

宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書 第245集

東諸県郡国富町所在

つかばる

# 塚原遺跡Ⅱ

## G・H・I・J地点

国富スマート IC 建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

2019

宮崎県埋蔵文化財センター









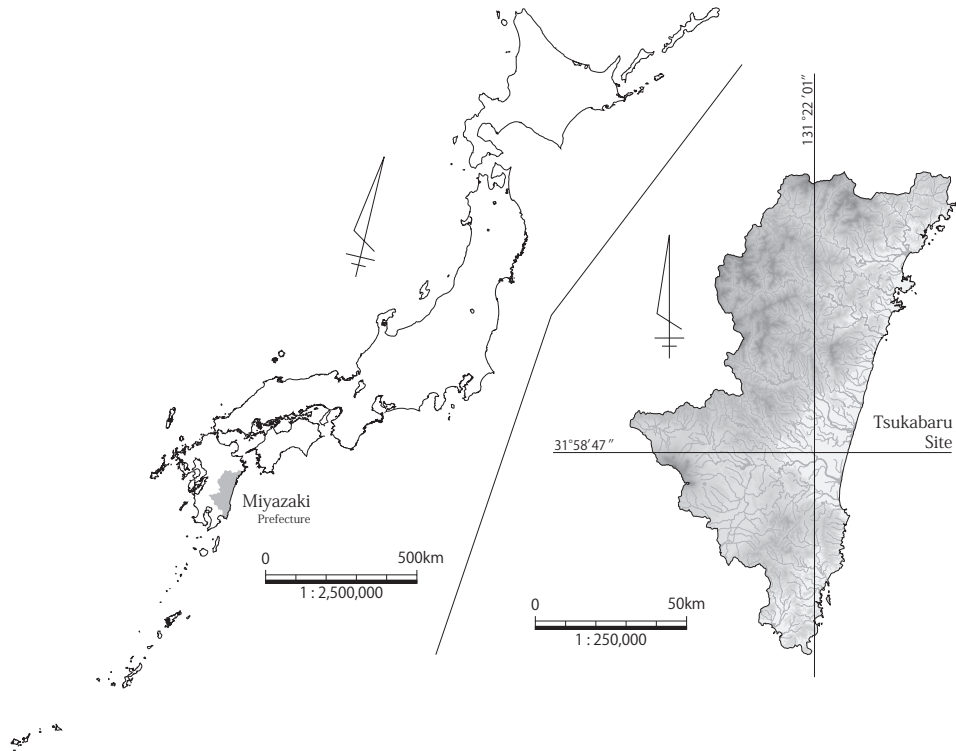




東諸県郡国富町所在

つか ぼる  
**塚原遺跡Ⅱ**  
G・H・I・J地点

国富スマートIC建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書



2019

宮崎県埋蔵文化財センター



# 序

宮崎県教育委員会では、平成27～29年度に国富スマートIC建設に伴い、国富町大字塚原・岩知野に所在する塚原遺跡の発掘調査を実施しました。本書は、その発掘調査の記録を掲載した報告書です。

今回報告する塚原遺跡は、古くは旧石器時代の石器から縄文時代の赤彩土器や隆帯文土器、弥生時代前期末にさかのぼる3条の環濠を巡らす集落跡、2基の古墳、古代・中世の水田跡等、多くの遺構・遺物が見つかり、国富町を代表する複合遺跡の存在が明らかになりました。

特に、弥生時代について、国富町調査C地点の成果を踏まえて円形にめぐる1条を含めて3条の環濠が確認できたことなど、これまでの調査結果を含め当該遺跡の詳細な様相がまた1つ明らかになったことは大きな成果です。

また、水田跡の調査では、近代から現代において、当地域の水田経営を行う上で大きな課題であった排水対策としての暗渠排水施設が縦横に設営された跡もみつけられました。

古くは旧石器時代から始まった台地上での人々の営みが、古代・中世には台地下に生活の場を広げていった、この地域で連綿と続く歴史を感じることのできる調査であったと思われま

す。今回の調査で得られたこのような多くの成果は、今後、当地域の歴史を解明する上で、非常に貴重な資料になるものと考えられます。

本書が学術資料としてだけでなく、学校教育や生涯学習の場で活用され、埋蔵文化財保護に対する理解の一助になれば幸いです。

最後になりましたが、発掘調査ならびに報告書作成にあたって、御協力いただいた地元および関係諸機関の方々に心より厚くお礼申し上げます。

平成31年3月

宮崎県埋蔵文化財センター  
所長 長峯 勝志

# 例 言

- 1 本書は、国富スマートIC建設工事に伴い、平成27・28・29年度に宮崎県埋蔵文化財センターが実施した東諸県郡国富町大字塚原・岩地野所在の塚原遺跡G・H・I・J地点の埋蔵文化財発掘調査報告書である。
- 2 発掘調査は、西日本高速道路株式会社及び宮崎県県土整備部の依頼を受け、宮崎県教育委員会が主体となり、宮崎県埋蔵文化財センターが、第1次調査は平成27年10月26日から平成28年3月24日、第2次調査は平成28年5月30日から平成29年3月28日、第3次調査は平成29年4月12日から平成29年6月30日まで実施した。
- 3 発掘調査は、調査課調査第二担当主査 後藤清隆を主任に、第I章で示した調査課職員を担当として発掘作業員の協力を得て行った。現地調査における図面作成及び、写真撮影については、調査担当者が中心に行った。
- 4 測量業務については(有)三和測地設計・(株)九州建設サポート、(有)ジパングサーベイ、空中写真撮影については(有)スカイサーベイ九州・(株)九州航空、一部の石器実測については(株)九州文化財研究所・(有)ジパングサーベイ、自然科学分析については古環境研究所にそれぞれ業務委託した。
- 5 整理作業は宮崎県埋蔵文化財センターで行い、本書に係る業務については、整理作業員の協力を得た。
- 6 本書で使用する土層および土器の色調については、農林水産省農林水産技術会議事務局ならびに財団法人日本色彩研究所監修の『新版標準土色帖』に拠り記述した。
- 7 実測で使用した測量基準は、国土座標平面直角座標系第II系（世界測地系）および東京湾海拔（T.P.）で、方位は座標北（G.N.）を指す。また、国土地理院発行地形図は真北を指す。
- 8 石器の分類については当センター日高広人の協力を、石器石材については当センター赤崎広志に助言を受けたが、最終的な責任は編集者にある。
- 9 本書に使用した主な略記号は次の通りである。  
SA=竪穴建物跡 SC=土坑 SD=土壇墓 SE=溝状遺構 SI=礫群・集石遺構  
SL=周溝状遺構 SN=古墳 SP=炉穴 Gr=グリッド Tr=トレンチ P=竪穴建物内土抗・小穴
- 10 本書の執筆は、当センター 後藤清隆、吉本正典、二宮満夫、県文化財課 甲斐貴充が分担し、最終的な編集を後藤が行った。なお、細かな文責は文末に記載している。
- 11 出土遺物の分類や年代観等は、第IV章に示した文献を総合して参考にしてている。
- 12 自然科学分析の結果および遺構と遺物の詳細な写真は、付属のDVD-ROMに収録している。
- 13 出土遺物およびその他の諸記録は、宮崎県埋蔵文化財センターにおいて保管している。



# 本文目次

第Ⅰ章	はじめに	
第1節	調査に至る経緯	1
第2節	調査の組織	1
第3節	塚原遺跡の地点名称について	2
第4節	調査の経過	2
第5節	整理作業および報告書作成の経過	6
第Ⅱ章	遺跡の立地と歴史的環境	
第1節	遺跡の立地	7
第2節	既往の調査	7
第Ⅲ章	調査の成果	
第1節	G地点の調査	9
1	基本層序	9
2	弥生時代後期～古墳時代前期の遺物	9
3	古代～中世の遺構と遺物	16
4	G地点のまとめ	21
第2節	H地点の調査	23
1	基本層序	23
2	古代～中世の遺構と遺物	26
3	H地点のまとめ	38
第3節	I地点の調査	40
1	基本層序	40
2	古墳時代前期前半の遺物	40
3	I地点のまとめ	40
第4節	J1地点の調査	41
1	基本層序	41
2	旧石器時代の遺構と遺物	43
3	縄文時代の遺構と遺物	55
4	弥生時代前期末～古墳時代前期前半の遺構と遺物	71
5	古墳時代終末期以降の遺構と遺物	110
6	J1地点のまとめ	116
第5節	J2地点の調査	120
1	基本層序	120
2	旧石器時代の遺構と遺物	120
3	縄文時代早期の遺構と遺物	134
4	J2地点のまとめ	138
第6節	J3地点の調査	139
1	基本層序	139
2	旧石器時代の遺物	140
3	縄文時代草創期・早期の遺構と遺物	143
4	弥生時代中期～終末期の遺構と遺物	151
5	古墳時代前期中葉以降の遺構と遺物	155
6	J3地点のまとめ	167
第Ⅳ章	総括	
第1節	旧石器時代の様相	171
第2節	縄文時代の様相	171
第3節	弥生時代の様相	172
第4節	古墳器時代の様相	173
第5節	古代の様相	173
第6節	中世の様相	174

# 挿 図 目 次

第1図 塚原遺跡の調査地点名称	2	第43図 旧石器時代第Ⅱ文化層出土石器4	53
第2図 工事予定範囲に対する本調査箇所	3	第44図 旧石器時代第Ⅱ文化層出土石器5	54
第3図 塚原遺跡の位置と周辺の遺跡分布図	8	第45図 8E・9E区 出土石器の分布と接合関係	55
第1節 G地点		第46図 縄文時代早期散礫分布図	56
第4図 G地点基本層序	10	第47図 縄文時代早期遺構分布図	57
第5図 土器集中区平面・断面図	11	第48図 SP1平面・断面図	58
第6図 土器集中区の出土遺物1	12	第49図 集石遺構(SI)平面・断面図1	59
第7図 土器集中区の出土遺物2	13	第50図 集石遺構(SI)平面・断面図2	60
第8図 弥生時代終末期～古墳時代前期前半の遺構に伴わない遺物	14	第51図 集石遺構(SI)平面・断面図3	61
第9図 古代～中世の遺構分布図	15	第52図 集石遺構(SI)平面・断面図4	62
第10図 畦畔状遺構平面・断面図	16	第53図 配石遺構平面・断面(見通し)図	63
第11図 SE1出土遺物1	18	第54図 縄文時代早期遺構出土遺物	65
第12図 SE1平面図	18	第55図 縄文時代早期出土遺物分布図	66
第13図 SE1断面図	19	第56図 縄文時代早期出土遺物1	67
第14図 SE1出土遺物2	20	第57図 縄文時代早期出土遺物2	68
第15図 古代以降の遺構に伴わない遺物	21	第58図 縄文時代早期出土石器1	69
第2節 H地点		第59図 縄文時代早期出土石器2	70
第16図 H地点基本層序	24	第60図 弥生時代前期末～ 古墳時代前期前半の遺構分布図	71
第17図 古代～中世の遺構分布図	25	第61図 SA1平面・断面図	72
第18図 畦畔状遺構A群平面・断面図	26	第62図 SA2・SA3平面・断面図	73
第19図 畦畔状遺構A群周辺の出土遺物	27	第63図 SA3出土遺物	73
第20図 畦畔状遺構B群平面・断面図	28	第64図 SA4平面・断面図および出土遺物	74
第21図 SE1平面・断面図および出土遺物	29	第65図 SA5出土遺物	75
第22図 SE2断面図	30	第66図 SA5・SA6平面・断面図	76
第23図 SE2出土遺物	30	第67図 SA6出土遺物	77
第24図 SE2・SE3・SE4・SE5平面図	31	第68図 SA7・SC5・SC6平面・断面図	78
第25図 SE3・SE4・SE5断面図	32	第69図 SA7出土遺物	79
第26図 SE4出土遺物	32	第70図 SA8・SA9・SA10平面・断面図	80
第27図 SE5出土遺物	33	第71図 SA8・SA9・SA10出土遺物	81
第28図 SE6・SE7・ため池状遺構平面・断面図 および出土遺物	35	第72図 SA11・SA12平面・断面図 およびSA12出土遺物	82
第29図 SC1平面・断面図および出土遺物	36	第73図 SC1・SC2出土遺物	83
第30図 遺構に伴わない遺物	37	第74図 SC1・SC2・SC3平面・断面図	84
第3節 I地点		第75図 SC4平面・断面図および出土遺物	85
第31図 I地点調査区・基本層序	40	第76図 SC5・SC6出土遺物	86
第32図 Tr1出土遺物	40	第77図 SC7出土遺物	86
第4節 J1地点		第78図 SC7平面・断面図	86
第33図 J1地点基本層序柱状図	42	第79図 SC8平面・断面図	87
第34図 礫群SI24・SI25平面・断面図	43	第80図 SD1平面・断面図	88
第35図 旧石器時代		第81図 SD1出土遺物	88
第I文化層遺構・遺物の分布と接合関係	44	第82図 SD2平面・断面図	89
第36図 9C・9D区 石器出土状況図	45	第83図 SD2出土遺物	90
第37図 旧石器時代第I文化層出土石器1	46	第84図 SE1断面図および出土遺物	90
第38図 旧石器時代第I文化層出土石器2	47	第85図 SE2平面・断面図	91
第39図 旧石器時代第Ⅱ文化層出土石器分布図	49	第86図 SE2出土遺物	92
第40図 旧石器時代第Ⅱ文化層出土石器1	50	第87図 SE3出土遺物	93
第41図 旧石器時代第Ⅱ文化層出土石器2	51	第88図 SE3平面・断面図	94
第42図 旧石器時代第Ⅱ文化層出土石器3	52	第89図 SE4・SE5平面図	95

第90図 SE4 第1段階底面の遺物出土状況図	96
第91図 SE4 断面図	97
第92図 SE4 (維持・管理期) 出土遺物	98
第93図 SE4 (第4層) 出土遺物1	99
第94図 SE4 (第4層) 出土遺物2	100
第95図 SE4 出土磨製石鏃	101
第96図 SE5 断面図	102
第97図 SE5 出土遺物	103
第98図 SL1 断面図	104
第99図 SL1・SL2 および SE1 平面図	105
第100図 SL1・SL2 出土遺物1	106
第101図 SL1・SL2 出土遺物2	106
第102図 SL2 断面図	106
第103図 遺構に伴わない遺物 (SC9)	108
第104図 遺構に伴わない遺物 (SN2 盛土)	108
第105図 遺構に伴わない遺物 (基本層内)	109
第106図 古墳時代終末期の遺構分布図	110
第107図 SN2 平面・断面図	111
第108図 SN2 墳丘平坦面出土遺物	112
第109図 SN2 周溝平面・断面図 および遺物出土状況図	113
第110図 SN2 周溝内出土遺物	114
第111図 SC9 平面・断面図	115
第112図 SC9 出土遺物	115
第113図 古墳時代終末期以降の基本層等出土遺物	116
第114図 SN2 模式図	119
第5節 J2 地点	
第115図 J2 地点 基本層序柱状図	120
第116図 旧石器時代出土石器分布図	121
第117図 旧石器時代 第I文化層遺構・主要遺物分布図	122
第118図 20G 区の石器の分布と接合関係	122
第119図 礫群 SI5・SI7・SI8 平面・断面図	123
第120図 旧石器時代第I文化層出土石器1	124
第121図 旧石器時代第I文化層出土石器2	125
第122図 旧石器時代第I文化層出土石器3	126
第123図 旧石器時代第I文化層出土石器4	127
第124図 旧石器時代第I文化層出土石器5	128
第125図 旧石器時代第II文化層遺構・ 主要遺物の分布と接合関係	129
第126図 礫群 SI6 平面・断面図	130
第127図 礫群 SI6 出土石器	130
第128図 旧石器時代第II文化層出土石器1	131
第129図 旧石器時代第II文化層出土石器2	132
第130図 旧石器時代第II文化層出土石器3	133
第131図 縄文時代早期散礫分布図	134
第132図 縄文時代早期遺構・出土遺物分布図	134
第133図 集石遺構 (SI) 平面・断面図	135
第134図 縄文時代早期出土石器	137
第135図 縄文時代早期出土石器	138

第6節 J3 地点	
第136図 J3 地点 基本層序	139
第137図 旧石器時代出土遺物分布図	140
第138図 旧石器時代出土石器1	141
第139図 旧石器時代出土石器2	142
第140図 縄文時代早期散礫・遺構分布図	143
第141図 集石遺構 (SI) 平面・断面図	144
第142図 縄文時代出土遺物分布図	144
第143図 縄文時代草創期出土石器1	146
第144図 縄文時代草創期出土石器2	147
第145図 縄文時代草創期出土石器3	148
第146図 縄文時代早期出土石器	148
第147図 縄文時代出土石器1	149
第148図 縄文時代出土石器2	150
第149図 弥生時代中期～終末期の遺構分布図	151
第150図 SC2・SC3 出土遺物	151
第151図 SC1・SC2・SC3 平面・断面図	152
第152図 SC4 平面・断面図	152
第153図 SC4 出土遺物	153
第154図 SC5 平面・断面図	153
第155図 SC5 出土遺物	153
第156図 SN1 盛土内出土遺物	154
第157図 調査以前の墳丘測量図	155
第158図 古墳時代前期の遺構分布図	156
第159図 SN1 平面図	157
第160図 SN1 断面図	158
第161図 墳丘における埋葬主体部の位置図	159
第162図 埋葬主体部平面・断面図および出土遺物	159
第163図 墳頂平坦面遺物出土状況図	160
第164図 墳頂平坦面出土遺物	160
第165図 周溝内遺物出土状況図	161
第166図 周溝内出土遺物	163
第167図 石列平面・断面図	164
第168図 墳丘上「後の祭祀行為」出土遺物	165
第169図 石列内出土遺物	165
第170図 古墳時代終末期以降の 基本層内等出土遺物	166
第171図 SN1 模式図	170
第172図 塚原台地東縁部における 旧石器時代～縄文時代の様相	176
第173図 塚原台地東縁部における 弥生時代～古墳時代の様相	177
第174図 塚原台地下、東側低地における 古代～中世の様相	178

## 表 目 次

第1表	J1 地点旧石器時代第Ⅰ文化層礫群一覽表 …	43	附表1	塚原遺跡Ⅱ 石器計測表 ……………	179
第2表	J1 地点縄文時代早期集石遺構一覽表 ………	63	附表2	塚原遺跡Ⅱ 土器觀察表 ……………	181
第3表	J2 地点旧石器時代第Ⅰ文化層礫群一覽表 …	123	附表3	塚原遺跡Ⅱ 錢貨計測表 ……………	190
第4表	J2 地点旧石器時代第Ⅱ文化層礫群一覽表 …	130	附表4	塚原遺跡Ⅱ 鉄製品計測表 ……………	190
第5表	J2 地点縄文時代早期集石遺構一覽表 ………	136	附表5	塚原遺跡Ⅱ 木製品計測表 ……………	190
第6表	J3 地点縄文時代早期集石遺構一覽表 ………	144			

## 写 真 目 次

写真1	SD1 出土粘土塊 ……………	89
-----	-----------------	----

## 図 版 目 次

写真図版1	調査地点より国富町域を望む 調査地点より宮崎市生目古墳群 (石ノ迫第2遺跡) 方面を望む	写真図版9	J1 地点の調査3 ①旧石器時代第Ⅰ・第Ⅱ文化層出土石器 ②縄文時代早期遺構出土土器 ③縄文時代早期出土土器 ④SA7 出土遺物 ⑤SE4 上層出土土器 ⑥SE2 出土土器 ⑦SN2 出土土器
写真図版2	J1 地点 中環壕SE4(左)・ 外環壕SE5(右) 周辺 J3 地点 古墳SN1 出土遺物(古墳築造時)	写真図版10	J2 地点の調査 ①J2 地点 俯瞰写真 ②土層堆積状況 ③第Ⅴ層検出状況 ④SI7 検出状況 ⑤旧石器時代第Ⅰ文化層出土石器 (ナイフ形石器) ⑥旧石器時代第Ⅱ文化層出土石器 (細石核・細石刃) ⑦縄文時代早期出土土器
写真図版3	G 地点の調査1 ①G 地点 俯瞰写真(合成) ②西壁土層断面 ③遺物集中箇所 ④SE1 完掘状況 ⑤SE1 木製品・土器出土状況	写真図版11	J3 地点の調査1 ①J3 地点全体写真 ②東壁土層堆積状況 ③SC5 完掘状況 ④SC4 完掘状況 ⑤SC4 遺物出土状況
写真図版4	G 地点の調査2 ①畦畔状遺構A群 ②畦畔状遺構A群土層堆積状況 ③畦畔状遺構B群 ④畦畔状遺構B群土層堆積状況 ⑤遺物集中箇所出土遺物 ⑥SE1 出土木製品・出土遺物	写真図版12	J3 地点の調査2 ①SN1 墳丘検出状況 ②SN1 南側土層堆積状況 ③SN1 散礫状況 ④SN1 埋葬主体部土層堆積状況 ⑤SN1 周溝検出状況 ⑥SN1 遺物出土状況 ⑦石列 ⑧石列土層堆積状況
写真図版5	H 地点の調査1 ①H 地点 俯瞰写真(合成) ②SE1 平場遺物出土状況 ③SE1 完掘状況 ④SE3・SE4・SE5 土層堆積状況	写真図版13	J3 地点の調査3 ①旧石器時代出土石器 ②縄文時代草創期出土土器 ③SC4 出土石器 ④SC5 出土遺物
写真図版6	H 地点の調査2 ①畦畔状遺構A群 ②畦畔状遺構B群 ③SC1 土層堆積・遺物出土状況 ④畦畔状遺構A群周辺出土遺物 ⑤基本層出土木製品 ⑥SE1 出土遺物	写真図版14	J3 地点の調査4 ①SN1 埋葬主体部出土遺物 ②SN1 墳頂平坦面出土の供献土器群 ③SN1 周溝出土壺形埴輪 ④SN1 墳丘上出土「後の祭祀行為」での 破砕された須恵器群
写真図版7	J1 地点の調査1 ①J1c 地点 俯瞰写真(合成) ②土層堆積状況 ③第Ⅵ・Ⅶ層遺物出土状況 ④旧石器時代第Ⅰ文化層礫群検出状況 ⑤配石遺構検出状況 ⑥SI4・SI5 検出状況 ⑦SP1 完掘状況		
写真図版8	J1 地点の調査2 ①SA4 完掘状況 ②SD2 完掘状況 ③SA8・9・10完掘状況 ④SE3 完掘状況 ⑤SE4 完掘状況 ⑥SE4 土層堆積状況 ⑦SN2 遺物出土状況		

# 第 I 章 はじめに

## 第 1 節 調査に至る経緯

国富スマートIC建設事業は、宮崎県と西日本高速道路株式会社が東九州自動車道利用者の利便性の向上、地域の活性化、物流の効率化等に寄与するため、東諸県郡国富町大字岩地野にETC専用のインターチェンジを整備することを目的とし、進められてきた事業である。

この計画をうけて、宮崎県教育庁文化財課では、平成26年度に西日本高速道路株式会社と宮崎県県土整備部道路建設課と事業地内の文化財包蔵地について協議を行い、平成27年2月と同年11月に文化財課が試掘調査を行った。

試掘調査の結果、文化財課は対象面積全体41,300㎡の約57%の23,500㎡について文化財包蔵地であることを回答し、以後、開発計画と埋蔵文化財保護について協議を重ね、遺跡については現状保存が困難であると判断し、やむを得ず発掘調査を行い、記録保存の措置をとることとなった。

発掘調査は、大きく3か年、3次に分けて実施することとした。第1次調査は平成27年10月26日～平成28年3月24日までの約6か月間（調査実施日88日）、第2次調査は平成28年5月30日～平成29年3月28日の約9か月間（調査実施日188日）、第3次調査は平成29年4月12日～6月30日の約3か月間（調査実施日57日）実施した。また、平成27年度には第1次調査分の一部の遺物整理作業を、平成28年度には第1・2次調査分の一部の遺物整理作業を、平成29・30年度には第1～3次調査分の遺物整理作業と報告書作成作業を県埋蔵文化財センター本館で実施した。

## 第 2 節 調査の組織

塚原遺跡における発掘調査組織は以下のとおりである。

調査主体：宮崎県教育委員会

事業調整：宮崎県教育庁文化財課

主査 松本 茂（平成26年度） 主査 二宮満夫（平成27～28年度）

主査 今塩屋毅行（平成29年度） 主査 藤木 聡（平成30年度）

発掘調査・整理作業及び報告書作成：宮崎県埋蔵文化財センター

所長 岩切隆志（平成27年度） 谷口武範（平成28年度）

菅付和樹（平成29年度） 長峯勝志（平成30年度）

副所長 菅付和樹（平成27～28年度：兼 調査課長）

甲斐久志（平成29年度：兼 総務課長）

田中礼子（平成30年度：兼 総務課長）

総務課長 上谷政隆（平成27年度） 荒木智恵美（平成28年度）

甲斐久志（平成29年度） 田中礼子（平成30年度）

調査課長 菅付和樹（平成27～28年度）

吉本正典（平成29～30年度 遺物整理・報告書作成）

調査第二担当リーダー 吉本正典（平成27～28年度） 島木良浩（平成29～30年度）

主査 後藤清隆（平成27～29年度 調査担当[主任]

平成28～30年度 遺物整理・報告書作成）



主査	甲斐貴充（平成27～28年度 調査担当・遺物整理・報告書作成）
主査	二宮満夫（平成29年度 調査担当・平成29～30年度 遺物整理・報告書作成）
主査	金丸大全（平成28年度 調査担当 [副主任]）
主査	竹田享志（平成29年度 調査担当 [副主任]）
専門主事	近藤 協（平成27年度 調査担当 [副主任]）
専門主事	長津宗重（平成28年度 調査担当 [副主任]）

### 第3節 塚原遺跡の地点名称について（第1図）

塚原遺跡では、今回の調査以前に2回、本報告分を含めて合計3回の発掘調査が実施されている。この3回の発掘調査は、調査機関や事業が異なり個別で報告されているため、遺跡の全体像が把握しづらい状況である。今回、発掘調査を実施するにあたり、以前の調査区域との混同を避けるべく、新たに塚原遺跡の地点名称の統一を行った。

まず、最初の発掘調査は、平成2（1990）年、塚原工業団地開発事業に伴い国富町教育委員会が塚原台地東縁部で実施した「塚原遺跡 東原 A・B・C・D・E・F 地点」（国富町1996・1997）である。次の発掘調査は、平成8～9（1996～1997）年に東九州自動車道（西都～清武間）建設に伴い当センターが台地東縁部（C地区）と東側法面下の低地部（A・B・D地区）で実施した（宮崎埋文セ2002）。

当センターが実施したA～D地区は、そのまま「塚原遺跡 A～D 地点」に置き換え、国富町教育委員会が実施した東原 A～F 地点のうち、「東原 A～D 地点」を「塚原遺跡 E 地点」、「東原 E・F 地点」を「塚原遺跡 F 地点」と置き換えた。また、今回報告分のうち、東九州自動車道西側の低地部を北から「塚原遺跡 G 地点」と「塚原遺跡 I 地点」、東九州自動車道東側の低地部を「塚原遺跡 H 地点」、台地東縁部を「塚原遺跡 J 地点」と名称することとした。なお、J 地点については、3か所に分割されたことから、北側から「J1 地点」「J2 地点」「J3 地点」とした。

### 第4節 調査の経過（第2図）

今回の調査では、平成27～29年度の3か年にわたり、第1次・第2次・第3次調査を実施した。以下にその経過を述べる。

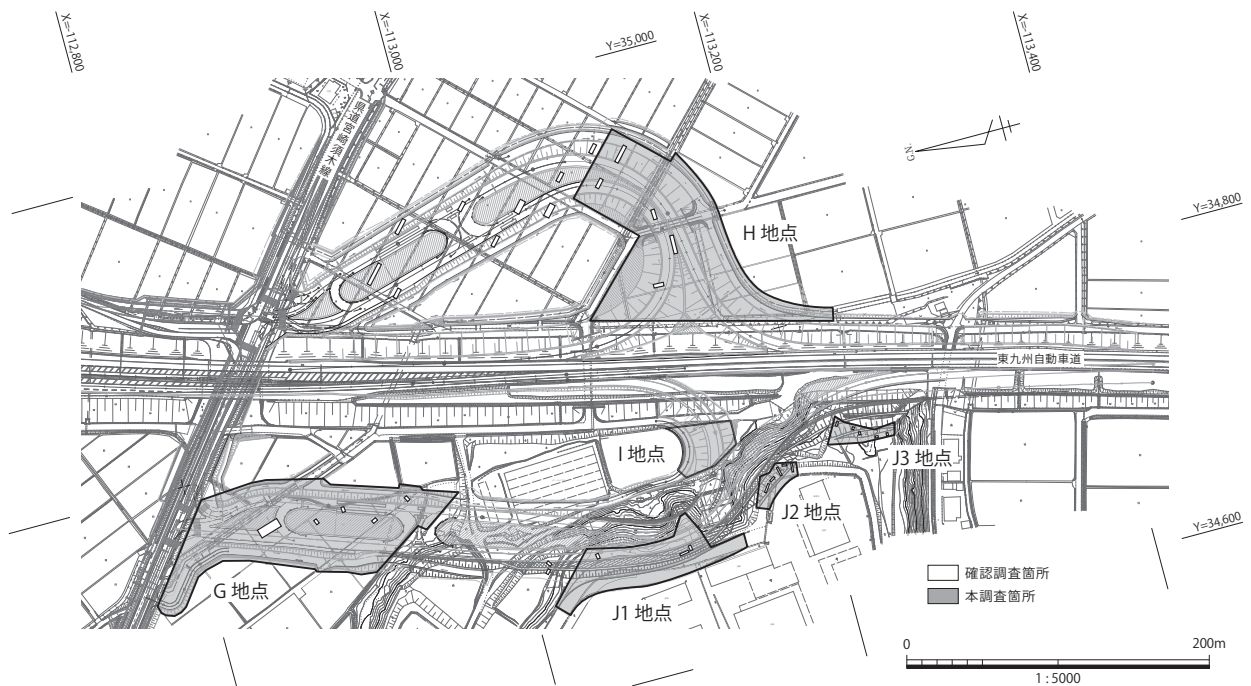
**第1次調査**（平成27年10月26日～平成28年3月24日：調査実日数88日）

調査区域はG地点、調査対象面積は8,600㎡である。調査は、排土置き場の確保の点から全面調査が困難であったため、調査区全域を南北に大きく2分割して、調査期間の前半期は南側、後半期は北側の調査を行った。

調査区南側（約4,000㎡）の調査は、平成27年10月下旬から平成28年1月下旬までの約3か月間実施した。調査においては、まず重機を用いて近世～現代の耕作土と推定される第I層と第



第1図 塚原遺跡の調査地点名称



第2図 工事予定範囲に対する本調査箇所

Ⅱ層の除去を行った。その上で、発掘作業員を雇用して、調査区域からの湧水を排水するための排水溝を、調査区域を全周する形で掘削した。さらに排水溝に溜まった水を近接する用水路に排出するための排水施設を設置した。その後、人力で中世の水田が含まれると推測される黒褐色粘質土（第Ⅲ層）の検出・掘削作業を行った。中世面の調査終了後、1月下旬に空中写真撮影を行った。次いで、第Ⅲ層～Ⅴ層の状況確認のため、4か所にトレンチ（合計約200㎡）を設定し、掘り下げを行ったが、遺構・遺物は確認できなかった。トレンチでの調査終了後、調査区の埋め戻しを行い、南側調査区の調査を終了し、北側調査区の調査へ移行した。

北側調査区（約4,600㎡）の調査は、平成28年2月初旬～同年3月下旬の約2か月間実施した。ただし、北側調査区域のうち、県道部分と接する北端部付近（約2,100㎡）は、後世の削平が著しく、基本Ⅲ層が残存していなかったことから、確認のためのトレンチ3か所（合計150㎡）の掘削調査のみとなった。その他全域調査は、南側同様、重機を用いて近世～現代の耕作土と推定される第Ⅰ層と第Ⅱ層の除去を行い、調査区域を全周する排水溝と排水施設を設置した。その後、人力により黒褐色粘質土（第Ⅲ層）の検出・掘削作業を行った。南側調査区同様、近現代の水田耕作が第Ⅲ層の大部分まで到達しており、全域の約30%程度しか第Ⅲ層が残存していなかったが、第Ⅲ層が残存している部分では、中世に時期比定される水田畦畔跡等を検出した。精査終了後、3月上旬に完掘状況の空中写真撮影を行い、第Ⅲ層～Ⅴ層までの状況確認のためにトレンチ2か所（合計約100㎡）を設定し、掘り下げを実施したが遺構・遺物は確認できなかった。その後、平成28年3月24日までに地形測量図や遺構検出状況図をはじめとする情報の記録、調査区全域の重機による埋め戻し、事務所等構造物の撤去を行い、現地での調査を終了した。

**第2次調査**（平成28年5月30日～平成29年3月28日：調査実日数188日）

調査区域はH・I・J地点、調査対象面積は14,900㎡である。

## H地点（調査対象面積10,600㎡）

調査は排土置き場の確保の点から、調査区全域を南北に大きく分けたのち、用水路や生活道路によって分割を行った。調査期間の前半期は北側(H1～3地点)、後半期は南側(H4～6地点)の調査を行った。

北側調査区(約5,000㎡)の調査は、平成28年5月末から平成28年11月下旬までの約6か月間実施した。調査に際しては、重機を用いて近世～現代の耕作土と推定される基本層序の第Ⅰ層と第Ⅱ層の除去を行った。同時期より、調査区域からの湧水を排水するための排水溝を、調査区域を全周する形で掘削した。さらに排水溝に溜まった水を近接する用水路に排出するための排水施設を設置した。その後、人力で中世の水田が含まれると推測される黒褐色粘質土(第Ⅲ層)の検出・掘削作業を行った。近現代における水田耕作が基本Ⅲ層の大部分まで到達しており、全域の約60%程度しか第Ⅲ層が残存していなかったが、古代～中世の溝状遺構などの遺構、調査区全域から古代～中世の土師器等の遺物が確認された。調査終了後、9月中旬(H1地点)、11月中旬(H2地点)、同月下旬(H3地点)に完掘状況の空中写真撮影を行った。その後、調査区の埋め戻しを行い、北側調査区の調査を終了し、南側調査区の調査へ移行した。

南側調査区(約5,600㎡)の調査は、平成28年12月初旬～同年2月下旬の約3か月間実施した。調査は北側同様、重機を用いて近世～現代の耕作土と推定される第Ⅰ層と第Ⅱ層の除去を行い、調査区域を全周する排水溝と排水施設を設置した。その後、人力により、中世の水田層と推測される黒褐色粘質土(基本Ⅲ層)の検出・掘削作業を行った。北側調査区同様、近現代の水田耕作が第Ⅲ層の大部分まで到達していたが、中世に時期比定される水田畦畔跡や古代以前の溝状遺構などが確認された。調査終了後、1月下旬(H4地点)、2月中旬(H5地点)、同月下旬(H6地点)に完掘状況の空中写真撮影を行った。その後、平成28年3月10日までに地形測量図や遺構検出状況図などの情報の記録、調査区全域の重機による埋め戻しを行い、H地点の調査を終了した。

## I地点（調査対象面積800㎡）

平成28年11月下旬から平成28年12月中旬までの約1か月間実施した。調査区西部付近は後世の削平が著しかったことから、確認のためのトレンチ3か所(合計11㎡)の掘削調査を行った。そして、人力による遺構・遺物の検出・掘削作業を行った。弥生～古墳時代の土器が出土したが、明確な遺構は確認されなかったため、11月中旬に空中写真撮影を行った後、トレンチの位置や土層堆積状況等の情報の記録、トレンチの埋め戻しを行い、調査を終了した。

## J地点（調査対象面積3,500㎡）

J地点は、調査区が3か所に点在しており、北側からJ1地点、J2地点、J3地点と命名した。

J1地点は、道路施工上の理由と排土置き場の確保の点から全面調査が困難であったため、西部を2分割、(北西部：J1a・南西部：J1b)、東部も2分割(J1c：北側・南側)して調査を行った。

J1a地点(約300㎡)の調査は、平成28年8月上旬から平成28年10月中旬までの約3か月間実施した。まず、重機を用いて現代の造成土の除去を行い、その後、人力で縄文時代早期と推測される暗褐色土(基本層Ⅴ層)の検出・掘削作業を行った。調査区中央から南側にかけて縄文時代の集石遺構や配石遺構などの遺構、調査区全域から縄文時代早期の土器等の遺物が確認され、調査終了後、9月中旬に第Ⅴ層上面での完掘状況の空中写真撮影を行った。

その後、第Ⅵ層～第Ⅷ層の状況確認のため、4か所にトレンチ(合計約35㎡)を設定し、掘り下げを行った結果、第Ⅵ層および第Ⅶ層で旧石器時代の遺物を確認した。トレンチでの調査終了後、調査区の



埋め戻しを行い、北西部調査区の調査を終了し、道路施工業者へ引き渡した。

J1b地点（約75㎡）の調査は、平成28年11月上旬から約1か月間実施した。まず、重機を用いて現代の造成土の除去を行い、その後、人力で縄文時代早期と推測される暗褐色土（第Ⅴ層）の検出・掘削作業を行った。調査区中央から北側にかけて縄文時代の集石遺構、調査区中央から古墳時代の竪穴建物跡、調査区全域から縄文時代早期の土器等の遺物が確認された。それらの終了後、11月中旬に第Ⅴ層上面での完掘状況の空中写真撮影を行った。その後、第Ⅵ層～第Ⅷ層の状況確認のため、4か所にトレンチ（合計約14㎡）を設定し、掘り下げを行った結果、第Ⅵ層で旧石器時代の所産と考えられる遺物を確認した。トレンチでの調査終了後、調査区の埋め戻しを行い、南西部調査区の調査を終了し、道路施工業者へ引き渡した。

J1c地点（約980㎡）の調査は、排土置き場の確保の点から全面調査が困難であったため、調査区域を南北に大きく2分割して、北側（約340㎡）を平成29年2月下旬から3月下旬までの約1か月間実施した。まず、重機を用いて現代の造成土の除去を行った。大部分が旧町道の造成による攪乱を受けており、表土・造成土除去後の調査面では最北端以外は第Ⅵ層が大部分を占めていた。その後、人力で旧石器時代と推測される明褐色土（第Ⅶ層）の検出・掘削作業を行い、旧石器時代の所産と考えられる礫群や遺物を確認した。この間、深く構築されたことで残った弥生～古墳時代の遺構も検出できている。なお、J1c地点については、工程上、次年度に調査を継続させることが決定したため、ブルーシートで現場保存を行った上で調査を一旦終了した。

J2地点（約200㎡）は、平成28年10月中旬から12月下旬までの約3か月間実施した。まず、10月中旬から重機を用いて現代の造成土の除去を行い、その後、人力で縄文時代早期と推測される暗褐色土（第Ⅳ層）の検出・掘削作業を行った。一部削平を受けていたが、集石遺構が検出され、縄文時代早期の土器等の遺物が出土した。掘り下げ終了後、11月下旬に第Ⅴ層上面で完掘状況の空中写真撮影を行った。第Ⅴ層～第Ⅵ層の状況確認のため、7か所にトレンチ（合計約18㎡）を設定し、掘り下げを行った結果、第Ⅴ層で旧石器時代の所産と考えられる遺物を確認した。トレンチを拡張（合計約140㎡）して調査した結果、旧石器時代の礫群が検出でき、調査区全域から旧石器時代のナイフ形石器や細石器等の石器が確認された。調査終了後、調査区の埋め戻しを行いJ2地点の調査を終了した。

J3地点は、平成28年12月中旬から3月下旬までの約4か月間実施した。調査区は、中心から西側にかけて古墳の一部、東から南側にかけて平地、北側は緩斜面となっており、古墳の調査を12月中旬から、古墳以外の調査をJ2地点が終了した1月上旬から行った。

古墳の調査は、以前より古墳の存在を指摘されていたため、調査に先立って8月上旬に精査と地形測量、地中探査レーダー調査を行い、墳丘と埋葬主体部の確認を行った。調査に際しては、まず、墳丘の土層及び周溝の確認のため、地形測量より墳丘の中心点を求め、東西南北の4方向と墳丘下南東方向にトレンチを設定した。その後、古墳に伴う散礫や周溝の精査、遺物の取り上げを行った。古墳の調査終了後、墳丘下の第Ⅲ層上面で弥生時代の土坑1基を検出した。

平成29年1月上旬より調査区北側、南側の調査を行った。調査区南側においては、人力で表土の除去を行ったが、表土下より二次シラス火山灰土層（第Ⅵ層）を確認し、遺物包含層の削平を受けていたため、東側と北側の調査に集中した。東側は人力で表土の除去を行い、C地点で検出された石列の一部を検出した。検出状況より、古墳時代の所産と考えられる。北側は1月上旬より重機を用いて表土の除去を行い、その後、人力で鬼界アカホヤ火山灰層（第Ⅲ層）上位での遺構の検出を行った結果、調査区中央付

近で土坑を検出した。その後、重機を用いて第Ⅲ層を除去し、人力で縄文時代早期と推測される暗褐色土（第Ⅳ層）の検出・掘削作業を行った。北側では遺構は確認されなかったが、縄文時代草創期・早期の所産とみられる土器片、剥片等を検出した。東側での第Ⅳ層の検出・掘削作業では、2基の集石遺構を検出した。

第Ⅳ層の調査後、第Ⅴ層での旧石器時代の調査を行った。表土や墳丘の盛土、第Ⅳ層中から細石核や細石刃などの旧石器時代の石器が確認されていたが、層中での遺物は剥片1点のみの検出となり、明確な遺構は確認されなかった。その後、平成29年3月28日までに地形測量図や遺構検出状況図をはじめとする情報の記録を行い、J3地点の調査を終了した。

### 第3次調査（平成29年4月12日～平成29年6月30日：調査実日数57日）

第3次調査では、J1c地点の継続調査のみを実施し、排出土置き場の確保の点から全面調査が困難であったため、調査区域を南北に大きく2分割した。

調査区北側の調査は、4月中旬より再開し、6月初旬まで約1.5か月間実施した。調査は人力で調査面の精査を行い、弥生時代～古墳時代の包含層（第Ⅲ層）が残る最北部や東縁辺において同時代の所産と見られる遺構・遺物の検出・掘削を実施した。それらの終了後、5月上旬に完掘状況の空中写真撮影を行った。その後、第Ⅴ層～第Ⅶ層の掘り下げを行った結果、第Ⅴ層で縄文時代早期、第Ⅵ層および第Ⅶ層で旧石器時代の遺物を検出した。一連の記録を取り終えた後、調査区の埋め戻しを行いJ1c地点北側の調査を終了した。

J1c地点南側の調査は、5月上旬から6月末までの約2か月間実施した。まず、重機を用いて表土と現代の造成土を除去し、その後人力で検出・掘削を行い、第Ⅳ層上面で弥生時代～古墳時代の竪穴建物跡や環濠、第Ⅴ層上面で縄文時代早期の集石遺構を検出した。また、調査を進める中で、造成により大部分が失われていたが古墳の墳丘と周溝が検出された。6月上旬に完掘状況の空中写真撮影を行い、平成29年6月30日までに地形測量図や遺構検出状況図をはじめとする情報の記録、調査区全域の重機による埋め戻しを行い、調査を終了した。（後藤）

## 第5節 整理作業および報告書作成の経過

出土品及び図面・写真などの記録物を宮崎県埋蔵文化財センターへ持ち帰り、記録物の整理を行うとともに、1期目の整理作業として、平成28(2016)年3月1日から出土品の一部の洗浄・注記作業を実施して3月25日に終了した。

2期目の整理作業は同年10月3日より開始し、出土品の遺物洗浄や注記作業、実測作業を実施して平成29(2017)年1月30日に終了した。

3期目の整理作業は、同年5月1日より開始し、出土品の接合作業を実施した後、実測作業に入った。出土品については、外部委託も利用しながら図化し、平行して、出土した木製品について樹種同定分析を実施して、平成30(2018)年3月27日に終了した。

4期目の整理作業は、同年5月1日より開始し、一部の出土品を図化して写真撮影を行った。そして報告書刊行に係る製図及び執筆編集作業の全てを同年12月までに完了させ、翌年1月から3月にかけて印刷・製本作業を行った。また、1・2月には出土品及び図面・写真などの記録物の登録作業を行った。

なお、平成28年8月21日と平成29年9月3日に遺跡発掘速報会（於宮崎県立図書館）、平成31年2月3日に発掘調査報告会（於国富町立図書館）において、発掘調査成果報告と、出土品の一部公開を一般向けに行った。（甲斐・後藤）

## 第Ⅱ章 遺跡の立地と歴史的環境

### 第1節 遺跡の立地

東諸県郡国富町は、宮崎県の中央部よりやや南東部、九州山脈の支脈が台地となって裾を延ばすところに位置する。北西から南東に流れる北俣川、三名川、深年川、後川は本庄、八代、六野原、高田原、塚原などの台地面を開析しつつ、大淀川の支流である本庄川に流れ込む。その流域には、肥沃な耕地がひらけている。町の境界は、東南が宮崎市、西は東諸県郡綾町、北は西都市に接しており、町の中心部は深年川と本庄川に挟まれた標高40～50mの低位段丘面である本庄段丘上に所在する。

本書で報告する塚原遺跡は、東諸県郡国富町大字木脇の字岸田・田名から大字塚原字西ノ免・東原にかけて広がっている縄文～古墳時代の散布地である。遺跡は先の本庄段丘の最東端が河川浸食によって独立した台地状の段丘最下段面（通称 塚原台地、以下この呼称を用いる）と台地を取り巻く沖積低地に立地する。今回の調査地点は、県道宮崎・須木線と南西に流れる本庄川と深年川の合流点にはさまれた標高35～40mほどの塚原台地の東縁部と台地下北東側に広がる沖積低地に位置している。

### 第2節 既往の調査

調査地周辺で発掘調査が実施された遺跡はそれほど多くはないが、調査された遺跡をもとに周辺の状態を概観する。

旧石器時代の遺跡は、国富町木脇遺跡、松元遺跡、宮崎市金剛寺原第2遺跡などではA T上位でナイフ形石器などが出土している。

縄文時代の遺跡としては、草創期の隆帯文土器が木脇遺跡、平成8年度の当センター調査の塚原遺跡C地点で出土している。早期の遺跡は、木脇遺跡、松元遺跡、塚原遺跡、上岩知野遺跡、宮崎市金剛寺原第2遺跡及び柿迫遺跡で集石遺構などが検出され、平成2年度に国富町教育委員会が発掘調査を実施した塚原段丘の南から東にかけての縁辺部（E・F地点）では押型文土器、手向山式土器が出土している。また、宮崎市倉岡第2遺跡では後期の綾式土器、柿迫遺跡では晩期の孔列文土器も出土している。

弥生時代の遺跡は、上ノ原遺跡、塚原遺跡、宮崎市石ノ迫第2遺跡などで発掘調査が実施されている。塚原遺跡の南縁辺部（F地点）では中期から後期の集落跡、東縁辺部（E地点）では環濠が確認されている。石ノ迫第2遺跡は中期中葉から後期後葉の集落跡で、後期初頭から後葉にかけては環濠集落が営まれている。また、同遺跡では2段掘りの土壇群も検出されており、弥生終末の集落廃絶後に造営されたものと考えられている。上ノ原遺跡では瀬戸内地方の中期末の矢羽透の高杯を模倣した土器や中溝式土器が出土している。

古墳時代の遺跡のなかで古墳の分布状況についてふれると、塚原台地上では南縁辺部に木脇古墳群（円墳17基）、西縁辺部では長方板葺短甲等を出土した木脇塚原地下式横穴墓A号が所在する。また、平成2年度の町調査（F地点）の際には地下式横穴墓が1基、平成8年度の県調査地（C地点）では、前期初頭頃に築造された円墳が検出されている。また、塚原台地周辺に目を転じると、沖積地を挟んだ北東台地上の上岩知野遺跡内にある円墳で構成される木脇古墳群や宮崎市柿木原地下式横穴墓群、台地南東3kmの大淀川を挟んだ対岸の台地上には、古墳前期の首長墓が存在する生目古墳群が所在し、西約2kmには前方後円墳や円墳、地下式横穴墓などから構成されている本庄古墳群が所在している。また、宮崎市迫内遺跡では丘陵上で前期末頃の円墳や後期の横穴墓が発掘調査によって発見されている。調査



地周辺には多数の古墳が所在しているが、集落の調査例は少なく、木脇遺跡や倉岡第2遺跡などがあるのみで、その時期は中期以降のものである。

古代の遺跡の調査例も少なく、井尻遺跡、深田遺跡、木脇遺跡などで集落跡が調査されているが、その規模は小さい。

中世の遺跡については、柿迫遺跡で城館跡、中別府遺跡で集落跡の一部が調査され、町屋敷遺跡では水田跡が調査されおり、塚原遺跡（B地点）においても畦畔が検出されている。また、周辺には木脇城跡、倉岡城跡、白糸城跡など中世山城が点在する。



- 1 塚原遺跡 2 木脇古墳群 3 八幡遺跡 4 上ノ原遺跡 5 上ノ原地下式横穴群 6 本庄遺跡 7 宗仙寺遺跡 8 郡山遺跡 9 宮王丸遺跡  
 10 本庄古墳群 11 前ノ原横穴群 12 桑鶴遺跡 13 木脇城跡 14 木脇遺跡 15 松元遺跡 16 井手口遺跡 17 上岩知野遺跡 18 セツ迫遺跡  
 19 サギス遺跡 20 瓜生野村古墳 21 柿木原遺跡 22 柿木原地下式横穴群 23 祇園町墓地遺跡 24 中尾遺跡 25 金剛寺原第2遺跡  
 26 上野遺跡 27 瓜生野小学校校庭遺跡 28 横穴 29 野首遺跡 30 大原遺跡 31 堤内遺跡 32 倉岡村古墳 33 中別府遺跡 34 倉岡第2遺跡  
 35 町屋敷遺跡 36 倉岡遺跡 37 戸森第1遺跡 38 戸森第2遺跡 39 前向遺跡 40 倉岡城跡 41 糸原遺跡 42 生目村古墳 43 生目山下遺跡  
 44 迫内遺跡 45 納島第1遺跡 46 納島第2遺跡 47 白糸城跡 48 生目古墳群 49 跡江遺跡 50 石ノ迫遺跡 51 石ノ迫第2遺跡  
 52 跡江貝塚 53 跡江城跡 54 八反田遺跡 55 間越遺跡

第3図 塚原遺跡の位置と周辺の遺跡分布図

## 第Ⅲ章 調査の成果

### 第1節 G地点の調査

#### 1 基本層序（第4図）

G地点は塚原台地から派生する北側緩斜面下に広がる低地の一角で、調査直前まで水田として利用されており、現代の畦や作業用道路によって複数の区画に分割されていた。近世～現代の耕作土と推定される第Ⅰ層～第Ⅱ層を重機により除去して、第Ⅲ層上部から本格的な調査を開始した。ただし、トレンチ調査によって後世の削平が著しいことが判明した北端部の2か所と激しい湧水のため泥化して安全が確保できなかった南端部については、詳細な調査の対象から除外している。

G地点は、南西から北東方向にかけて高低差約1mと緩やかに下る地形であり、調査区南西部分に台地上部からの流入土と洪水等による流入土が部分的に確認されるが、基本的に水平堆積であり、調査を実施した深度までを下記のとおり大きくⅠ～Ⅴ層に区分した。

第Ⅰ層は黒褐色土で、層厚約0.2m前後の現表土となり主として現代の水田耕作土である。

第Ⅱ層はオリーブ黒色土で、層厚0.2～0.3m程度、層全体に桜島文明軽石と推定される灰色軽石粒を多く含む。近世や近代の陶磁器片などを含むことから、主として近世～近代頃のの水田耕作土と考えられる。

第Ⅲ層は層厚0.05～0.1m程度のオリーブ黒色土で、粘性が強く層全体に赤褐色系の糸根状斑紋が多く認められる。この層中で中世に時期比定される水田畦畔群が確認されており、同一層を耕作土としても利用している。

第Ⅳ層は層厚0.2m程度の黒褐色土で、粘性が強く上部には赤褐色系の糸根状斑紋が認められるが、Ⅲ層より量が少ない。

第Ⅴ層は黒褐色土で、層厚0.2m以上、層全体に植物遺体が多量に含まれている。

なお、第Ⅴ層より下位層については、トレンチ等の掘削に伴い、黒泥層及び泥炭層が確認されているが、部分的な確認のみで、全体的な検出作業は行っていないので基本層序には組み入れていない。

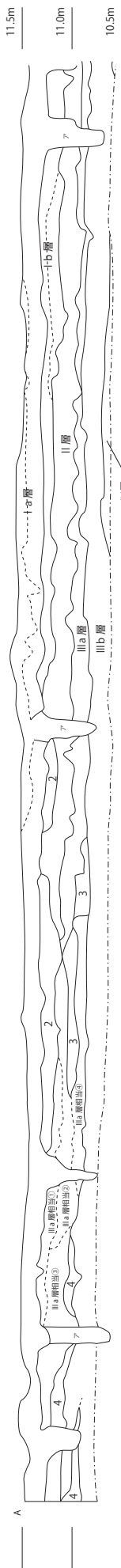
(甲斐)

#### 2 弥生時代後期～古墳時代前期の遺物

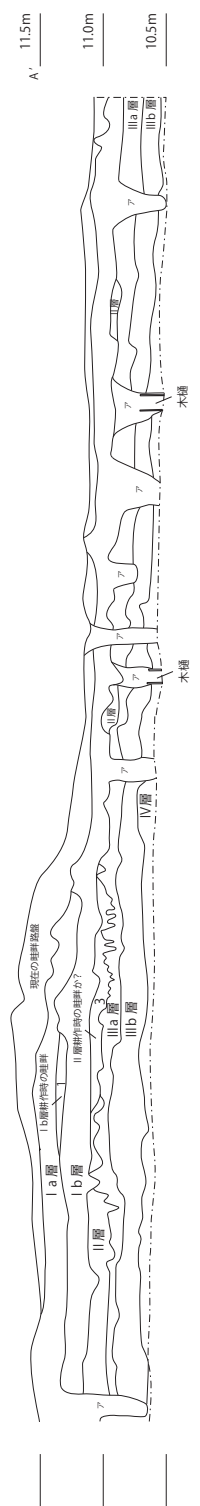
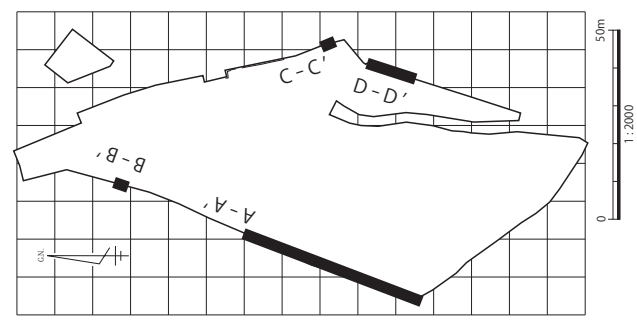
##### (1) 黒色砂質土層（第4図2層）について（第5図）

G地点の南西隅部、段丘斜面下の最も標高の高い標高11.0～11.2mの部分（約500㎡）において、第Ⅲ層を覆うような形で黒色砂質土（第4図2層）の堆積が確認された。層厚は0.2m前後で、分布範囲において端部が薄く中央部が厚いレンズ状に堆積している。この黒色砂質土層内には、弥生時代後期～古墳時代の土器、石器や中世の土師器などの遺物が包含されており、特に、調査地点の南西端にあたる16C・17C区では古墳時代前期の土器が集中して出土した。また、希薄ではあるが桜島文明軽石粒と推定される灰白色軽石粒も含まれる。これらのことから、当該層は、桜島文明軽石降下より後の15世紀後半以降に丘陵上部からの土砂崩落や河川からの洪水によって流入し、形成されたものと推測される。

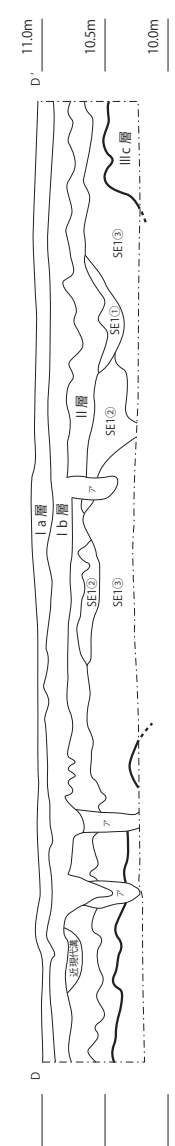
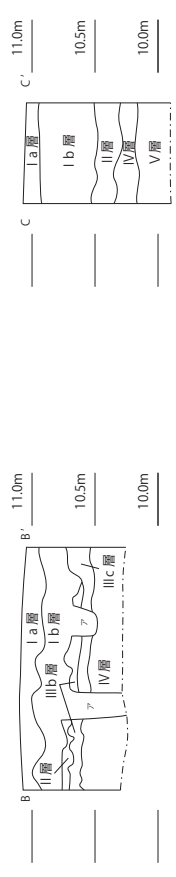
(甲斐)



- IIIa層相当 ①：黒色砂質土 (灰白色砂質土ブロックを含む)  
 ②：オリーブ黒色砂質土 (IIIa層との混層)  
 ③：オリーブ黒色砂質土  
 ④：黒色砂質土 (灰白色砂質土ブロックを多量に含む)



- 1 黒褐色土 (III層ブロックを多く含む)  
 2 黒色砂質土 (灰白色軽石粒を含む)  
 3 オリーブ黒色粘質土 (灰白色軽石粒を含む, III層ブロックを多く含む)  
 4 IIIa層に灰白色砂質土のラミナ堆積が混入  
 5 IIIb層に灰白色砂質土のラミナ堆積が混入

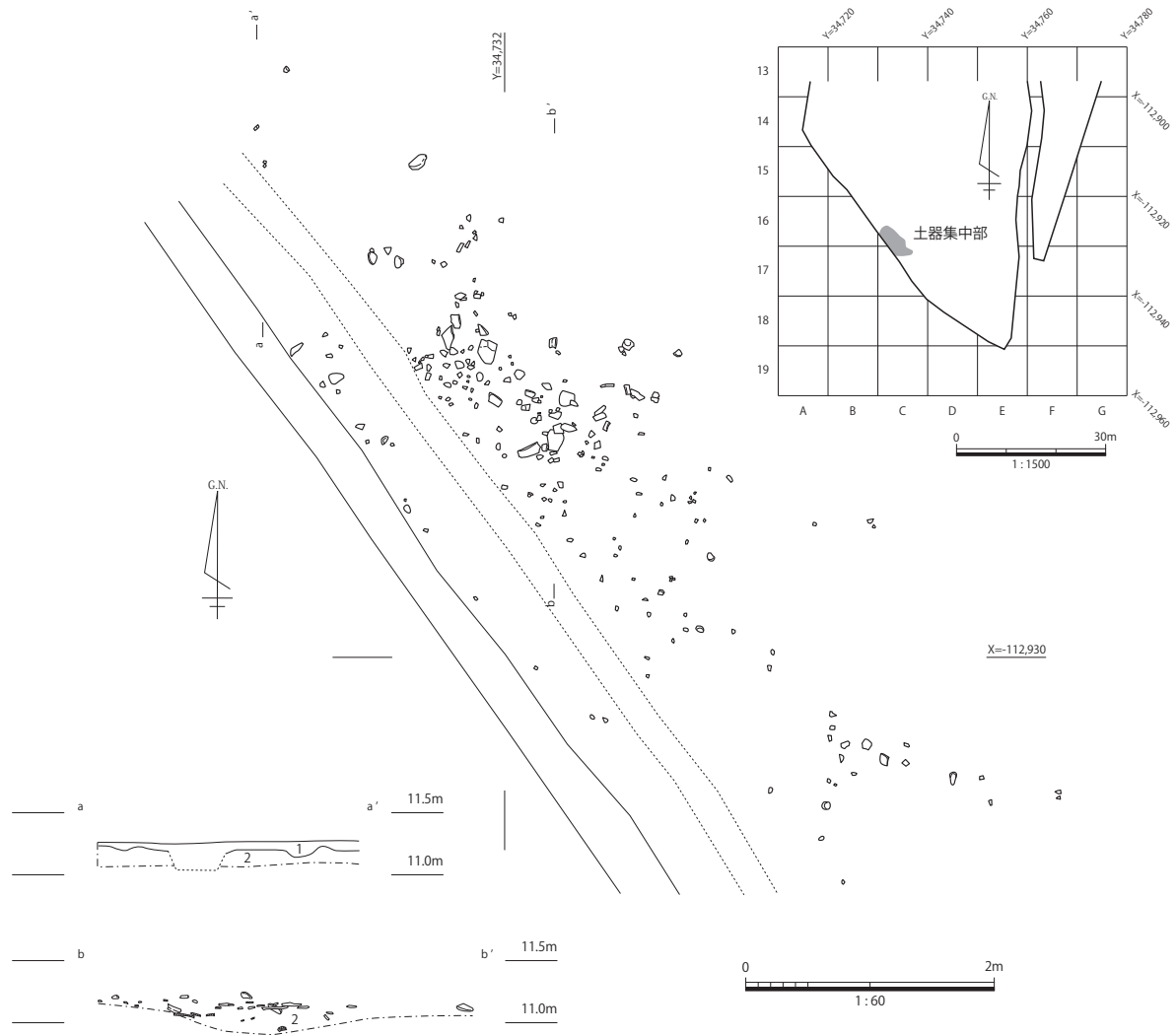


- SE1 ①：黒色粘質土 (灰白色軽石粒を含む, ラミナ状の植物遺体あり)  
 ②：灰オリーブ色粘質土  
 ③：灰色粘質土 (全体的にラミナ状の堆積)

- I層 a：黒褐色土 (明褐色土粒子と透明光沢粒子を含む, 層下半に糸状斑紋あり) 【表土, 現代の水田耕作土】  
 b：オリーブ黒色土 (浅黄色ノミミス粒を含む, 糸状斑紋あり) 【近代の水田耕作土】  
 II層 オリーブ黒色土 (岐阜文明降下軽石と推測される灰白色軽石粒を多く含む, 糸状斑紋が認められる) 【中世～近世の耕作土】  
 III層 a：オリーブ黒色粘質土 (粘性強い, 糸状斑紋あり) 【古代～中世の水田耕作土①】  
 b：黒色粘質土 (a層より暗い, 粘性強い, 糸状斑紋あり) 【古代～中世の水田耕作土②】  
 c：黒色粘質土 (植物遺体を多く含む) 【耕作に伴わない本来のIII層】  
 IV層 黒色粘質土 (粘性強い, 分解した植物遺体を多量に含む) 【古墳時代前後の遺物包含層か】  
 V層 黒色粘質土 (黒泥層, 粘性が強くグライ化する)

第4図 G地点基本層序





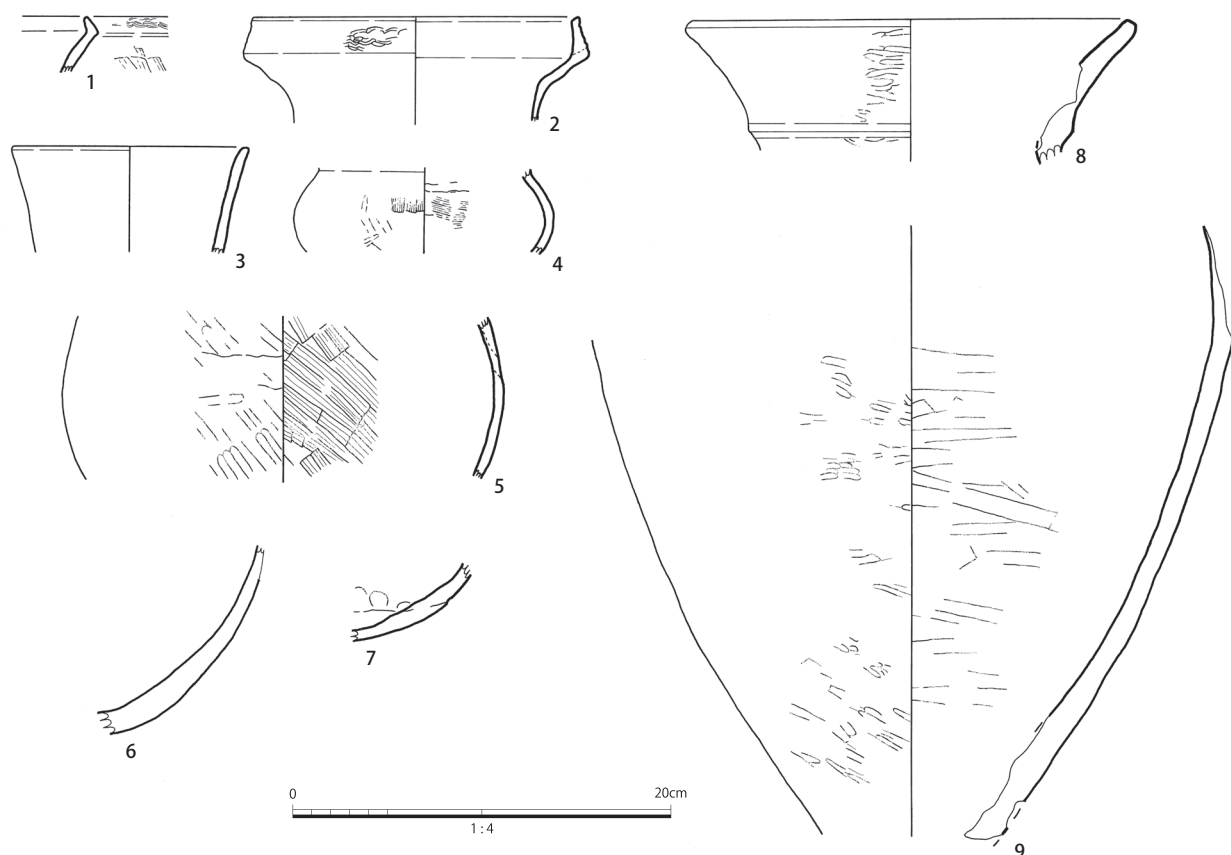
- 1 黒褐色土 (浅黄色粒子、文明ボラを多量に含む)
- 2 黒色砂質土 (浅黄色粒子、文明ボラを僅かに含む、中世の水田耕作土と洪水砂が攪拌される)

第5図 土器集中区平面・断面図

## (2) 16C・17C区土器集中区の出土遺物 (第6・7図)

上述の黒色砂質土層の堆積箇所の中で、古墳時代前期の土器などが多量に出土するブロックがある。部分的に当該層が浅い凹部を形成して堆積し、ところどころ細かな土器片が重なって出土するが、中世の水田層上に流入した層に含まれるものであり、本来の位置は保っていない。また、流入・堆積の過程か、あるいは堆積後の地下水の影響なのか定かでないが、器面が摩滅した状況となっている個体がほとんどである。主要な個体を図化した。

1・2は複合口縁壺である。1は短く折り返して口縁部を作出する。外面に櫛描波状文を施す。2は頸部の内面に粘土帯をのせて口縁部を形成している。接合の痕跡が明瞭である。外面に櫛描波状文を施す。3はほぼ直線的に立ち上がる壺の口縁部。4は小形の壺の胴部で扁球状を呈する。外・内面ともに細かなハケ目が残る。6・7は丸底の壺の底部近くである。8は複合口縁壺の口縁部。口縁先端近くの破片と頸部近くの破片を図上で復元した。複合口縁であるが屈曲は極めて鈍く、外面に文様は認められない。9は色調や胎土の特徴からみて8と同一個体と考えられる。胴部の最大径の付近から底部近くまでの比較的まとまった破片である。



第6図 土器集中区の出土遺物 1

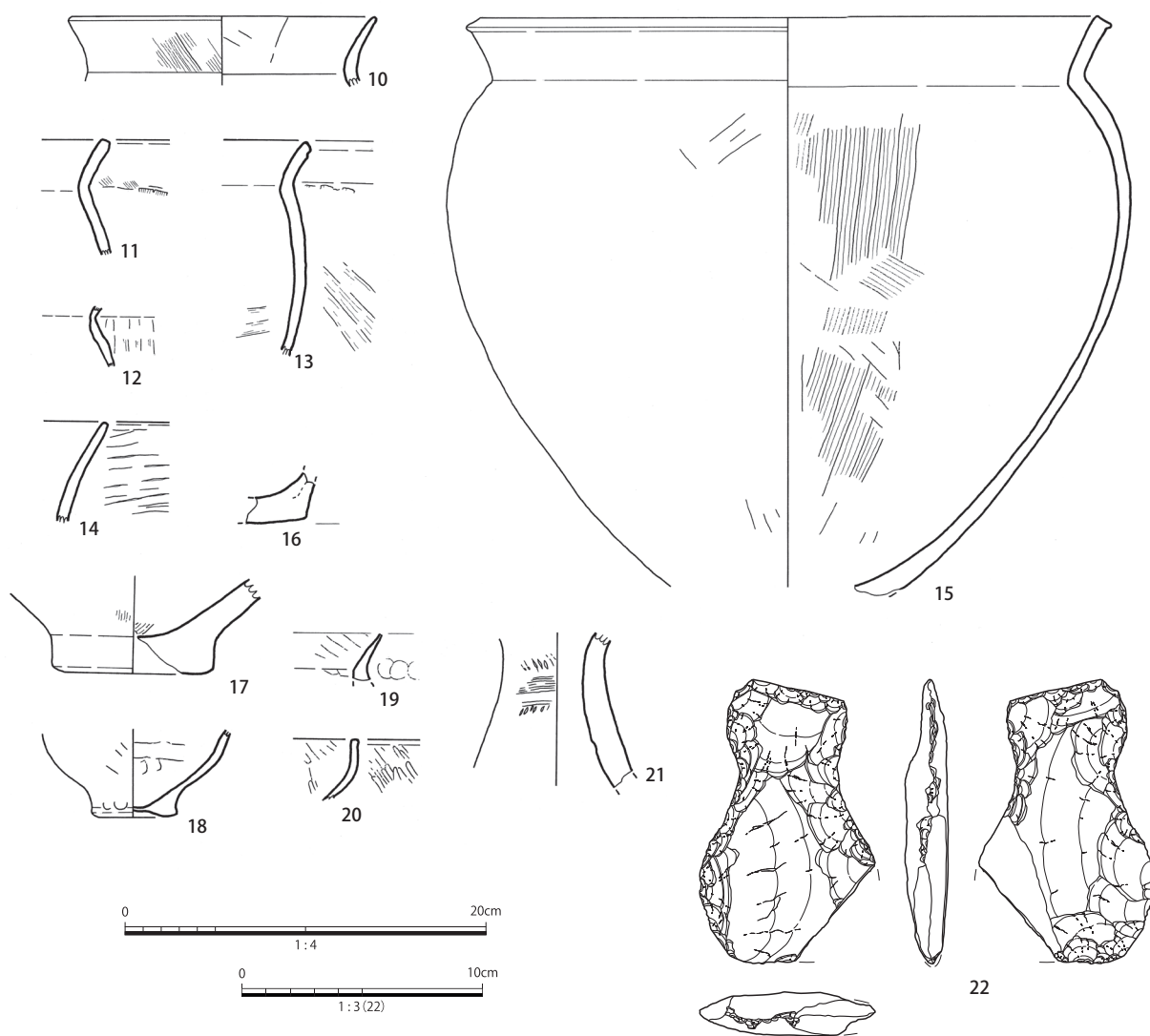
10～16は甕と考えられる個体である。10は緩やかに外反する口縁部で、外面に斜め方向のハケ目が残る。11は「く」字形に屈曲する口縁部で、外面の頸部より上は斜め方向、下は縦方向のハケ目がみられる。12は同様に「く」字形に屈曲する頸部付近と考えられる。外面はハケ目が残る。内面は器面剥落の影響で不明な点が多い。14は外反する口縁部で、外面にタタキ痕状の粗い条線が付いている。15は胴上部が張り、重心が頸部近くにある器形を呈する。口縁端部は平坦となり、外方が張り出して小さな段を形成する。17は壺の底部であろう。18は小形の壺か鉢の底部と推測される。底面の中央に凹部が認められる。19は小形の壺の口縁部と推定した。ただし、外面に指頭圧痕が残り、口縁端部とおぼしき部位が極端に薄くなるなど、不自然な面もある。20は椀状の器形の個体か。21は加飾の高杯の脚部である。上部に斜め方向の短沈線文と一周する平行沈線文が施される。22は砂岩製の打製石斧である。刃部の一部が欠損している。一方の面の中央部付近に変色した箇所が認められる。

### (3) 遺構に伴わない遺物 (第8図)

G地点の第I b層などから弥生時代終末期～古墳時代前期前半の土器が若干量出土していることから、特徴的なものをここで報告する。

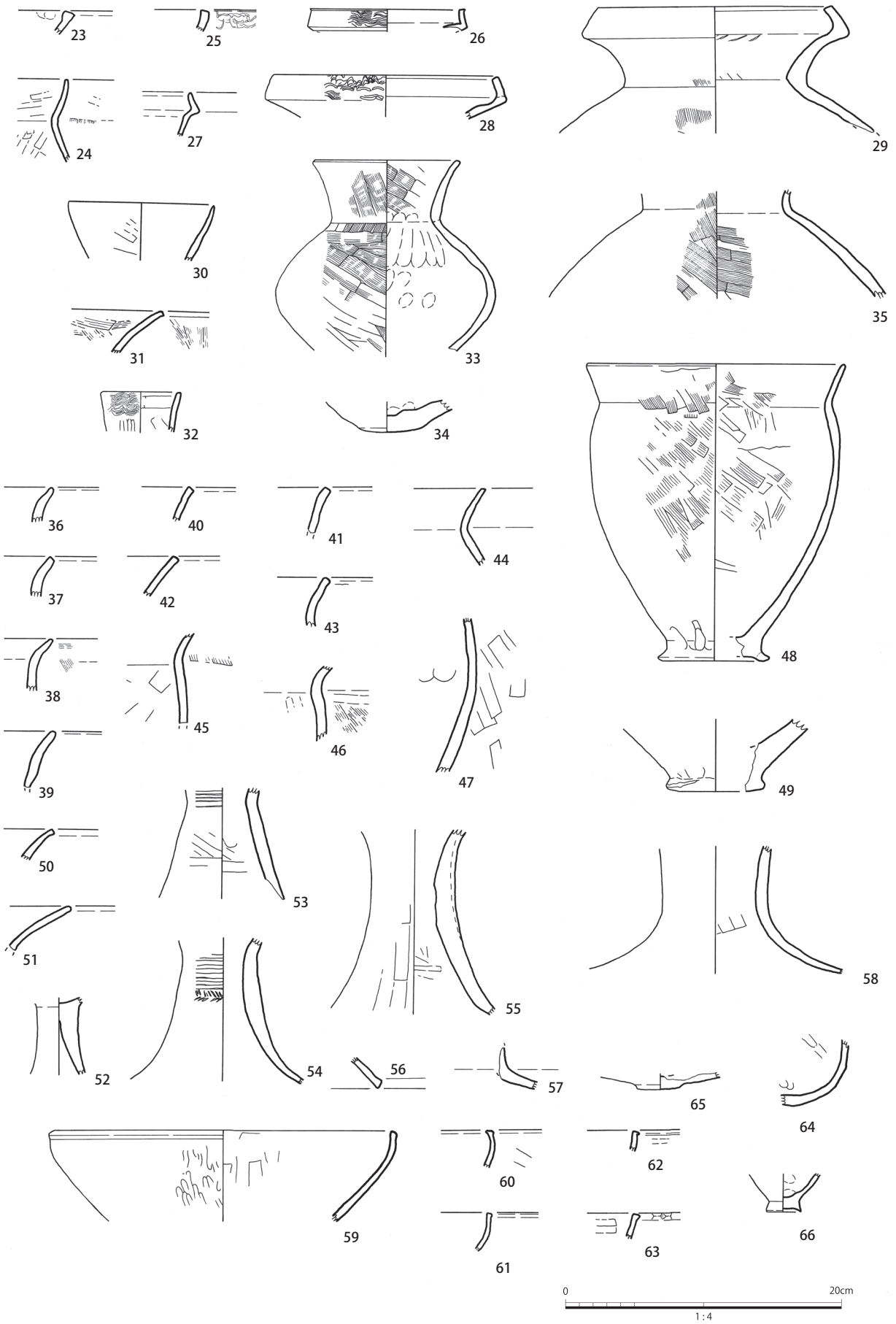
23～35は壺形に属する個体である。25～29は複合口縁壺の口縁部で、27と29以外は外面に楕描波状文を施している。29は口縁部～胴上部にかけてのやや大きな破片である。32は残存部位のみで椀状の器



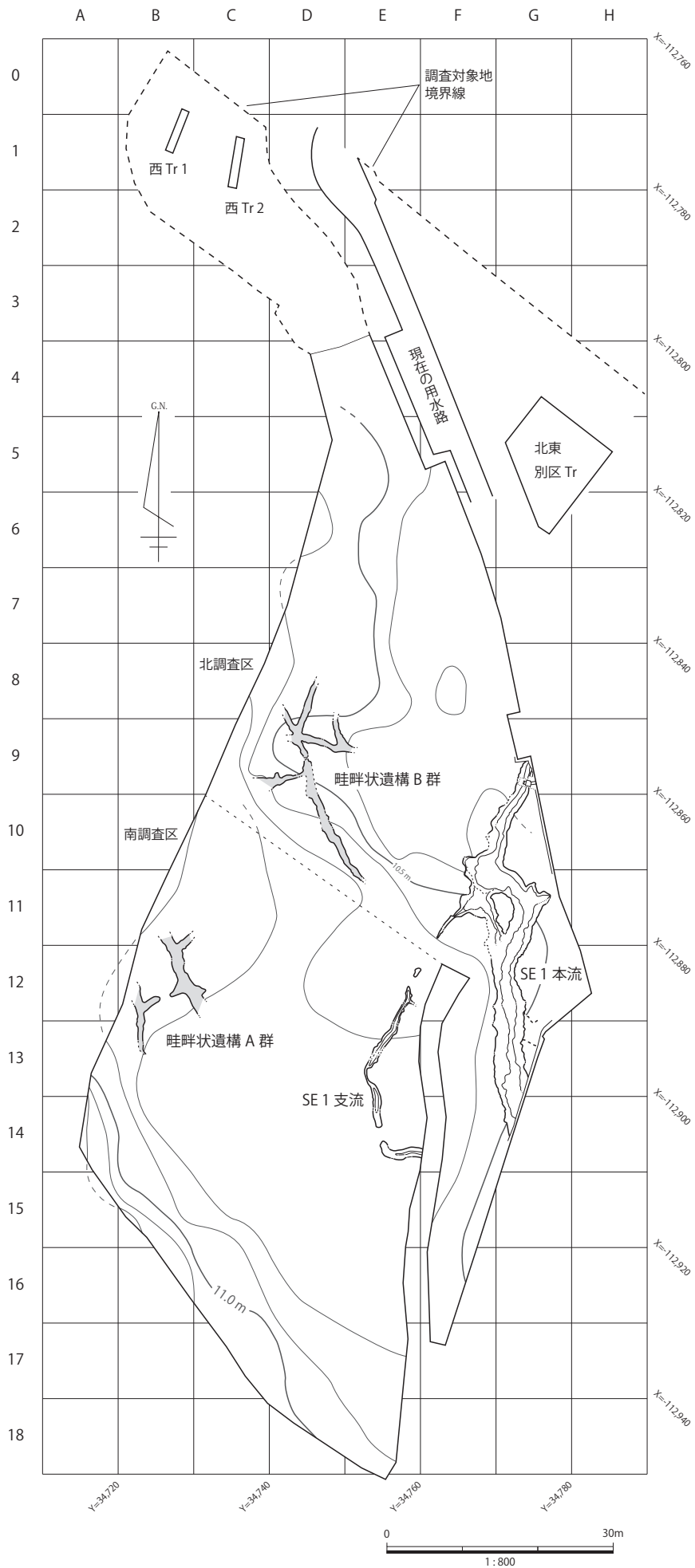


第7図 土器集中区の出土遺物2

形にもみえる。外面に櫛描波状文を施す。**33**は小振りの壺で底部付近以外は全周の1/3程度が残存する。内面の頸部～胴上部は指頭による調整の痕跡が明瞭に残る。**36～49**は甕と考えられる。この中では**48**が最もまとまる個体である。「く」字形に外反する口縁部を有し、胴上部が最大径部位となる。最大径部位付近の外面にススが付着している。底部は上げ底になると考えられ、底面が外方に張り出している。**50～57**は高杯である。小さな破片が多いが、脚上部に平行沈線文、綾杉状の短沈線文を施した**53**と**54**が目をひく。**56**は脚裾の端部、**57**は脚筒から裾部の破片であろう。**59**は鉢、**60～64**は椀形の個体と推定している。**65**は円盤状の貼り付けを施した底面部で、壺か鉢の底部であろうか。**66**は小型器種の底部近くで、脚台状を呈する。(吉本)

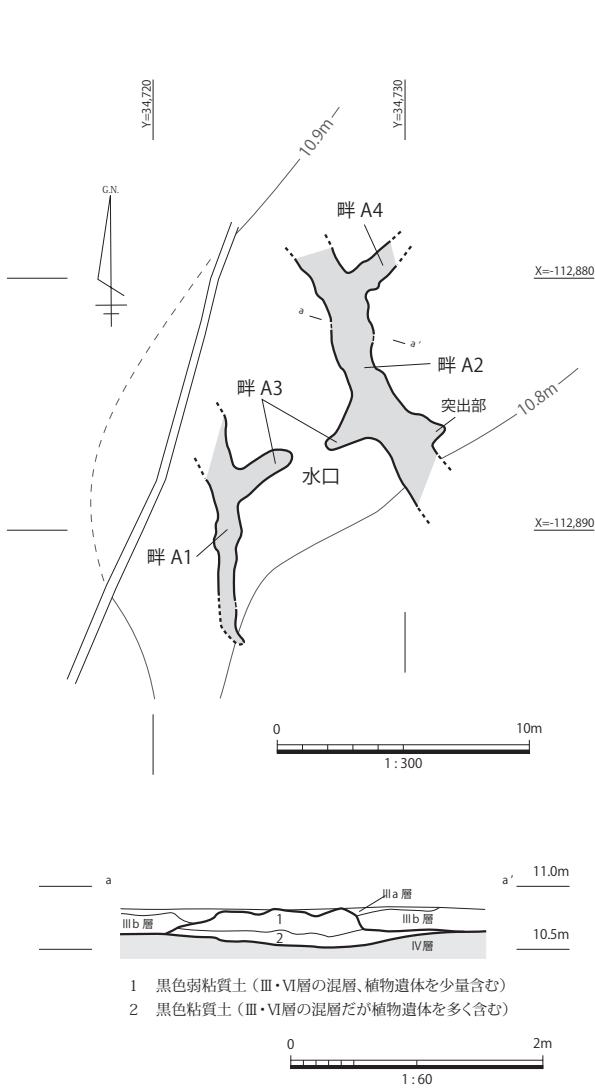


第8図 弥生時代終末期～古墳時代前期前半の遺構に伴わない遺物

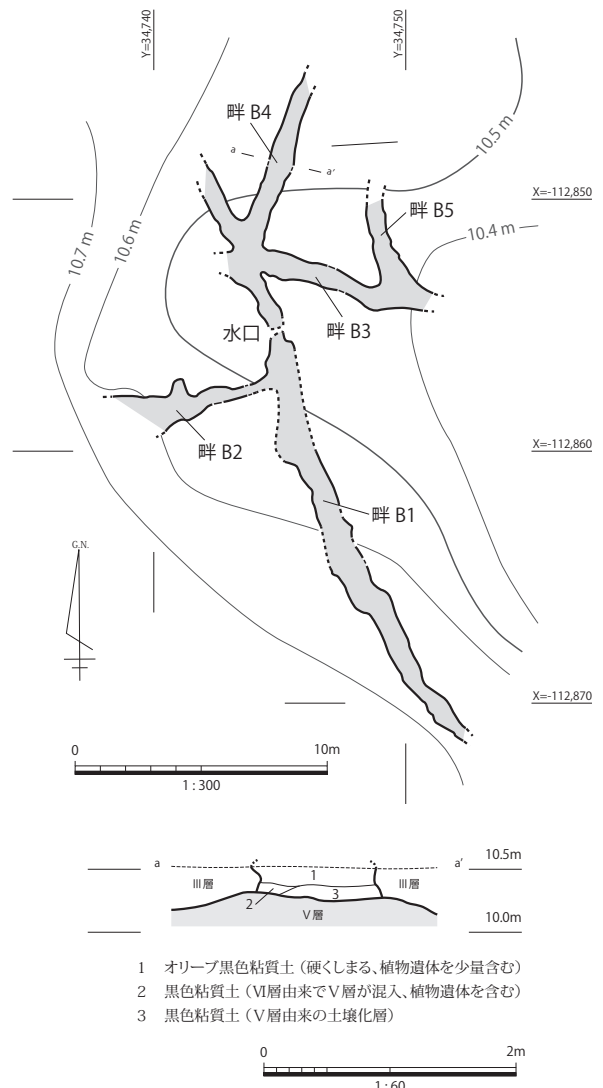


第9図 古代～中世の遺構分布図

畦畔状遺構 A 群



畦畔状遺構 B 群



第10図 畦畔状遺構 平面・断面図

### 3 古代～中世の遺構と遺物

#### (1) 遺構の分布 (第9図)

中世期における耕作土とした第Ⅲa・b層は調査区域全面で検出されたのではなく、調査地点の大部分、特に北東部では、後世の第Ⅱ層内での耕作時などによって削平されたと推測され、第Ⅲa・b層の残存が希薄であったり、消失していたりしていた。また、北端部分では、第Ⅲa・b層が6E区付近で徐々に消失し、代わりに植物遺体を多く含む第Ⅲc層が第Ⅳ層上に堆積している。第Ⅲa・b層の残存状態が良好であったのは、調査区西部から南西部付近にかけてであり、第Ⅲa・b層中の遺構・遺物は、その西部から南西部を中心に検出された。そうした残存状態が良好でない状況下ではあったが、第Ⅲa・b層中で形成されたと推定される2か所の水田畦畔群を調査地点西部で、溝状遺構を南東部で検出した。

#### (2) 畦畔状遺構

畦畔と推定される遺構は、調査区南西側の12B区付近と調査区中央部の9D区付近の2か所で検出さ

れた。いずれも第Ⅲa・b層のオリーブ黒色土に植物遺体を多く含む第Ⅳ層に似た黒色粘質土のにじみが帯状に確認されたことによって畦畔状遺構として認識し、検出作業を行った。

**畦畔状遺構 A 群** (第10図) 12B区付近において、幅1.5m程で南南東から北北西に延びる2条(畦A1・畦A2)とそれらに直交するように幅1m程度で西南西から東北東に延びる2条(畦A3・畦A4)の計4条の畦畔状遺構が確認された。いずれも部分的な検出で全容が確認できないが、畦A1と畦A2の間隔が5.2～6.4m程度、畦A2の南東部で確認される突出部と畦A4の間隔が約5.9mであることを考慮すると、1枚の水田区画は、6.0m前後と推定できる。畦A1と畦A2を繋ぐ畦A3は、中央部分が約1.35m途切れており、その部分は水口と推定される。

また、遺構の土層堆積状況確認のため、トレンチを設定し、掘り下げを行ったところ、第Ⅲ層の下は、植物遺体を多く含み、植物遺体層と黒色粘質土層が互層状に堆積している第Ⅳ層が全面に確認された。畦畔状遺構との認識に至った黒色粘質土のにじみは、第Ⅲ層と第Ⅳ層の混層と推定できる。遺構の堆積状況から、耕作土となる前の第Ⅲ層とともに第Ⅳ層を掘り下げて、畦状の高まりを形成した可能性が高いことを示している。

**畦畔状遺構 B 群** (第10図) 9D区付近において、幅0.7～1.0m程で南東から北西に延びる1条(畦B1)を中心に、西側で直交する1条(畦B2)、北側で45°と135°の角度で接続する2条(畦B3・畦B4)、畦B3東側から派生する1条(畦B5)の計5条の畦畔状遺構が確認された。部分的な検出のため、この部分での水田規模の推定は行うことができなかったが、並行する可能性がある畦B1と畦B5の間隔が約4.5mであることから、水田規模は4.5m程度の可能性がある。

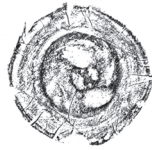
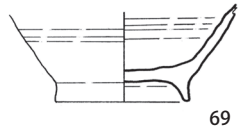
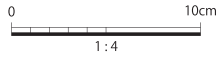
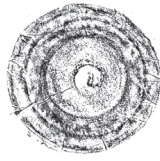
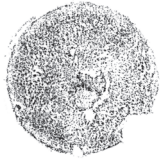
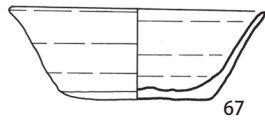
また、畦畔状遺構 A 群同様、土層堆積状況確認のため、トレンチを設定し、掘り下げを行ったところ、ここでは第Ⅲ～第Ⅴ層までを掘り込んで、畦と推定される高まりを形成していることがわかった。

### (3) 溝状遺構 (SE1、第11～14図)

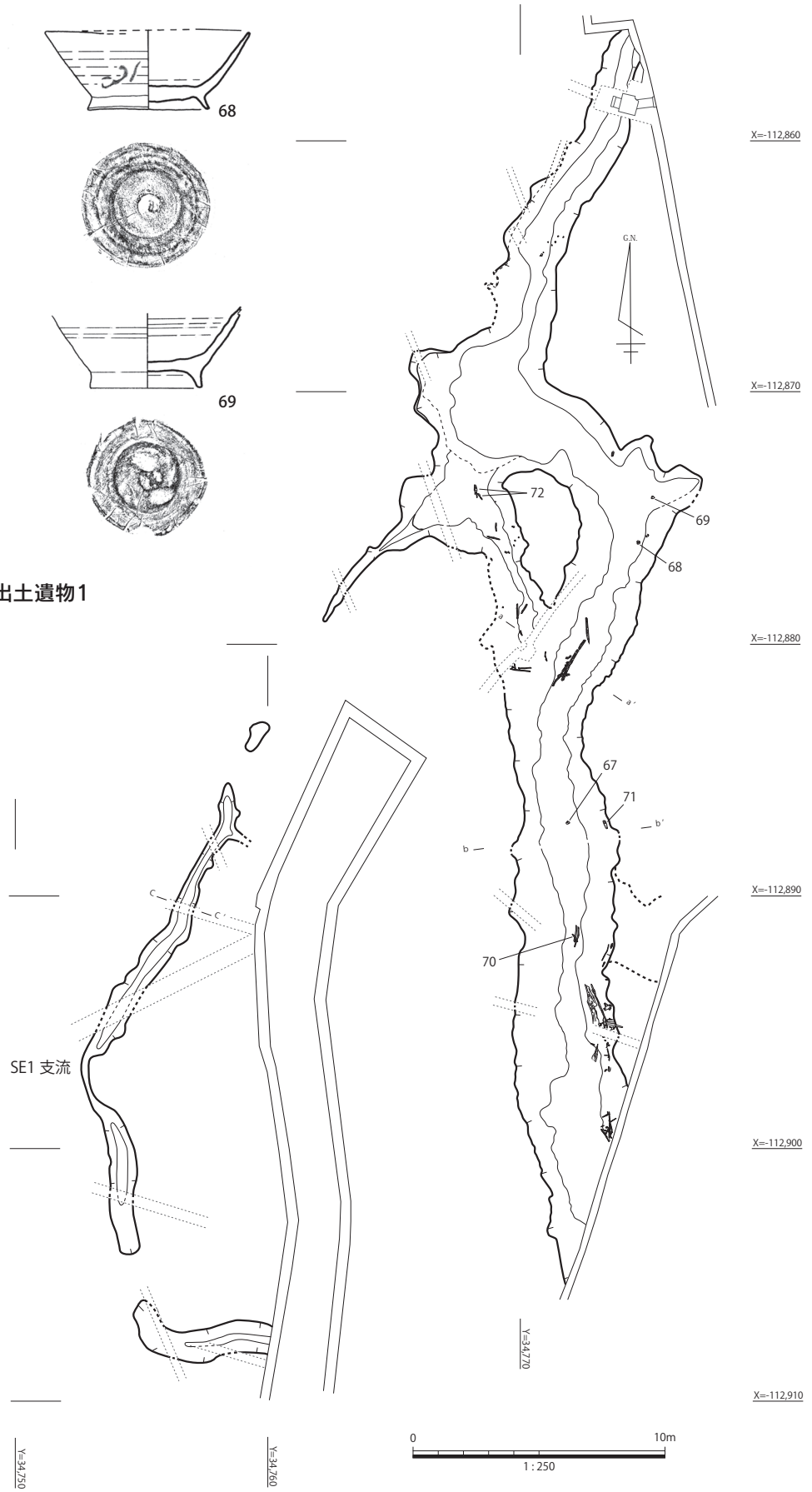
調査区中央東端部の9G～14G区にかけて検出された。SE1は大きく2条に分かれ、東側に幅2.0～4.0m・長さ46mの本流、西側に幅約1.0m・長さ約40mの支流から構成される。本流はわずかに湾曲しているが、概ね南北方向に延びる。11F・11G区付近で一度2本に分岐するが、再び1本に合流する。遺構は、南西から北東にかけて緩やかに下る地形に並行するように位置し、傾きはわずかに南側から北側に向かって下る程度である。本流の深さは、最深部で約0.1mである。土層堆積状況を見ると、シルト質土が主たる構成埋土であるが、部分的に砂質土を多く含むことから、幾度かの洪水等による土砂の流入によって埋没していったと推測できる。また、埋没過程において、再度部分的に掘削された痕跡もb-b'断面において確認されている。最終的には最上部の堆積土にのみ桜島文明降下軽石と推定される灰白色軽石粒を含むことが確認できた。

一方、支流は南南西から北北東に延びるが、南側は一度120°程度屈曲した後、さらに約90°曲がる形状を呈する。また、11F区付近で本流と合流する。しかし、埋土状況をみると、遺構の深さは最深部で約0.2mと浅く、第Ⅲ層上部から掘り込まれており、埋土下部(2層)に桜島文明降下軽石と推定される灰白色軽石粒を多く含むことから、畦畔状遺構より後出する。このことから本流が機能していた時期ではなく、本流がある程度埋没した時期に付随する形で取り付くものと推定できる。

出土遺物は、本流埋土の底部付近で古代の土師器67～69の他に、刀子形木製品70が出土した。また、

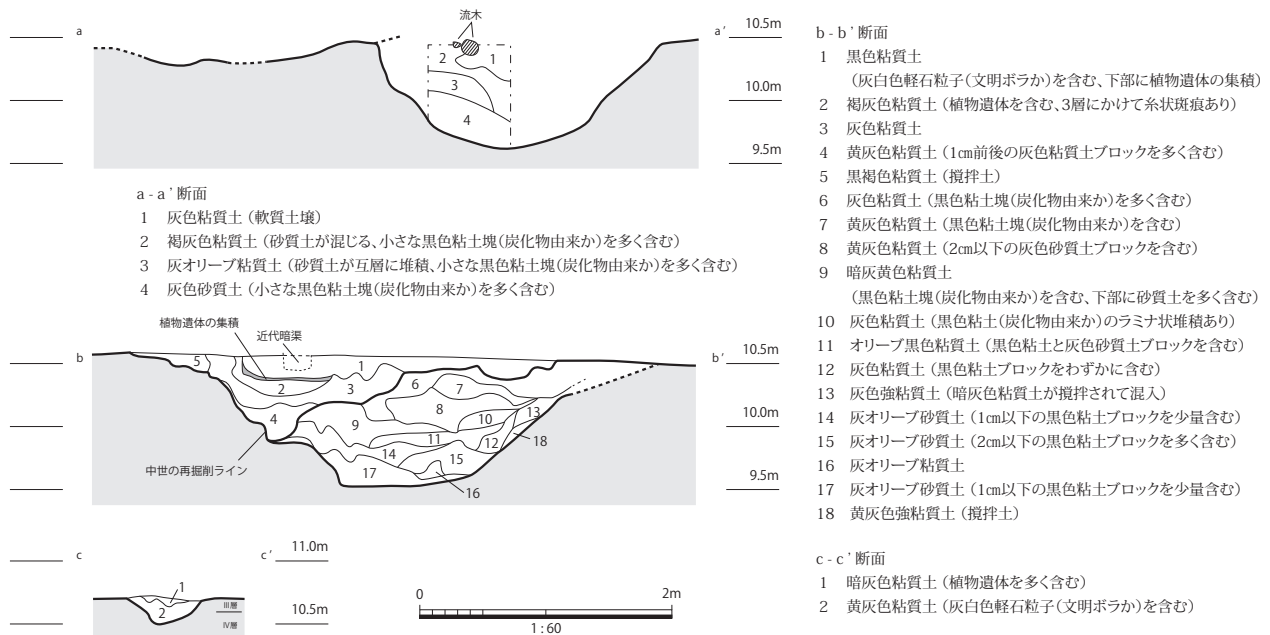


第11図 SE1 出土遺物1



第12図 SE1 平面図



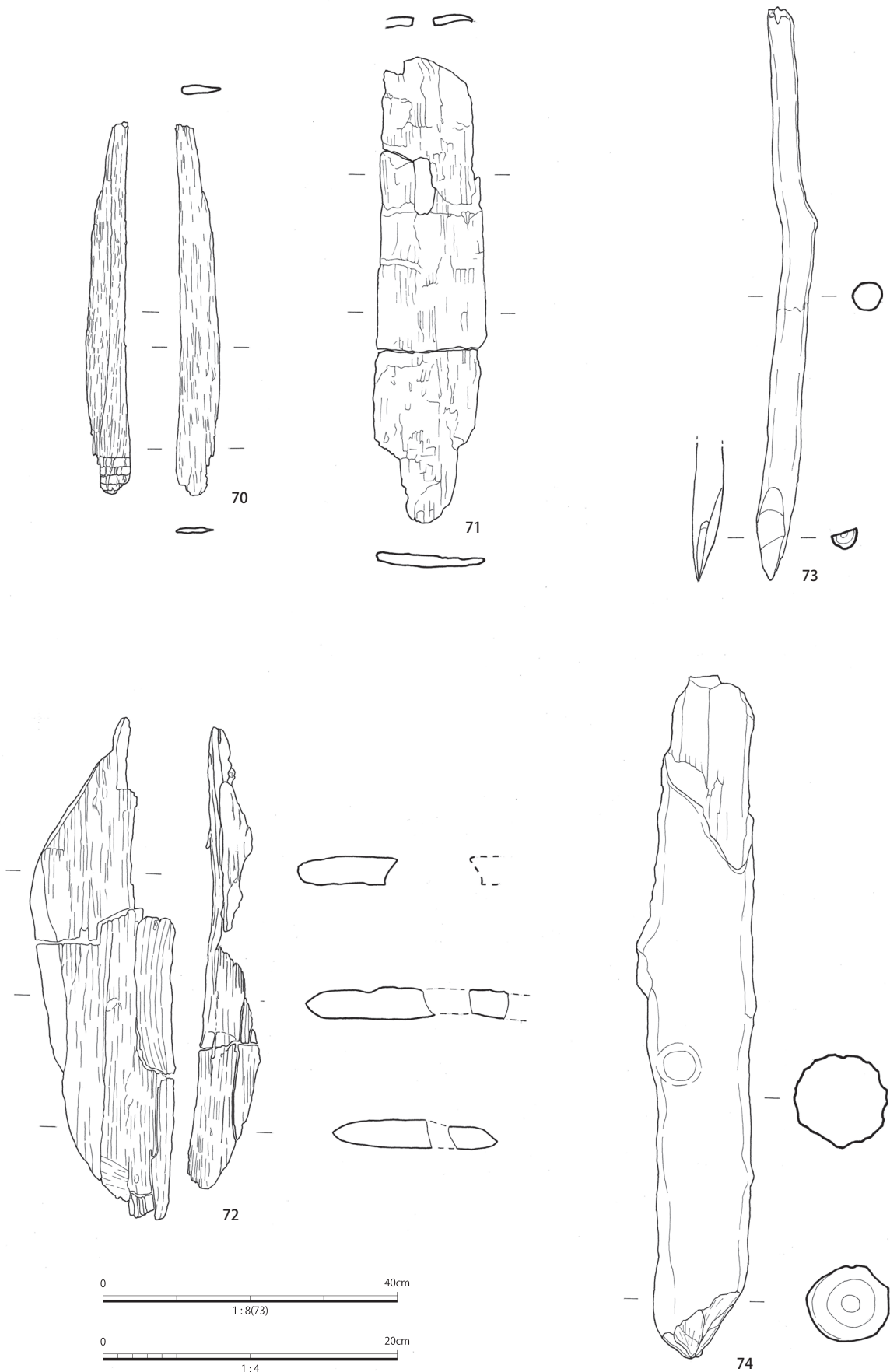


第13図 SE1 断面図

中位から上位では、木製農具71・72が出土しており、細片のため図化し得ていないが中世の土師器も認められる。なお、埋土中で加工痕が認められる杭が確認できた。流木とともに何か所かに集積された状況であったことから、必要な場所に設けられた柵状施設が押し流されたと考えておきたい。杭については特徴的なものを図化した。(甲斐・二宮)

67はヘラ切り底の坏、68・69は高台付碗で、いずれも土師器であるが67・68は硬質な仕上がりである。67は安定した底面から坏部が角をもって外方に開くもので、口縁部を外反させてやや丸くおさめる端部をもつ。成形時における見込みの稜とヘソを残して、内外面とも丁寧なナデで調整する。68は外に開き、69はほぼ直立する低い高台を有する碗である。ともに体部から口縁部までがほぼ直線的に外に開き、68の口縁端部はやや鋭い。68は内外面ともに丁寧なナデで調整し、69の体部内面には2条の凹線が認められ、高台内に圧痕が確認できる。なお、68の体部外面には墨書が確認できるが、判読には至らなかった。(二宮)

70は形状から刀子形木製品とした。残存長は25.5cm、幅3.1cm、厚さ0.7cmの細板状で、刀身は約21cmを測る。刀身は細板の側面を薄く削って刃を作りだし、もう片側面は角を整形し僅かに丸みをもっている。また、聖と思われる部分に横方向の切り込みが5本入っており、長方形曲物等の転用とも考えられる。用材はコウヤマキである。71は直柄平鋏の鋏身で、長さ31.9cm、幅7.8cm、厚さ1.1cmを測る。中央上部に4.0×1.2cmの隅丸長方形孔をもつ。用材はコナラ属アカガシ亜属である。72は組合せ平鋏の鋏身で、残存長44.8cm、残存幅10.3cm、厚さ2.3cmを測る。側面は表裏両方を削って刃を作りだし、刃部の長さは約25cmを測る。中央に凹形の加工痕が有り、凹形下部は表裏面より斜めに削って山形に加工している。用材はコナラ属アカガシ亜属である。73・74は杭状の加工品である。73は芯持ち丸木を用い、一端を尖らせている。残存長158.4cm、最大径4.6cmを測る。先端37cmより火を受けて焦げた跡が見られる。用材はカヤである。74は残存長46.9cm、最大径8.0cmを測る。一端には切断面が明瞭に残る。用材はコナラ属クヌギ節である。(後藤)

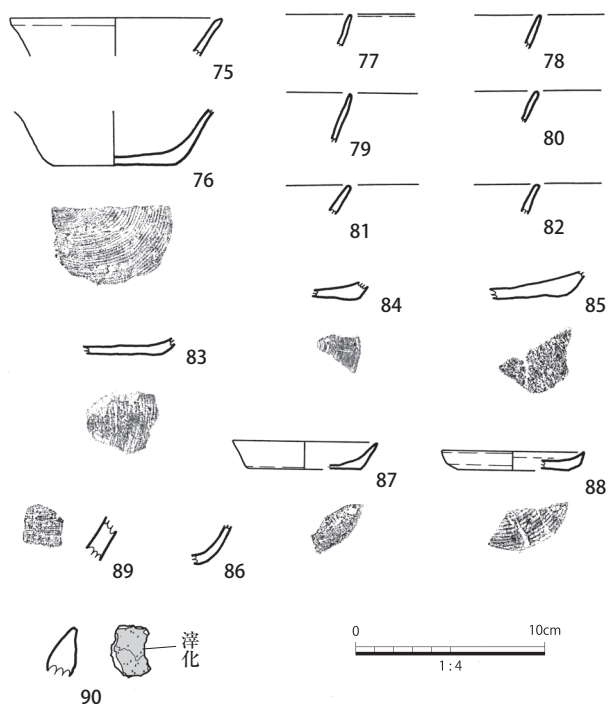


第14図 SE1 出土遺物 2



#### (4) 遺構に伴わない遺物 (第15図)

先に報告した黒色砂質土層を含む基本層中から、古代～中世に属する遺物が出土している。75～85は土師器坏である。76・83・84は糸切り底、85はヘラ切り底である。このうち76は外に開く坏部から外反する口縁部をもち、丁寧な回転ナデで内外面の稜を消すが、底面と坏部の境は切り離しのままで残す。86～88は土師器皿である。87はヘラ切り底、88は糸切り底のもので、ともに鋭い口縁端部を有する。89は布痕土器片、90は表面がガラス質に変化した羽口の先端部である。(二宮)



第15図 古代以降の遺構に伴わない遺物

### 4 G地点のまとめ

#### (1) 古代以前の様相

遺跡下層の状況確認のためトレンチを複数箇所設定して掘り下げを行い、黒色粘質土の第V層中に多量の植物遺体が含まれていることが判明した。植物珪酸体分析の結果、上位の第IV層ともあわせて、イネはほとんど確認されず、ヨシ属の植物珪酸体を非常に多く含むことが判明している〔詳細は自然科学分析編参照〕。このことから第V層中の植物遺体がまさにそのヨシ属のものであり、第III層形成以前については、それらが繁茂する湿地帯であったと推測される。また、出土量こそ少ないが、第V層上部周辺で古墳時代の土師器片が出土していることから、同時代には湿地帯の風景が広がっていた可能性がある。

古墳時代における遺構の検出はなかったが、塚原台地直下にあたる調査地点の南西端において、古墳時代前期の土器類を中心に、弥生時代後期の遺物などが包含された黒色砂質土層(第4図2層)が堆積していた。当該層に桜島文明軽石が混じっていることを踏まえると、15世紀後半以降に台地上部からの土砂崩落や河川からの洪水によって、これらの遺物が流入したと考えられ、古墳時代前期の遺物量を勘案したとき、台地上に集落が存在していたことが示唆される。(甲斐)

#### (2) 古代～中世の様相

近世～近代の耕作土と推測される第II層には15世紀後半頃の桜島文明軽石が含まれており、中世の水田層を含むと推測されている第III層には桜島文明軽石層が含まれていないことから、第III層の形成は桜島文明軽石降下以前、つまり15世紀後半以前であったと判断している。

第III層を利用してつくられた畦畔状遺構群は、調査地区の一部分のみでの検出であったことから水田の全体像まで言及することは困難であるが、部分的な復元は可能と考えられる。そこで、畦畔状遺構A群とB群を併せて検討したところ、畦A1・A2・B1・B5はほぼ並行することがわかった。さらに、

これら4条の畦畔状遺構の向きは等高線と重ね合わせてみると、等高線とも並行するように配置されている。A群とB群の比高差が約0.2mであることを考慮に入れると、これらの水田群は、台地下のA群からB群にかけて緩やかに下る棚田状の水田を形成していた可能性がある。

また、第Ⅲ層については、調査地点の北西部や北端部では確認できなかった。第Ⅲa・b層が消失し、第Ⅲc層が堆積している6E区北側での植物珪酸体分析の結果、イネ科の植物珪酸体は全く確認されなかったことに対し、約10m南側でⅢ層が残存している6E区南側では密度が8,400個/グラムの高い数値で植物珪酸体が確認されていること〔自然科学分析編参照〕から考えると、第Ⅲ層が水田耕作土となり、6E区付近を境界として南側のみを水田として利用していたと推測できる。

SE1は歪曲した平面形状から当初は自然流路であったと考えられるが、V字状に掘削されている断面形状が確認できる場所では人工的な掘削が行われた可能性が高い。断定はできないが、出土遺物から9世紀代頃より流れていた自然流路を中段階で一部人工的に改削して排水路として使用していた可能性が高い。また、自然流路であった9世紀代頃の流域の埋土中より、墨書土器や刀子形木製品が出土したことから、河川祭祀が執り行われたと考えられる。同時代における水田跡など周辺域の開発の痕跡は確認できなかったが、後世まで継続して耕作が繰り返される場所であることを考えると同時代の畦畔等は滅失している可能性もある。

なお、SE1は等高線に対してわずかに北側に向けて下るが、およそ等高線と並行に近い形で配置されており、畦畔状遺構A・B群の方向とも近似していることから、排水目的だけでなく区画目的であった可能性も指摘できる。このことからSE1の人工的な開削の時期と畦畔状遺構の設置については、有機的に結びついていると考えられ、周辺から出土する土師器などが13～14世紀頃の所産であることから、当該地点を利用した水田経営はこの頃に始まったと考えておきたい。また、本流部分の埋没が進み徐々に流域を狭める中で、分岐するようにして支流部分が流れ始めたと考えられる。最終的にはどちらの埋土にも桜島文明降下軽石と推定される灰白色軽石粒が多く含まれていることから15世紀後半頃には溝としての機能を終えたことが判明した。

(甲斐・二宮)

## 第2節 H地点の調査

### 1 基本層序（第16図）

H地点は、丘陵地の東部に位置する広大な水田地帯で、調査対象地の西側には東九州自動車道が整備されており、工事に伴い塚原遺跡 A・B・D 地点の調査が行われている。その他周辺では、昭和20年代・40年代に広範囲にわたってほ場整備が実施されていることが知られている。対象地の現地表面の標高は、水田面の最も低い場所で約10.3m、町道の最も高い場所で約11.5mを測る。

対象地は、町道・農道・農業用水路によって分断されており、排土の処理などの工程上6分割して調査を行った。農業用水路より北側をH1地点、農業用水路より南側・町道東側をH2地点、町道西側・農道北部をH3・H4地点、農道南部東側をH5地点、西側をH6地点とした。

対象地は、全体的に約0.3mの現耕作土と直下に約0.3mの近世～近現代の耕作土と近現代の暗渠排水設備の敷設が認められる。それ以下の地形は、南西から北東方向にかけて高低差約0.3mと緩やかに下り、下位層は基本的に水平に堆積している。基本層は稲作の連続耕作によって削平を受けているが、北東側ほど残存状況がよいことが地層堆積状況より確認できる。しかしながら、H1地点では北東側ほどグライ化が進み、H1地点の北東側の3/5は近世～近現代の耕作土直下より褐灰色土の堆積を確認した。トレンチによる確認を行ったところ、1m以上の堆積が確認でき、これより北東側は低湿地の水没地帯であったことが想定される。

地層堆積状況の観察と記録は、H2～H3地点の北東側壁面で行った。全体を大別してⅠ～Ⅶ層に区分した。

第Ⅰ層は、層厚約0.3m前後、現表土の明褐灰色土で、主として現代の水田耕作土である。ほ場整備の時期により、分割が可能である。

第Ⅱ層は、層厚0.05～0.3mのオリブ黒色土で、層全体に桜島文明軽石と推定される灰色軽石粒を多く含む。軽石粒の粗密により、細分が可能である。近世や近現代の陶磁器片などを含むことから、主として近世～近現代頃の水田耕作土と考えられ、耕作の影響でこれより以前に堆積していたと見られる軽石粒を巻き込みながら攪拌を受けている。

第Ⅲ層は、層厚0.05～0.15mの黒褐色土で、粘性が強く、層全体に赤褐色系の糸根状斑紋が多く認められる。古代～中世の水田に伴う耕作土としても利用される。

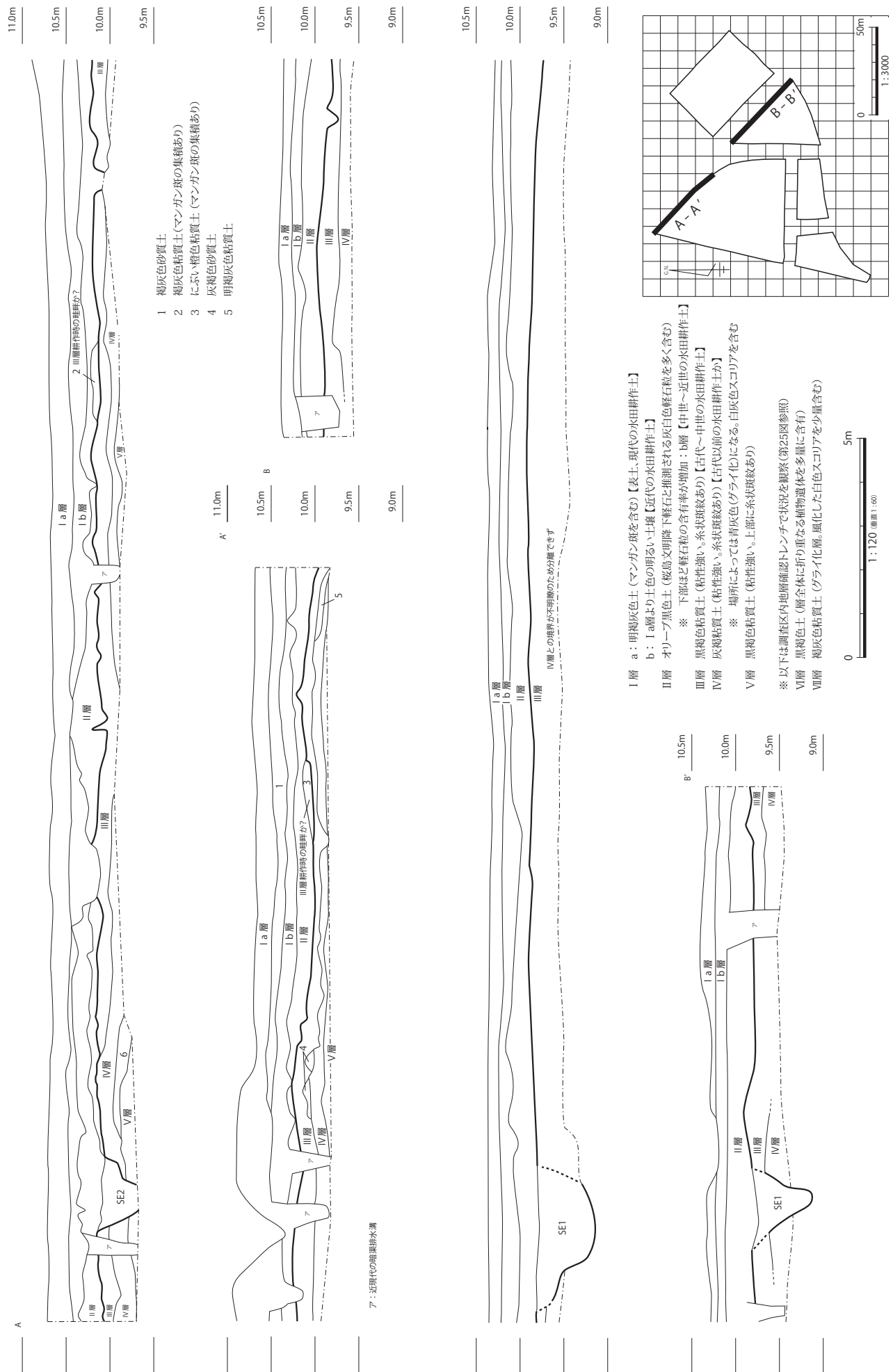
第Ⅳ層は、層厚0.05～0.15mの灰褐色土で、粘性が強く、赤褐色系の糸根状斑紋が多く認められ、H2・H3地点の北東側でのみ確認できる。古代以前の水田の耕作土としても利用される。

第Ⅴ層は、層厚0.2m程度の黒褐色土で、粘性が強く、上部には赤褐色系の糸根状斑紋が認められるが、第Ⅲ層より量が少ない。

第Ⅵ層は、層厚0.2m以上の黒褐色土で、層全体に植物遺体が多量に含まれている。

第Ⅶ層は、褐灰色粘質土で、H1地点北東側で確認した。グライ化しており、層厚が1mになるところもあり、風化した白色スコリアを少量含む。

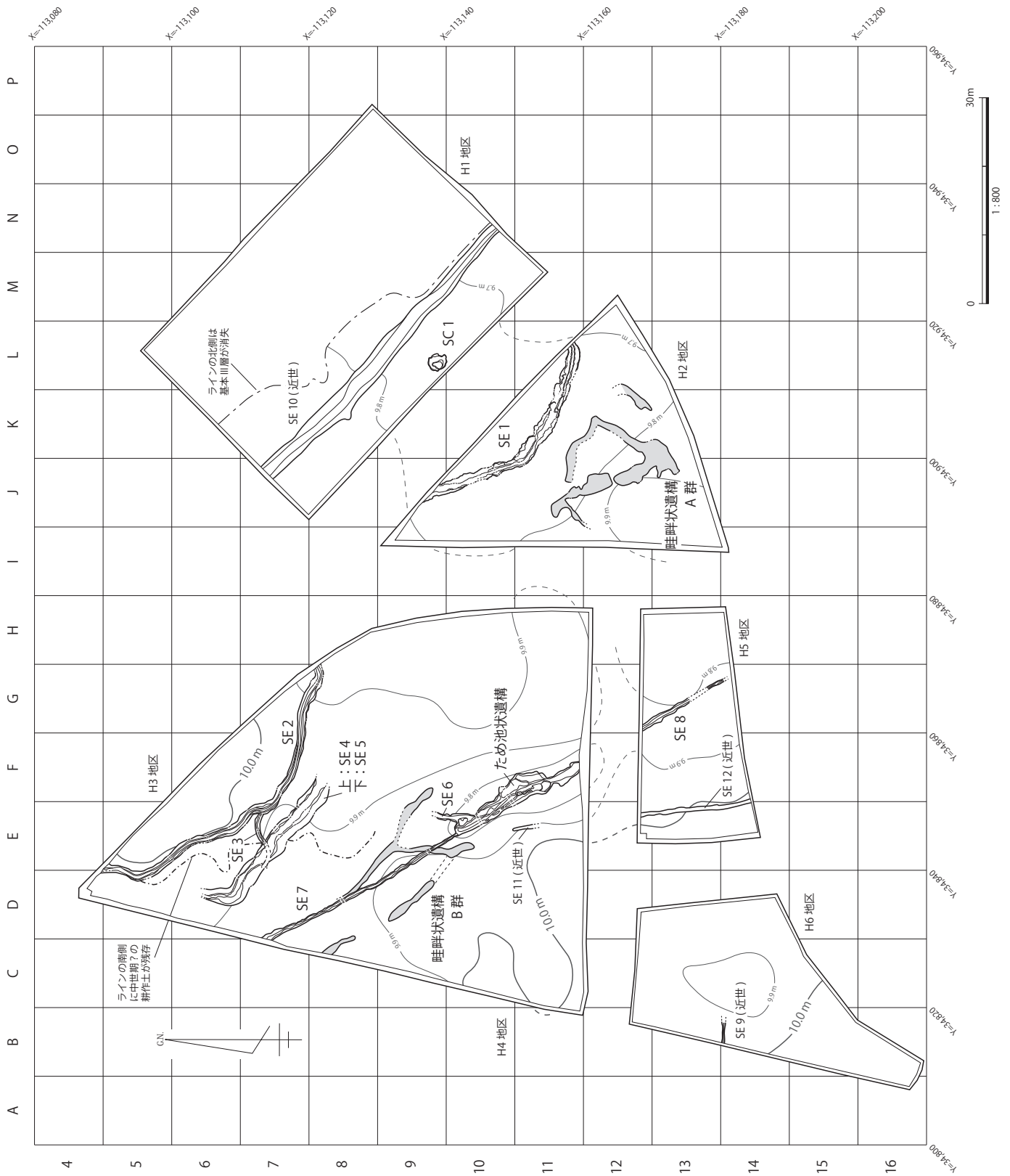
これより下位層については、深い溝状遺構の調査等によって褐灰色土層を確認しているが、部分的な確認のみで、全体的な検出作業は行っていないので、基本層序には組み入れなかった。



- 1 褐灰色砂質土
- 2 褐色粘質土(マンガン菌の集積あり)
- 3 灰褐色粘質土(マンガン菌の集積あり)
- 4 明褐色粘質土
- 5 明褐色粘質土

- 1層 a : 明褐色灰土(マンガン菌を含む)【表土、現代の水田耕作土】
  - 1層 b : Ia層より土色の明るい土壌【近代の水田耕作土】
  - II層 オリーブ黒色土(微島文明降下軽石と推測される灰白色軽石粒を多く含む)
    - ※ 下部ほど軽石粒の含有率が増加：b層【中世～近世の水田耕作土】
  - III層 黒褐色粘質土(粘性強い。糸状斑紋あり)【古代～中世の水田耕作土】
  - IV層 灰褐粘質土(粘性強い。糸状斑紋あり)【古代以前の水田耕作土か】
  - ※ 場所によっては青灰色(グライ化)になる。白灰色スコリアを含む
  - V層 黒褐色粘質土(粘性強い。上部に糸状斑紋あり)
- ※ 以下は調査区内地層確認トレンチで状況を観察(第25図参照)
- VI層 黒褐色土(層全体に折り重なる植物遺体を多量に含有)
  - VII層 褐色粘質土(グライ化層。風化した白色スコリアを少量含む)

第16図 H地点 基本層序



第17図 古代～中世の遺構分布図



## 2 古代～中世の遺構と遺物（第17図）

H 地点では、古代～中世の溝状遺構 5 条、中世の溝状遺構 4 条、調査区南東部と西部で畦畔状遺構 2 群を確認した。調査は、第Ⅰ層（現代の水田耕作土）、第Ⅱ層（近世～近現代頃の水田耕作土）を重機で除去し、第Ⅲ層上面での検出を行った。第Ⅲ層は、調査区域全面で検出されたのではなく、調査区の大部分は、後世の第Ⅱ層耕作時などによって削平されたと推測され、第Ⅲ層の残存が希薄であったり、消失していたりしていた。また、7K-11N区より北東部分では、第Ⅱ層下よりグライ化した第Ⅳ層が1 m 以上堆積しており、桜島文明軽石を除去した面の一部からは湧水が確認された。この範囲での遺構・遺物は検出できなかったが、植物珪酸体分析の結果、5L 区付近の第Ⅱ層下より多量のイネのプラントオパールを確認しており、中世以前の水田耕作地の範囲は調査区北端まで広がる可能性が指摘できる。

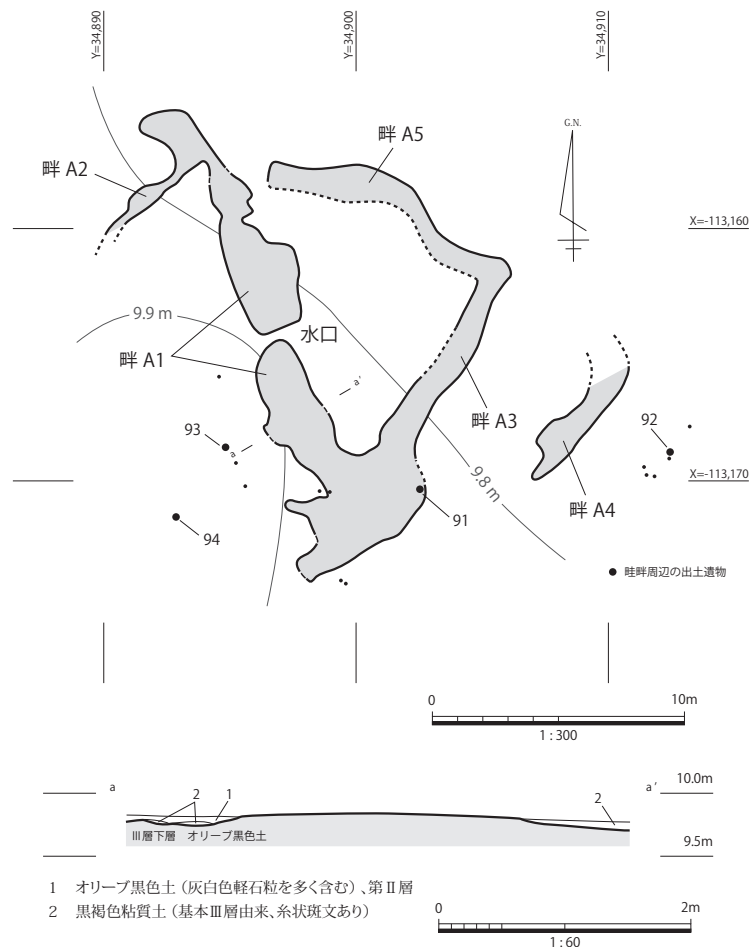
第Ⅲ層の残存状態が良好であったのは、地形が徐々に高くなる調査区西部から南西部付近にかけてであり、第Ⅲ層中の遺構・遺物は、ここを中心に検出した。第Ⅲ層中からは、層中で形成されたと推定される水田畦畔群や溝状遺構などの遺構および土師器を中心とする遺物が確認された。

### (1) 畦畔状遺構

畦畔と推定される遺構は、H2 地点の11J~13K区（A群）と H4 地点の8C~10E区（B群）の2か所で検出した。

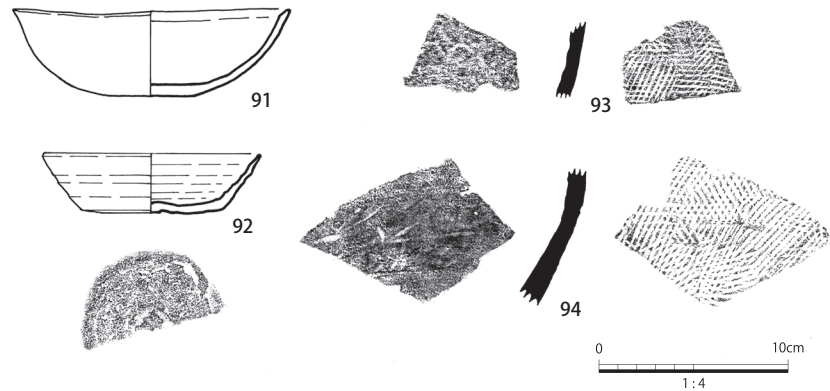
東側のA群では黒灰色砂質土の上面、西側のB群が第Ⅲ層上面で、いずれもオリーブ黒色土のにじみが帯状に確認されたことによって畦畔状遺構として認識し、こののにじみを残すようにして畦畔の検出作業を行った。

畦畔状遺構は調査区の一部のみの検出であり、水田の全体像まで言及することは困難であるが、部分的な復元は可能と考えられる。そこで、畦畔状遺構A群とB群を併せて検討したところ、A・B群ともに等高線と並行するように配置された畦をベースに、区切る畦を配置し、また、ベースとなる畦に水口を形成していることが想定される。このことより、これらの水田群は、北東方向にかけて緩やかに下る棚田状の水田を形成していた可能性がある。しかし、成立時期については、後述する



第18図 畦畔状遺構A群 平面・断面図

土層堆積状況から畦畔状遺構 A 群は第Ⅲ層と第Ⅳ層の間層上、B 群は第Ⅲ層上に畦を形成しており、A 群の方が先に出現している。このことより、調査対象地一帯は、何度か洪水等で土が流入し、その都度畦の形成を行った可能性がある。



第19図 畦畔状遺構 A 群周辺の出土遺物

#### 畦畔状遺構 A 群 (第18・19図)

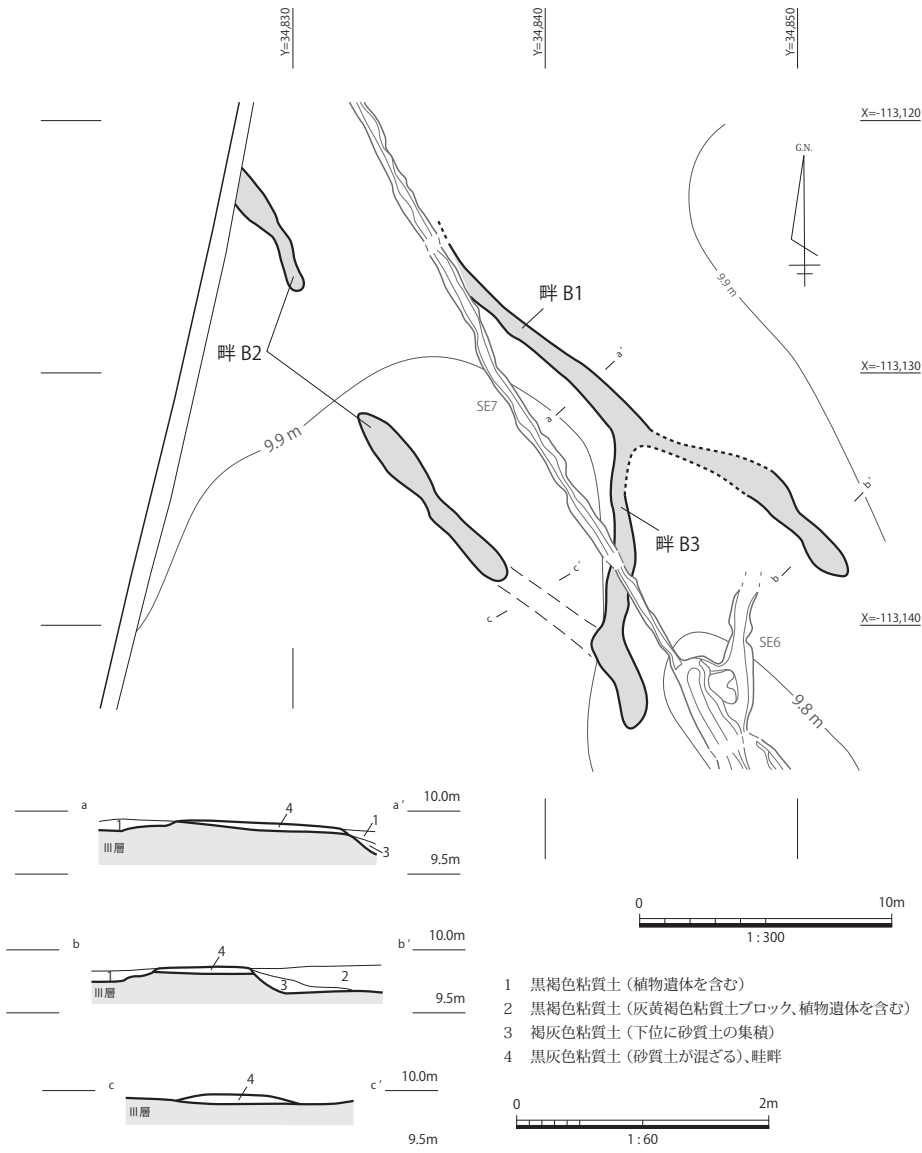
12J 区において、幅約3.0m、高さ約0.14mで北北西から南南東を軸に延びる1条(畦 A1)を中心に、幅約0.8~1.2mで北東・南西に延びる3条(西側より畦 A2・畦 A3・畦 A4)、幅約1.0mで西北西・東南東に延びる1条(畦 A5)の計5条の畦畔状遺構が確認できた。いずれも部分的な検出で全容は確認できないが、畦 A2と畦 A3の間隔が5m程度であることを考慮すると、1枚の水田区画は、5m前後と推定できる。また、畦 A2と畦 A3を繋ぐ畦 A1は、中央部分が約0.4m途切れており、その部分は水口と推定される。

遺構の土層堆積状況確認のためトレンチを設定し、掘り下げを行ったところ、基本層序の第Ⅲ層・第Ⅳ層間に畦畔状遺構との認識に至ったオリブ黒色土の堆積を確認した。このオリブ黒色土はしまりが強い粘質土で砂を含んでおり、このため畦畔の構築については、第Ⅲ層形成以前に洪水等で水成堆積した後に畦状の高まりを削り出して形成した可能性が高いことを示している。また、13K 杭付近で検出した畦畔状遺構の上面で土師器杯91が出土しており、畦祭祀が行われた可能性も指摘できる。その他、畦畔群周辺からも須恵器片などが出土しており、水田経営の時期を示すと考えられる。(後藤)

91・92は土師器杯である。91は平底のやや小さめの底部から内湾しながら外に開く体部をもち、口縁部を外反させ端部を鋭くつくる。92はヘラ切り底の安定した底面からやや角をもって坏部に至り、口縁部まで短くほぼ直線的に外に開くもので、口縁端部はやや鋭い。内外面とも丁寧なナデで調整するが、成形時における見込みの稜とヘソを残す。93・94は須恵器甕の胴部としたが、軟質で内面の当て具痕がないことから土師器の可能性もある。外面には平行タタキが施され、一部で直行する。(二宮)

畦畔状遺構 B 群 (第20図) 8C~10E 区グリッドにおいて、幅約0.7~1.0m、高さ約0.8~1.0cmで北西から南東に延びる2条(北側より畦 B1・畦 B2)に、幅約0.7~1.0m、高さ約0.6cmで南北方向に接続する1条(畦 B3)の計3条の畦畔状遺構が確認された。部分的な検出のため、この部分での水田規模の推定は行うことができなかったが、A 群とは違い直線的な畦畔が整えられていることが特徴的である。なお、畦 B1・畦 B2は後述の SE4 と並行し、一部で SE7 に切られる。

また、畦畔状遺構 A 群同様、土層堆積状況確認のため、トレンチを設定し、掘り下げを行ったところ、第Ⅲ層上に畦と推定される黒灰色砂質土の層を確認した。この黒灰色砂質土はややしまりのある砂質を多く含み、畦畔の構築については、第Ⅲ層形成後に流入した洪水砂によって一帯が埋没した後、畦状の高まりを削り出して形成した可能性が高いことを示している。



第20図 畦畔状遺構 B 群平面・断面図

## (2) 溝状遺構 (SE1~8)

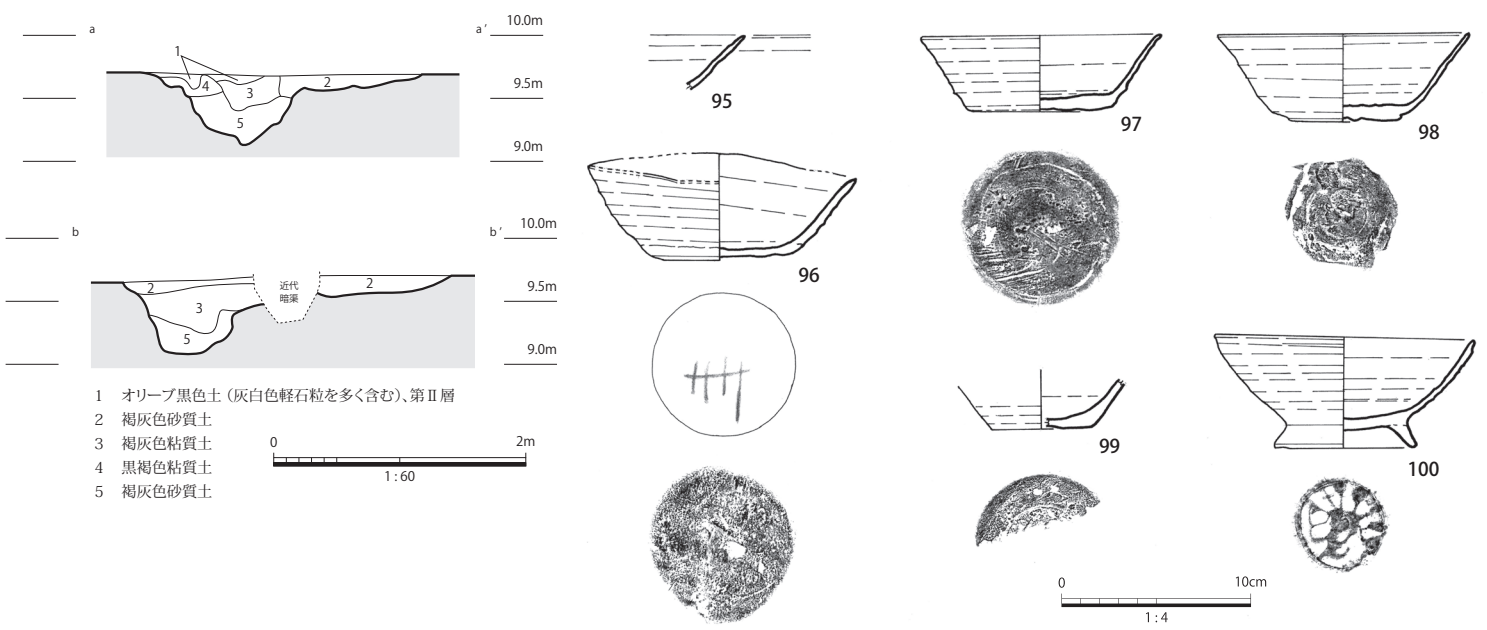
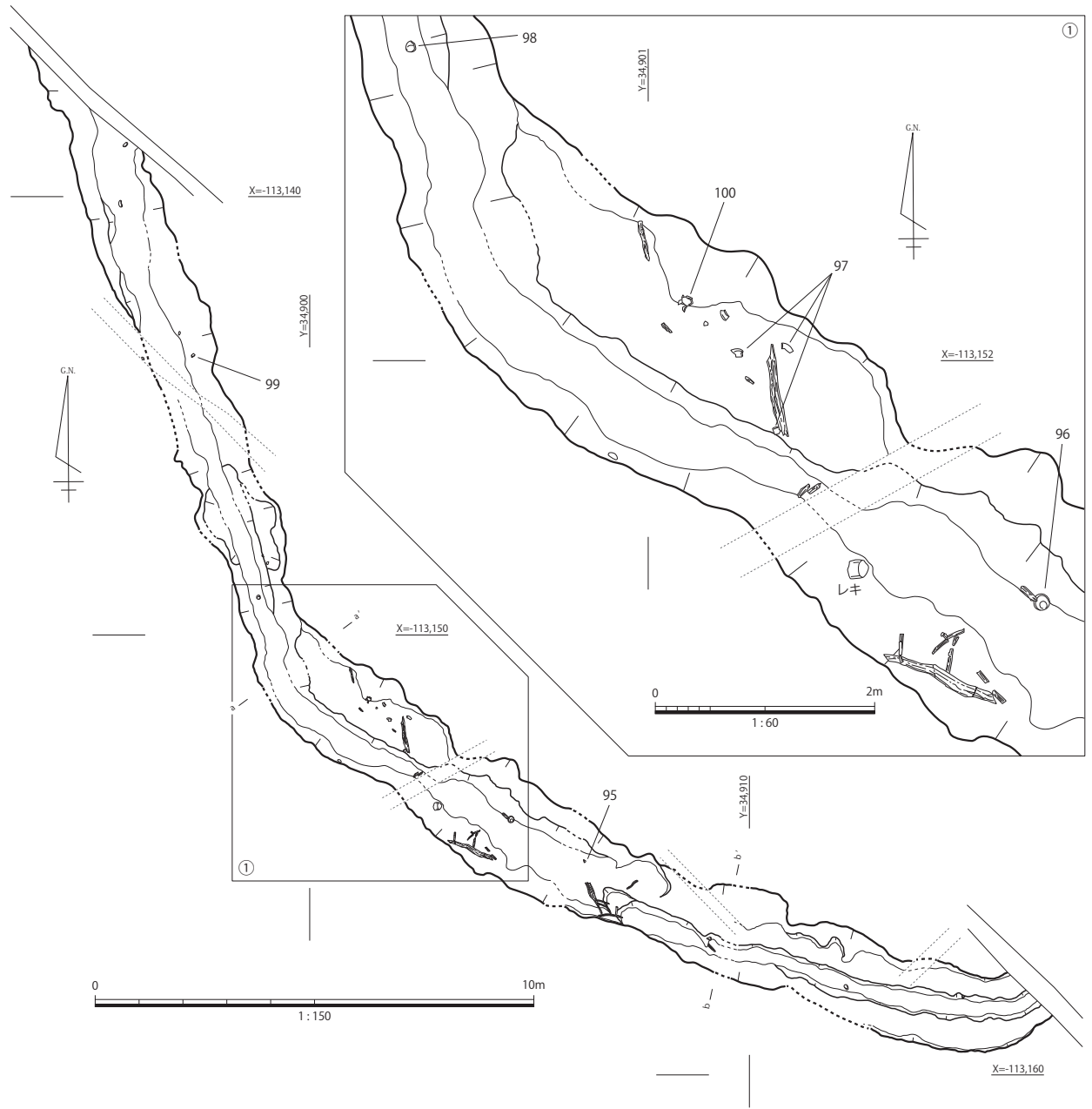
SE1 (第21図) 調査区中央東部の9J~12M区にかけて検出された、検出長33m以上・幅約2.0mを測る溝である。11K 杭付近で45°屈曲しているが、概ね北西-南東方向に延び、延長は調査区外に至る。

南西から北東にかけて緩やかに下る地形に直交するように掘削され、北西側から南東側に向かってわずかに傾斜する。深さは、最深部で約0.6mである。土層堆積状況を見ると、シルト質土が主たる構成埋土であるが、部分的に砂質土を多く含むことから、幾度かの洪水等による土砂の流入によって埋没していったと推測できる。また、埋没過程において、部分的に掘削された痕跡 (3層下部ライン) も確認されている。

なお、中央左岸には長さ4.5m、幅1.4mの平場があり、この平場上において完形の土師器杯97・100が出土し、意図的に置かれた状況が見てとれることから、祭祀の場として設けられたと推測される。その他、平場に近接する底部付近で墨書のある完形の土師器杯96が、中位から上位にかけて土師器杯98・99が出土している。

(後藤)





- 1 オリーブ黒色土 (灰白色軽石粒を多く含む)、第II層
- 2 褐灰色砂質土
- 3 褐灰色粘質土
- 4 黒褐色粘質土
- 5 褐灰色砂質土

第21図 SE1 平面・断面図および出土遺物

95～99は土師器坏である。ヘラ切り底で96～98は坏部との境に段をもち、99は角をなす。いずれも底面以外を丁寧なナデによって整えているが、97・98については底部と体部の境が切り離しのままであった。口縁端部が残る95～98については鋭くつくる。また、96の底面には肉眼では把握できないが、「冊」のように見える墨書が赤外線によって確認できるが判然としない。100は土師器の高台付碗である。外方に開く高台を有し、内湾する体部は口縁部まではほぼ直線的に外に開き、口縁端部をやや鋭くつくる。体部外面には成形時の稜を若干残し、高台内には放射状の圧痕が確認できる。(二宮)

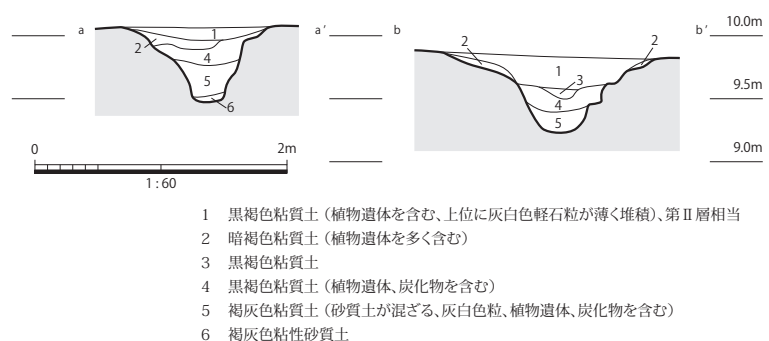
SE2・SE3 (第22～25図) 調査区北西端部の5D～8G区にかけて検出された溝で、本流である検出長46m以上・幅0.9～1.7mのSE2と、SE2の中間付近から西側に延びる検出長4m以上・幅0.6～0.8cmの支流SE3から構成される。

本流SE2は、5E・6E杭の中間地点付近、7F・8F杭の中間地点付近で2度45°屈曲しているが、概ね北西-南東方向に延びる。北西から南東にかけて緩やかに下る地形に直交しており、南東側がわずかに傾斜する。深さは最深部で約0.6mとなり、土層堆積状況を見ると、シルト質土が主たる構成埋土であり、底部には砂質土を含む。埋土の上位に桜島文明降下軽石と推定される灰白色軽石粒を多く含む黒褐色土(第Ⅱ層)が堆積する。またSE2の北より付近において、付随する堰の可能性が高い溝に直交する杭列1本と横木と見られる木枝2本を検出した(第24図-①)。

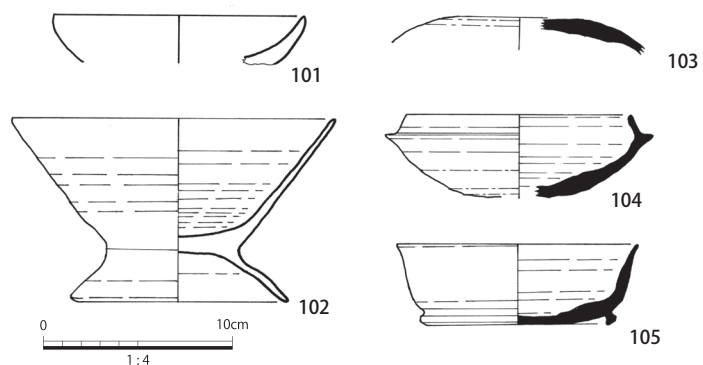
断面形状をみるとV字状に掘削されており人工的な溝の可能性が高い。ただし、調査区域が分断することで連続して検出できていないが、SE2の南延長にSE1があると考えられ、SE1の断面形状からは自然流路であったものを改変掘削した痕跡が認められたことから、SE2も本来は自然流路であったものを改変掘削しながら使用し続けていた可能性が高い。なお、遺構最上部の堆積土にのみ桜島文明降下軽石と推定される灰白色軽石粒を含む。

一方、支流であるSE3は後述のSE4の埋没後に上部を流れており、北西から南東に延びるが湾曲する形状を呈して、7F区付近で本流と合流する。しかし、埋土状況を見ると、遺構の深さは最深部で約0.2mと浅く、第Ⅲ層上部から掘り込まれる。埋土には桜島文明降下軽石と推定される灰白色軽石粒を多く含むことから、畦畔状遺構B群よりも後出する遺構となり、本流SE2が機能していた時期ではなく、本流がある程度埋没した時期に付随する形で掘削された溝状遺構と推定できる。

溝にともなう出土遺物は、SE2



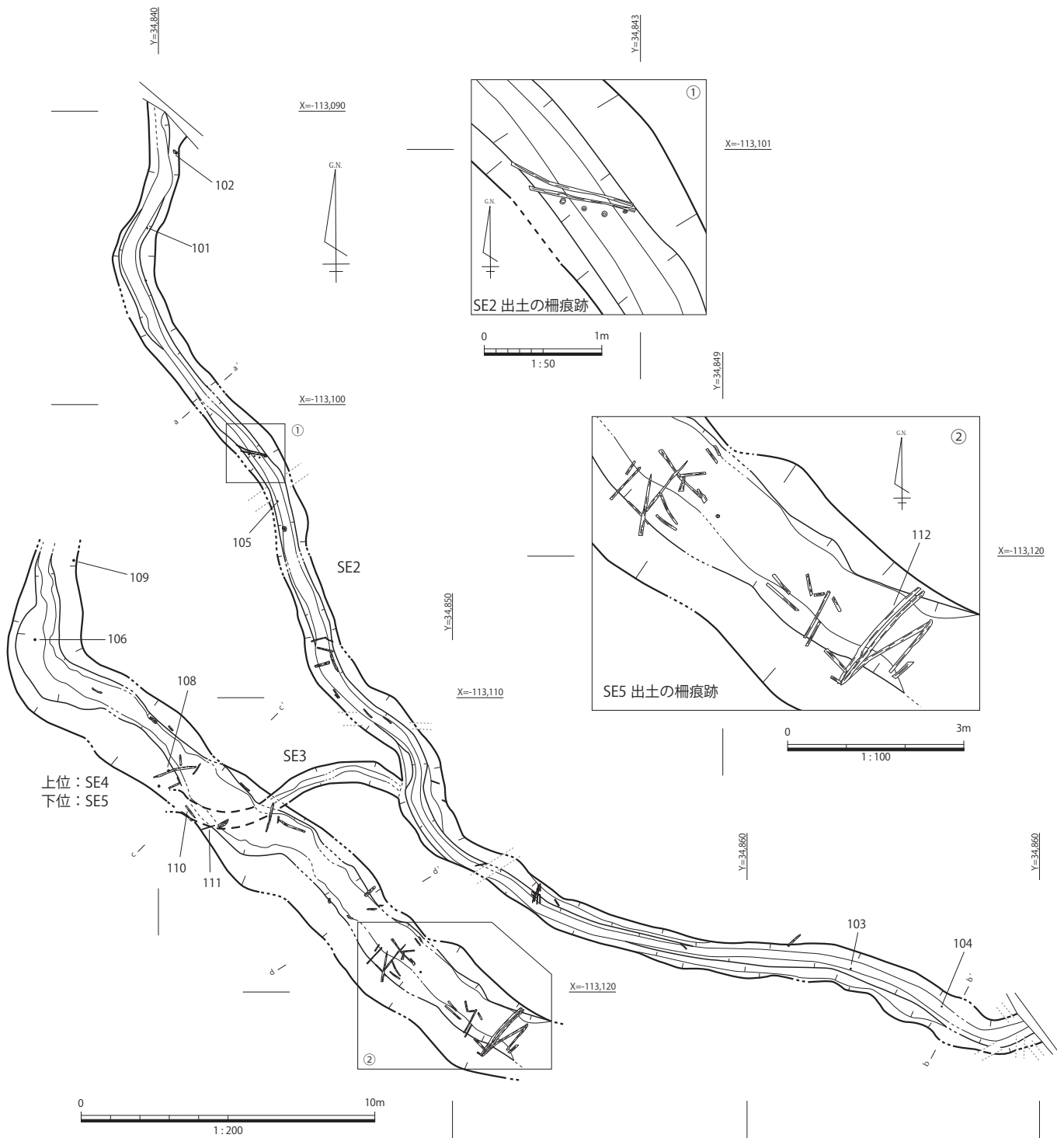
第22図 SE2 断面図



第23図 SE2 出土遺物

の底部付近で古墳時代の須恵器坏103・104や古代の須恵器坏105が、中位から上位にかけて土師器坏101・102が出土した。(後藤)

101は土師器坏である。厚手で器高の低いもので、内湾する口縁部が内湾し、鋭い端部をもつ。102は土師器高台付碗である。外に大きく開く高い高台を有するもので、体部から口縁部までがほぼ直線的に外に開き、口縁端部は丸くおさめる。内外面とも丁寧なナデで調整する。103は須恵器坏蓋である。天井部はやや扁平で、ヘラ切り後は未調整である。残存する外面には、回転ヘラケズリが確認できる。104は



第24図 SE2・SE3・SE4・SE5 平面図

須恵器坏身で、内傾する口縁部から端部を上方へつまみ上げ丸くおさめる。受け部は短く、坏部はやや深い。坏部外面の下半部に回転ヘラケズリが施される。

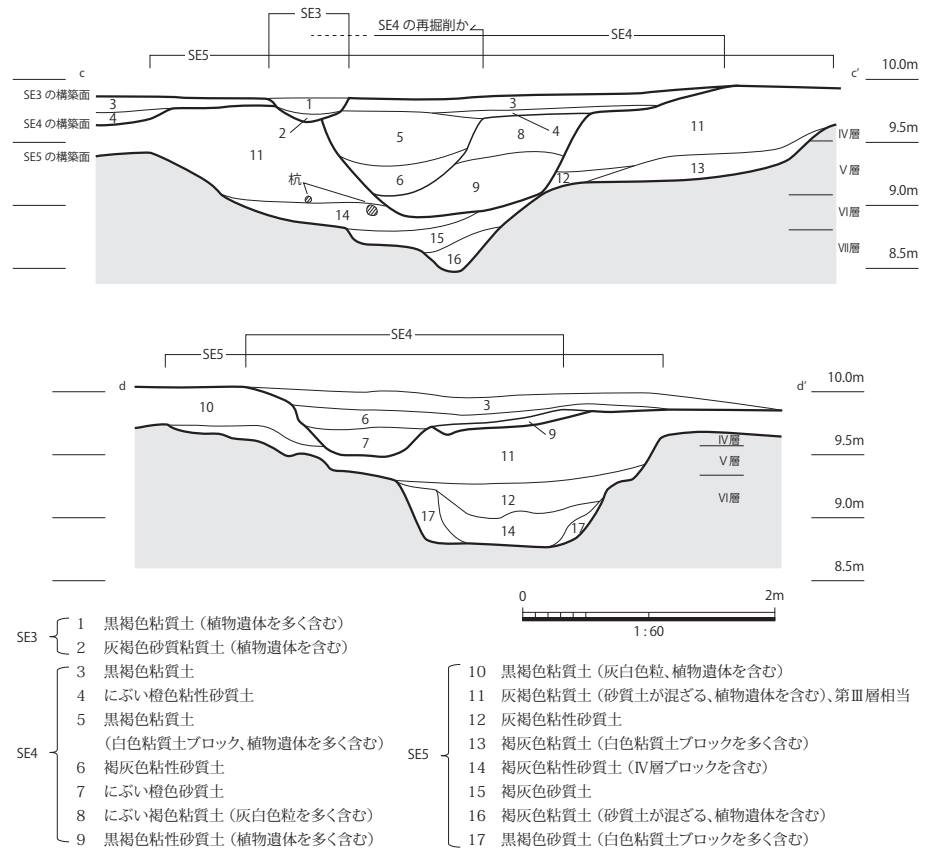
105は須恵器高台付坏である。端部を丸くおさめる高台は短く外に開き、面をなす接地面には凹線がめぐる。やや外に開く体部から口縁部を外反させ、端部を鋭くつくる。(二宮)

SE4・5 (第24~27図)

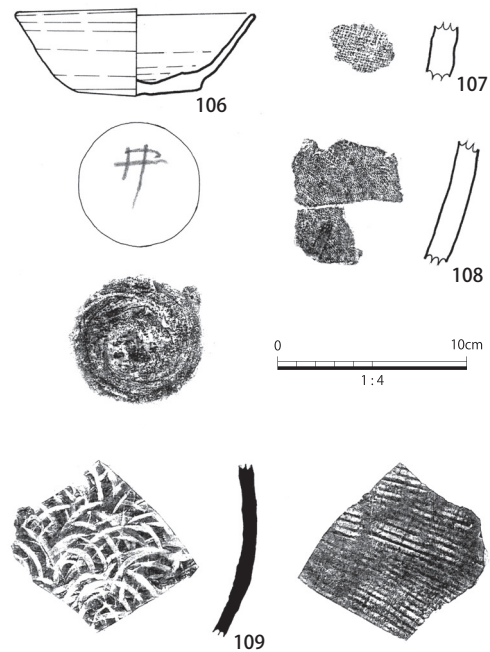
6D~8F区にかけて検出し、7E区においてSE3に切られている。断面形状からSE5の埋没後、ほぼ同じ位置にSE4が形成されていることがわかった。

溝の検出長は約24mで、幅についてはSE4が0.9~1.3m、SE5が2.6~2.8mを測る。概ね西北西・東南東方向に延びるが、7E杭付近で北に45°屈曲している。遺構検出時は、第Ⅲ層検出面で黒褐色のにじみのある範囲が見られ、掘り込みの上端は明瞭に確認できなかったが、土層堆積状況の確認で遺構の形状を確認している。

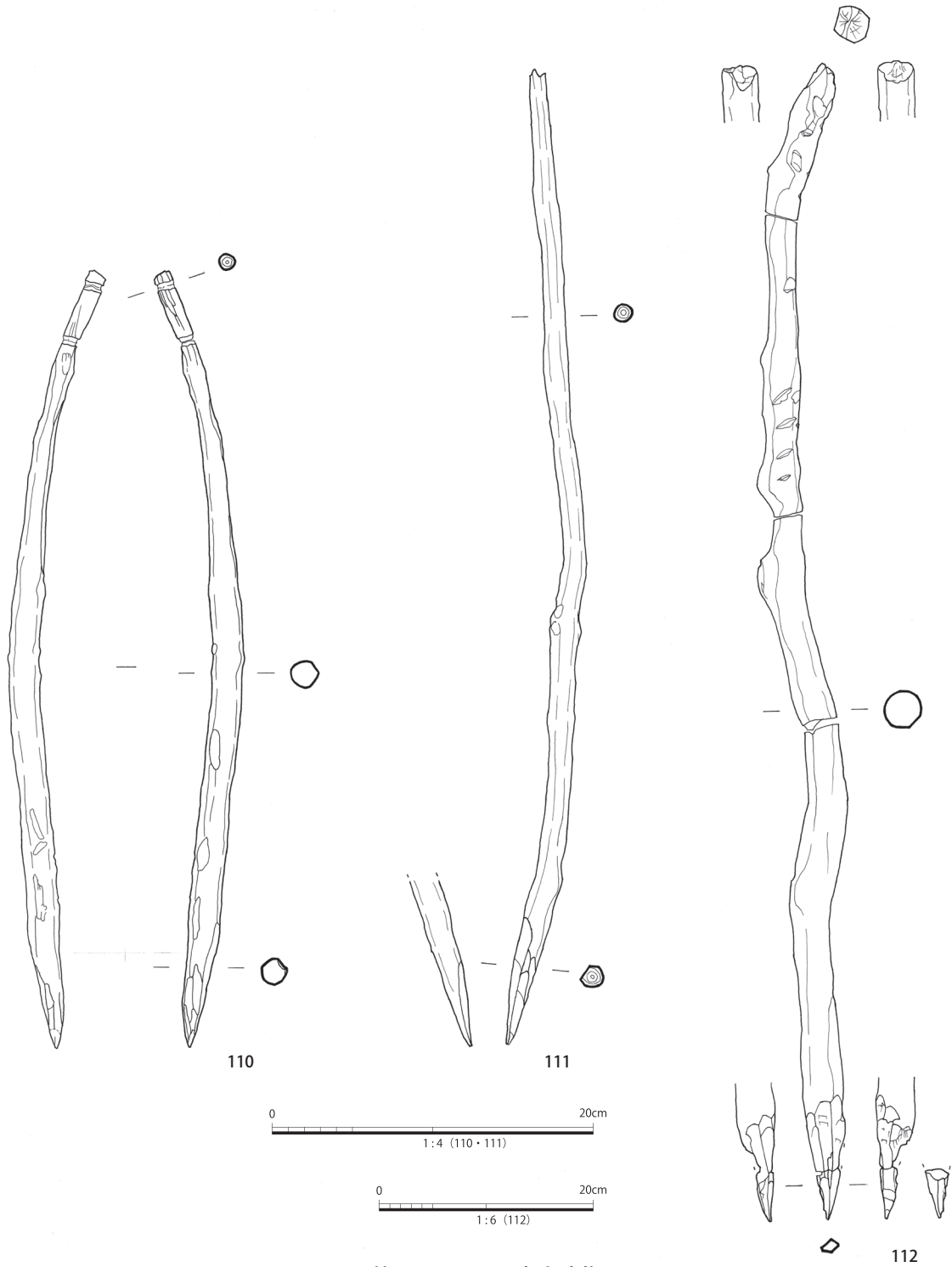
当該遺構は、SE2に近接しており、北西から南東に向かってわずかに傾斜する。深さは、遺構検出面より最深部でSE4が約0.65m、SE5が約1.35mである。堆積状況を見ると、第Ⅳ層で構築されたSE5については粘質土が主たる構成埋土であるが、部分的に砂質土を多く含むことから、幾度かの洪水等による土砂の流入によって埋没していき、最終的に第Ⅲ層堆積時に埋没したと推測できる。また、7E~8E区付近で、溝に平行・直交する木製の杭112などを検出した。堰を構成していた杭と横木であった可能性があり、杭先が下流方向を向いていることから、水路を逆流した土砂により倒壊したものが流



第25図 SE3・SE4・SE5 断面図



第26図 SE4 出土遺物



第27図 SE5 出土遺物

されて埋没したと考えられ、堰の構築は杭の検出場所よりも下流と推察される。

SE4については、断面形状からSE5が埋没した後に窪地として痕跡が残る場所で、改めて掘削されたものと考えられ、さらに再掘削の状況も見て取れる。遺物はSE4の埋土にあたる底部付近で墨書のある土師器坏106、上位で布痕土器107・108などが出土した。 (後藤)

106は土師器坏である。ヘラ切り底で坏部との境に段をもつ。坏部は外に開き、口縁端部を丸くおさめる。



底面以外を丁寧なナデによって整える。なお、底面に「井」と墨書された痕跡がうっすらと肉眼で確認できる。**107・108**は布痕土器である。**109**は須恵器甕で、外面は斜位の平行タタキに、所々で直行するタタキを施す。内面は同心円痕が残る。(二宮)

**110～112**は木製品でいずれも杭である。芯持ち丸木を用いたもので、**110**と**112**のみ僅かに樹皮が残る。**110**は一端を尖らせ、もう一端は円柱状に加工後、紐かけ溝を2条削りこんでいる。用材はカヤである。**111**は、一端のみ尖らせた切断面が明瞭に残る。用材はチシャノキ属である。**112**は、一端は伐採時の切断面が、もう一端は尖らせた切断面が明瞭に残る。用材はクロモジ属である。(後藤)

**SE6・SE7・SE8・ため池状遺構** (第28図) 7D～14G区にかけて検出した。使用中の農道を挟むため連続して検出できなかったが、SE7とSE8は一連の溝として理解している。概ね北西-南東方向に直線状に構築された溝で、両端は調査区外に至るが、総延長約78m以上を測る。また、10E～11F区でため池状に深くなる部分(ため池状遺構)をもち、ここから北に延びる浅い溝をSE6とした。

当該遺構群は、もともと10E～11F区にあった浅い谷地形の最深部に対して、北からSE6が流入する形で楕円形のため池状遺構ができたことで形成されている。ため池状遺構は検出長15.5m以上、幅0.5～1.2m、最深部約0.6mとなり、SE6については検出長約5.5m、幅3.9～5.6m、深さ約0.15mを測り、北側は途中から耕作によるものか消失している。

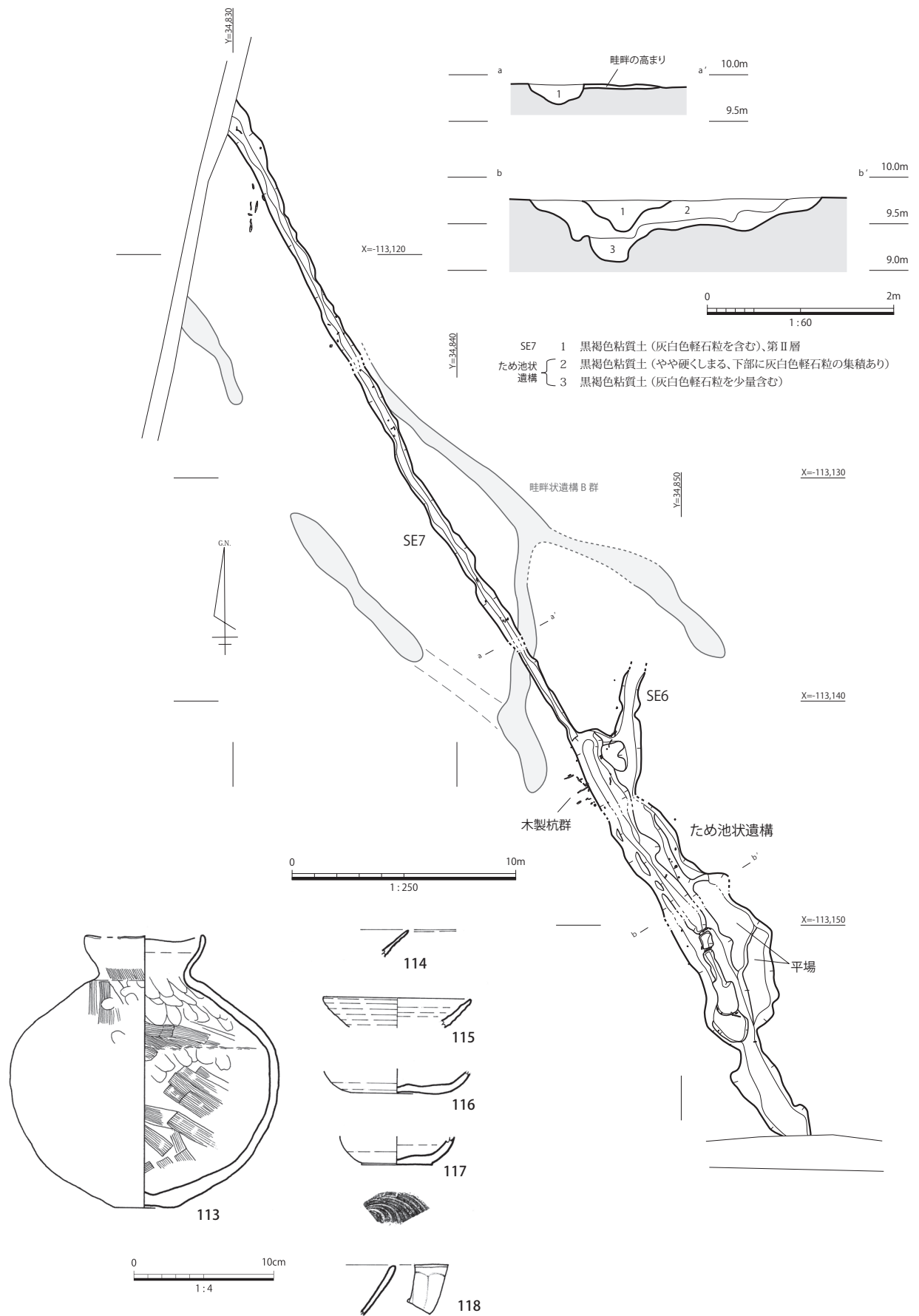
ため池状遺構については、東側に人工的な平場が設けられており、このことから当初は自然にできたため池を人工的に改変したと考える。さらに、SE6がため池状遺構に流入する延長上の西岸付近に、ため池状遺構の補強のためか杭状の木器が確認されていることから、単なるため池であったのではなく当該遺構の何らかの利用が想定される。遺物はため池状遺構の最深部から完形近くに復元できた壺**113**が出土している。

その後、ため池状遺構を利用するようにして、北西方向から南東方向に向けてSE7とSE8が主軸を北から約25°西に傾けて一直線に調査地点を貫通している。SE7は幅0.2～0.8m、最深部で約0.2m、SE8は幅0.4～1.2m、最深部で約0.3mを測り、先にも触れたが総延長約78m以上となる。埋土は桜島文明軽石粒混じりの黒褐色土の単一層で、SE7については畦畔状遺構B群を切る形で構築されている。遺物は埋土中より土師質土器類**114～117**や青磁碗**118**が出土した。(後藤)

**113**は球形の体部をもつ土師器壺である。平底となる底部は小さく、内面にしぼり痕が確認できる頸部径も小さく成形する。外傾する短い頸部から口縁部が短く立ち上がり、端部は鋭くつくる。外面の調整は頸部から肩部にかけて縦方向のハケが確認でき、内面は斜位のハケで調整し頸部付近は縦方向のユビナデが残る。**114～117**は土師器坏である。**116**は摩耗のため詳細は不明であるが、ヘラ切り底と考えられる。**117**は糸切り底で坏部との境に段をもつが、底径が小さいことから皿の可能性もある。**118**は龍泉窯青磁碗で、やや内湾する体部と丸くおさめる口縁端部をもつ。外面に弧状の剣頭をもつ太めの蓮弁文を描く。(二宮)

### (3) 土坑 (SC1、第29図)

9L・10L区で検出した浅く掘り込まれた土坑で、長軸2.8m、短軸2.3mの楕円形を呈し、西側に一段深くなる場所がある。最深部の深さは0.18mを測る。埋土は桜島文明軽石粒が混ざる黒褐色土の単一層で、細片ではあるが土師質土器類を中心とする遺物の出土量は多い。また、遺構埋土中ではないが、近隣か

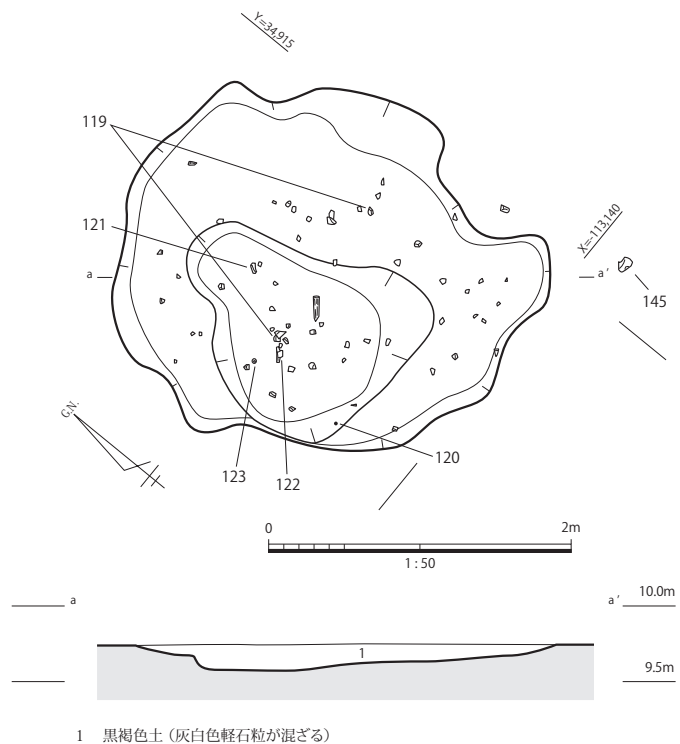


第28図 SE6・SE7・ため池状遺構平面・断面図および出土遺物



ら中国産の天目茶碗**142**や羽口**145**も出土している。(後藤)

**119**はヘラ切り底の土師器坏である。底部と坏部の境は丸く、外傾する坏部からさらに口縁を外反させる。全体的に丁寧なナデで仕上げている。**120**は土師質土錘である。**121**は東播系須恵器の鉢で口縁部が肥厚するものである。口縁端部上端をやや面に仕上げ、厚く突出する下部外面もやや面をなす。**122**は青磁碗あるいは皿である。外面が端部に向かって稜をもって内傾する高い高台をもつ。高台内部と見込みの釉は輪状に剥ぎ取られている。龍泉窯系のもの。**123**は洪武通宝である。(二宮)



#### (4) 遺構に伴わない遺物 (第30図)

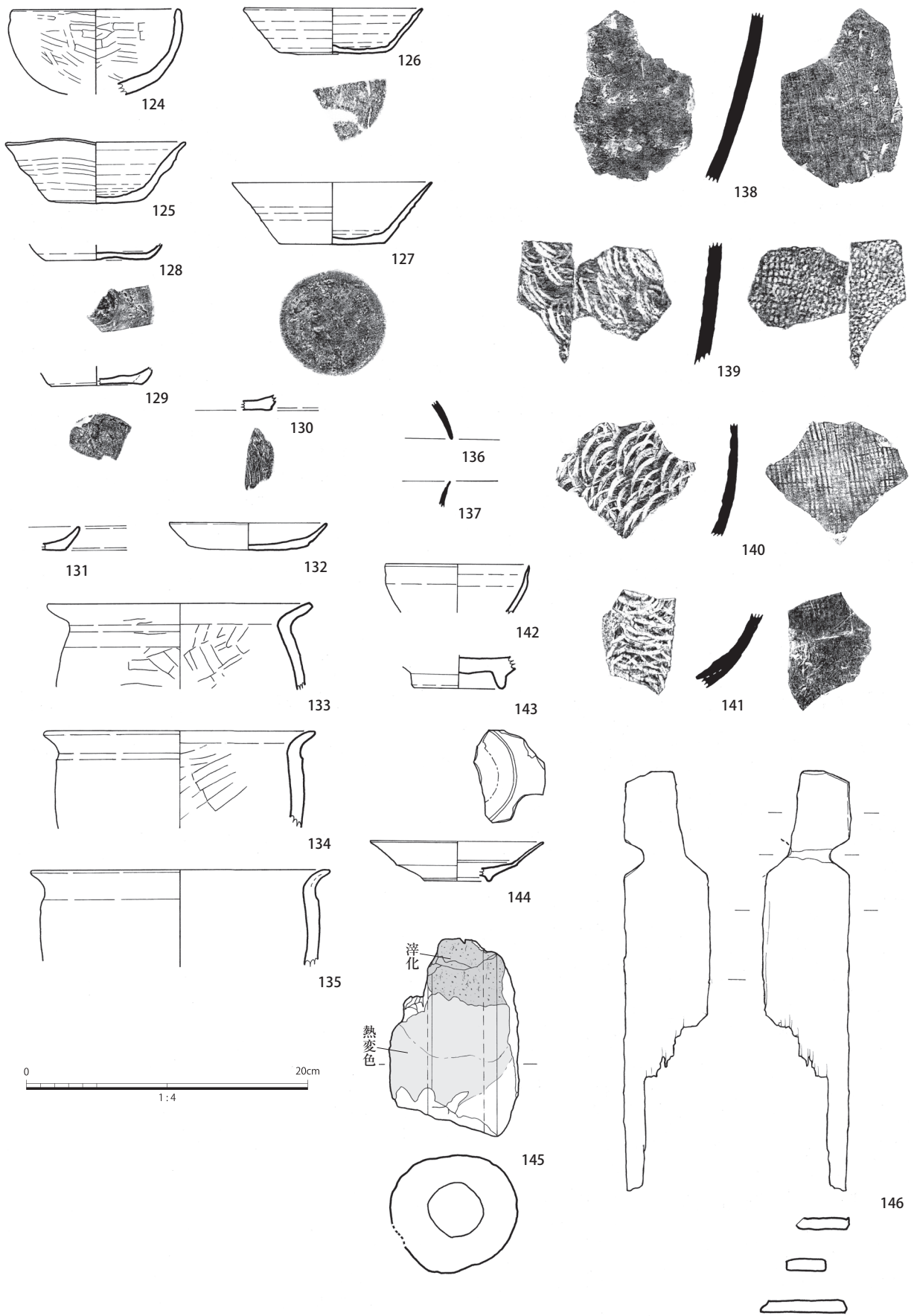
基本層中から出土した遺物を一括する。

**124**～**128**は土師器坏である。**124**は半球形の形状で厚みのある器壁をもち、口縁端部外面を小さく玉縁状にする。**125**～**128**はいずれもヘラ切り底で、**125**は外面の稜を成形時のまま残すが、その他は丁寧なナデで調整する。**129**～**132**は土師器皿で、**129**がヘラ切り底、**130**が糸切り底である。**131**

と**132**は摩耗により確認できない。**133**～**135**は土師器甕である。**133**は頸部から口縁部にかけて大きく屈曲させるもの。**134**・**135**は張りのない体部で、頸部外面に強いヨコナデによって稜をつくる。口縁部を短く外反させ、端部は鋭い。**136**は古墳時代の須恵器坏蓋、**137**は古代の須恵器坏である。**138**は須恵器壺の体部である。内面はナデ、外面は縦方向の工具ナデで調整する。**139**～**141**は須恵器甕である。**139**が格子タタキ、**140**・**141**が縦方向の平行タタキで外面の調整を行う。なお、**140**・**141**で使用された平行タタキの原体には、幾本かの横位の平行線が確認できる。いずれの内面も同心円痕が残る。**142**は中国産の天目茶碗である。口縁端部は鋭くつくり、内外面とも釉剥ぎがなされる。**143**は青磁碗あるいは皿か。不鮮明であるが見込みに印花が確認できる。高台内部を蛇の目に釉剥ぎする。龍泉窯系。**144**は中国産の白磁皿である。見込みには釉剥ぎが見られ、低く小さな高台および内部は無釉か。**145**は羽口で、両端部は欠損するが、平面形はやや「ハ」の字を呈する。高温の影響で先端部側は褐灰色をなして発泡する。

(二宮)

**146**は杵型の田下駄の一部と見られる。板状で残存する端の左右から挟りが入る。挟りが入る部分には表面に一筋の圧痕があり、縄などで杵の横木に縛り付けて固定されていた部分と想定される。ただし、縄の



第30図 遺構に伴わない遺物

圧痕が片面にだけしか認められないことから、同型の部材を十字に組合せ、天秤棒に吊した縄の下部に取付け、桶等を支える枠での使用等も別用途の可能性として考えておきたい。用材はコウヤマキである。（後藤）

### 3 H地点のまとめ

#### 古代の様相

調査地点西部に位置する第Ⅳ層を構築面とする SE5 は、直線的な部分があることから人工的に掘削された可能性が高く、堰を構成する部材と考えられる木製杭が溝底から出土した。構造物としての原型は留めないが、溝に対して平行・垂直で横になり、杭先が下流である東に向かっていることから、さらに下流において設置された堰が逆流する水の力によって倒壊して流されたと考えられる。時期のわかる遺物の出土はなかったが、近接する SE2 より 8 世紀後半代の須恵器高台付坏が出土し、あるいは TK43 形式に相当する須恵器坏も出土していることから、古墳時代後期後半にまで遡る可能性も考えておきたい。また、第Ⅳ層での植物珪酸体分析の結果では、SE5 の周辺よりも北東側の H1 地点や H2 地点のほうが、より高密度に植物珪酸体が確認されており〔自然科学分析編参照〕、溝の人工的な構造と下流で堰が設置されたことを総合すると、畦畔の検出はなかったが調査地点北東側における上記の時期での水田の経営も想定しておく必要がある。なお、木製杭については樹種同定を行った結果、クロモジ属・チシャノキ属・カヤであり、この時期の周辺の植生環境と木材利用に関する重要な知見を得ることができた。〔自然科学分析編参照〕

調査地点の北西部から南東部では、SE1・SE2 が蛇行しながら東流し、SE1 の南側には畦畔状遺構 A 群がつくられる。SE1 の北半分と畦 A1、SE1 の南半分と畦 A5 がそれぞれ並行になることから、畦畔状遺構 A 群は SE1 に規制されていることがわかり、SE1 と畦畔状遺構 A 群が有機的に結びついていたと考えられる。また、特筆すべき点として、SE1 の中央左岸の平場で完形の土師器坏 2 点、平場より約 2 m 下流の底部で完形の墨書土器 1 点が出土しており、平場において河川祭祀を行った痕跡と推察される。さらに、完形の土師器坏は畦畔上でも確認されており、これについては畔祭祀の可能性がある。畦畔が溝に規制されることから、両者の関係が深いことは明確だが、畔周辺の遺物が概ね 9 世紀前半期のものであるのに対して、自然流路としては 8 世紀後半頃まで遡るが、SE1・SE2 出土の土器類が 10 世紀前半期までのものが含まれることから、畦畔状遺構 A 群の廃絶の方が早い。

調査地点西部では、SE4 が SE5 の上位で確認でき、SE5 埋没後に地形の低くなった場所を水路として活用するために掘削したものと考えられる。さらに、SE4 の南には畦畔状遺構 B 群がつくられており、先の A 群より直線的な形状が特徴的で畦 B1・畦 B2 と SE4 が並行する。なお、SE4 出土の遺物には、底面に「井」と墨書された完形の土師器坏があり、先の SE1 同様に水辺の祭祀が想定できる。

水田の経営としては、畦畔状遺構 A・B 群の検出面の違いやそれぞれの畦畔や周辺の溝出土の遺物を考えると、より地形に制約を受けた畦畔状遺構 A 群が 9 世紀前半期、畦畔状遺構 B 群が 9 世紀中頃～10 世紀前半期を想定しておきたいが、B 群の直線的な畦畔形状を考えるとさらに後出するものかもしれない。また、溝に含まれる洪水砂等をみると土地そのものが安定していないことは明白で、洪水によって利用ができなくなった畦畔については、水田経営に適した場所を求めながら作り変えていた可能性がある。

## 中世の様相

H 地点では、中世期になると明確な水田の痕跡はわからなくなる。以前からの洪水がもたらした土砂によって徐々に土地が乾燥しはじめ、当該地点では必要量の水の確保が難しくなった可能性がある。ただし西部地区には依然として谷地形内にできたため池状遺構に水が集まっていた様子も見てとれることから、水田経営がなくなる要因は他にあったのかも知れない。なお、ため池状遺構には人工的な平場が設けられており、平場直下の遺構底面付近から完形近くに復元できる壺が出土していることを見ると、何らかの理由でこの場に溜まる水を汲み取っていたのだろう。その後、ため池状遺構を利用する形で SE7・SE8 が一直線に構築されており、調査地外に残る古い地割とも一致することから条里地割の一面を担った基幹水路であったとも考えられ、主軸は北から約25°西に傾く。出土遺物より主として14世紀代での利用が考えられ、15世紀代には完全に埋没したものと考えられ、埋土に15世紀後半頃の桜島文明軽石が含まれることから齟齬はない。なおここで、SE2の北半部がSE7と並行することに気付く。SE2が人工的な改変を受けた後の最終埋土や流入するSE3の埋土に桜島文明軽石が含まれることから同時期に機能しており、検討の余地は残すが条里地割との関係性も考えておく必要がある。

その他、北東部では SC1 が検出されており、土器類に加えて羽口や洪武通宝など出土遺物も多岐に渡る。他と比べて比較的乾燥した場所であったことから当該地区の積極的な利用があったのだろうが、後世の耕作で削平された場所であることから不明な点が多い。出土遺物から14世紀後半頃が想定され、SE7・SE8 と同時期に利用されている。

## 近世の様相

詳細な報告は割愛しているが、近世に帰属する溝が4条検出された。中でも北東部にある最大幅約3.0mを測る SE10 は、北西から南東方向に一直線に構築されており、現在の用水路の北約10mに並行していることが分かった。また、南西部で検出した SE11・SE12 は農道で分断されているが一直線に連続する溝で、さらに最南西部に位置する SE9 と合わせてみると、ほぼ正方位での区画を考えることができ、桜島文明軽石の降下の影響のためか中世段階の区画を踏襲していないことが判明した。（後藤・二宮）

### 第3節 I 地点の調査

#### 1 基本層序 (第31図)

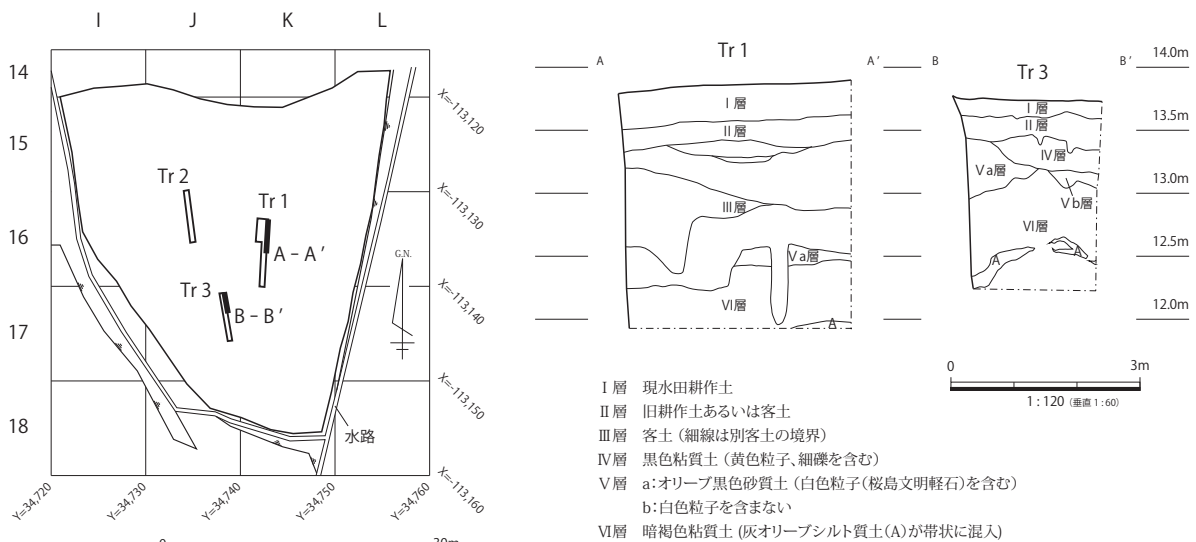
塚原遺跡 D 地点の西に隣接する位置にあり、J 地点の立地する台地東の裾部にあたる。台地上の水が崖下に集まる影響もあってか、調査着手前は水はけの良くない水田が営まれていた。調査は3か所のトレンチを設定して行ったが、水の流入と湧出が顕著で掘り下げは困難をきわめた。このことから、地層確認を優先した調査を止め記録作成に努めた。Tr2・Tr3 では遺物はほとんど出土しておらず、比較的多くの古墳時代の遺物が出土した Tr1 では、範囲を広げて掘り下げを行った。基本層序は第31図のとおりで、Tr1 の第VI層において古墳時代の遺物が出土した。

#### 2 古墳時代前期前半の遺物 (第32図)

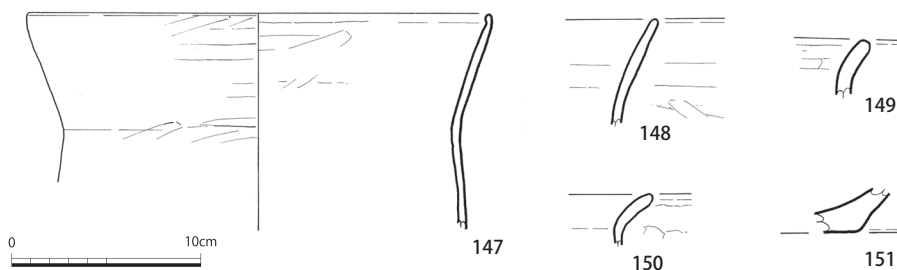
Tr1 の北側の限られた範囲でのみ出土した。147は最もまとまって出土した個体で、口縁部内面に沈線状の凹部が認められる薄手の甕である。148~150は甕の口縁部片、151は甕の底部片である。

#### 3 I 地点のまとめ

古墳時代前期後半を中心とする遺物が出土し、この点については隣接する東九州自動車道調査 D 地点の状況と共通するが、遺構の構築など当該期における活動の痕跡は明確でない。また、土器が集中していたとはいえ、継続的な廃棄といえるほどの数量はない。出土した遺物は、おそらくは台地上から流れ込んで堆積したものか、何らかの理由で単発的に投棄されたものと推定される。(吉本)



第31図 I 地点調査区・基本層序



第32図 Tr1 出土遺物



## 第4節 J1地点の調査

### 1 基本層序（第33図）

J1地点は塚原台地の東縁に位置する。調査対象地の現況は民間企業の敷地の一部および町道で、台地縁には雑木林が繁茂する。企業地の敷地に関しては地元国富町が平成2年度に工業団地造成に伴って発掘調査を実施した範囲と重複しているが、工事が及ばない深度、具体的にはアカホヤ火山灰層以下の遺構については現地保存の処置がなされていた。しかしながら、同時期に整備された町道敷設工事箇所では、残念ながら十分な調査がなされずに工事に至っており、基本層などが削平されていたことが判明した。現地表面の標高は、台地東縁の最も低い場所で約32mであり、企業地側の最も高い場所が約34mであった。

対象地は企業地と町道の造成箇所において全体的に客土を入れることで高さを揃えたため、斜面地では約1.6mの客土が認められる場所もある。企業地のうち北側のJ1a地点は、約0.4m程度の造成土直下にアカホヤ火山灰の二次堆積層が認められ、以下も縄文時代早期の包含層などを含む降下火山堆積物由来の土壌で構成されており、全体的には水平な堆積であったことが確認できる。南側のJ1b地点については南側ほど基本層の削平は著しかったが、南に向かって傾斜していく旧地形の様子が見て取れる。J1c地点のうち町道が敷設されている場所は、基本層の大部分が失われているが、台地東縁の雑木林であった場所では弥生時代以降の遺物を包含する黒色系の土壌以下の基本層が確認できる。ただし、J1c地点付近は本来J1地点を横断する東西方向の小規模な尾根筋の東端にあたり、ここを境にして南北方向へ徐々に傾斜する地形となるためか、基本層の流出が認められる場所もあり、北側や最南端部ではアカホヤ火山灰層は全く確認できない。しかしながら、J1地点全体では縄文時代早期以前の遺物包含層となる黒色系のローム層が残る割合が高く、それ以下は始良Tn火山灰層や台地そのものを形成するシラスの堆積が確認できる。

地層堆積状況の観察と記録は、町道敷設による基本層の消滅が著しいことと分割された南北に長い調査区であったことから、J1a・b地点では西側壁面、J1c地点では東側壁面のうち残りのよい場所を採用して行い、全体を大別して下記のとおりI～X層に区分した。

第I層は表土および現代の客土で、層厚は最大で1.6mである。客土は土質や造成時期により細分が可能である。

第II層は厚さ0.2m程度の黒色粘性砂質土で、赤褐色粒子を多量に包含する。古墳時代終末期以降の遺物包含層で、検出遺構の最終的な埋土となることもある。基本層序としてはJ1c地点の台地端にだけ確認でき、下面を古墳時代後期後半の生活面とした。

第III層は黒色系の粘質土を主体とする土壌で、土質の違いにより2層に細分した。上層はしまりがあり、下層は砂質優勢でやや明るい。層厚は上層が0.2m未満で、下層が0.1m未満である。弥生時代前期末～古墳時代前期前半の遺物を多量に含む層で、下面を同時代の生活面とした。

第IV層はアカホヤ火山灰の二次堆積層である。層厚0.15m未満の明黄褐色粘性砂質土で、上面は土壌化が進んでいる。J1a地点とJ1c地点の尾根筋より南側の一部に認められる。

第V層は黒褐色粘質土で、硬くしまるローム層である。層厚は0.2～0.4mで、拳大以下の細礫を多量に含む。縄文時代早期の遺物包含層で、本来ならJ1地点全域で確認できると思われる。下面を同時代

の生活面とした。

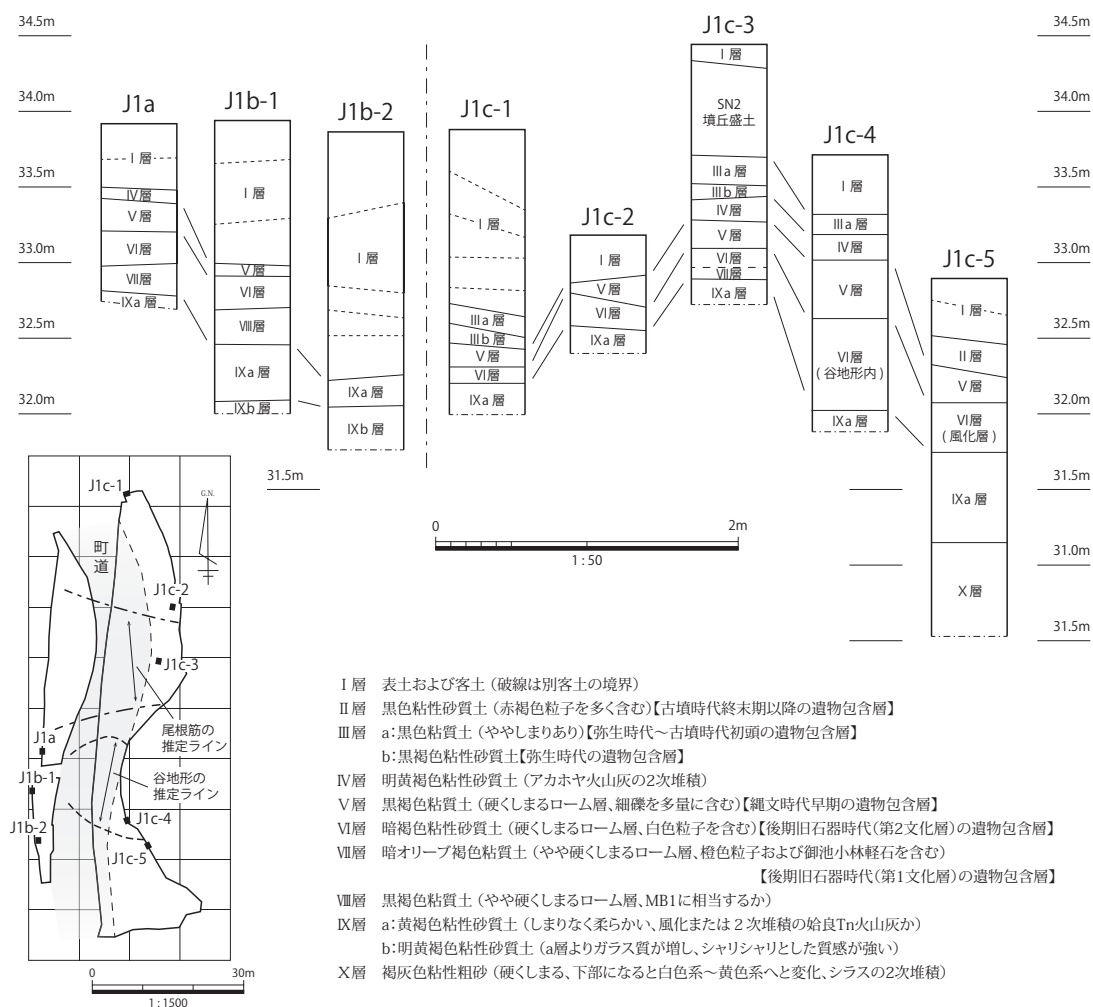
第Ⅶ層は白色粒子を含む暗褐色粘性砂質土で、硬くしまるローム層である。基本的な層厚は0.1～0.2mであるが、J1c 地点南よりにある谷地形を埋める堆積土でもあり、谷地形内では0.6m程度の厚みをもつ。後期旧石器時代のうち第Ⅱ文化層の遺物包含層である。

第Ⅷ層は暗オリーブ褐色粘質土で、やや硬くしまるローム層である。橙色粒子および霧島小林降下軽石を含む。後期旧石器時代の第Ⅰ文化層の遺物包含層である。層厚は0.15m程度で、J 地点を横断する尾根筋上にも認められる。

第Ⅷ層は厚さ0.15m程度のやや硬くしまる黒褐色粘質土である。東九州自動車道調査の基本層序である黒色ローム層 MB1 に相当すると考えられ、J1b 地点で確認した。

第Ⅸ層は黄色系の粘性砂質土で始良 Tn 火山灰と考えられ、土質の違いにより 2 層に細分した。上位は風化あるいは 2 次堆積の影響でしまりなく柔らかく、下位はガラス質が増し、シャリシャリとした質感が強くなる。最大で0.75mの厚みをもつ。

第Ⅹ層はシラスの二次堆積層で、硬くしまる粘性の粗砂である。下位になるにつれて白色系～黄色系へと変化する。 (二宮)



第33図 J1 地点基本層序柱状図



## 2 旧石器時代の遺構と遺物

J1 地点の旧石器時代の遺構と遺物は、町道の造成で表土あるいは造成土の下がすぐに第Ⅶ層になることや後世の遺構が掘り込まれている等の要因により、遺物の包含状況は芳しいとは言えないが、調査区の一部に残る旧石器時代の包含層である第Ⅵ層～第Ⅶ層中で石器群を検出した。

同時代は、層位と遺物の組成により大きく2期（下位より第Ⅶ層を第Ⅰ文化層、第Ⅵ層を第Ⅱ文化層）に分けられる。以下、文化層別に説明していきたい。

### (1) 第Ⅰ文化層（第35図）

今回の調査では、後述する第Ⅱ文化層調査部分や町道の造成土除去後に検出した第Ⅶ層の掘り下げを行い、旧石器時代の礫群2基と石器群を検出した。

#### ① 検出遺構

##### 礫群（SI24・25、第34図、第1表）

礫群は、8D区で2基（SI24・25）検出し、ともに0.5mの範囲内に十数点の礫が集中している。礫は破砕したものが多。断面からは、若干の凹みが認められることから、掘り込みがあった可能性もある。遺構内からの遺物の出土は認められないが、礫群周辺から剥片が出土している。

第1表 J1 地点旧石器時代第Ⅰ文化層礫群一覧表

遺構番号	層位	調査区	Gr.	出土遺物	礫の範囲(m) 最大長×最大幅	掘り込み規模(m) 最大長×最大幅×深さ	礫層個数	礫の密度	備考
J1-SI24	Ⅶ	J1c	8D	-	0.34×0.29	0.40×0.33×0.11	11	散	
J1-SI25	Ⅶ	J1c	8D	-	0.45×0.32	0.53×0.46×0.14	13	散	

#### ② 遺物分布（第35図）

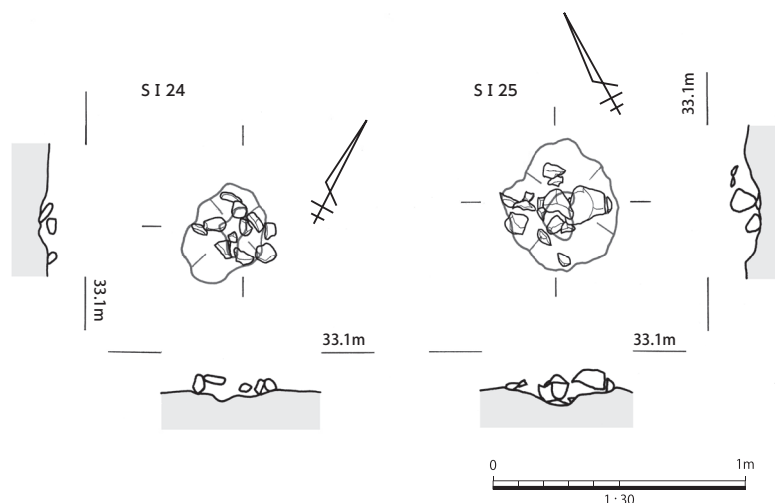
遺物はナイフ形石器、礫器、磨石等が出土している。その分布は調査区中央の尾根上の平坦面に認められ、そのうち5D～6E区、9C・9D区の2か所で石器が比較的集中する。

5D～6E区では石核や剥片、礫器等が出土するほか、接合資料が2例（接合資料I-1・2）認められる。

9C・9D区内では石核や剥片、磨・敲石類、礫器等が出土したほか、接合資料が1例認められる。（第36図）

#### ③ 出土遺物（第37・38図）

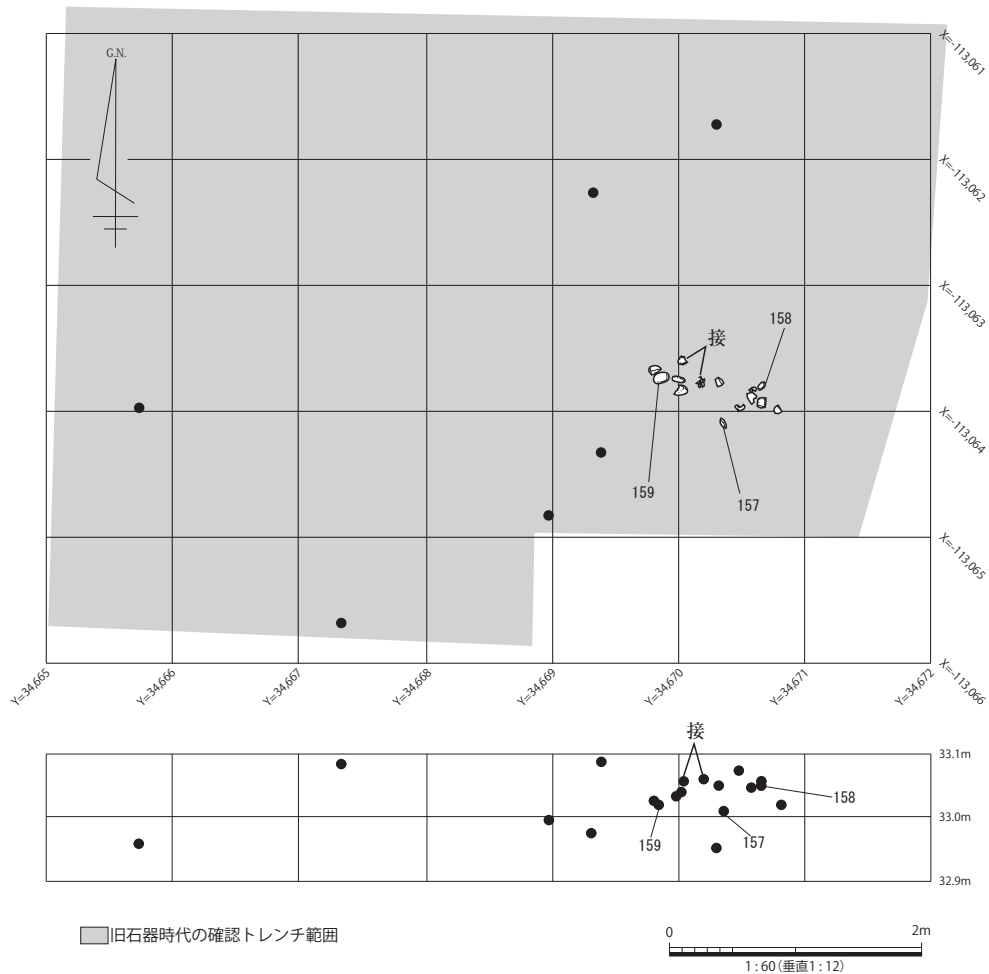
152は、ナイフ形石器である。後述する弥生時代の竪穴建物跡（SA3）で出土したが、同文化層の遺物として抽出した。素材に縦長剥片を利用して、打面近くの右側縁に表面から加工を施し、基部としている。また先端部の稜上にも加工が施されている。頁岩製である。



第34図 礫群 SI24・SI25 平面・断面図



第35図 旧石器時代第I文化層遺構・遺物の分布と接合関係

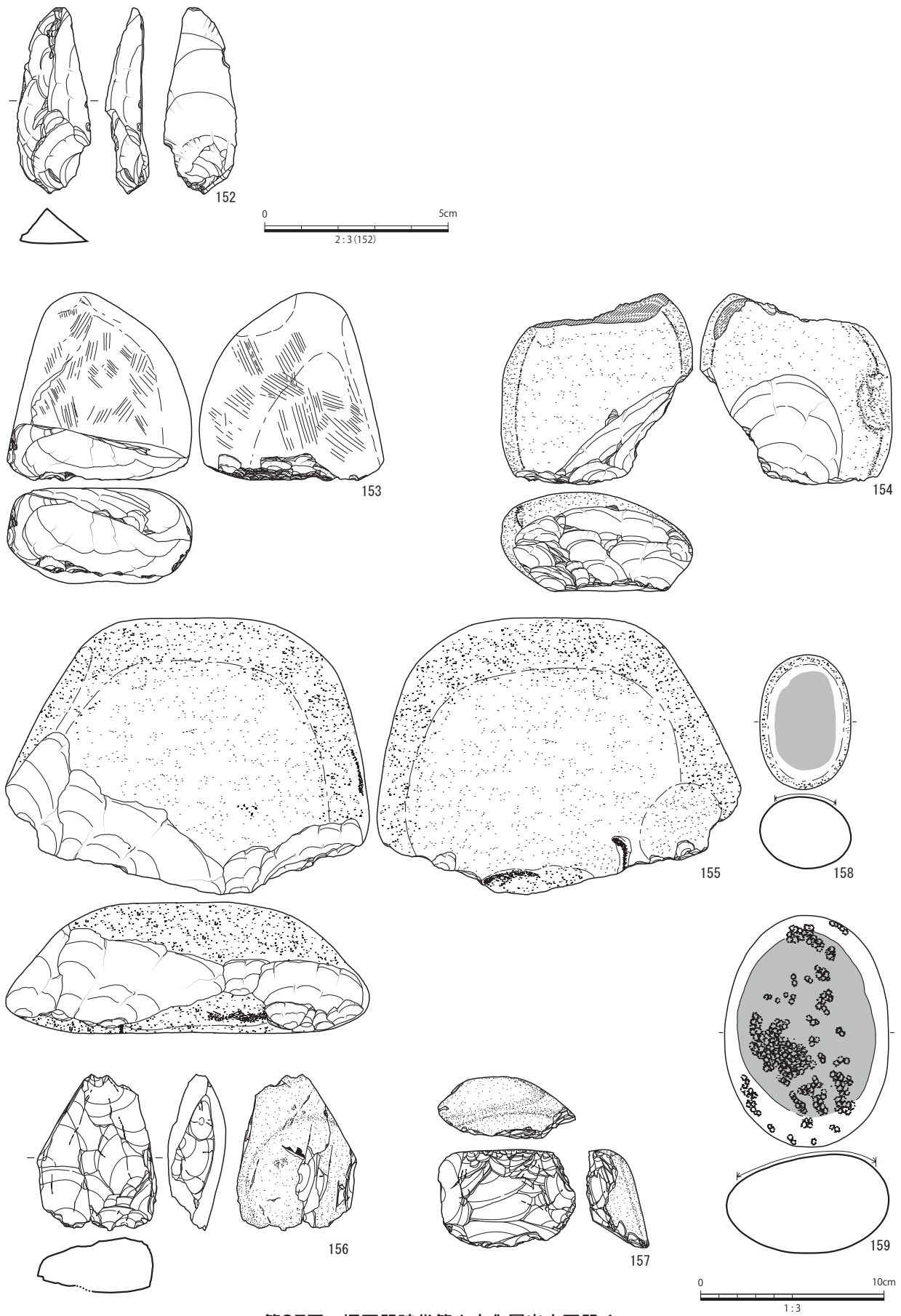


第36図 9C・9D区 石器出土状況図

153～157は、礫器である。いずれも片刃を有しており、石材は頁岩（153・156・157）やホルンフェルス（154）、砂岩（156）等が利用されている。154～156は、垂円礫を素材にして片面より1（154）～複数回（155・156）の打撃を加え、刃部を作出している。このうち154の刃部には、連続した小剥離痕が認められる。また156は大型で平坦面に擦痕等が認められることから台石を転用したものと考えられる。156・157は石核を転用したもので、いずれも礫面から複数回の打撃を加え、刃部を作出している。このうち157の刃部には、使用痕が認められる。

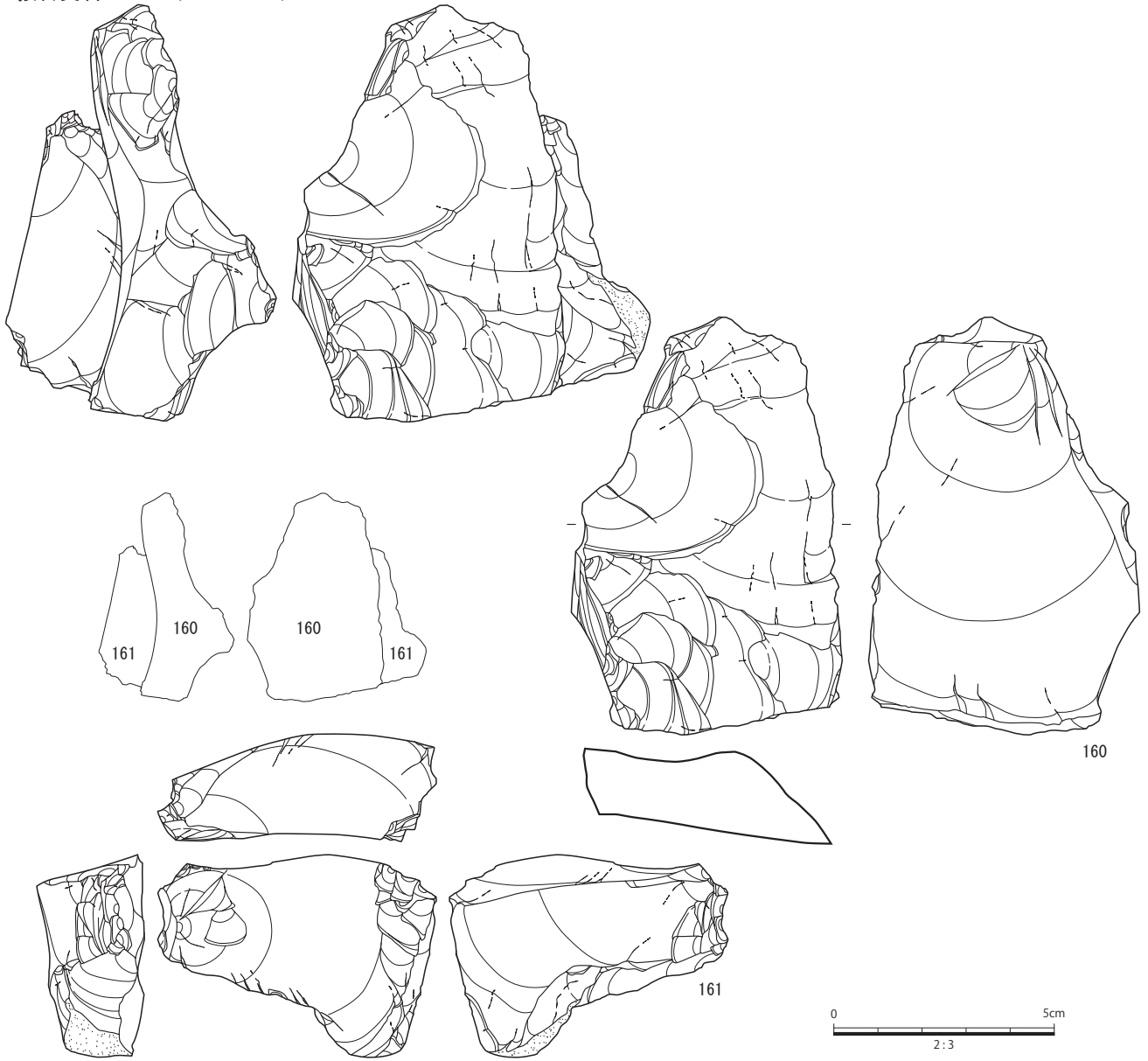
158は砂岩製の磨石である。表・裏両面に磨痕が観察される。159は砂岩製の磨・敲石である。表・裏両面に磨痕が観察される他、表面や側面の一部に敲打痕が認められる。

接合資料は3例確認され、2例を図化した。接合資料Ⅰ－1（160・161）は、頁岩製の石核と剥片で構成されている。正面、左側面と打面を入れ替えながら剥片剥離作業を行った後、上面を打面に設定して、厚みのある縦長剥片（160）を剥離する。その後、数回の打面転移を行いながら剥片剥離作業を繰り返し、161が剥出されている。161は剥片素材の石核で、素材の左側面を打面にして底面を作業面として剥片剥離作業を行っている。接合資料Ⅰ－2（154・162）は、礫器と刃部調整剥片で構成されている。このうち162については、何らかの理由で刃部を再加工した際に生じたものと考えられる。

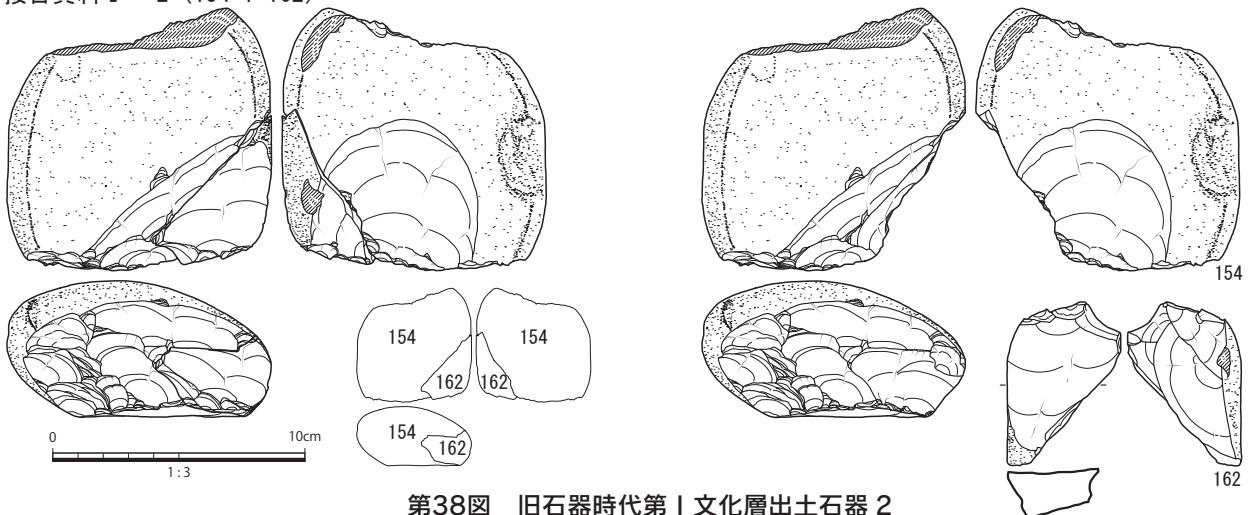


第37図 旧石器時代第Ⅰ文化層出土石器 1

接合資料 I - 1 (160 + 161)



接合資料 I - 2 (154 + 162)



第38圖 旧石器時代第 I 文化層出土石器 2

## (2) 第Ⅱ文化層 (第39図)

第Ⅱ文化層では、後述する第Ⅴ層までの調査が完了した後、第Ⅵ層を部分的に掘り下げた。第Ⅵ層は、調査区中央を南北に通る町道の造成や後世の遺構の影響を受け、一部消失しているが、細石刃を含む石器群を確認した。

### ① 遺物分布 (第39図)

遺物は、細石刃、細石核、スクレイパー、石核、打製石斧等が出土している。その分布は調査区中央の尾根上の平坦面及び谷を挟んだ南側で認められ、8E・9E区、9C・9D区、12D区の3か所に比較的石器が集中している。

8E・9E区内では、細石核や剥片、打製石斧等が出土している。ここでは、縄文時代早期の炉穴等の遺構や旧町道の造成により攪乱を受けているため、石器の分布はさらに広がる可能性がある。このほか、接合資料も2例(接合資料Ⅱ-1・2)認められる。(第45図)

また、9C・9D区内で細石刃や作業面再生剥片、スクレイパー、石核等、12D区内で剥片が出土している。

### ② 出土遺物 (第40～44図)

細石刃は11点出土しているが、1点のみ第Ⅵ層中より出土で、他は上位層・後世の遺構からである。このうち6点(163～168)を図化した。部位別で見ると163～165は頭部、166・167は末端部、168は中間部の資料である。163・164は右側縁、165・168には左側縁、167は両側縁に微細な剥離痕が認められる。なお167の表面には礫面が残る。利用石材は163が日東系の黒曜石、164・167・168が頁岩、165が砂岩、166が水晶である。

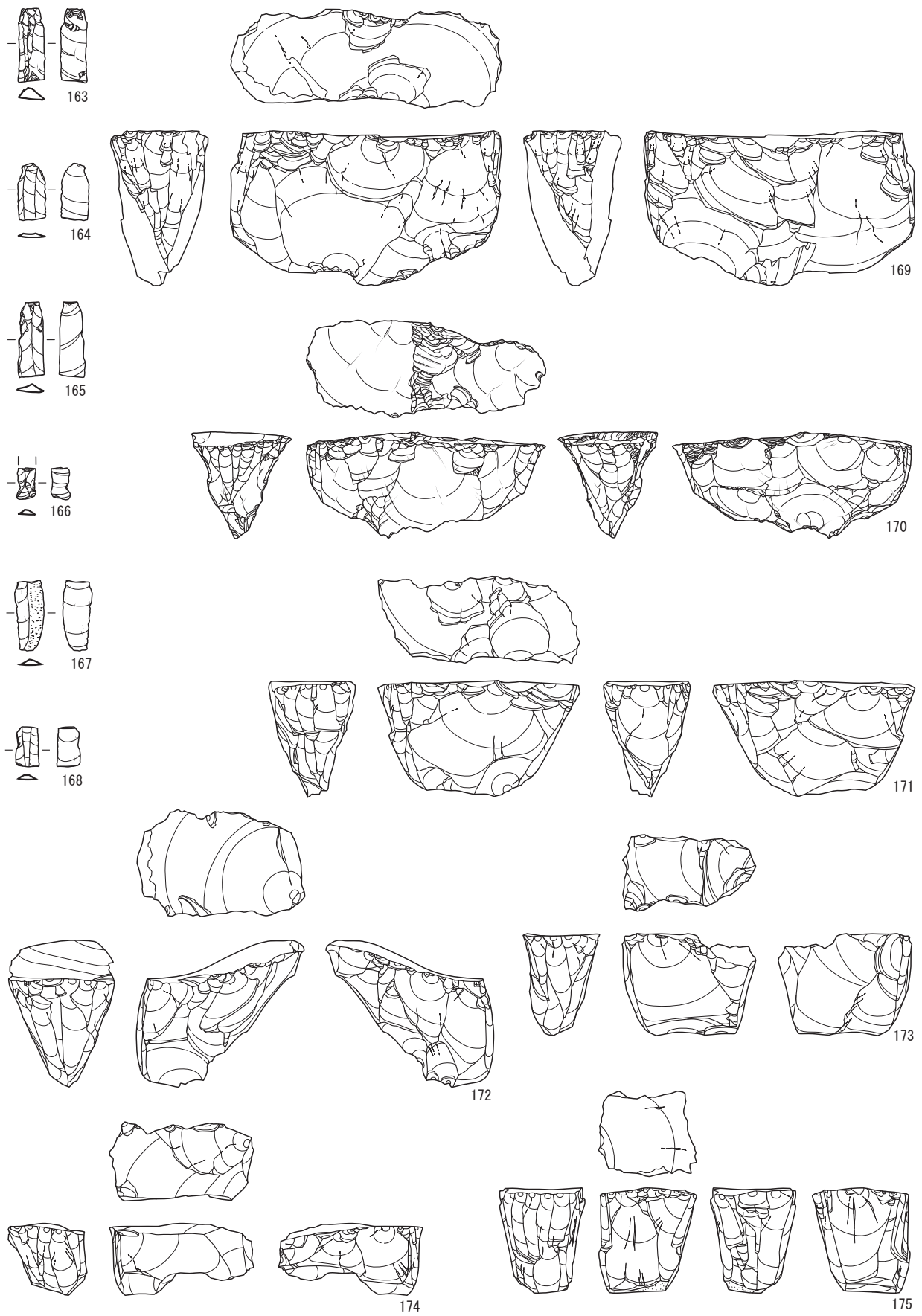
細石核・ブランク・作業面再生剥片は23点出土しているが、4点が第Ⅵ層中出土で、他は上位層・後世の遺構からである。そのうち16点(169～184)を図化した。細石核のうち169～175は、分割礫・厚みのある剥片を素材にして、分割面もしくは素材の主要剥離面を打面に設定し、そこから側面調整を行った後、小口面(172～174)ないし両小口面(169～171・175)を作業面として、細石刃剥離作業を行うもので、船野型細石核に相当する。そのうち169～172は下縁調整が、169～171では打面に側面からの調整も行われている。また171では作業面aで細石刃剥離痕を切る形で大きな剥離が認められることから、作業面が再生された可能性がある。175は、細石刃剥離作業がかなり進行し、全体形がU字形を成す。なお、底面に自然面が残る。利用石材は、169～174は頁岩、175は流紋岩である。176・177は、剥片を素材にして主要剥離面を側面に置き、小口部分を作業面として、細石刃剥離作業が行われている。なお176は下縁調整が行われている。176は頁岩製、177は桑ノ木津留産黒曜石製である。178・179は頁岩製の扁平な礫を分割して、分割礫の小口面(178)ないし両小口面(179)を作業面として細石刃剥離作業を行うもので、畦原型細石核に相当する。180は細石刃剥離作業が、かなり進行しており全体形がV字形を成す。頁岩製である。181は、桑ノ木津留産黒曜石の小亜角礫を素材にして、上面で打面調整を行い、正面を作業面として細石刃剥離作業を行うもので野岳・休場型細石核に相当する。182は頁岩製の作業面再生剥片で畦原型細石核から剥出されたものと考えられる。183・184は、細石刃剥離作業は行われていないことからブランクと判断した。このうち183は船野型細石核、184は畦原型細石核のブランクである。どちらも頁岩製である。

185～187は頁岩製、188はホルンフェルス製のサイドスクレイパーである。このうち185・186は大型の剥片を用い、185には両側縁と下縁に、186は両側縁に刃部を作出している。なお186の左側縁刃部は

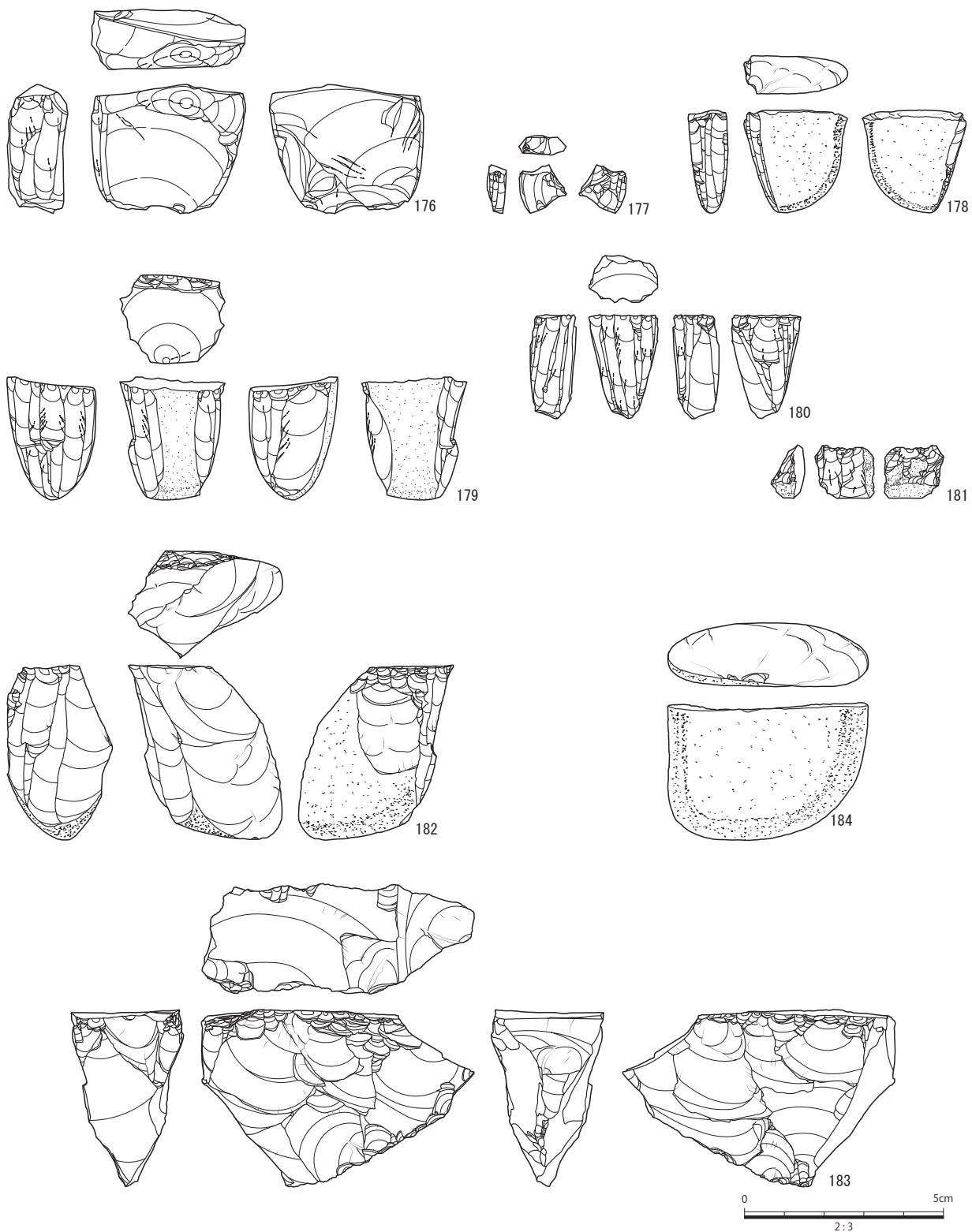




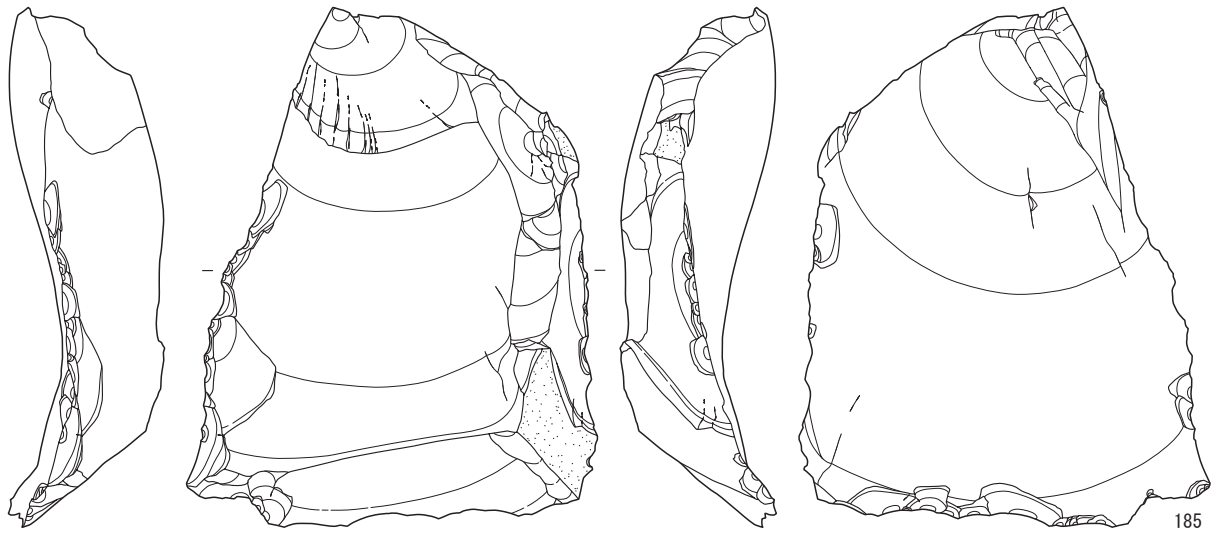
第39図 旧石器時代第Ⅱ文化層出土石器分布図



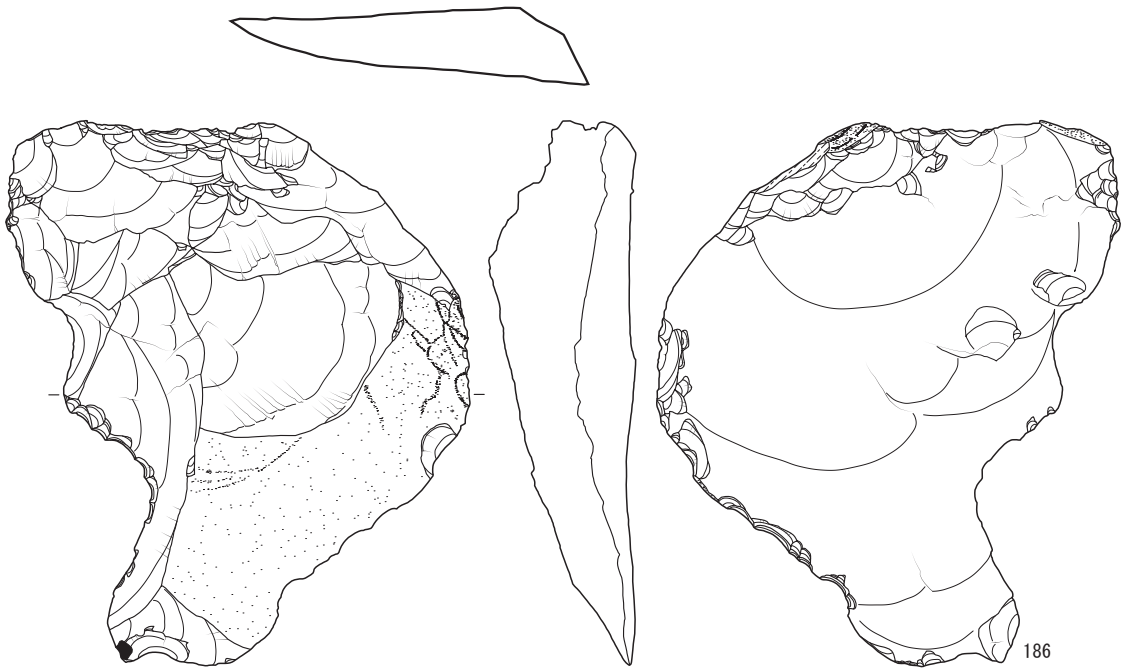
第40図 旧石器時代第Ⅱ文化層出土石器 1



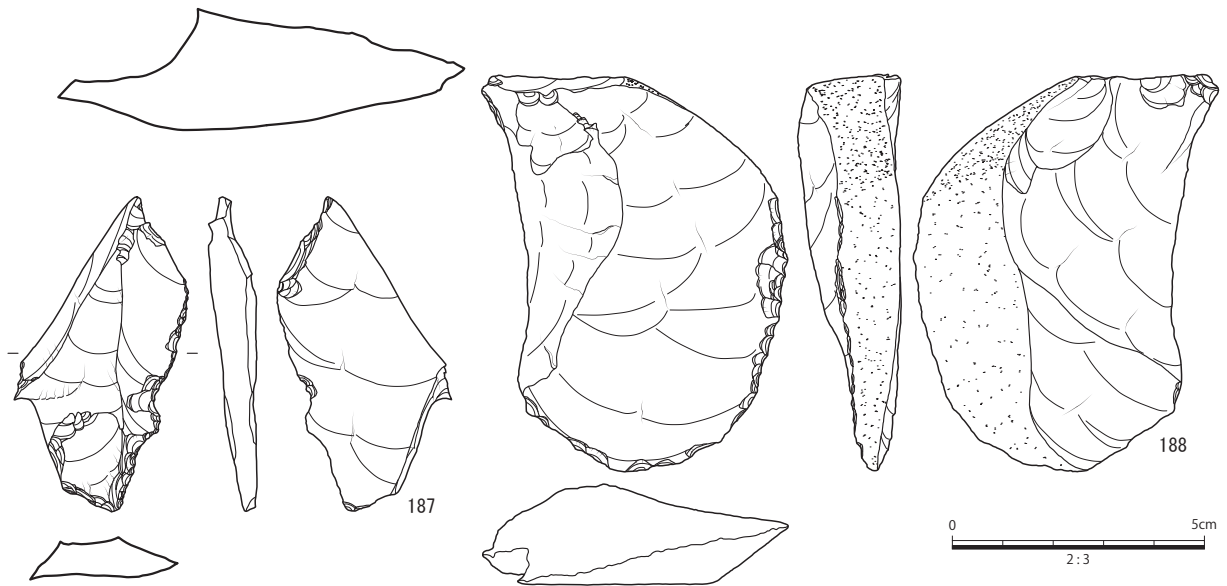
第41図 旧石器時代第Ⅱ文化層出土石器 2



185



186

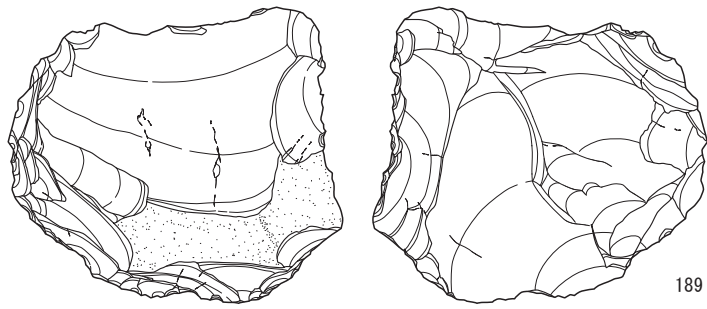


187

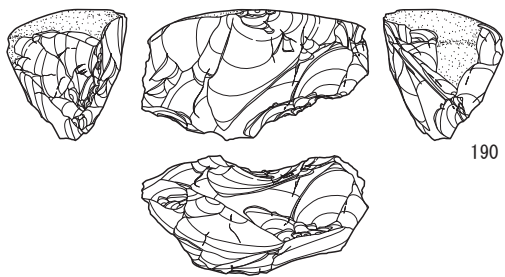
188



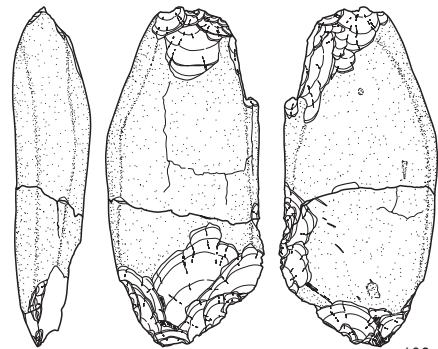
第42図 旧石器時代第Ⅱ文化層出土石器 3



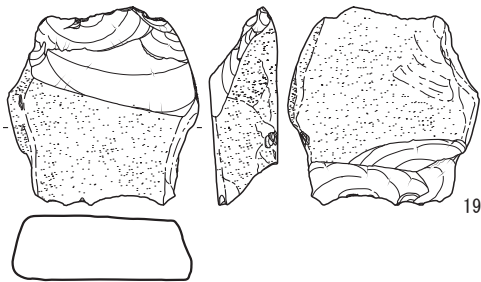
189



190



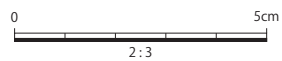
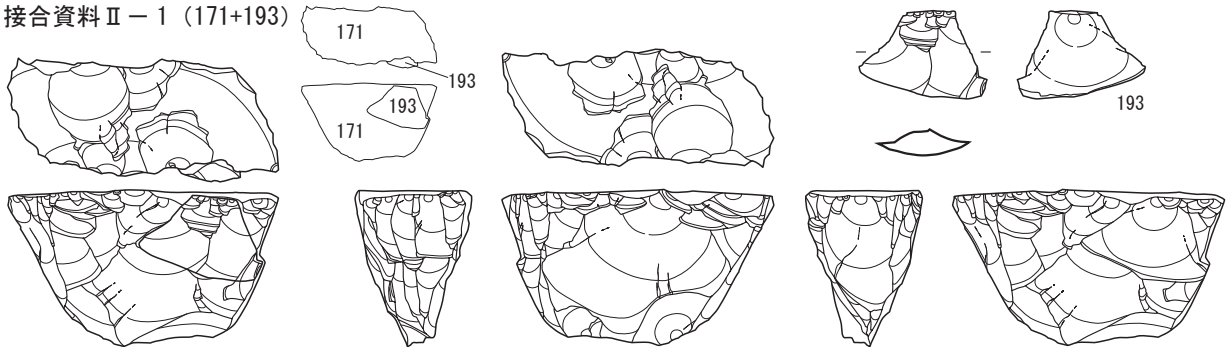
192



191

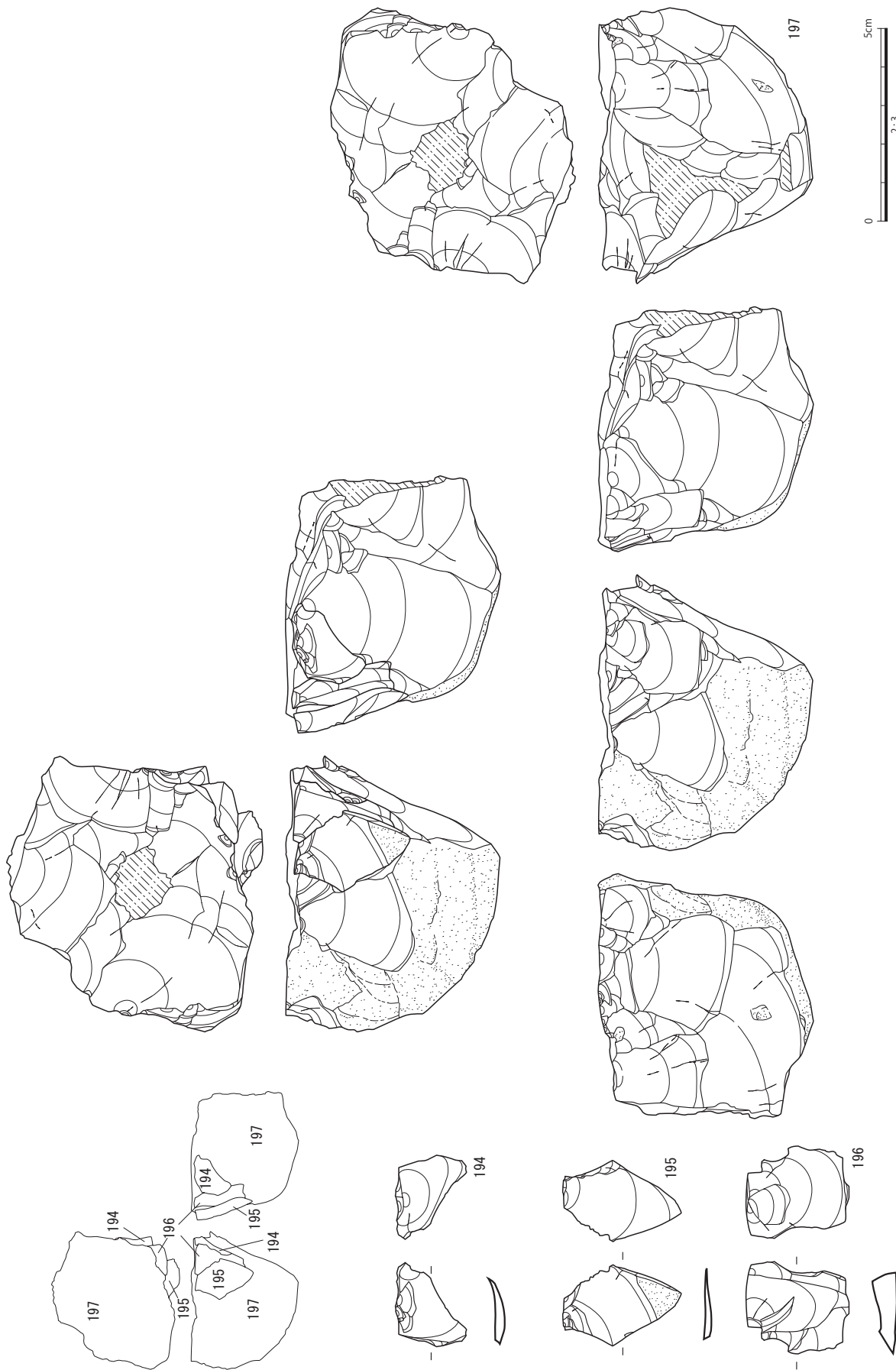


接合資料Ⅱ-1 (171+193)



第43図 旧石器時代第Ⅱ文化層出土石器 4

接合資料Ⅱ-2 (194 + 195 + 196 + 197)



第44図 旧石器時代第Ⅱ文化層出土石器 5

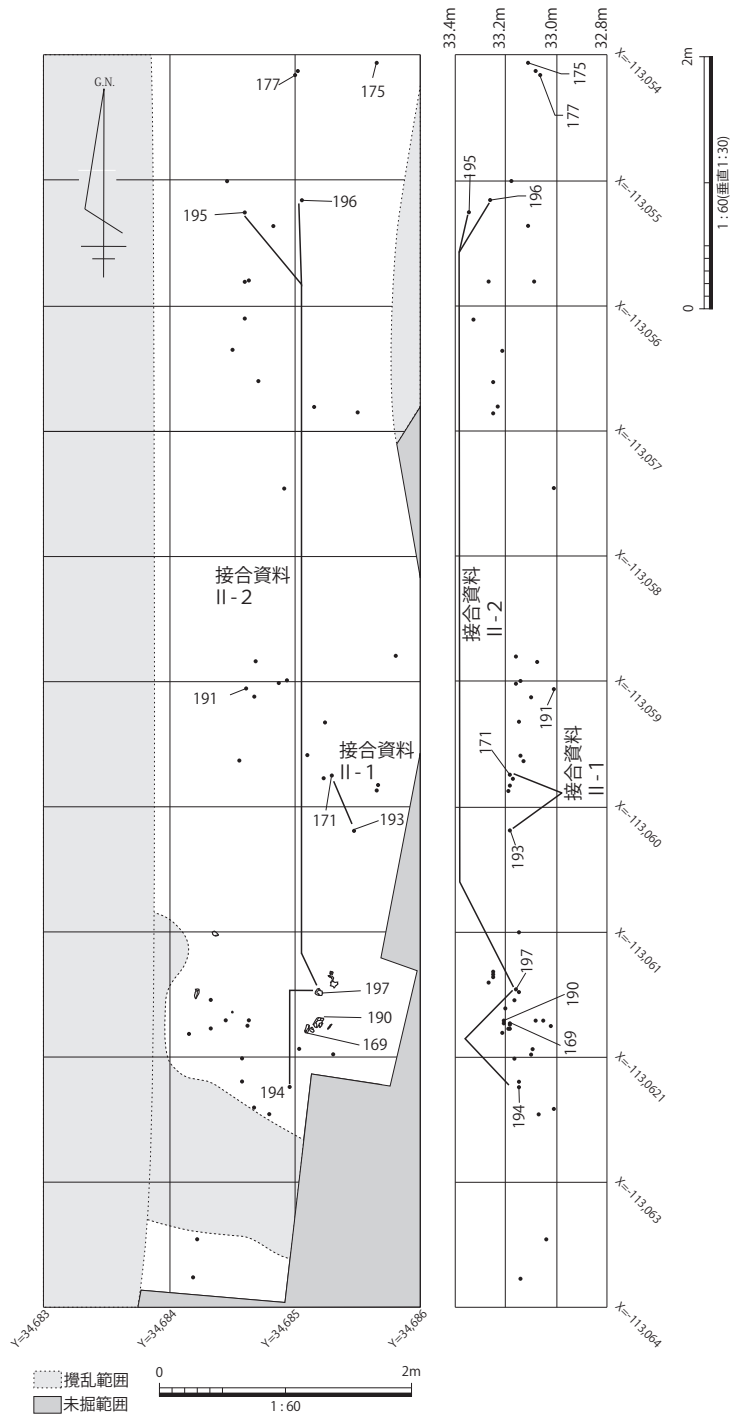


挟入状に仕上げられている。**187**は縦長剥片を利用して右側縁から下縁にかけて刃部が作出されている。**188**は一部赤化した縦長剥片を利用して、左側縁中部から下縁にかけて弧状の刃部が形成されている。**189**は頁岩製のエンドスクレイパーである。**189**は、弧状の刃部が形成されている。このうち左側縁から下縁にかけて急角度の加工に刃部が作出しているのに対し、右側縁の刃部は薄く仕上げられている。

**190・191**は頁岩製の石核である。このうち**190**は正面及び左側面を作業面として打面を転移させながら剥片剥離作業を行っている。**191**は扁平な礫を用い、両端から打面調整を行わず、有底を有する横長剥片を剥離している。

**192**は頁岩製の打製石斧である。棒状の扁平礫を素材として、両端に加工を行っている。なお刃部には、一部で研磨痕が認められる。

**接合資料Ⅱ-1 (171・193)**は、頁岩製の細石核と剥片で構成されている。細石刃の剥離作業が行われた作業面の一部を切る形で、打面より横長の調整剥片(**193**)を剥離している。**接合資料Ⅱ-2 (194~197)**は、頁岩製の石核1点と剥片3点で構成されている。側面から底面にかけて礫面を残す石核(**197**)の上面を打面に設定して、打面を左右にずらしながら**194**→○→**195**→○→**196**の順で剥片剥離作業を行っている。石核の打面は入念に整形されている。



第45図 8E・9E区 出土石器の分布と接合関係

### 3 縄文時代の遺構と遺物

表土や一部に残る第IV層(K-Ah)除去後、残存する縄文時代の遺物包含層である第V層の掘削途中で、粗密はあるものの、多量の砂岩礫が一面に検出された。礫は破碎した砂岩で、調査区中央南寄りの谷地形範囲近辺で礫の密度は高く、尾根筋で地形が高くなる調査区北側や丘陵端の傾斜する南東側は少なくなる傾向にある。調査区北側は後世に削平を受け、南東側は丘陵端の東に傾斜する場所のため散礫の密度は下がるものと推察される。この散礫の除去後、縄文時代の集石遺構を23基検出した。その分布

は、町道敷設により失われたところも多いが、丘陵の縁辺に集中する傾向にある。基本層が残る J1c 区では、アカホヤ除去後の第 V 層下面～下位で検出できる。その他、配石遺構 1 基、炉穴 1 群を検出した。ともに、尾根筋上に位置しており、配石遺構はやや台地の頂部に、炉穴は縁辺に構築されている。

### ① 検出遺構

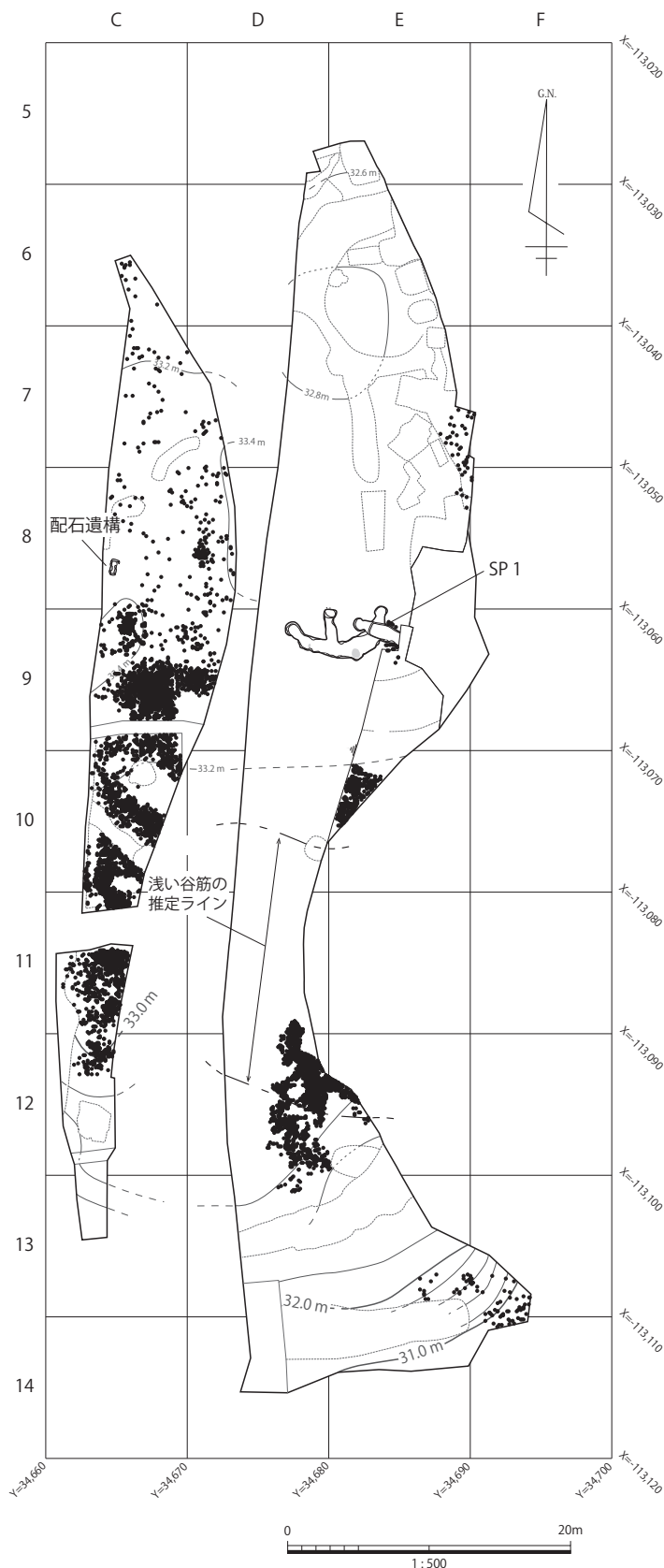
**炉穴 (SP1、第47・48図)** 調査区中央、尾根筋推定部分東端の E8・E9 区より連結した炉穴が 1 群検出された。町道敷設による基本層の削平が著しく、大部分が第 IXa 層での検出となったが、炉穴群の東端部のみは削平を免れ、基本層が残存していたことから、第 VI 層上面より掘り込まれていることを確認した。なお、東側は調査区外へ至る。炉穴群は、尾根筋と同じ東西方向に長軸をとり、規模は東西に約 4 m、南北に約 1.9 m の範囲に南側に弧を描く形状の 1 条を基本として、中心から北方向に 1 条、東側で南東-北西方向に 1 条が連結している。

4 か所ある端部は円形を呈し、排煙口と推定される。西側から 2 番目のみはオーバーハング状に立ち上がり、その他は底面より斜めに立ち上がる。

ブリッジは、断面の形状により痕跡部を 4 か所確認した。その内 c-c'、d-d' 断面の 2 か所については、土層堆積状況により底面で IXa 層ブロックの

集中を確認しており、ブリッジが遺構埋没時に崩落したと推定される。焼土の範囲は、ブリッジの痕跡部下で 3 か所、遺構南部で 2 か所、北西側排煙口 1 か所の計 6 か所で確認している。

平面・断面の形状、焼土範囲、床面の段差から想定される切り合い関係を総合すると、東側の 3 方向に 3 基、東から西に連続した 4 基、北方向に 1 基の合計 8 基以上の炉穴がつくられたことが想定される。

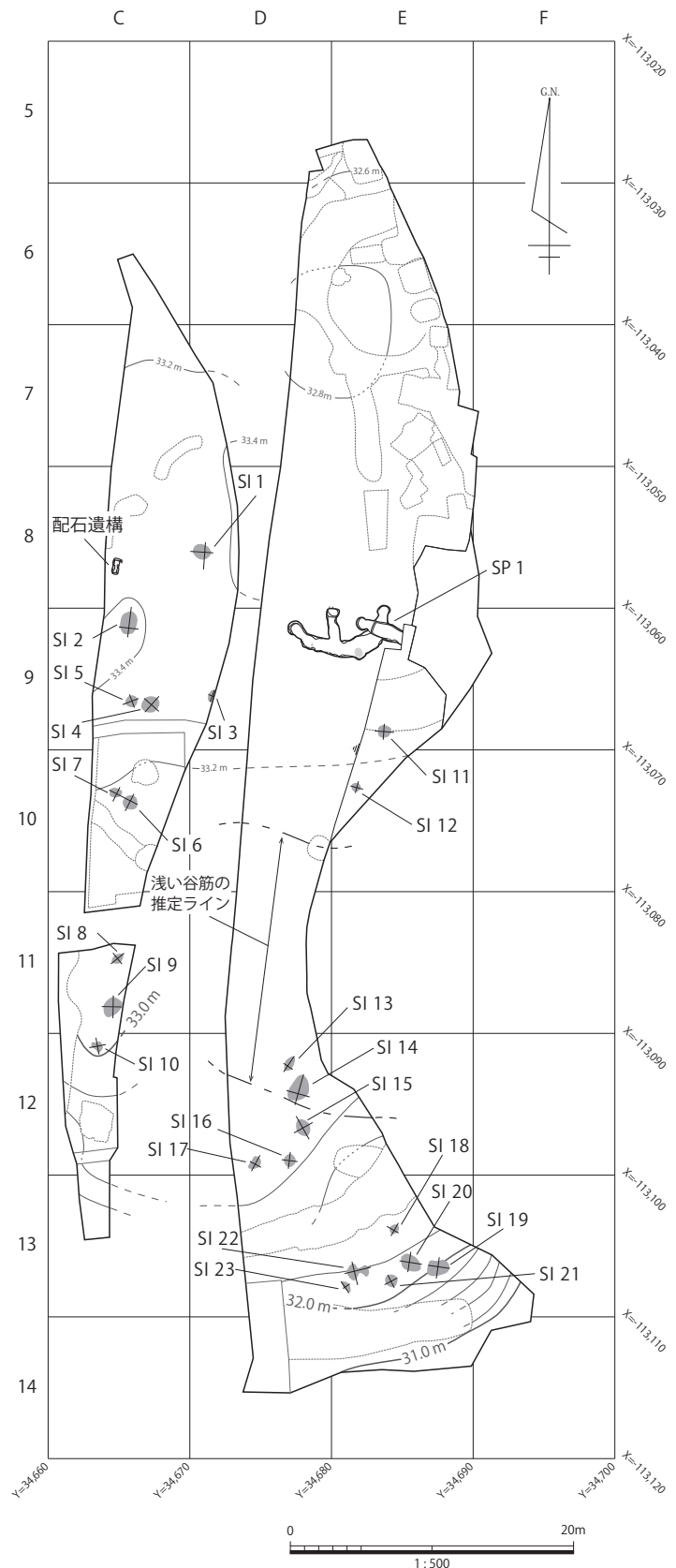


第46図 縄文時代早期散石分布図

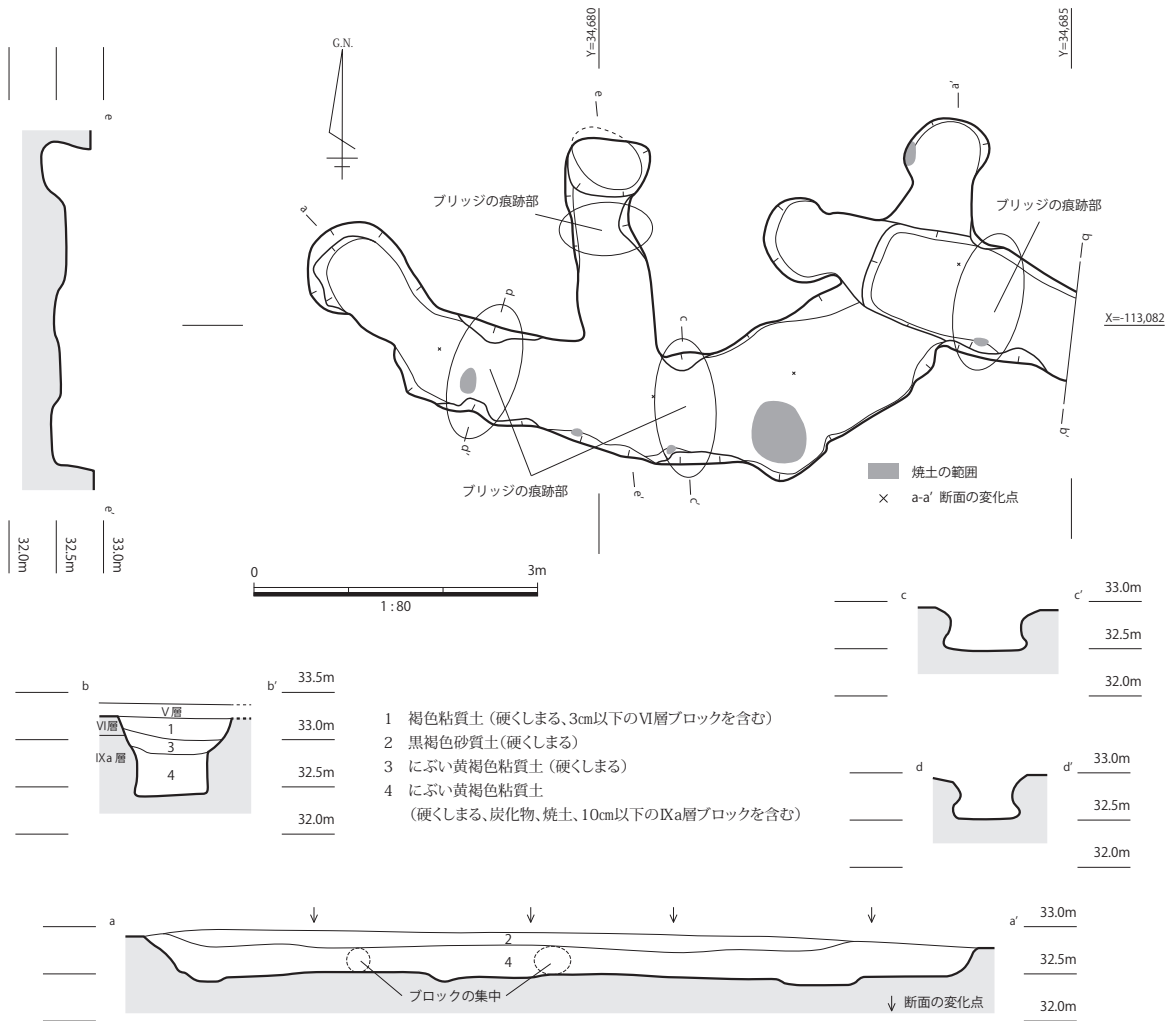
遺物は、炉穴内より縄文時代早期の貝殻文系に属する土器片及び台石が出土している。土器は実測に耐えうる3点(198~200)と台石206を図化した。集石遺構(SI1~23、第47図・第49~52図、第2表) J1地点では、今回の調査で集石遺構を23基確認した。集石遺構は掘り込みの有無により大別でき、配石の有無及び礫の密集度等から8通りに分類できる。

I類は掘り込みを有し、掘り込み内に配石が認められるもので、構成される礫が密集しているIa類はSI16・17の2基が該当する。掘り込みは、いずれも平面が円形・断面がすり鉢状を呈し、規模はそれぞれ長軸1.12m(SI16)、1.02m(SI17)を測る。また、掘り込みの深さは、SI17は0.24mと比較的浅いが、SI16は0.4mとやや深い掘り込みを有する。掘り込み内の配石と礫の状況は、掘り込みの中央部に扁平な砂岩がSI16は2個、SI17は1個配置され、礫は掘り込みの中位までで底部に礫の集積はない。構成礫が散在するIb類はSI21の1基が該当する。掘り込みは円形・平皿状を呈し、規模が長軸0.52m、深さは0.12mと比較的小さい。配石は扁平な砂岩が掘り込み中央に配置され、礫は掘り込み底部まで集積している。

II類は掘り込みを有し、掘り込み内に配石が認められないもので、礫が密集するIIa類のみが確認できた。SI1~7・11・12・14・15・20の12基が該当する。掘り込みは、円形・すり鉢状(SI4・6・12・14・15・20)、円形・平皿状(SI5・11)、楕円形・すり鉢状(SI2・7)、楕円形・平皿状(SI1)を呈し、規模は長軸0.44~1.54m、深さ0.06~0.45mとばらつきがあり、0.06m(SI5)、0.12m(SI15)の比較的浅いものや0.3m(SI2)、0.45m(SI20)の比較的深いものがある。礫は、SI1~7・11は掘り込み底部まで集積しているが、SI12・14・



第47図 縄文時代早期遺構分布図



第48図 SP1 平面・断面図

15・20は掘り込みの中位までで底部に礫の集積はない。

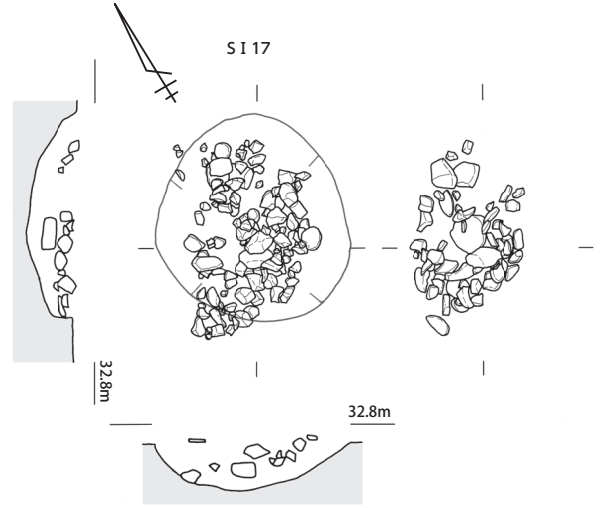
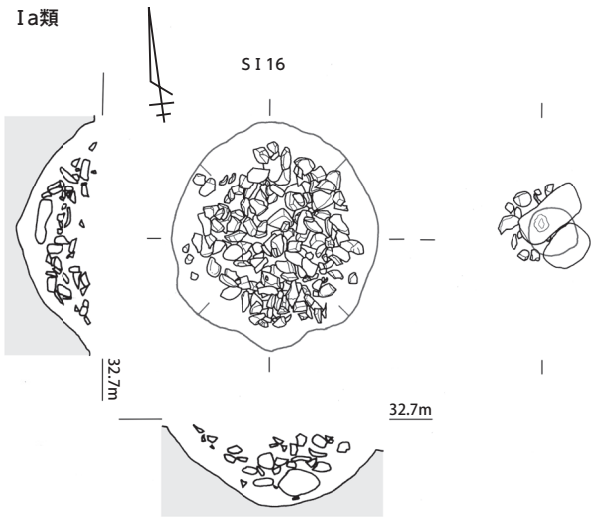
Ⅲ類は掘り込みを持たないものの配石が認められるもので、構成礫が密集するⅢa類はSI22が該当する。礫の範囲は長軸1.82mの楕円形を呈し、配石は特に礫が密集する部分の下に扁平な砂岩1個を確認した。礫は大半が破碎礫で構成されている。構成礫が散在するⅢb類はSI19が該当する。礫の範囲は長軸1.59mの楕円形を呈する。礫は大半が破碎礫で構成され、配石は遺構中央上部に扁平な砂岩1個を確認した。

Ⅳ類は配石・掘り込みを持たないもので、構成される礫が密集するⅣa類はSI13が該当する。礫の範囲は長軸が1.14mあり、大半が破碎礫で構成されている。構成礫が散在するⅣb類は、SI8～10・18・23の5基が該当する。礫の範囲は長軸が0.74～1.37mで、大半が破碎礫で構成されている。SI9・10については、遺構中央に暗～黒褐色土のにじみを確認したが、明確な掘り込みは確認できなかった。

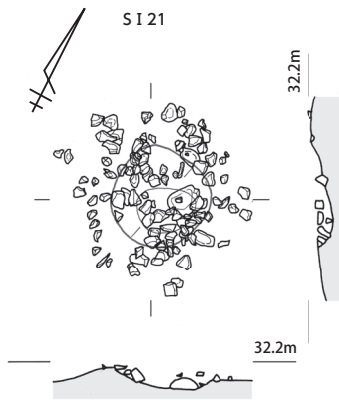
遺構内出土遺物は、約6割の遺構で確認されている。土器は、SI9・11・14・20よりいずれも貝殻文系に属する土器片が出土している。石器は、多くが剥片であったが、SI11・14・20からスクレイパー、SI20から打製石斧が出土している。なお、SI13からは細石核が出土しているが、遺構そのものの構築面は第V層下位であることから縄文時代とした。

**配石遺構**（第53図） 8C区で検出した箱状の掘り込みの側面に礫を配置した遺構である。主軸はほぼ南北を示し、長軸1.15m・短軸0.6mの長方形を呈する。第V層中から掘り込まれ、第VI層まで達する。深

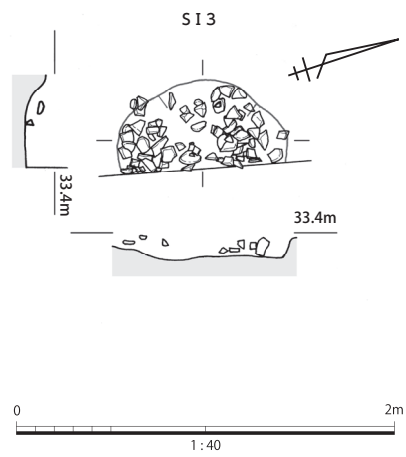
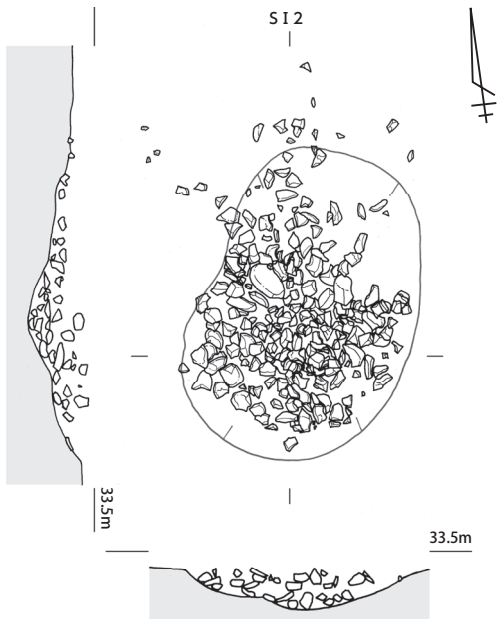
Ia類



Ib類



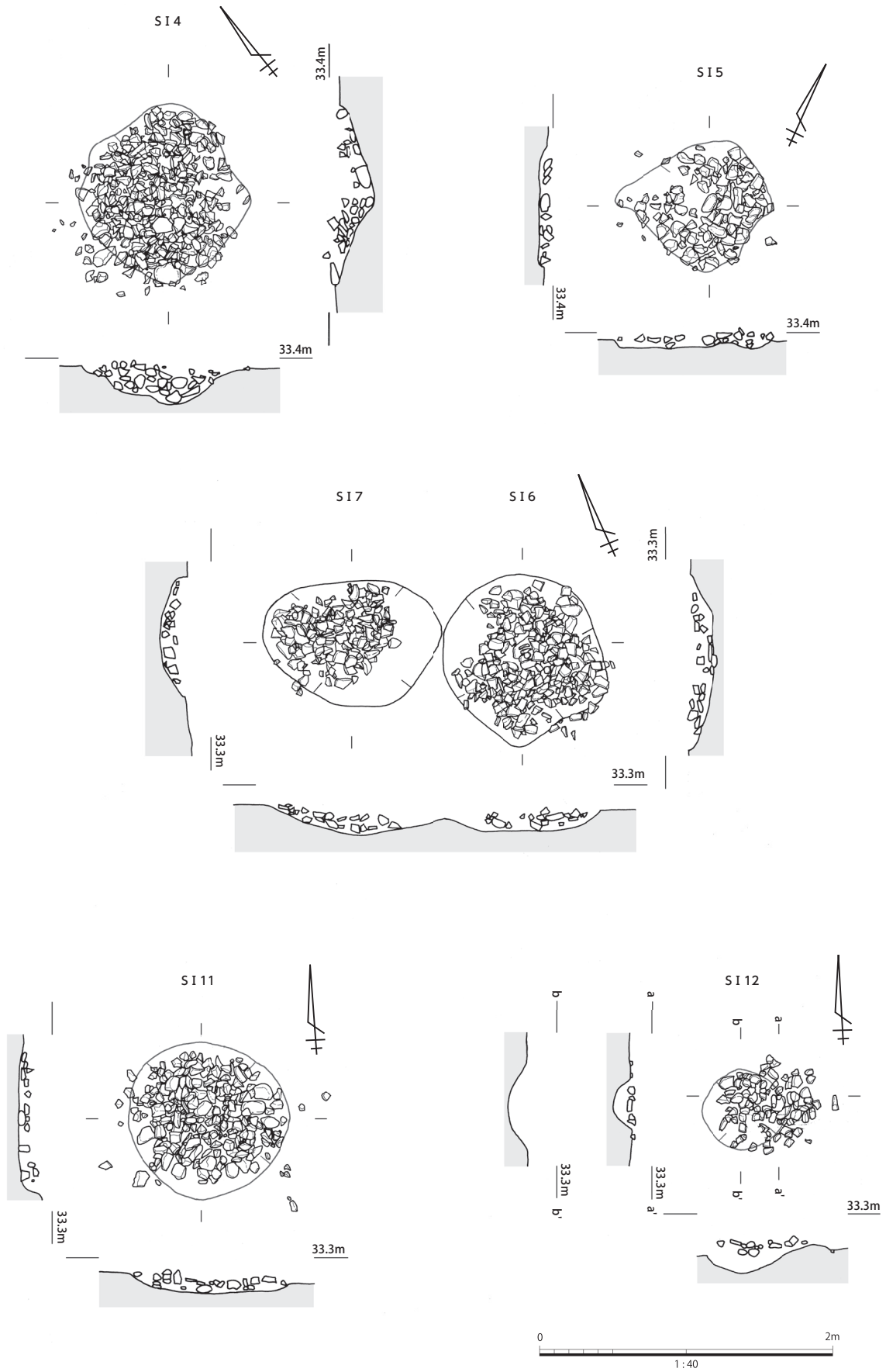
IIa類



第49図 集石遺構 (SI) 平面・断面図 1



IIa類

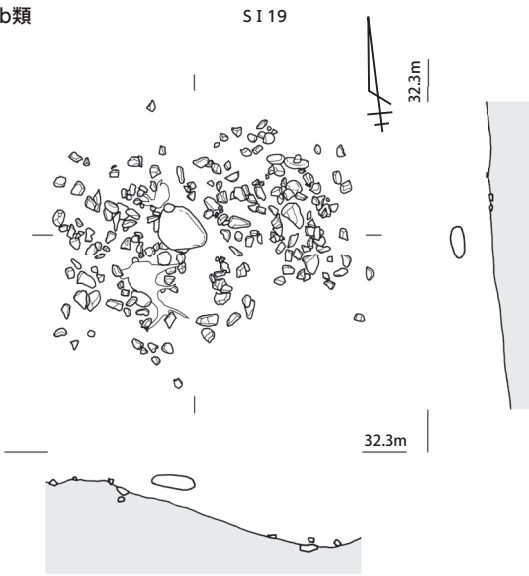


第50図 集石遺構 (SI) 平面・断面図 2

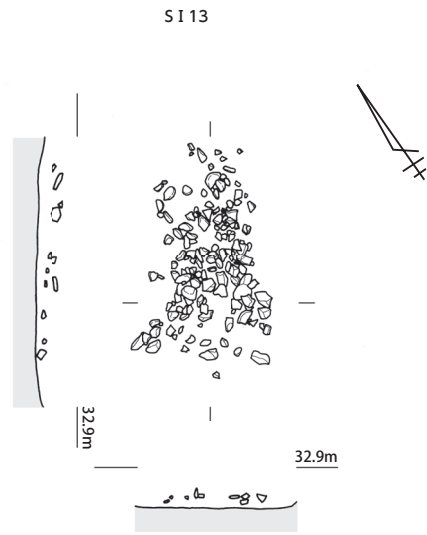




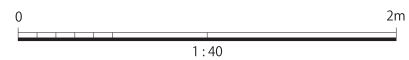
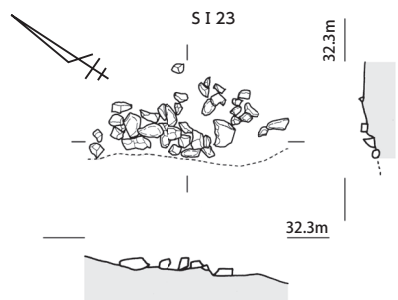
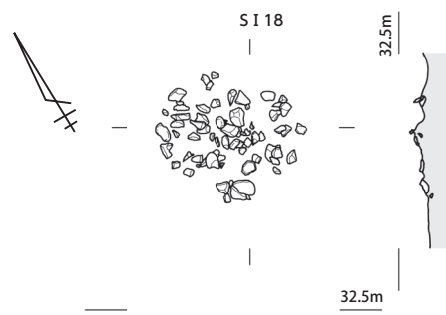
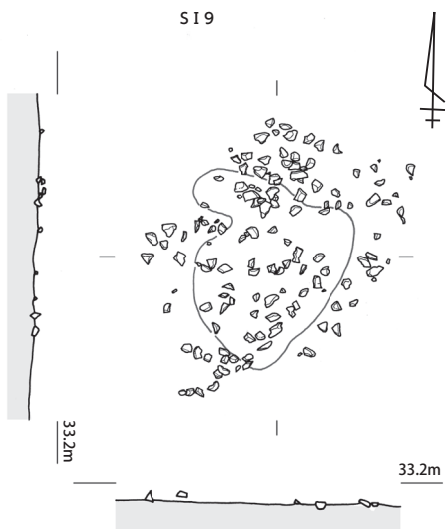
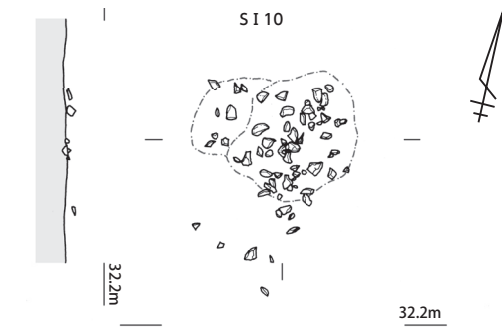
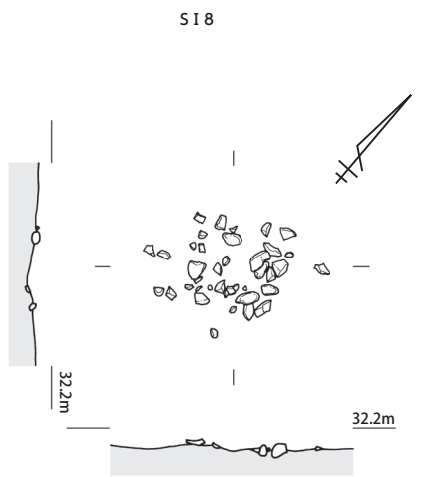
Ⅲb類



Ⅳa類



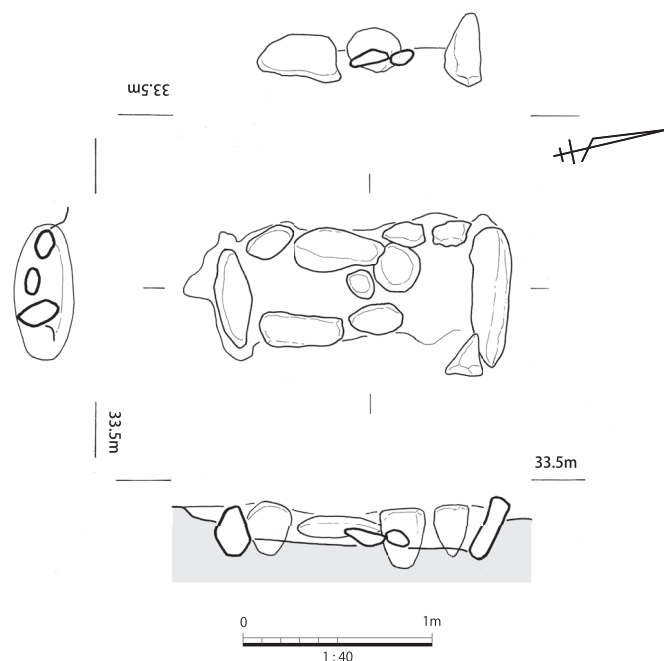
Ⅳb類



第52図 集石遺構 (SI) 平面・断面図 4

第2表 J1 地点縄文時代早期集石遺構一覧表

分類	遺構番号	層位	調査区	Gr.	出土遺物	礫の範囲(m) 最大長×最大幅	掘り込み規模(m) 最大長×最大幅×深さ	礫の密度	配石	備考
I a	J1-SI16	V	J1c	12D	土器片	0.91×0.89	1.12×1.05×0.40	密	2	炭化物
I a	J1-SI17	V	J1c	12D	土器片・剥片	0.98×0.72	1.02×0.90×0.24	密	1	
I b	J1-SI21	V	J1c	13E	土器片	0.98×0.95	0.52×0.50×0.12	散	1	
II a	J1-SI1	V	J1a	8D	-	1.41×1.21	1.19×1.17×0.18	密	×	
II a	J1-SI2	V	J1a	9C	剥片	1.80×1.10	1.54×1.17×0.30	密	×	
II a	J1-SI3	V	J1a	9D	-	0.82×0.44	0.83×0.47×0.22	密	×	
II a	J1-SI4	V	J1a	9C	-	1.26×1.22	1.15×1.10×0.27	密	×	
II a	J1-SI5	V	J1a	9C	土器片	1.00×0.79	1.00×0.77×0.06	密	×	
II a	J1-SI6	V	J1a	10C	-	1.04×1.01	0.98×0.97×0.19	密	×	
II a	J1-SI7	V	J1a	10C	-	0.83×0.72	1.15×0.77×0.20	密	×	
II a	J1-SI11	V	J1c	9E	土器片・剥片・スクレイパー	1.20×0.85	1.05×0.98×0.15	密	×	
II a	J1-SI12	V	J1c	10E	-	0.77×0.63	0.64×0.50×0.15	密	×	
II a	J1-SI14	V	J1c	12D	土器片・スクレイパー	1.91×1.53	1.47×1.08×0.21	密	×	
II a	J1-SI15	V	J1c	12D	土器片・剥片	1.57×1.33	0.44×0.35×0.12	密	×	
II a	J1-SI20	V	J1c	13E	土器片・剥片・スクレイパー・石斧	1.47×1.20	1.30×1.10×0.45	密	×	最深部に炭化物
III a	J1-SI22	V	J1c	13E	剥片	1.82×1.45	1.00×0.71×0.17	密	1	
III b	J1-SI19	V	J1c	13E	土器片・剥片	1.59×1.41	-	散	1	
IV a	J1-SI13	V	J1c	12D	土器片・剥片・細石核	1.14×0.70	-	密	×	
IV b	J1-SI8	V	J1b	11C	-	0.92×0.62	-	散	×	
IV b	J1-SI9	V	J1b	11C	土器片・剥片	1.37×1.34	-	散	×	
IV b	J1-SI10	V	J1b	12C	土器片	0.75×0.72	-	散	×	
IV b	J1-SI18	V	J1c	13E	-	0.74×0.66	-	散	×	
IV b	J1-SI23	V	J1c	13E	-	0.98×0.47	-	散	×	



第53図 配石遺構平面・断面（見通し）図

さは0.16m。礫に囲まれた部分の埋土はV層に似た暗褐色土である。砂岩の礫11個が用いられ、短辺には大きい扁平礫を2分割したものを1個ずつ、長辺は確認できるだけで西側に4個、東側に3個を配置し、掘り込み底部にも円礫2個を配置している。遺構の構築は、長方形の掘り込みを成形し、その側縁に礫を配置して行ったものと考えられる。掘り込みの下底は明瞭でなかったが、掘り込みの中央に存在する円礫はおそらくは底部に置かれたものと推測されるため、その下端が底面のレベルであろう。当該遺構に明確に伴う遺物は出土しなかったが、遺構の構築層位と埋土の土質が第V層と同系統であることから、縄文時代早期の所産と判断した。（後藤）

## 遺構内遺物（第54図）

198～200・206はSP1出土遺物で、198～200はいずれも縄文時代早期の貝殻文系土器に属するものである。地文として斜方向の貝殻条痕を施したのちに、縦位の貝殻腹縁による文様を施文する。198はわずかに外方に反る口縁部片で、外面の最上位に3条の横方向の貝殻腹縁刺突線文を巡らせる。口唇部には、おそらくは条痕と同一原体による刻目を施す。200は底部近くの破片とみられる。内面の器面調整はケズリ状となる。206は台石で、砂岩製の扁平な楕円礫を用い、正面には磨面が形成されている他、上面から左側面の一部にかけて敲打痕が認められる。台石は約1/2欠損している。全体的に赤化しており、一部で黒化がみられる。

201～205、207～210は集石遺構出土遺物である。201はSI9出土土器で、貝殻文系に属する口縁部片である。直線的に外に開く器形を呈する。外面の文様は、口縁部に横方向に4条、その下位はV字を描く線状の文様を付けており、構成は198とほぼ同じであるが、文様が貝殻腹縁の押圧による連点状となる。202・209はSI11出土遺物で、202は貝殻文系に属する小破片である。地文としての斜方向の貝殻条痕の上に縦位、斜位の貝殻腹縁による連点状文を施す。209は頁岩製サイドスクレイパーで、左側縁上部～中位にかけて刃部形成を行っている他、左側縁下部や右側縁中位には微細剥離が認められる。203・204・208はSI14出土遺物で、203・204は、いずれも貝殻文系に属する小破片である。203は斜方向の貝殻条痕の上に縦位の貝殻腹縁刺突線文を密接して施文する。204は楔形突起と縦位の貝殻腹縁による連点状文を施す。両者とも内面はケズリ状の粗い器面調整となる。208は頁岩製のエンドスクレイパーで、下側縁に刃部形成を行っている。205・207・210はSI20出土遺物で、205は貝殻文系に属する個体である。口縁部近くの破片であろうが口唇部を欠いている。確認できるだけで3列にわたって楔形突起を巡らせ、その下位には貝殻腹縁による連点状文を縦方向に施文する。押し引き状とまでは表現できないが、摩滅のためやや不明瞭ではあるものの、施文具を器面から離さずに横方向に連続押圧させている可能性がある。内面調整はケズリ状であるが、それについても摩滅により明瞭とはいえない。207は頁岩製のサイドスクレイパーで、右側縁から下縁の一部にかけて弧状の刃部を作出している。210は頁岩製の打製石斧で、素材となる縦長の垂円礫に加工を行い、端部に刃部を作出している。片面の大部分には、自然面を残す。

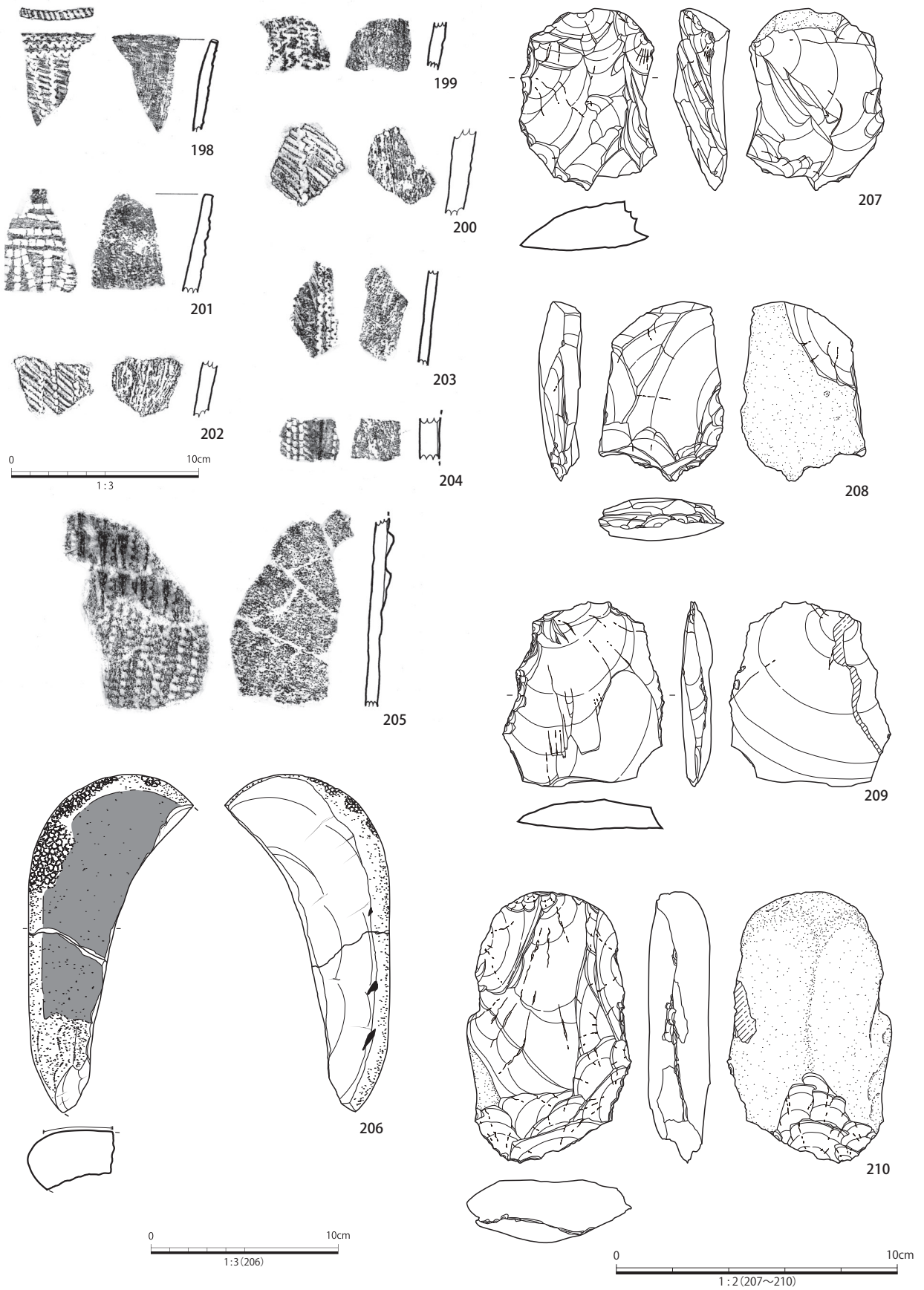
なお、遺構埋土より細石核が出土しているが、第4節2-3で記述したとおり、周辺より流入したと考えられる旧石器時代の遺物であり、遺構出土遺物から除外した。（吉本・後藤）

## ② 出土遺物（第55図）

V層が当該期の遺物包含層である。多くは丘陵先端近くの12D・12E区で出土している。そのほか、谷の頂部付近にあたる9～11C区付近にも集中箇所がある。8～10E区にも遺物が濃密に分布していたと考えられるが、削平の影響を受けている。

## 土器（第56・57図）

211～214は口縁部に縦長の1列の列点文、あるいは縦方向の短沈線文を巡らせ、それ以下には貝殻腹縁による横・斜方向の条痕文を施す。215は縦方向の短沈線文のみが認められる小片で、口縁部以下は明確でないが、おそらくはこの一群に含まれるものであろう。ただし特徴は近いが、213のみは別型式に属する可能性が高い。213の口縁の条痕状の文様は浅く、図面ではあまり明瞭に表現されない。211と213～215の口唇部は丸く収めているのに対して、212は平坦となるなど細かな違いも認められる。216と217も外面に斜方向の条痕文を施す点は211などと似るが、口縁部が外反すること、内面が丁寧なナデ調整と



第54図 縄文時代早期遺構出土遺物



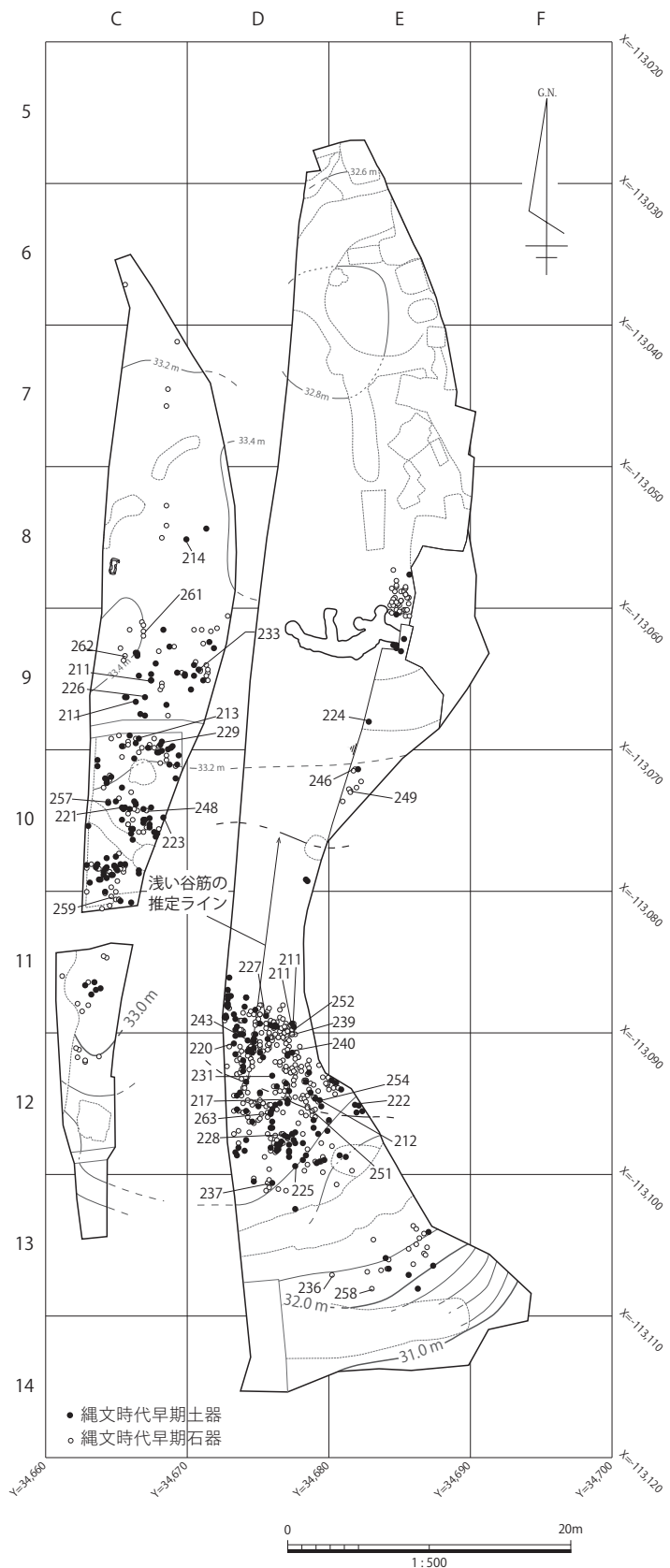
なることなど違いもある。むしろ213との類似点が多い。ただし口縁部外面に文様は認められない。

218～226は地文に貝殻条痕を施し、その上から縦方向の貝殻腹縁による刺突線文を付す一群である。刺突線文は、一部は斜方向になる可能性もあるが、そのように断定できる個体はない。218は口縁部であり、平面形が方形となるいわゆる角筒形の土器である。口縁部に横方向の1列の刺突線文を施し、その下位に縦位の刺突線文と楔形貼付突起を付す。227は貝殻文系土器群の口縁部であるが、口縁端部が内湾する器形で、211や218とは明確に型式が異なる。外面は横方向の貝殻による連点状の圧痕文を施す。内面はナデ調整で、上部は横方向のミガキ状の丁寧なものとなる。228・229は貝殻文系土器の底部。外面に縦・斜位の短沈線文を施す。底面に圧痕などは認められない。

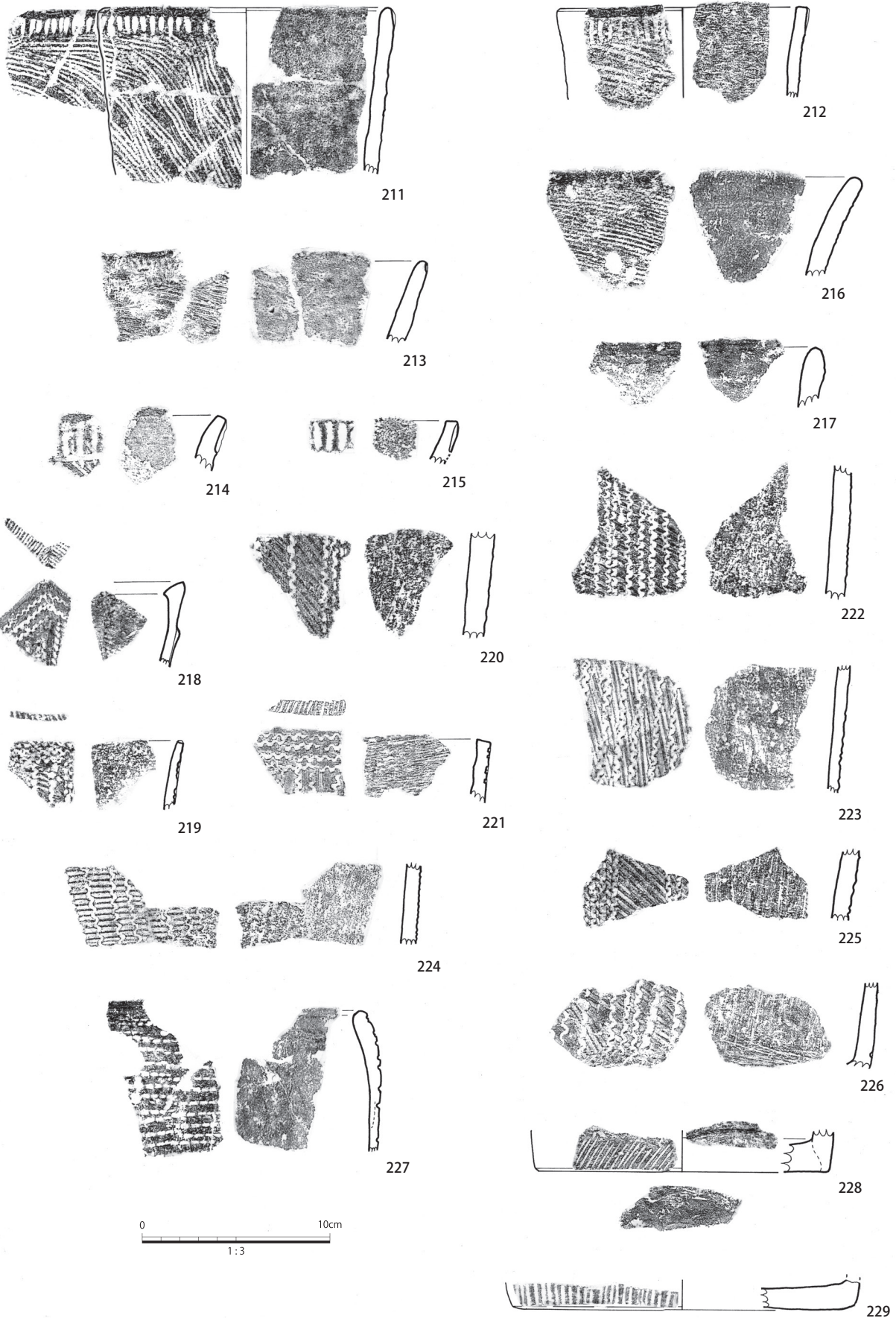
230～233は押型文系に属するものである。230は格子目状、231～233は山形文であるが232は間延びして流水状となる。

234・235は縄文時代晩期終末の系統の浅鉢で、おそらくは実年代は弥生時代早期から前期に属するとみられる。便宜的にこの項で扱った。234は胴部から逆「く」字状に屈曲する。口縁部は玉縁状に肥厚する。235も口縁部の形状は同じで、胴部の屈曲部から鈍角に接合して立ち上がる。傾きはやや不確かであるが、口縁部はわずかに外に開くようである。234・235ともに外面はミガキ調整であろうが、風化のため明瞭ではない。(吉本) 石器 (第58・59図)

236～245は、打製石鏃である。石材別にみると、黒曜石製5点、チャート製3点(239・240・245)、



第55図 縄文時代早期出土遺物分布図



第56図 縄文時代早期出土遺物 1

頁岩製2点(241・242)となっている。黒曜石は産地別に見ると、2点が桑ノ木津留産(236・243)、2点が腰岳産(237・244)、1点が姫島産(238)である。

その形状からⅠ類(正三角形)、Ⅱ類(二等辺三角形)、Ⅲ類(五角形)に分類でき、基部の形状からa類(平基)、b類(ごく浅い抉りを有するもの)、c類(浅い抉りを有するもの)、d類(深い抉りを有するもの)に細分できる。このうち、236はⅠb類で、非常に小型で断面は薄い。基部の抉りは非

常に浅く、平基に近い。237はⅡa類で、非常に小型で断面は薄い。側縁は左右非対称で、基部右端は欠損している。主要剥離面側は、あまり加工されていない。238～240は、Ⅱb類である。そのうち、238は左側縁の形状が歪で、左脚部が右脚部よりも外に延びる。239・240は、ともに形が整っている。断面形は239が紡錘形を成すのに対し、240は片面がやや平坦で蒲鋒状を成す。241～244は、Ⅱc類である。このうち、241は抉りの幅が大きく、脚端は細く尖る。242は、側縁調整が甘く、鋸歯状となっている。243は非常に小型で断面形が薄く、主要剥離面側は、あまり加工が行われていない。側縁は左右非対称である。244は厚みあり、側縁が左右非対称で左脚端がやや尖るのに対し、右脚端は角張る。245はⅡd類である。側縁は先端部から直線的に延び、脚部付近で外側に湾曲する。脚端は丸く仕上げられている。右脚部は欠損している。

246は、尖頭状石器である。頁岩製の幅広の剥片を用いて、主に主要剥離面から加工を行い、尖頭状に仕上げている。未製品の可能性も考えられる。

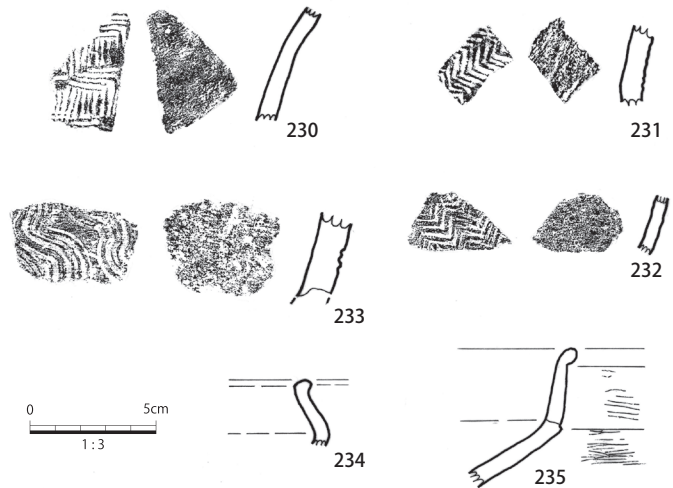
247～251は、スクレイパーである。このうち247～248は、サイドスクレイパーである。247は頁岩製の縦長剥片を素材にして右側縁に刃部を作出している。248はホルンフェルス製の不定形剥片を素材にして右側縁に刃部形成を行っている。249は流紋岩製の厚みのある縦長剥片を利用して、右側縁から下縁にかけて刃部形成を行っている。250は頁岩製のラウンドスクレイパーで、石核を転用したものである。251は日東系の黒曜石製で急角度の刃部を有する。左側面には分割面から小剥片を剥離しており、彫器に転用された可能性がある。なお、247・249・250については、旧石器時代の所産の可能性もある。

252～254は磨製石斧である。このうち252は小型で両刃の刃部が形成されている。頁岩製。253は礫面を有する剥片を素材にしている。刃部の研磨は入念に施されている。砂岩製である。254は、ホルンフェルス製の扁平な礫を用いて、側縁に抉り状の加工を施している。風化のため、不明瞭であるが、研磨は全体に及んでいたものと考えられる。また刃部が形成されていないことから、未製品と考えられる。

255・256はホルンフェルス製の打製石斧である。このうち255は厚みがあり、左側面には敲打調整が認められる。表中央の剥離面には、使用に伴う摩滅痕が認められる。256は片面に礫面を残し、主に剥離面側で調整が行われている。

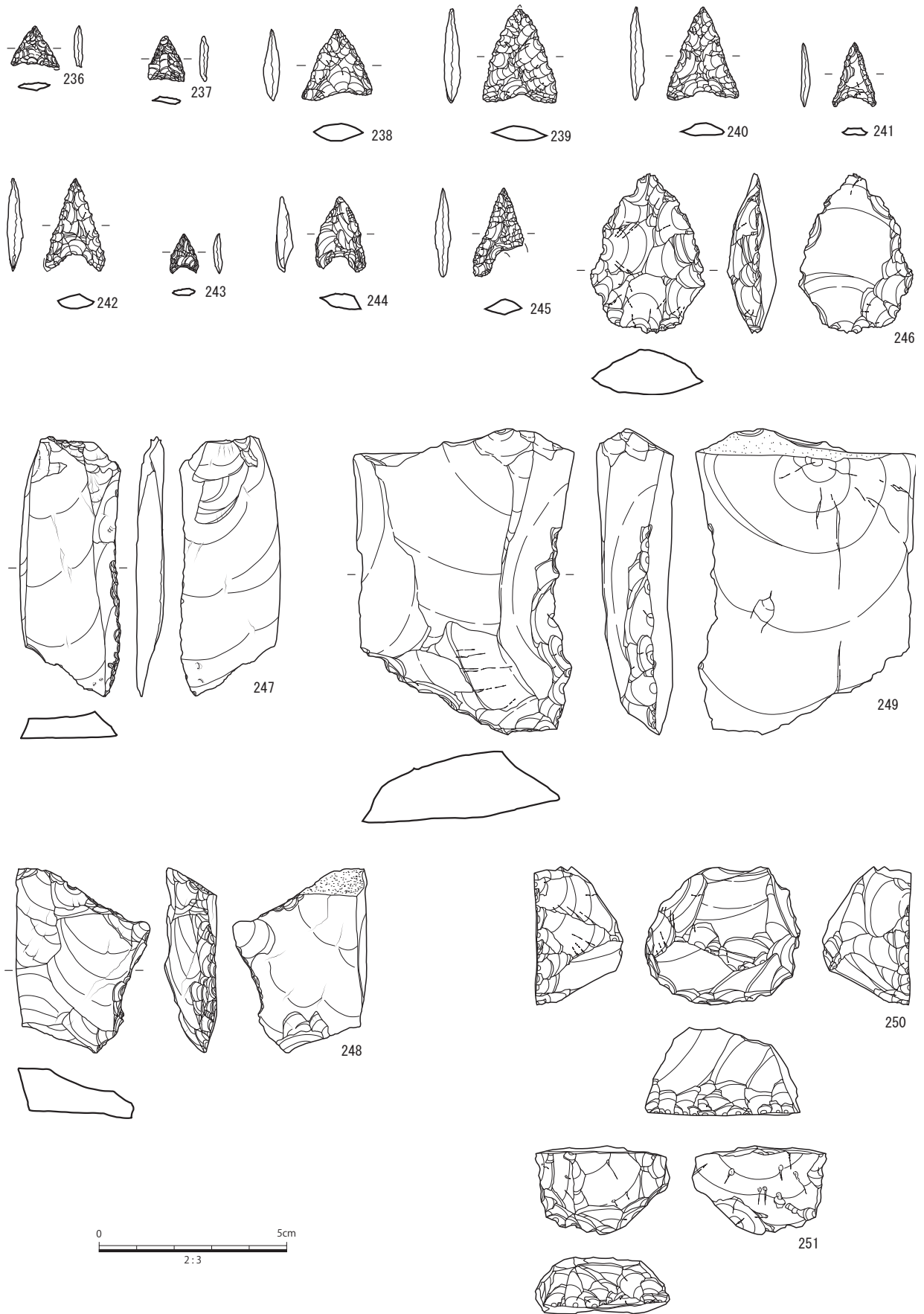
257は石錘である。砂岩製扁平礫の短軸に片面より打撃を加え、網掛け部を作出している。

258～260は、礫器である。このうち258は扁平な砂岩製の円礫、259は赤色頁岩製の垂角礫を利用し、

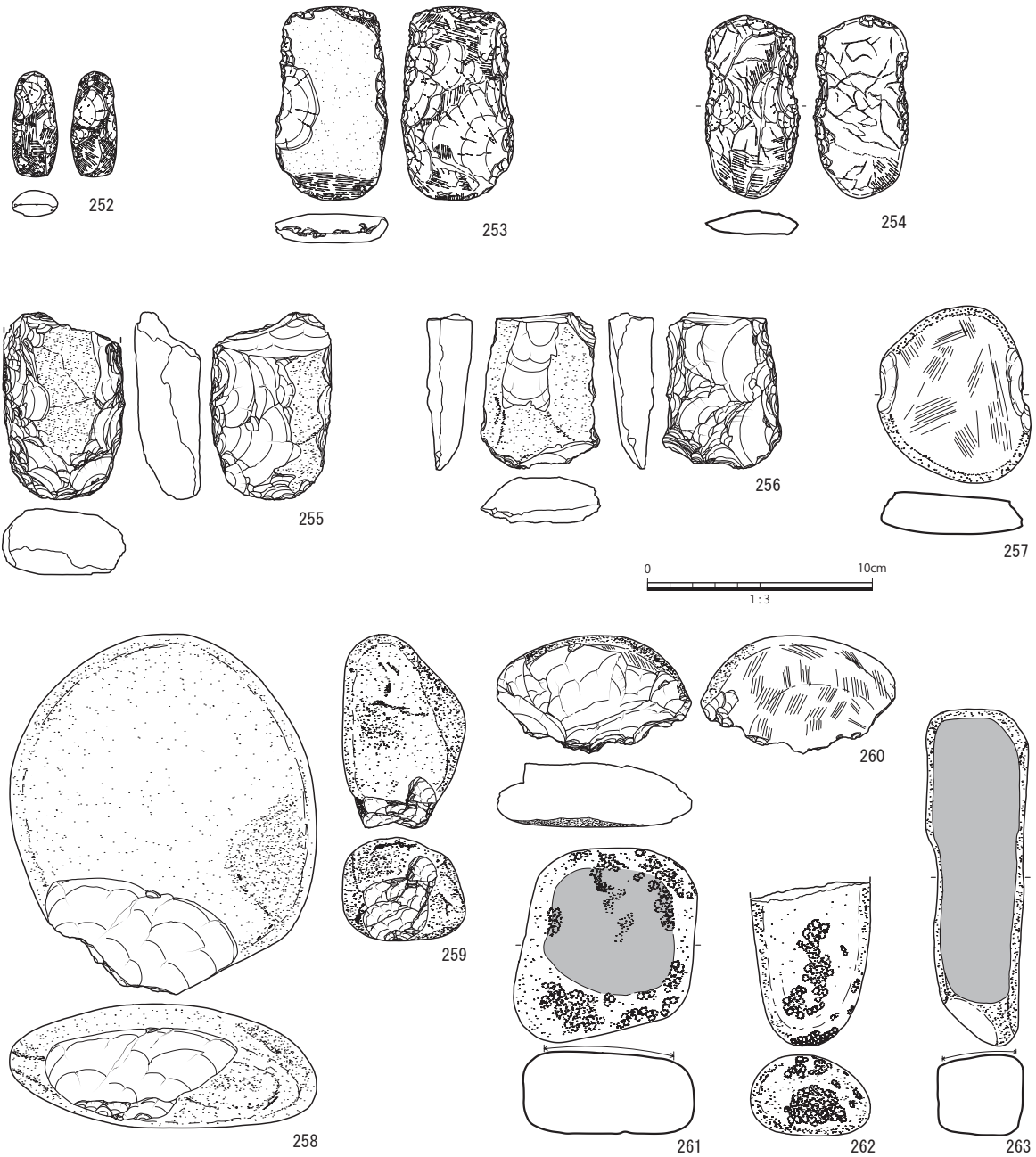


第57図 縄文時代早期出土遺物 2





第58図 縄文時代早期出土石器 1



第59図 縄文時代早期出土石器 2

一端に片面より打撃を加え、刃部を作出している。**260**は頁岩製の円礫を分割し、一端に片面より打撃を加え、刃部を作出している。他と比べ刃部形成は入念である。また表裏礫面の一部に擦痕が認められる。

**261**・**262**は砂岩製の磨・敲石である。そのうち**261**は、亜角礫を用いたもので、表裏両面及び右側面の3面を磨面として使用されているほか、さらに表裏両面や上面の一部に敲打痕が認められる。また**262**は全体の約1/2が欠損しているが、おそらく棒状の亜円礫を用いていると考えられる。裏面は、磨面として使用されているほか、表裏面の一部と下面に敲打痕が認められる。

**263**は砂岩製の砥石である。棒状の厚みのある亜角礫を用いたもので、表面を砥面として使用されている。なお、石器は熱を受けて赤化しており、特に右側面の赤化が著しい。(後藤)

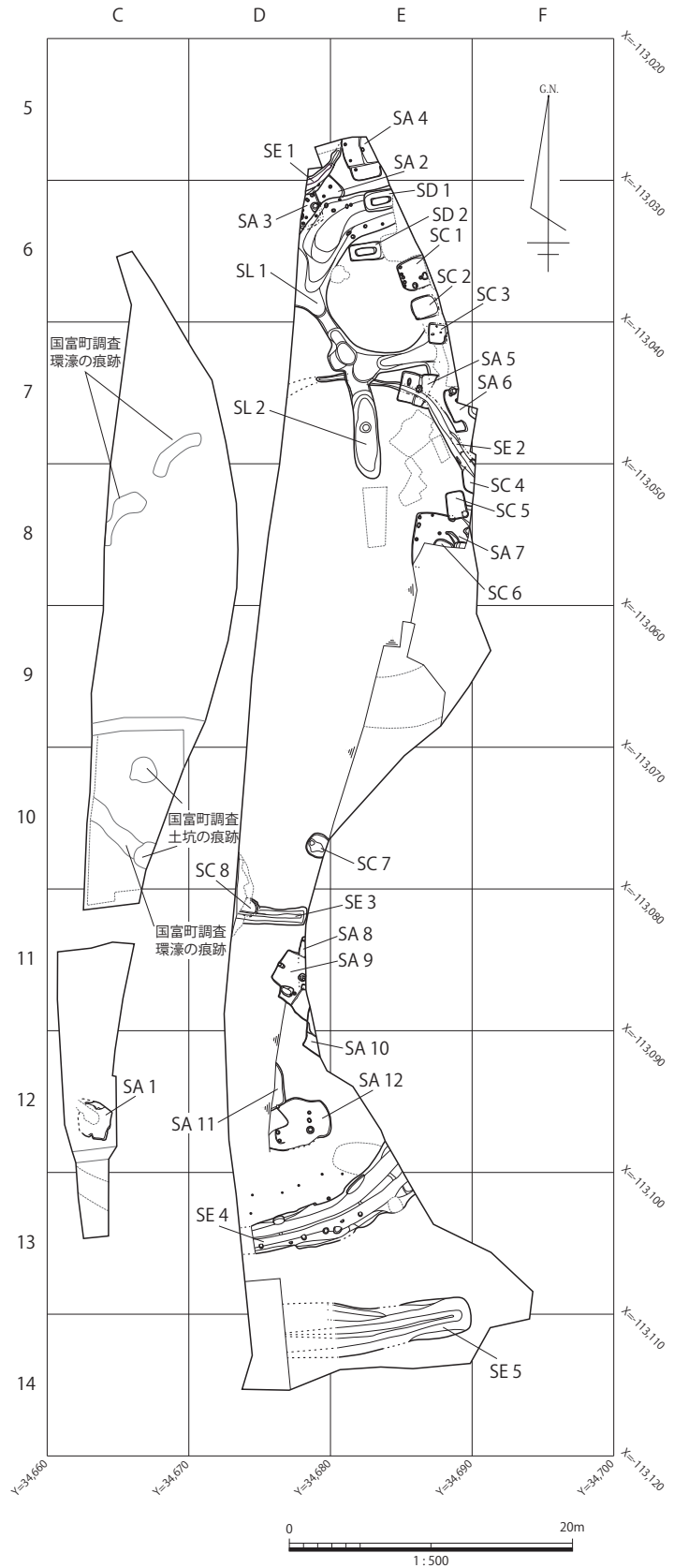


#### 4 弥生時代前期末～古墳時代前期前半の遺構と遺物

##### (1) 遺構の分布 (第60図)

造成工事などで基本層が削平されている場合もあるが、本来ならば遺物包含層である第Ⅲ層の除去後に検出することができる、弥生時代前期末から古墳時代前期前半にかけての生活面である。J1a・b地点は大部分が国富町調査地区と重複することから、新たな遺構の検出はJ1c地点が中心となった。

J1c地点の旧地形は、調査区中央北より付近を頂点に南北方向に徐々に傾斜しており、東側は台地先端に位置しすぐに崖面となる。時期幅はあるが同一面で検出できた遺構としては、集落を囲う3重の環濠、竪穴建物、土壙墓、貯蔵穴、周溝状遺構などがあり、少なくとも3時期の遺構が重複していると考えられる。3重の環濠については、内環濠を構成する北側濠SE2を北半で、南側濠SE3を中央南よりで検出し、J1c地点で最低標高となる最南端で中環濠SE4および外環濠SE5を検出した。内環濠の内側には、北よりで竪穴建物1軒、南よりで貯蔵穴1基などを検出したが遺構の数は少ない。内環濠より外側のうち北側については遺構の密度が高く、切り合い関係のある竪穴建物5軒分（うち2軒は環濠を切る）、貯蔵穴3基、土壙墓2基などがあり、周溝状遺構についても調査地点の北側で2基検出した。さらに、内環濠と中環濠の間では切り合い関係のある竪穴建物5軒分を検出したが、中環濠と外環濠の間は間



第60図 弥生時代前期末～古墳時代前期前半の遺構分布図

隔も狭く検出できた遺構はなかった。

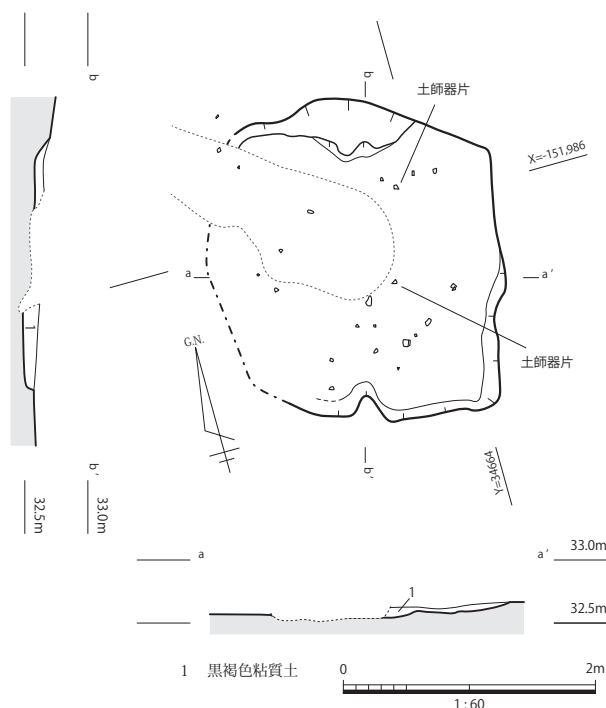
J1a・b地点では、国富町調査時の検出遺構が攪乱として認められ、J1c地点で検出した内環濠を構成する弧を描く溝を確認した。なお、J1b地点では国富町調査で検出していない竪穴建物1軒を今回新たに確認した。

## (2) 竪穴建物 (SA1～12)

**SA1 (第61図)** 12C区で検出した方形を基調とする竪穴建物である。工業団地の造成工事によって建物上位部の大半を失っているが、第V層中でかろうじて平面形状が確認できた。平面規模については、建物西辺が不明瞭ではあったが検出面で南北最大2.5m、東西推定2.4mを測る。硬質のローム層である第VI層を床面とし

て利用しており、黒褐色粘質土の単一の埋土が最大で約0.1mが残っていた。なお、建物南壁に間仕切りの痕跡と考えられる内部への突出部が認められ、北側には棚状の段差が設けられている。

遺物は細片のため図化できないが、土師器の細片が出土したことから、古墳時代の建物跡と判断した。他に縄文土器片、弥生土器片も出土しているが周辺域からの流入である。

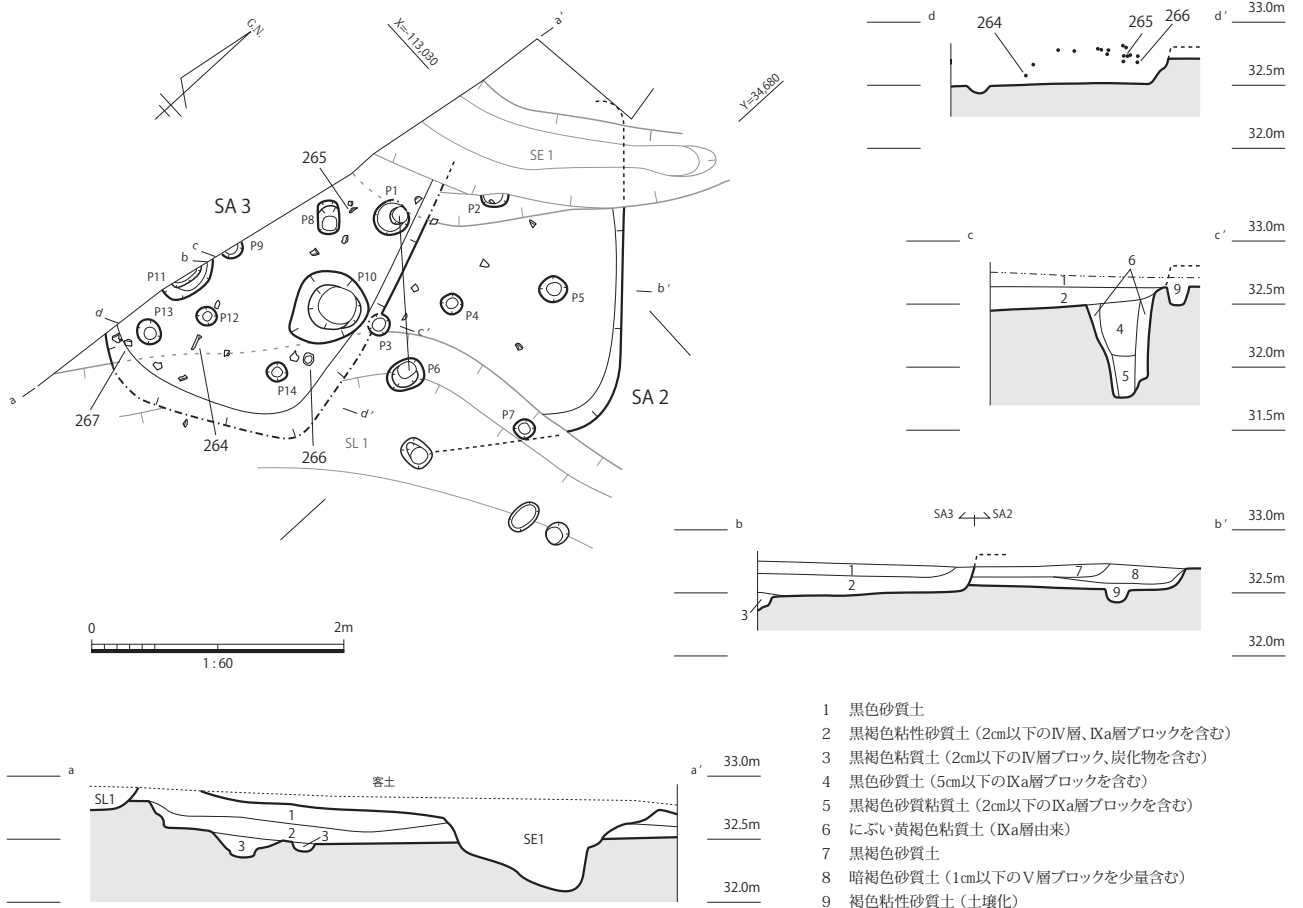


第61図 SA1 平面・断面図

**SA2 (第62図)** 6D・6E区で第III層の除去後に検出した竪穴建物である。西側がSA3、北側がSE1、南側がSL1によって大きく攪乱を受けているため正確な平面規模を知ることはできないが、床面で検出した7基の小穴(P1～7)の大方が10cm程度の深さであるのに対して比較的深さのあるP1(0.2m以上)とP6(約0.5m)の2本を主柱穴と考えた場合、南北2.5m、東西3.5m程度の長方形様の建物が復元できる。検出面から床面までの深さは0.2mを測る。3層に細分できる埋土の最下層は機能時における土壌化の進んだ粘質土であり、その上位2層は自然堆積と考えられる砂質土であった。

出土遺物は少なく、復元・図化できるものはなかったが、大半が最終的な埋没過程の中で流入した弥生時代終末期～古墳時代初頭頃に比定される細片の土器であった。ただし、本遺構がSA3より先行することから、出土遺物は建物の帰属時期を示すものではない。

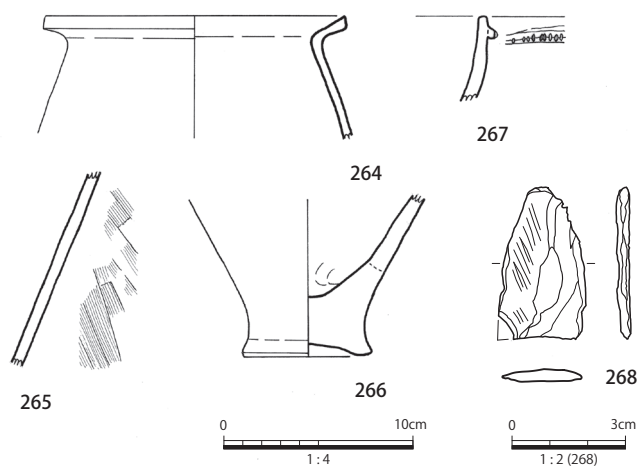
**SA3 (第62・63図)** 6D区で第III層の除去後に検出した南壁に間仕切りを設けた方形を基調とする竪穴建物である。北側がSE1、南側がSL1によって攪乱を受けており、西側は調査区外に至る。検出面で東西2.0m以上、南北2.5m以上の平面規模を有し、調査区の西断面で確認できた南壁肩から床面までの深さは最大で0.35mを測る。床面の南東部で検出した主柱穴の一つであるP10は径約0.6m、深さ0.8mの規模をもち、埋土の堆積状況から0.15m程度の柱が使用されていたと考えられる。また、径約0.5mのP11は



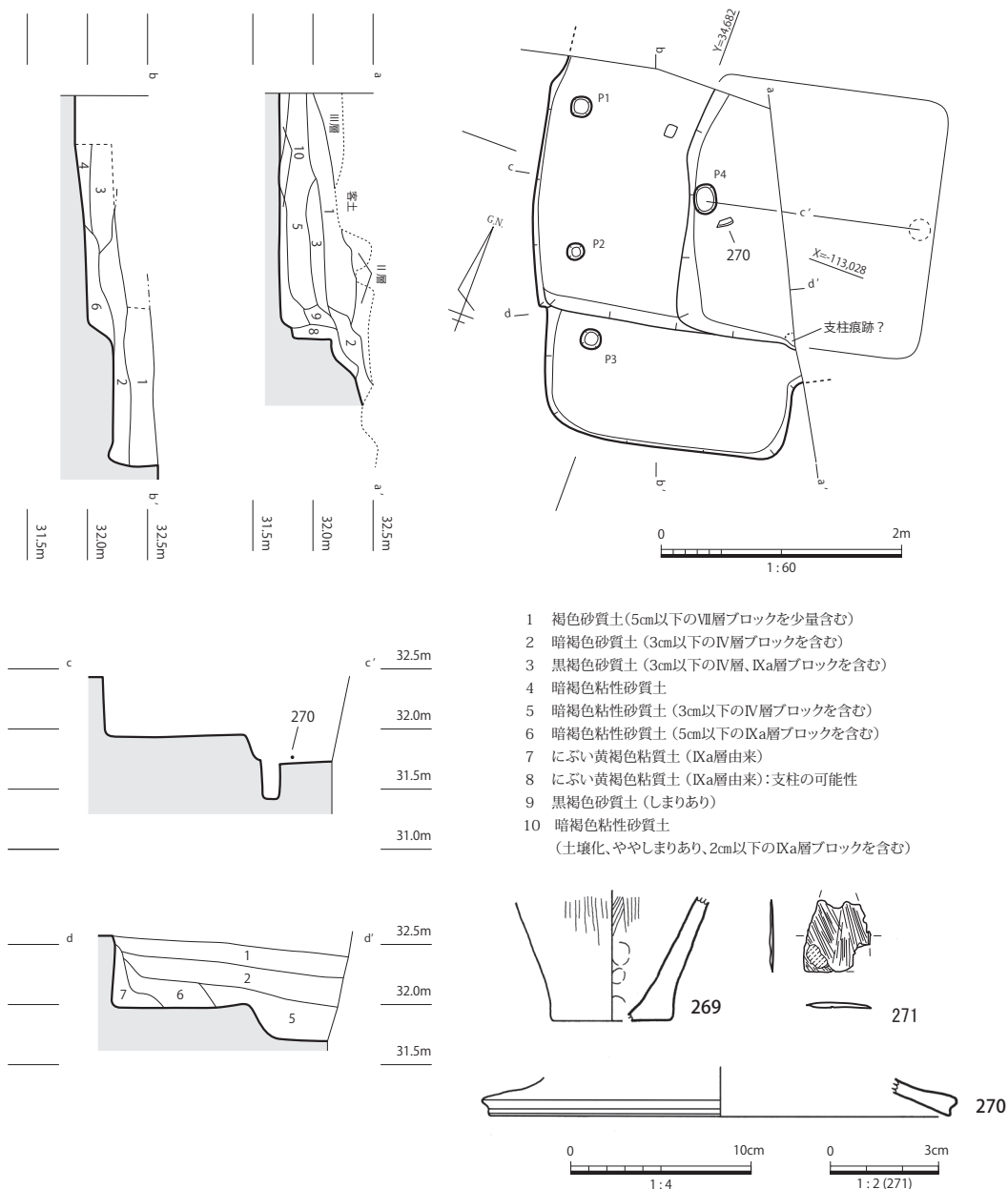
第62図 SA2・SA3 平面・断面図

支柱穴の可能性もあるが、埋土中に炭化物片が散見されることもあり別用途も想定される。埋土は2層に細分できる砂質土を主体とした自然堆積であり、貼床の痕跡はなかった。

遺物は建物床付近から甕264が、やや高い位置で甕265～267が、埋土中から磨製石鏃の未成品268が出土した。264は口縁がやや短く「く」の字に屈曲する甕で、体部はやや張りをもつ。265は甕の胴部、266はあげ底をなす底部付近である。267は下城式系の甕でSA2から混入したと思われる。内湾する口縁形状で、口縁部の高い位置に1条の刻目突帯をもつ。



第63図 SA3 出土遺物



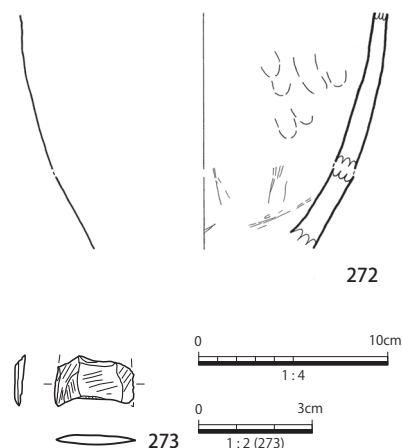
第64図 SA4 平面・断面図および出土遺物

SA4 (第64図) 5E 区で第III層の除去後に検出した、南壁に間仕切りを設ける方形を基調とした竪穴建物である。主たる床面の他に西側と南側で段差のある棚状の平坦面を有する。南壁肩からのそれぞれの深度は、上位平坦面から最大で約0.4m、約0.6m、約0.9m(貼床0.1mを含む)を測る。東側と北側は調査区外に至るため平面規模は知り得ないが、検出面で東西2.4m以上、南北3.1m以上を測る。最下位の床面西端で検出した径0.4~0.45m、深さ0.35mのP4を支柱穴の1本とし、断面観察で確認できた支柱と思われる南壁の抉れを中心に据えると、最下面は床面積約4㎡の正方形が復元できる。その他、支柱と考えられる深さ0.1m程度の小穴を平坦面のうち中位で2か所、上位で1か所検出した。

貼床については0.1m程度の黒褐色系の粘性砂質土(8・9層)を利用しており、主たる床面にのみ確認ができる。貼床より上位の埋土は、北東側に傾斜する地形が影響する緩やかな窪みが確認できること

から自然堆積による埋没と考えられるが、西側の壁際に堆積する7層（あるいは6層もか）については、地山土（第Ⅶ層）由来であることを考慮すると周堤の廃棄土である可能性も示唆しておきたい。

遺物は主たる床面の床付近で器台の脚裾部**270**、埋土中からは平底の甕底部**269**、平基式の磨製石鏃**271**などが出土したが、出土量は全体的に少なく細片が多い。



第65図 SA5 出土遺物

**SA5**（第65・66図） 7E区で検出した竪穴建物である。町道建設に伴って建物上位部の大半が失われているが、第Ⅸa層中で建物の一部を検出した。東西方向に大きく2段の平坦面が確認できるが、後世の攪乱や東側が調査区外に至ることもあり本来の平面形状は不明である。検出面で南北2.5m以上の大きさであり、SA6の北壁肩を壊すP3を支柱穴の1本と考えるならば東西4.0m以上で、西壁肩からの深度は約0.4mである。支柱穴の1本とした下位の床面で検出した径約0.5m、深さ0.6m程度のP3では、断面の形状から20cm程度の柱が使用されていたと考えられる。その他、支柱と考えられる深さ0.4m程度のP2の埋土上位で破碎した弥生土器の甕**272**が出土した。

SA5での出土遺物はかなり少なく、図化し得たものはP2出土の甕**272**の他に埋土中から出土した凹基式の磨製石鏃**273**がある。

SA5での出土遺物はかなり少なく、図化し得たものはP2出土の甕**272**の他に埋土中から出土した凹基式の磨製石鏃**273**がある。

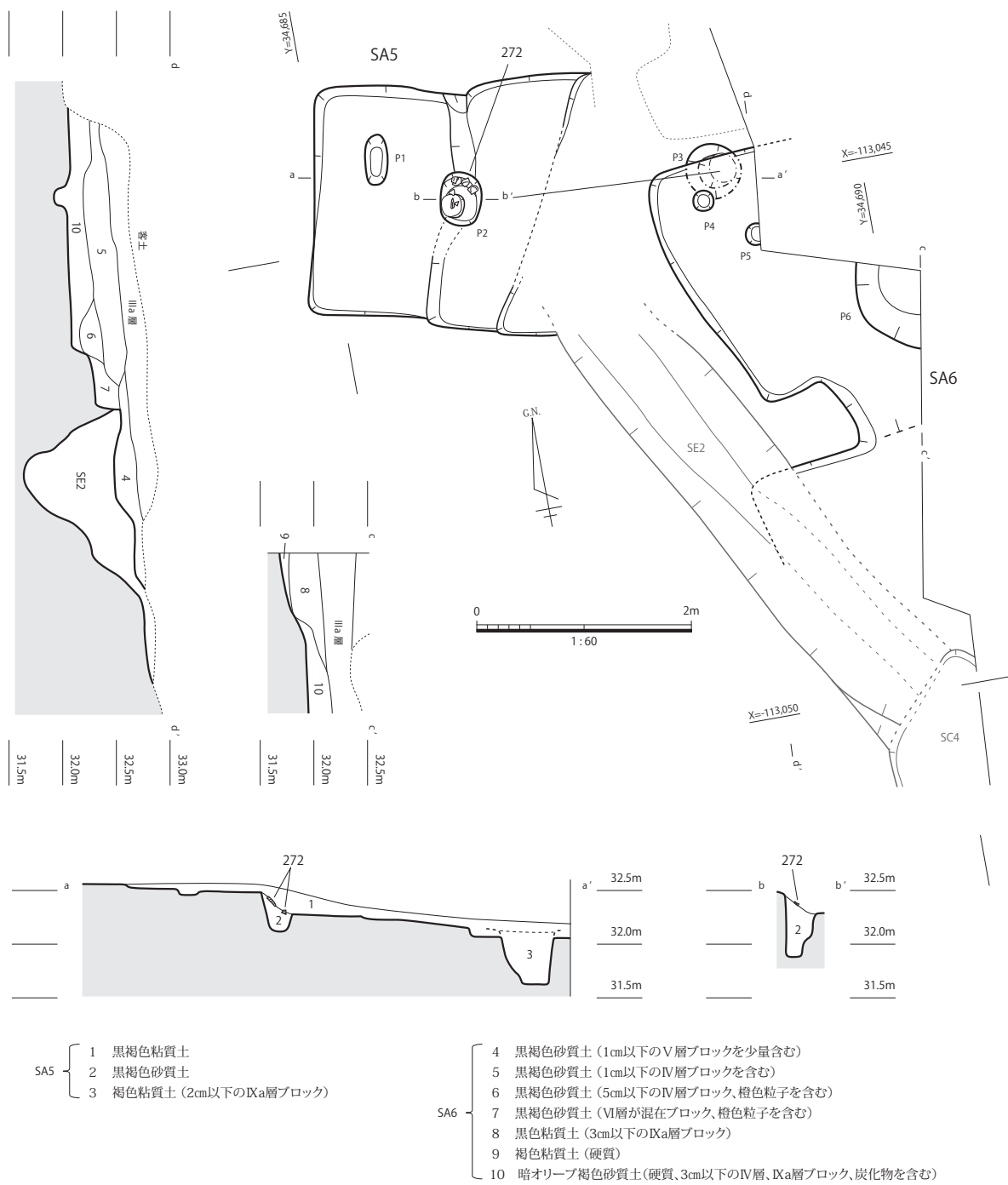
**SA6**（第66・67図） 7E区で第Ⅲ層の除去後に検出した、西壁に間仕切りを設ける方形を基調とした竪穴建物である。西側はSA5、南側はSC4によって攪乱を受けており、一部調査区を拡張したものの全体的に東側は調査区外に至る。検出時にSE2との切り合いが明瞭でなく、十分に区別して調査ができなかったことから平面形状は不明な点が多い。しかしながら、断面観察より間仕切り部分を境に北側が一段低いことが確認できるため、本来は南北方向に大きく2段の平坦面を設けていたと思われる。検出面で東西2.0m以上、南北5.0m程度の平面規模を有する。

北側に設けられた主たる床面には、地山土のブロックを含んだ硬質の砂質土で0.2m程度の厚みがある貼床がなされている。本来の壁肩は失われているが、断面で確認できる深度は、南側の平坦面上までで約0.3m、北側の貼床面上までで約0.5mを測る。建物屋内の施設に関しては、主たる床面の中央付近で中央土坑と考えられるP10を検出した。底面に黒色系の硬い粘質土を貼る半径約0.5m、深さ0.4mの規模で、埋土中に炭化物等は確認できなかった。

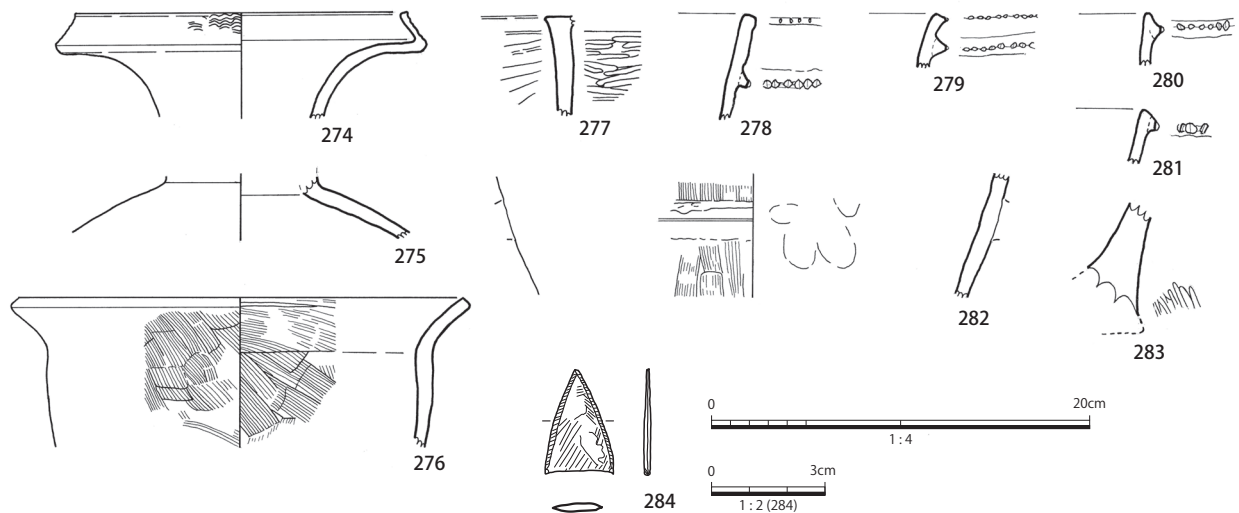
貼床以上の埋土は黒褐色系統の砂質土が主体であり、建物の周辺の基本層では確認できない第Ⅳ層（アカホヤ）ブロックが小さいながらも埋土中に含まれることから、人為的なものも含めた建物の廃絶に関連した堆積であったと考えられる。

遺物は埋土中より壺、甕、磨製石鏃などが出土した。**274**は櫛描波状文を有する複合口縁壺で、**275**は壺の肩部にあたる。**276**は口縁部が緩やかに屈曲し、面をなす端部をもつ甕である。**277**は欠損するが小さな三角形なす口縁端部をもつ甕で、内側を小さくつまみ出す。**278**～**281**は下城式系の甕で、**280**・





第66図 SA5・SA6 平面・断面図



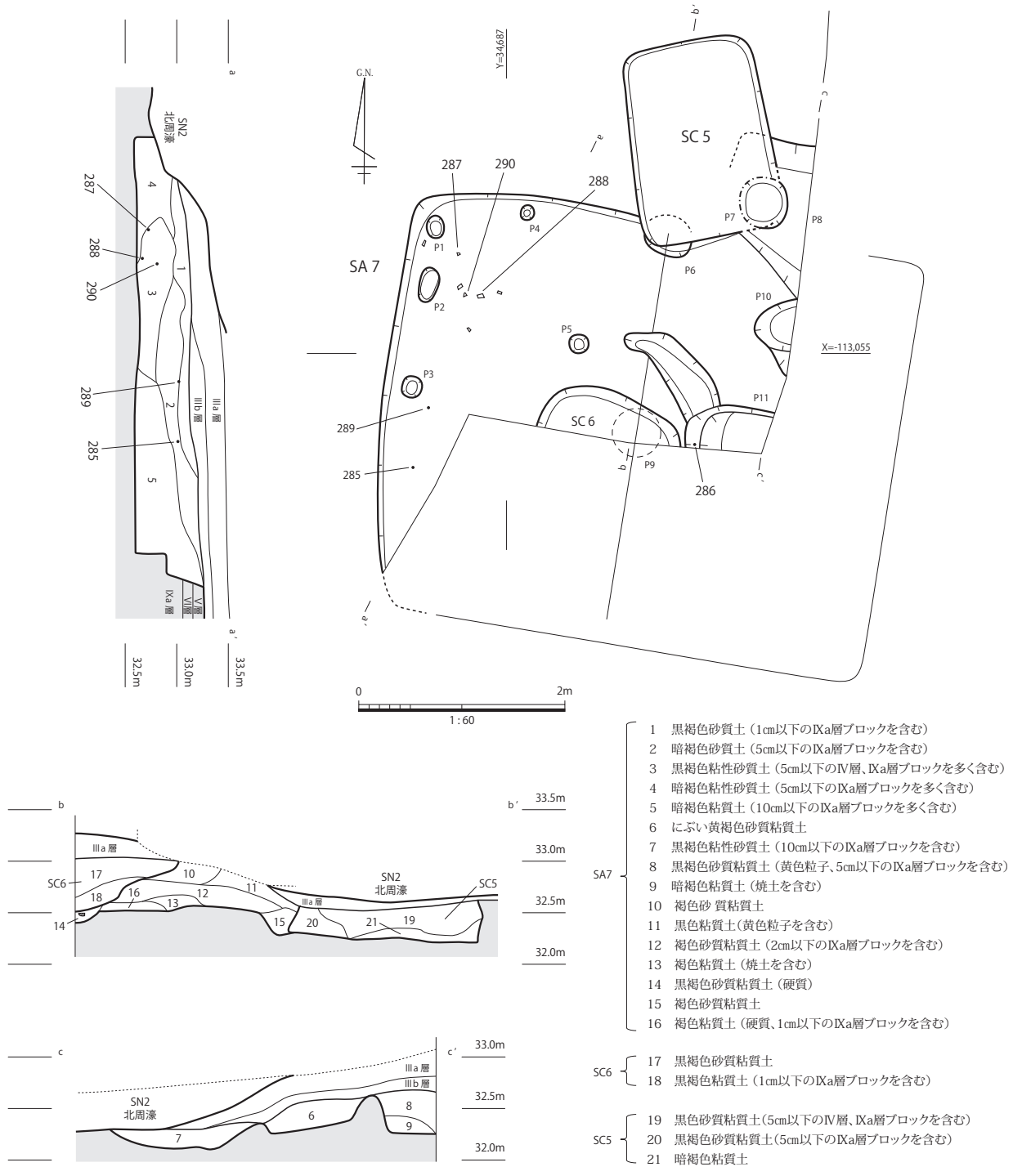
第67図 SA6 出土遺物

281は口縁端部に刻目突帯をもつ。282は欠落しているが台形状の突帯を貼り付ける甕である。283は外方に張り出す端部をもつ甕の底部。284は基部がやや凹む二等辺三角形をなす磨製石鏃である。277～283については弥生時代前期末～中期に比定される土器群で、先行するSE2の埋土から巻きあげられたものと考えられる。

SA7（第68・69図） 8E区で第Ⅲ層の除去後に検出した方形を基調とする竪穴建物である。北側はSC5、建物中央はSC6によって攪乱を受けており、一部調査区を拡張したものの全体的に南側と東側は調査区外に至る。また、北側についてはSN2の北周濠によって上位部が失われていることから、本来の北壁肩は検出面よりやや広がる。検出面で東西4.0m以上、南北4.0m程度を測り、平面形については径0.4m程度、深さ0.35mのP6を支柱穴の1本として主軸を西壁に平行させると床面積約20㎡の長方形様に復元できる。断面で確認できる南壁肩から床面までの深度は約0.7mを測る。また、硬質の粘質土を利用した0.1mに満たない貼床が、建物中央付近にだけ確認ができた。

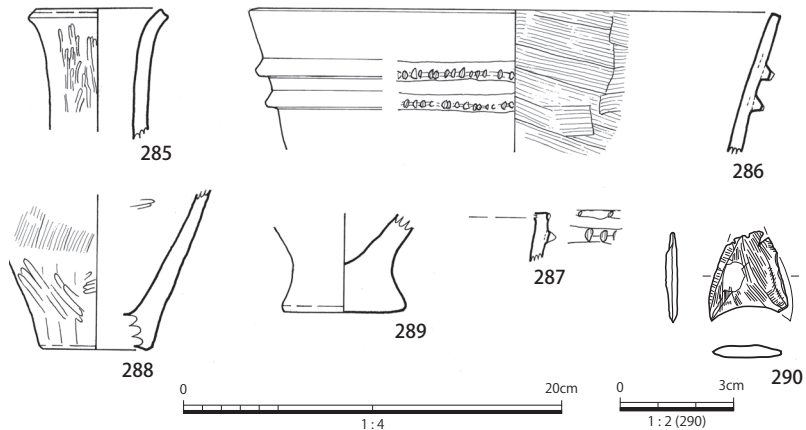
建物屋内には中央東よりに長さ0.8m以上、深さ0.4mの土坑P11が検出でき、埋土の下半には多量の焼土が確認できた。また、P11には北西方向から取りつく溝があり、その埋土にも多量の焼土が認められる。その他、支柱穴の1本としたP6以外に、支柱と考えられる深さ0.1m程度の小穴が壁面に沿って設けられている。なお、建物北側の一部が掘り込みながら張り出しており、当初別遺構の可能性も考えたが、掘り込みがより西側に続かない状況や断面観察から建物の付属施設P8とした。建物下半の埋土は、こぶし大程度の暗褐色系の粘性砂質土が壁際に三角形に大きく堆積しており（4・5層）、その間隙に同様の地山ブロックを多く含む黒褐色系の粘性砂質土（3層）が堆積している。堆積の状況をみても建物の廃絶に関連したものと思われ、建物の覆土が屋根の崩落によって落ち込んだと考えておきたい。これより上位の埋土については、北東側に傾斜する地形が影響した自然堆積による埋没と考えられる。また、周辺の地形については中心付近から北側に傾斜する地形の変化点にあたり、南北の壁肩の構築面は0.4～0.5mの比高差がある。

遺物は建物の廃絶土中から甕286～288、凹基式の磨製石鏃290が、その他の遺物については埋土のう



第68図 SA7・SC5・SC6 平面・断面図

ち上位の自然堆積層から出土した。285は長頸壺である。286・287は下城式系の甕で、287の内面には小さな突出がめぐる。288は甕の平底の底部付近、289は中実の脚台状底部で、底面は平滑に仕上げる。



SA8 (第70・71図) 11D区

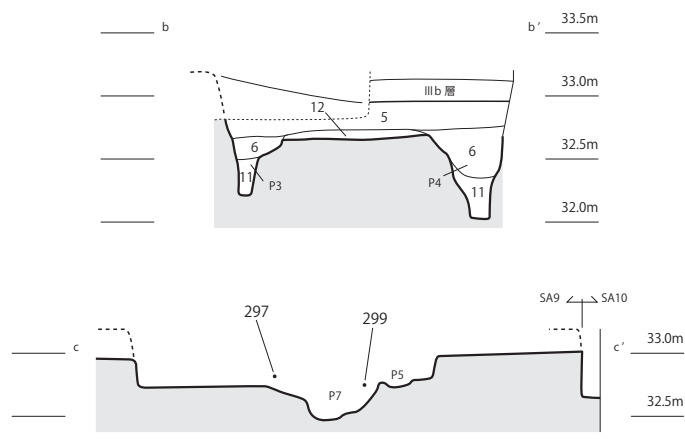
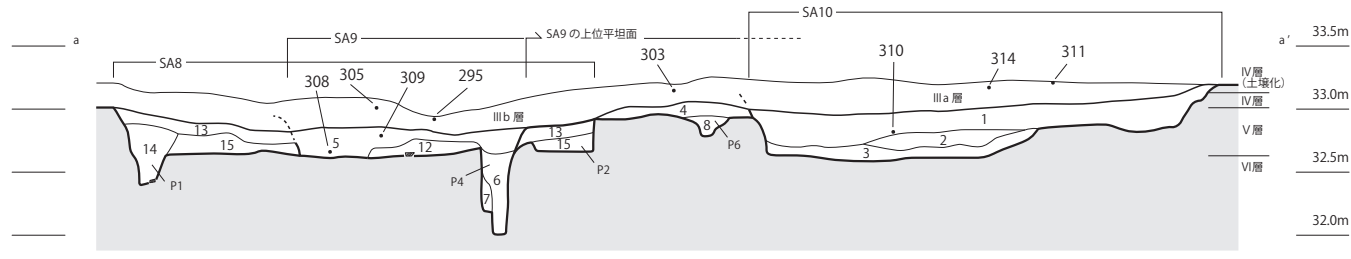
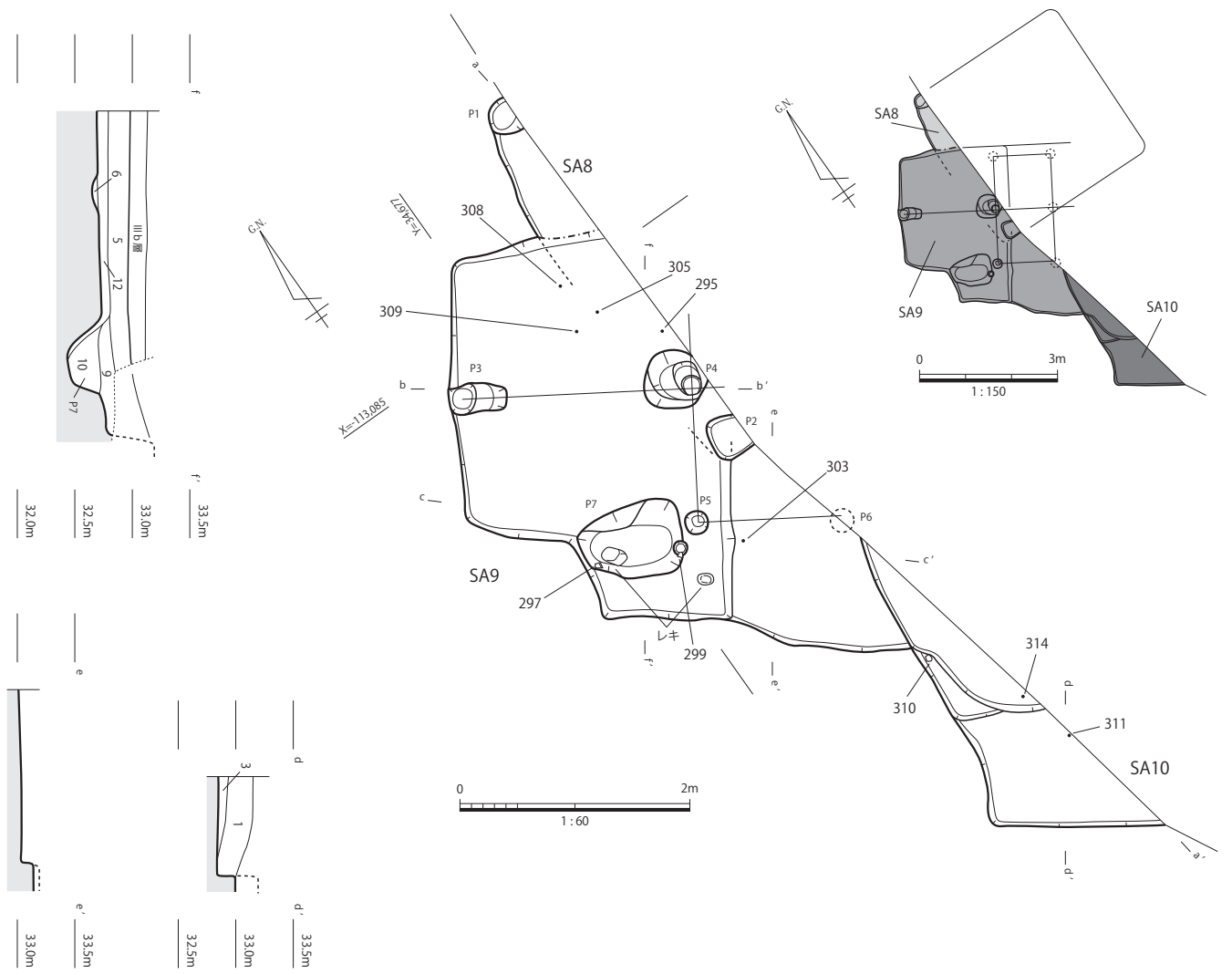
第69図 SA7 出土遺物

で第Ⅲb層の除去後に検出

した方形を基調とする竪穴建物である。南半部がSA9によって攪乱を受けており、東側は調査区外に至るため、平面的には北西隅の一部を検出したのみとなった。しかしながら、SA9の影響を受けなかった南西隅角も確認できたことから、検出面で南北3.7m程度の規模であり、平面形が正方形であった場合には、約14㎡の床面積が復元できる。床面には第Ⅳ層（アカホヤ）のブロックを含んだ硬質の黒色粘質土で最大0.15m程度の貼床がなされており、北壁肩からの深度は貼床面上までで0.2~0.3mを測る。北西隅には支柱穴の1本と考えられる径約0.4m、深さ0.5mのP1があり、南西隅角にも対応するP2が認められるが、検出できた範囲内での深度は0.15m程度と浅い。貼床より上位の埋土については、黒色の粘質土による自然堆積の層が確認できた。

遺物は埋土中から甕291~294などが出土した。291・292は口縁部に逆「L」字をなすように端部を貼り付ける甕で、291は台形状の口縁端部に凹線がめぐる。293はやや上げ底をなす中実の脚台状、294は平底で直線的に伸びる体部をもつ甕の底部である。

SA9 (第70・71図) 11D区で第Ⅲb層の除去後に検出した方形を基調とする竪穴建物である。南東側はSA10によって攪乱を受けており、北東側は調査区外に至る。また、町道建設に伴って建物西側の上部が失われていることから、本来の西壁肩は検出面よりやや広がる。西側の主たる床面と東側に一段高い平坦面を有し、南側の一部が張り出しているが、主たる床面については面積約6.3㎡の正方形を基本としている。なお、上段の平坦面の南壁は張り出しから延長する。全体としての平面規模は検出面で東西4.0m以上、南北3.5m程度である。貼床については、主たる床面にのみ認められ、0.1m程度の硬質の粘質土を利用していた。本来の壁肩は失われているが、断面で確認できる建物の深度は、上段の平坦面上までが0.25m程度、主たる床面の貼床面上までが0.45m程度である。建物屋内では柱穴と土坑を検出し、柱穴については正方形を基本とする主たる床面を南北に分ける中心線上の2か所と南壁の張り出し部近くで1か所、上位平坦面で1か所を確認した。このうち支柱穴のひとつである東壁際のP4は直径約0.5m、深さ約0.7mの規模をもち、断面形状から0.15m程度の柱が使用されていたと推定できる。また、支柱穴と考えられるP3、P5は支柱穴P4を支点にしてほぼ直角する位置にあり、P3が0.5m程度の深さであるのに対してP5はやや窪みをもつ程度であった。上位平坦面上のP6は断面で確認したものであり、P5とP6を結んだ際、P3-P4のラインに平行する。土坑は南壁の張り出し部近くであり、長軸約0.8m、



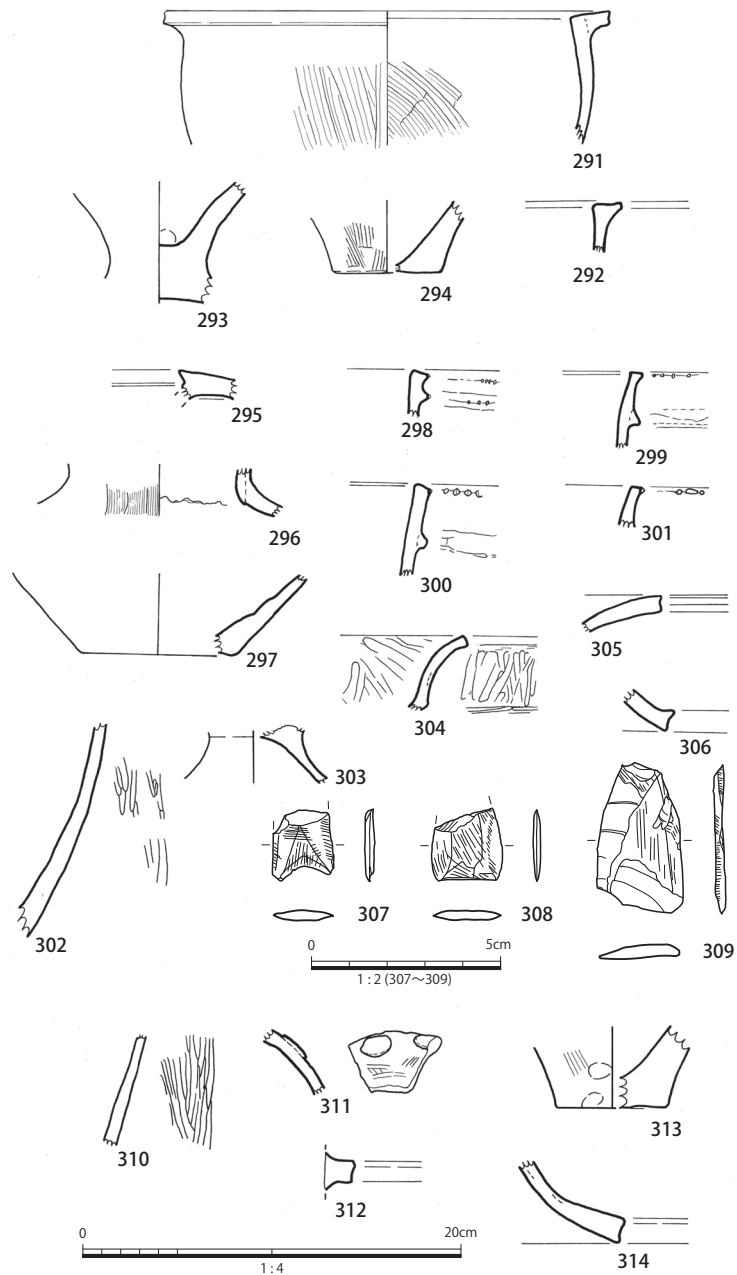
- SA8 {
  - 1 黒色粘質土 (3cm以下のIV層、V層ブロックを含む)
  - 2 黒色粘質土 (硬質、3cm以下のIV層ブロックを含む)
  - 3 黒色粘質土 (硬質、VI層由来)
  
- SA9 {
  - 4 黒色粘質土 (橙色粒子を含む)
  - 5 黒色粘質土 (3cm以下のIV層ブロックを含む)
  - 6 黒色砂質粘質土 (細礫を多く含む)
  - 7 暗褐色粘質土 (細礫を多く含む)
  - 8 暗褐色粘質土 (細礫を含む)
  - 9 黒褐色粘質土 (硬質、橙色粒子を含む)
  - 10 黒色粘質土 (2cm以下のIV層、V層ブロック、橙色粒子、炭化物を含む)
  - 11 黒色粘質土 (橙色粒子を含む)
  - 12 黒褐色粘質土 (硬質、1cm以下のIV層ブロックを含む)
  
- SA10 {
  - 13 黒色粘質土 (2cm以下のIV層ブロックを含む)
  - 14 黒褐色粘質土 (IV層と混合)
  - 15 黒色粘質土 (硬質、2cm以下のIV層ブロック、黄色粒子を含む)

第70図 SA8・SA9・SA10 平面・断面図



短軸約0.6m、深さ0.3mの楕円形様で、第Ⅳ層、第Ⅴ層ブロックを含む黒色系粘質土の単一層であった。また、埋土中には炭化物も確認できる。貼床以上の埋土については、第Ⅳ層ブロックを含む黒色の粘質土による自然堆積の層であった。

遺物は建物床付近から壺**297**、甕**299**、磨製石鏃**308**が、その他、高坏や器台などは埋土中から出土した。**295**は鋤先状口縁をもつ壺、**296**は壺の頸部と体部の境界付近で、内面に粘土痕が認められる。**297**は壺の底部で、平底になるものか。**298**～**301**は下城式系の甕で、**300**以外の口縁端部の刻目は突帯を貼り付ける。**302**は甕の体部で、**303**は中空の脚台をもつ甕あるいは鉢の底部である。中津野式のものか。**304**は高坏の口縁部で、**305**は器台の受け部、**306**は器台の裾部と思われる。**307**～**309**は磨製石鏃であるが、**309**は未成品である。**307**は凹基式、**308**は平基式である。壺**295**や下城式系の甕**298**～**301**などの弥生時代中期の範疇の土器類は、先行するSA8からの混入と考えられる。



第71図 SA8・SA9・SA10 出土遺物

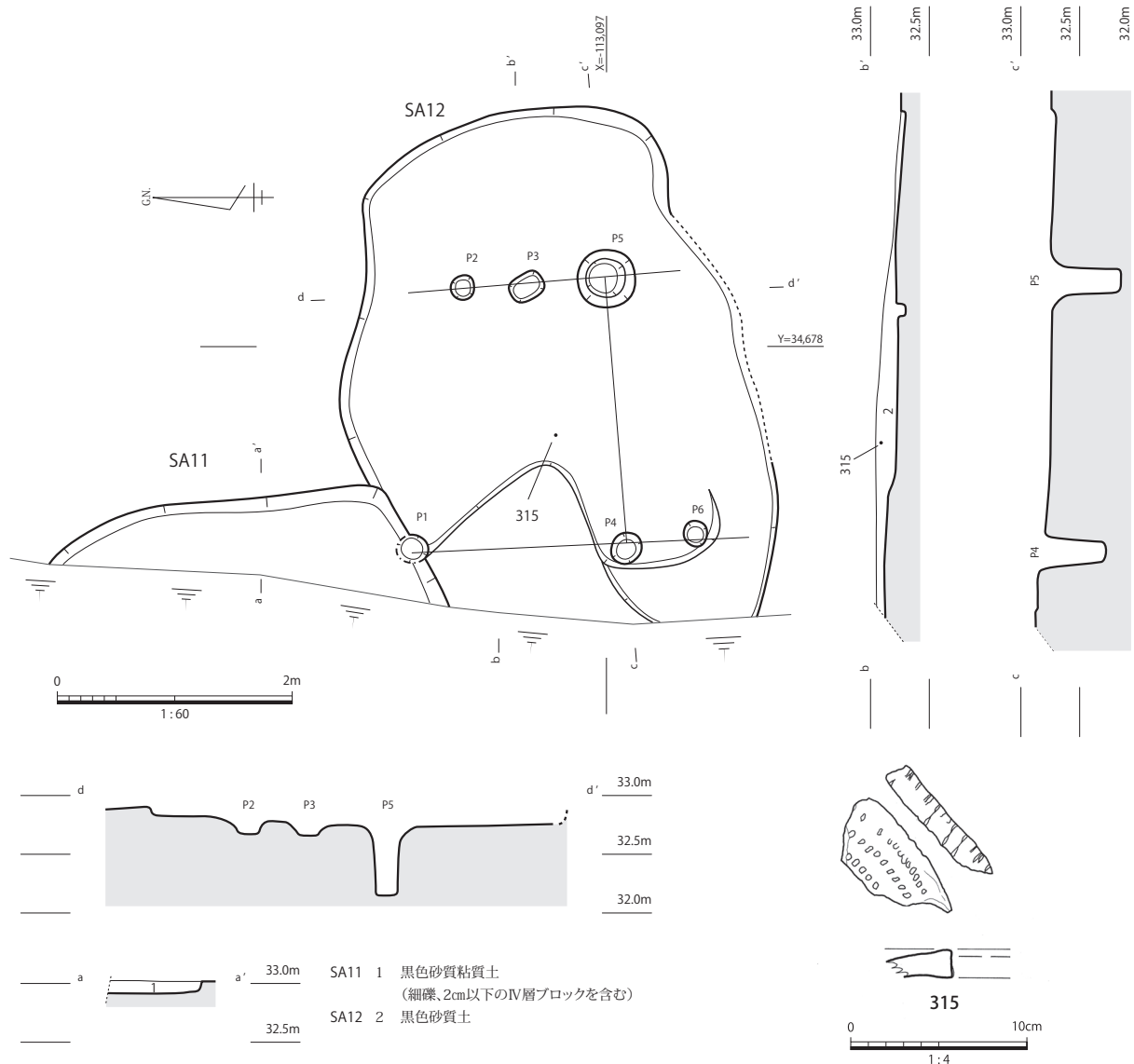
SA8 : 291～294, SA9 : 295～309

SA10 : 310～314

SA10 (第70・71図) 11D・12D 区

で第Ⅲa層の除去後に検出した竪穴建物である。建物の大部分が調査区外に至るため、平面的には南西隅の一部を検出したのみである。狭い範囲ではあったが、北側と南側に段差のある平坦面が検出できた。どちらの床面にも第Ⅵ層由来の硬質の黒色粘質土で最大0.15m程度の貼床がなされており、南壁肩からのそれぞれの深度は貼床面上までで約0.3m、約0.5mを測る。貼床より上位の埋土については、第Ⅳ層、第Ⅴ層ブロックを含む黒色の粘質土の単一層が確認できたが、ブロックを含む厚みのある均一な層であったことから建物の廃絶に関連した堆積であったと考えられる。

遺物は建物床付近から壺**310**が、その他は埋土中から出土した。**310**は直口壺の頸部で、**311**は壺の肩部にあたり、畿内Ⅳ様式によく認められる円形浮文を配置する。**312**は甕の体部に張り付く台形状の突帯、



第72図 SA11・SA12 平面・断面図および SA12 出土遺物

313は平底になる甕の底部である。314は器台の裾部である。これら出土遺物のうち直口壺310のみが、SA10に直接帰属する遺物と考えられる。

**SA11** (第72図) 12D区で検出した竪穴建物である。町道建設に伴って上位部も含め大部分が失われているが、第V層中で建物の南東隅が検出できた。0.1m程度が残る埋土については、第IV層ブロックを含む黒色の粘質土が確認できる。

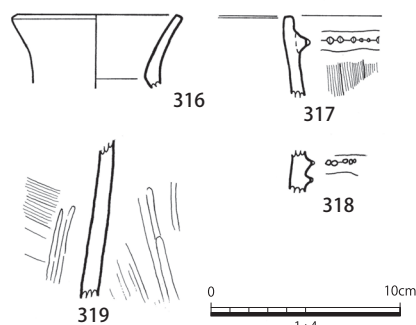
建物周辺の第V層中には縄文時代早期の散礫が無数に存在することから、これをそのまま床面としては利用しにくいと考えられる。このため、他の住居で見られる貼床のように硬質ではなかったが、埋土の黒色粘質土も貼床であったと考えておきたい。なお、SA11にともなう遺物は出土していない。

**SA12**（第72図） 12D区で検出した竪穴建物である。SA11による攪乱や町道建設に伴って西側と上位部が失われているが、第V層中で建物の最深部が検出できた。検出面での規模は南北3.5m程度、東西4.5m以上を測り、残存する深さは最大0.2mであった。支柱穴は床面の南半で検出した深さ約0.45mのP4と深さ0.6mのP5の2本で、その他検出した支柱穴については、2本の支柱穴それぞれから南北方向に直線的に並び、柱列は平行する。現状の平面形は北西側に棚状の施設をもつ楕円形様であるが、支柱穴の位置を考えると建物は南側に広がるものと思われる。貼床については、SA11と同様に現状の床面に礫が散乱することから、何らかの処置がされていたと考えられるが、埋土とした黒色砂質土を明確に分離することはできなかった。

出土遺物は全体的に少なく細片が多い。埋土中から広口壺**315**などが出土した。**315**は口縁部上面をほぼ水平にして、3列の長方形様の連続刺突文をもつ。やや凹面をなす口縁端部には刻目を施している。また、口縁部下面には靫の圧痕が認められた。

### (3) 土坑（SC1～8）

**SC1**（第73・74図） 6E区で検出した方形に復元できる土坑で、SA5・6の北6～7mに位置する。町道建設に伴って上位部が失われているが、基本層IXa層中で検出した。また、東部に関しては後世の攪乱や調査区外に至るがほぼ終焉に近いと思われる。検出面で東西2.0m以上、南北約2.2mの規模で、残存する深さは約0.6mである。東側を除く壁面はほぼ垂直に掘削され、底面は平坦に仕上げている。底面の西壁際には深さ0.1mに満たない5基の小穴が連続し、長軸0.4～0.5mの楕円形の土坑2基（P6・P8）も確認できる。埋土は概ね2層に細分でき、上位部に炭化物を包含する粘質土が西側の下層にだけ最大で20cm堆積していた。底面などに被熱痕跡がないことから他所からの人為的な廃棄と考えられ、その上位全体の埋土は暗褐色粘質土で埋められていた。



第73図 SC1・SC2 出土遺物  
SC1：316～318、SC2：319

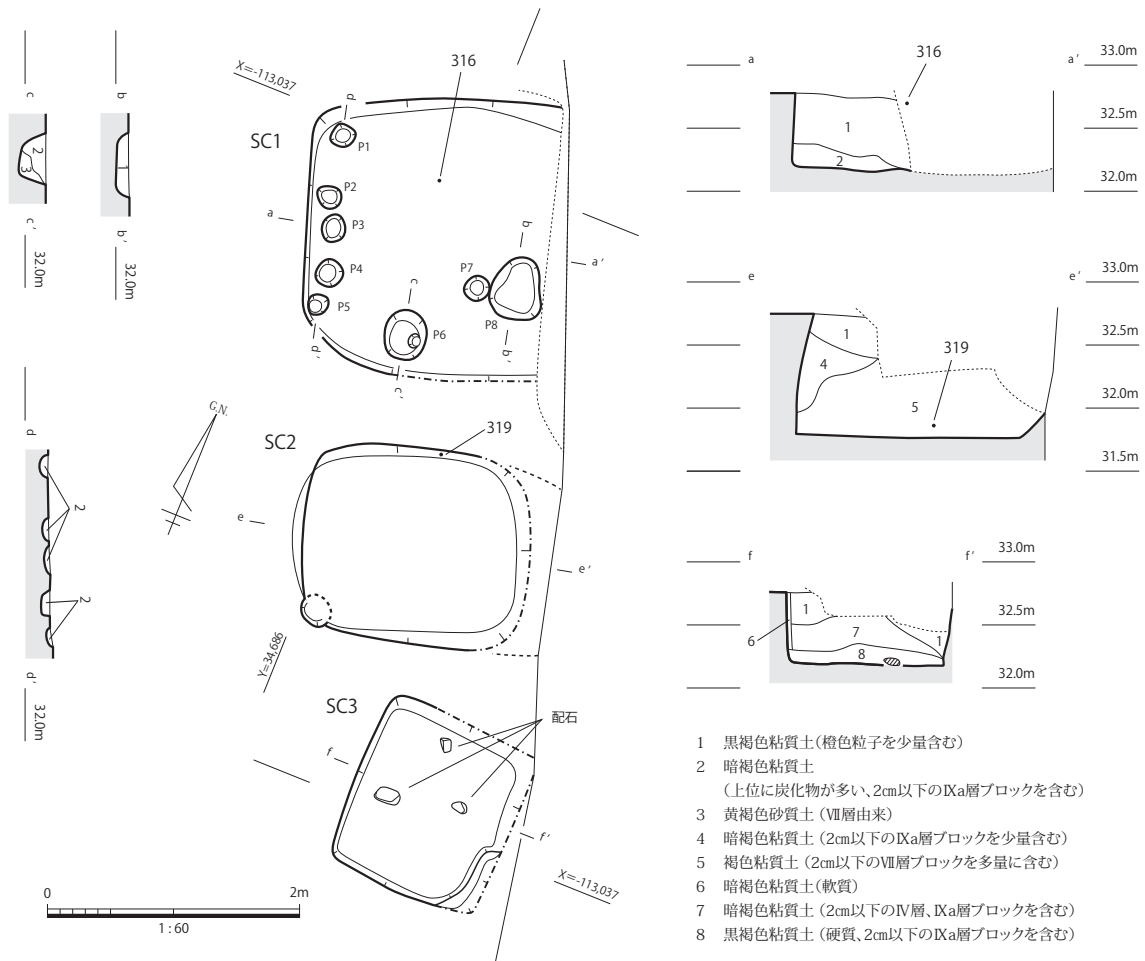
埋土中からの出土遺物は多いが、細片が大半を占める。遺構の帰属時期を示す壺**316**が埋土中から出土した。**316**は外方に短く伸びる口縁部をもつ壺で、端部は面をなす。**317・318**は下城式系の甕である。

埋土中からの出土遺物は多いが、細片が大半を占める。遺構の帰属時期を示す壺**316**が埋土中から出土した。**316**は外方に短く伸びる口縁部をもつ壺で、端部は面をなす。**317・318**は下城式系の甕である。

**SC2**（第73・74図） 6E区で検出した土坑で、SC1の南0.5mに位置する。SC1同様に第IXa層中で検出し、東側は後世の攪乱や調査区外にあるが、長方形の平面形が想定される。検出面で東西2.0m以上、南北約1.6mで、残存する深さは約1.0mである。西側の壁面のみやや袋状をなし、底面は平坦であった。埋土は概ね3層に細分でき、最下層には地山ブロックを多量に含む褐色の粘質土が山なりに堆積していたことから、人為的な埋戻しが行われたと考えられる。

出土遺物は全体的に少なく細片が多い。底面に近い場所で甕あるいは壺の体部**319**が出土した。

**SC3**（第74図） 7E区で検出した長方形の土坑で、SC2の南0.5mに位置する。SC1・SC2同様に第IXa層中での検出で、後世の攪乱で東側の上位部が失われている。検出面で東西約1.3m、南北約1.5mで、残



第74図 SC1・SC2・SC3 平面・断面図

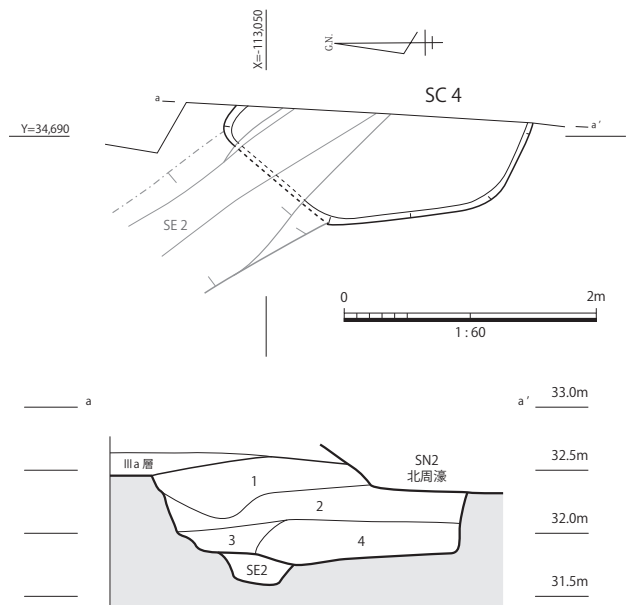
存する深さは約0.6mである。東壁の南側に段をもつ以外はほぼ垂直に掘削されており、平坦に仕上げた底面には硬質の黒褐色粘質土で最大0.15m程度の貼床がなされていた。なお、底面の北半には一辺0.6~0.7mの三角形様に0.1~0.2mの礫が3つ配置されていたが、貼床に被覆されていたこともあり用途は不明である。貼床より上位には、西壁に沿うように軟質の暗褐色粘質土の筋が断面で観察できることから、板材が壁に沿って設置されていた可能性がある。貼床以上の埋土は概ね2層に細分でき、山なりに堆積した地山ブロックを含む暗褐色の粘質土が確認できることから、人為的な埋戻しが行われたと考えられる。

SC1・SC2に連続する土坑ではあるが、北に軸をとること、規模が小さくなること、礫が配置されていることなど前2者とは異なる点が多いことが特徴である。出土遺物は少なく、復元・図化できるものはなかった。

**SC4** (第75図) 8E区で検出した土坑で、SC3の南約9.0mに位置する。検出時にSE2との切り合いが明瞭でなく十分に区別して調査ができなかったが、東断面より第Ⅲa層に被覆されることが観察できた。なお、南側についてはSN2の北周濠によって上位部が失われている。東側が調査区外にあるため平面形状は不明であるが、検出面で東西0.8m以上、南北約2.3m、断面で観察できる深さは0.7m程度である。壁面はほぼ垂直に掘削されており、底面は平坦に仕上げられていた。埋土は概ね4層に細分でき、最下部に地山ブロックを含む黒色粘質土が堆積し、上位は砂質土主体の埋土であった。斜面に対して直交す

る断面での観察だったので埋没の過程については一概に言えないが、最上位の埋土が山なりに堆積していることから人為的な埋戻しの可能性も考えられる。

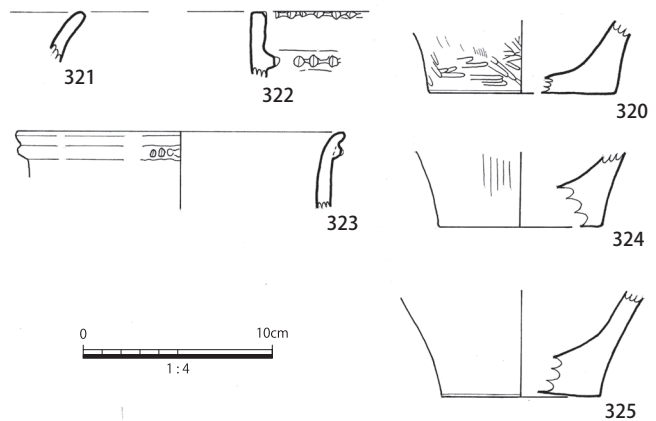
遺物はすべて埋土中より出土した。321は甕の口縁部で端部を丸くおさめるもの。322・323は下城式系の甕で、323については口縁端部を強く外反させ、直下に1条の刻目突帯をもつ。320は壺、324・325は甕の底部で、いずれも平底である。321以外は弥生時代中期に比定される土器群で、先行するSE2を攪乱することで巻きあげられたものである。



- 1 黒色砂質粘質土(細礫を含む)
- 2 黒褐色砂質土
- 3 黒褐色砂質粘質土
- 4 黒色砂質土(3cm以下のIXa層ブロックを含む)

**SC5** (第68・76図) 8E区で検出した長方形の土坑で、SA6の南約3.0mに位置する。古墳SN2の北周溝によって上位は削平されている。検出面で東西約1.4m、南北約2.0mを測り、深さは最大0.4mである。南側の壁面のみやや袋状をなし、底面は平坦であった。埋土は概ね3層に細分でき、地山ブロックを含む黒色系の砂質粘質土を主体にして堆積していた。

埋土中からは円盤状の平底をなす鉢326などが出土したが、出土遺物は全体的に少なく細片が多い。



第75図 SC4 平面・断面図および出土遺物

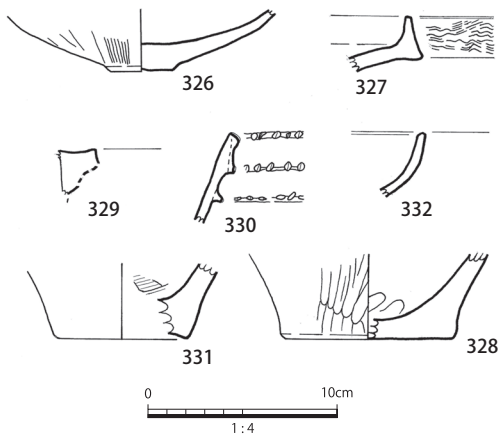
**SC6** (第68・76図) 8E区で検出した土坑で、SC5の南約2.0mに位置する。断面より第Ⅲa

層に被覆されることが観察できたが、上位部分に関してはSA7との切り合いが明瞭でなく十分に区別して調査ができなかった。南側は調査区外にあるが楕円形の平面形が想定される。断面で観察できる規模は東西約1.5m、南北1.0m以上である。播鉢状をなす断面の深さは0.7m程度である。埋土は2層に細分でき、黒褐色系の砂質粘質土を主体とする埋土であった。なお、SC6周辺は北側に急激に落ち込む地形の変化点にあたり、北に近接するSC5より遺構構築面は0.4~0.5m高くなっている。

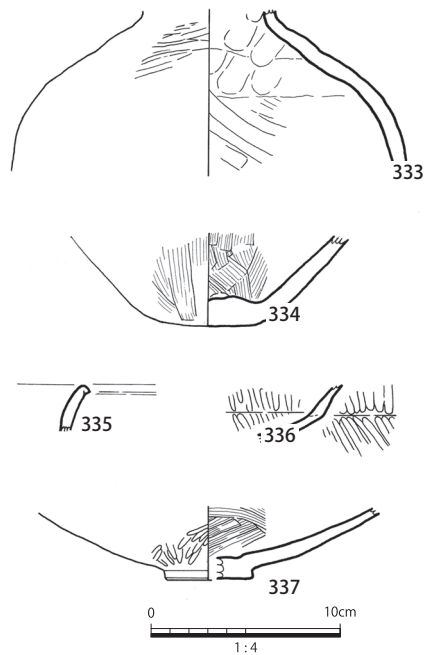
遺物は埋土中より壺327・328、甕329~331、鉢332などが出土した。327は楕描波状文を有する複合口縁壺である。328は平底の壺の底部。329は甕の体部をめぐる台形状の突帯と考える。330は下城式系の甕で、336はやや上げ底になる甕の底部である。332は碗状の鉢の口縁部である。

327・329・332がSC6に帰属する遺物で、その他は先行するSA7の埋土から混入したものである。

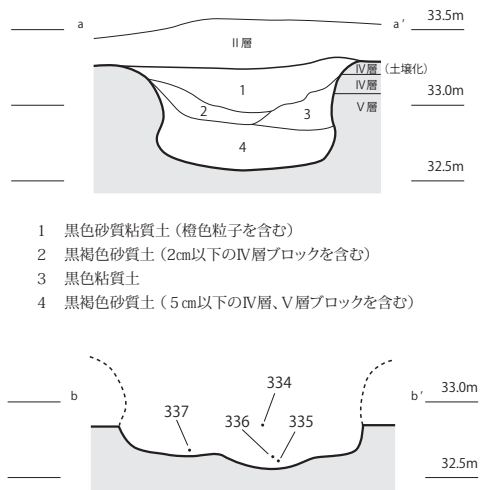
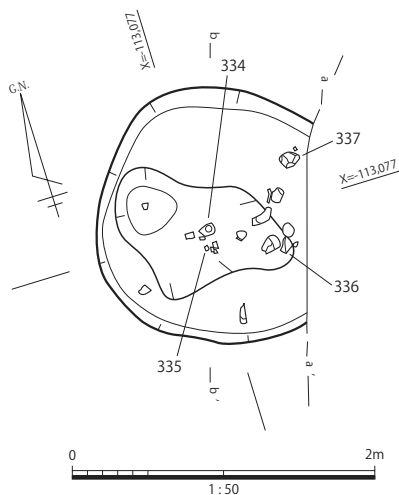




第76図 SC5・SC6 出土遺物  
SC5 : 326、SC6 : 327~332



第77図 SC7 出土遺物



第78図 SC7 平面・断面図

SC7 (第77・78図) 10D区で検出した土坑で、SA9の北約7.0mに位置する。町道建設に伴って上位部のほとんどが失われているが、東壁断面より第II層に被覆されることと本来は袋状をなしていたことが観察できる。第V層中で検出した底面の平面形は、径約1.7mのほぼ正円形に復元できる。断面で観察できる深さは約0.7mで、底面は中心付近がやや窪みをもつ。埋土は4層に細分でき、最下層の地山ブロックを含む黒褐色砂質土は廃絶に関連する堆積と考えられ包含する遺物も多い。

遺物は底部付近から壺335、高坏336、鉢337などが、やや上位で壺334などが出土した。333と334は同一個体のもので、頸部の径がやや締まる広口壺と思われる。335は端部外面を外反させ玉縁状に肥厚する短頸壺。336は高坏の坏部。337は鉢の底部で、円盤状の平底をもつ。

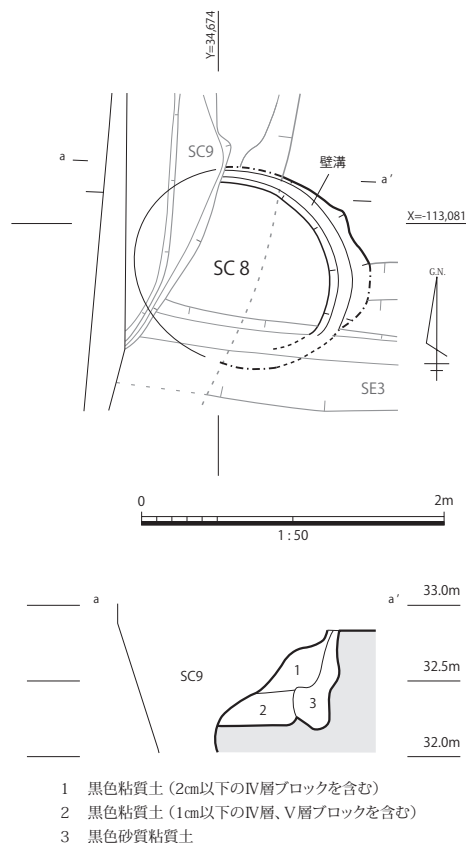
SC8（第79図） 11D区で検出した土坑で、SA8の北西3～4mに位置する。町道建設に伴って上位部が失われているが、第V層中で検出した。なお、西側についてはSC9によって攪乱を受けているが、平面形は楕円形に復元できる。検出面で東西約1.3m、南北約1.5mを測り、残存する深さは約0.6mである。壁面は垂直に仕上げられ、壁に沿う溝が設けられている。埋土は3層に細分でき、地山ブロックを含む黒色系の粘質土を主体に堆積する。この土坑と同形態のものは、国富町調査C地点においても確認できる。

なお、SC8にともなう遺物は出土していない。

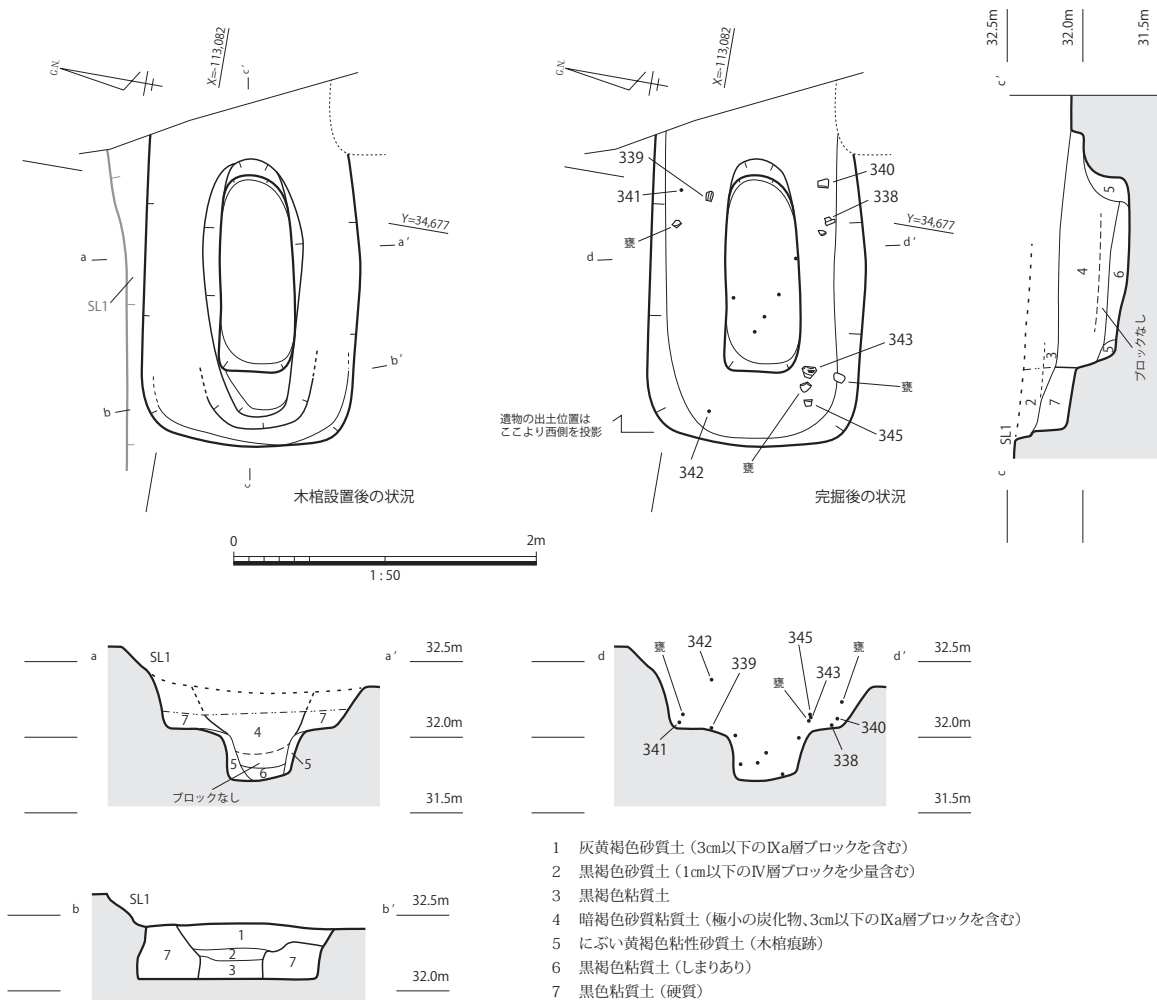
#### (4) 土墳墓 (SD1・SD2)

SD1（第80・81図、写真1） 6E区でSL1北周溝の底面で検出した東西方向に主軸をもつ木棺墓である。SD2の北約2.0mに位置する。東側は後世の攪乱や調査区外に至るが墓壙の平面形は長方形をなすもので、検出面での規模は長辺2.3m以上、短辺約1.4mである。

SL1によって上位が攪乱を受けるため本来の規模は不明だが、周溝肩を見掛け上の壁肩とした際、やや傾斜をもって0.7m程度掘削したのちに、木棺設置のための埋葬部を墓壙中央に掘り込んで2段に仕上げている。埋葬部は長辺約1.3m、短辺約0.5mの箱型の長方形様で、深さは最大0.4mであった。そして、2段目掘形の底面については、木棺設置に先立つものか、しまりのある黒褐色粘質土（6層）で平坦に仕上げられていた。なお、この黒褐色粘質土が底面より一回り小さな範囲に認められることから、この規模が木棺の内法であったと考えられ、壁に沿った5層が棺材の痕跡とすると、側板が壁面にほぼ接しているのに対して小口板は0.1～0.15m内にあるため、両側板で小口板を押さえる組合せ式木棺であったと推定される。あるいは、5層については棺材と壁を埋める目地の役割とも考えられる。さらに、1段目底面には木棺の外側を固めるためか硬質の黒色粘質土（7層）が東側以外に確認できる。これらを総合すると、木棺の内法については長軸約0.9m、短軸約0.4m、高さ約0.4m、棺材の厚みは0.05m程度が想定でき、規模から小児の埋葬であったと推測される。なお、底板の痕跡は認められなかった。埋葬部東壁の上位についてはやや掘り窪められており、かつ1段目底面がやや広く確保され遺物も確認できなかったことから、埋葬に係わる作業場であったと考えられる。木棺内の埋土は、蓋板が朽ちたのちに崩落した地山ブロックを含む暗褐色砂質粘質土でしまりは無い。また、埋土中に極小の炭化物が散見されることから、火を用いた埋葬に係わる儀礼があったとも考えられる。木棺内に明らかに副葬された遺物はなく、木棺内に流入した埋土から土器片が出土したが、遺構上位がSL1によって攪乱を受けているためか全体の量は少ない。また、後述するSD2とは異なり、割り投げ入れられた小型の壺や高坏の細片などは少ない。対して、遺構の帰属時期ではない、やや大きめの弥生土器片（壺338・339、甕343など）が木棺外でも南側の裏込め土中か1段目底面に、数点では



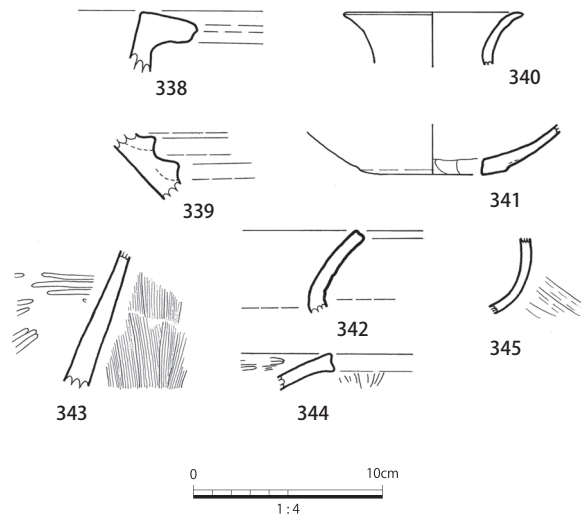
第79図 SC8平面・断面図



第80図 SD1 平面・断面図

あるが確認できることが特徴としてあげられる。

出土遺物は完形に復元できるものではなく細片が多い。図化し得たものは、すべて裏込め土中か1段目底面から出土したものであるが、遺構の帰属時期を示すものとしては壺340・341、甕342、器台344、鉢345がある。338は山ノ口式系の壺で、口縁部上面にミガキが施される。339は三角形状の2条の突帯が確認できる壺の肩部。340は小型の壺で、外反する口縁部の端部は鋭い。341は平底になる壺の底部で、焼成前の穿孔が確認できる。342は頸部から口縁部にかけてやや緩やかに屈曲する甕、343は甕の体部下半である。344は器台の受部で、外面の縦方向のミガキは筋状で間隔をもつ。345は碗状の鉢である。また、写真のみの掲載であるが、径2cm程度の土玉様の粘土塊が埋土



第81図 SD1 出土遺物

中から1点出土している。

**SD2** (図82・83図) 6E区でSD1の南約2.0mに位置する木棺墓である。町道建設に伴って上位部が失われているため、第IXa層中での検出となった。東側の上位は後世の攪乱を受けているが、墓壇の平面形は東西方向に主軸をもつ長方形をなすもので、検出面で長辺約2.4m、短辺1.1~1.3mを測る。SD1と同様に墓壇中央を掘り込んで2段に仕上げたもので、ほぼ垂直に0.7m以上掘削したのちに、長辺約1.5m、短辺約0.5mの長方形様でやや傾斜のある壁面をもつ深さ約0.45mの埋葬部を設ける。断面観察では木棺の痕跡をうまく分離することができなかったが、SD1で確認した1段目底面の木棺外の裏込め土(4層)が認められることから、木棺が用いられていたことは間違いない。なお、埋葬部底面には土壌化した作業土が溜るが、その上部に硬質の黒褐色粘質土(裏込め土と同一)が認められたことから、木棺安置に先立つ平坦面の構築があったと考えられる。埋葬部底の平坦面を内法として考えた場合、木棺の規模としては、長軸約1.2m、短軸約0.45m、高さ約0.45mより小さいものが推測される。埋葬部東壁についてはやや傾斜をもって掘削されており、南東側1段目底面もやや広く確保されていることから、墓壇の東側は埋葬に係わる作業場であったと考えられる。木棺内の埋土は、蓋板が朽ちたのちに崩落したと考えられる地山ブロックを含むしまりのない黒褐色砂質土(3層)で充填され、SD1同様に埋土中に極小の炭化物が散見される。

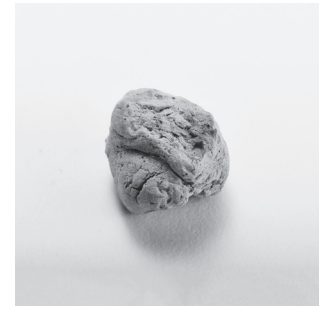
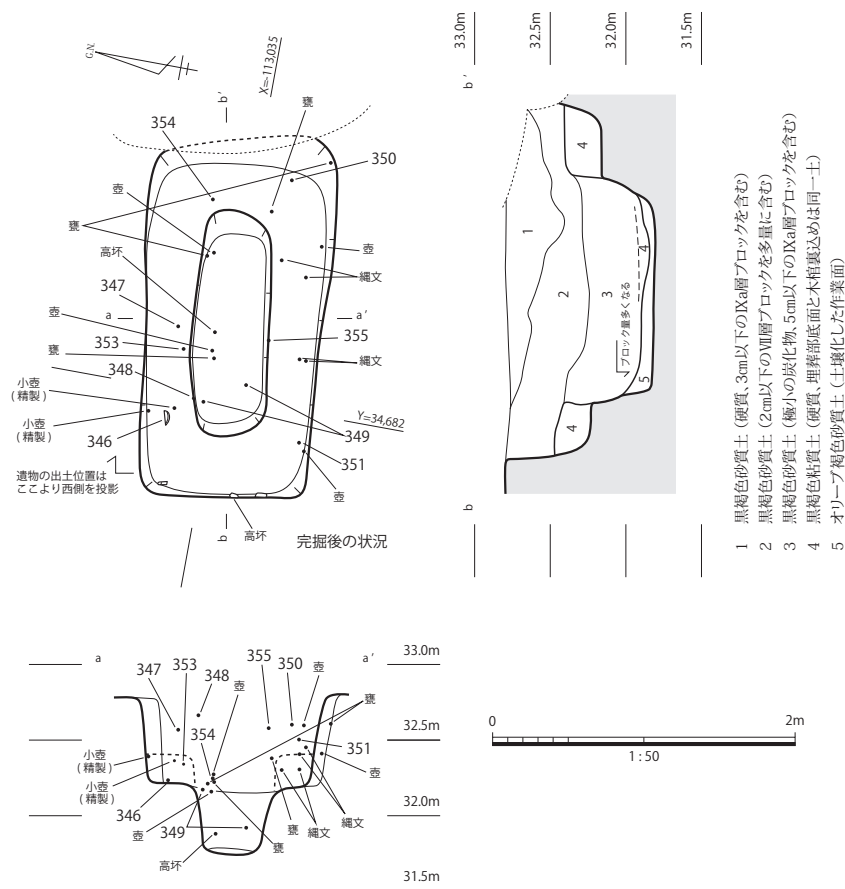
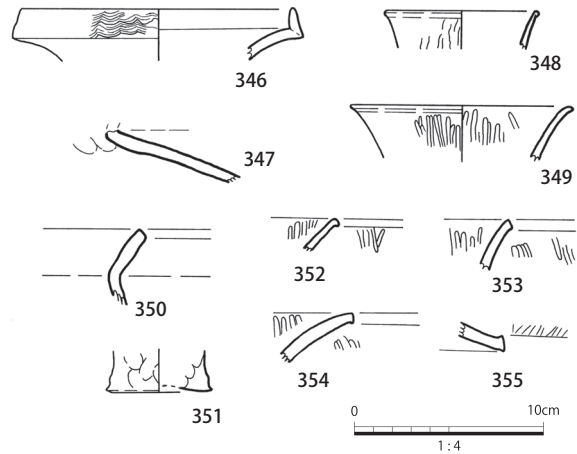


写真1 SD1出土粘土塊



第82図 SD2 平面・断面図

木棺内部には明確な副葬品はないが、遺物は木棺内への流入土や墓壙の埋土中から土器片が出土している。特に木棺内への流入土中には完形には復元できない精製の小型壺**348・349**や高杯の細片などが散見されることから、埋葬に係わる儀礼の後に割り投げ入れた可能性がある。さらにSD1同様、木棺外の裏込め土中か1段目底面から土師器片を中心に縄文土器や弥生土器片も出土した。このうち壺**346**と高杯**353**が図化できたが、その他は埋土中のものである。



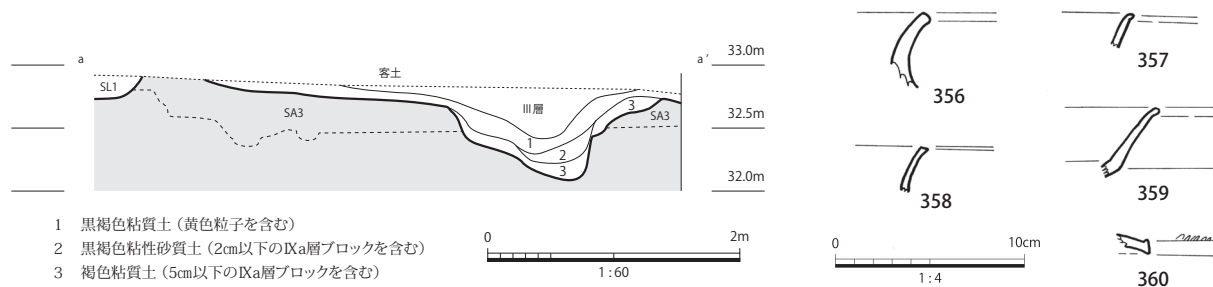
第83図 SD2 出土遺物

**346**は楯描波状文をもつ複合口縁壺、**347**は壺の肩部である。**348・349**は器壁の薄い精製の小型壺で、口縁端部を玉縁状に仕上げる。**348**は外面を、**349**は内外面ともに丁寧なミガキが施され、**349**については光沢をもつ。**350**は「く」の字に屈曲する甕の口縁部で、端部を面にする。**351**は甕の底部で、指頭の痕跡が明瞭に残る。**352～354**は高杯の坏部、**355**は器台の裾部である。

#### (5) 溝状遺構 (SE1～5)

**SE1** (第84・99図) 第Ⅲ層の除去後に、5E～6D区にかけて検出した南側に弧をなす溝である。SL1の北周溝より北約1.0mの位置にあり、SA2・SA3の北側を切る。溝の北側は地層確認トレンチで失われているが、北壁断面で確認できないことから、調査区内で終息するものと思われる。西側は調査区外に延びてゆくが、徐々に深くなり最大幅1.7m、最深部で0.65mである。埋土は下～中位が地山ブロックを含む黒褐色系の粘質土を主体とする自然堆積の層で、窪地として残る上位部には最終的に第Ⅲ層が堆積している。

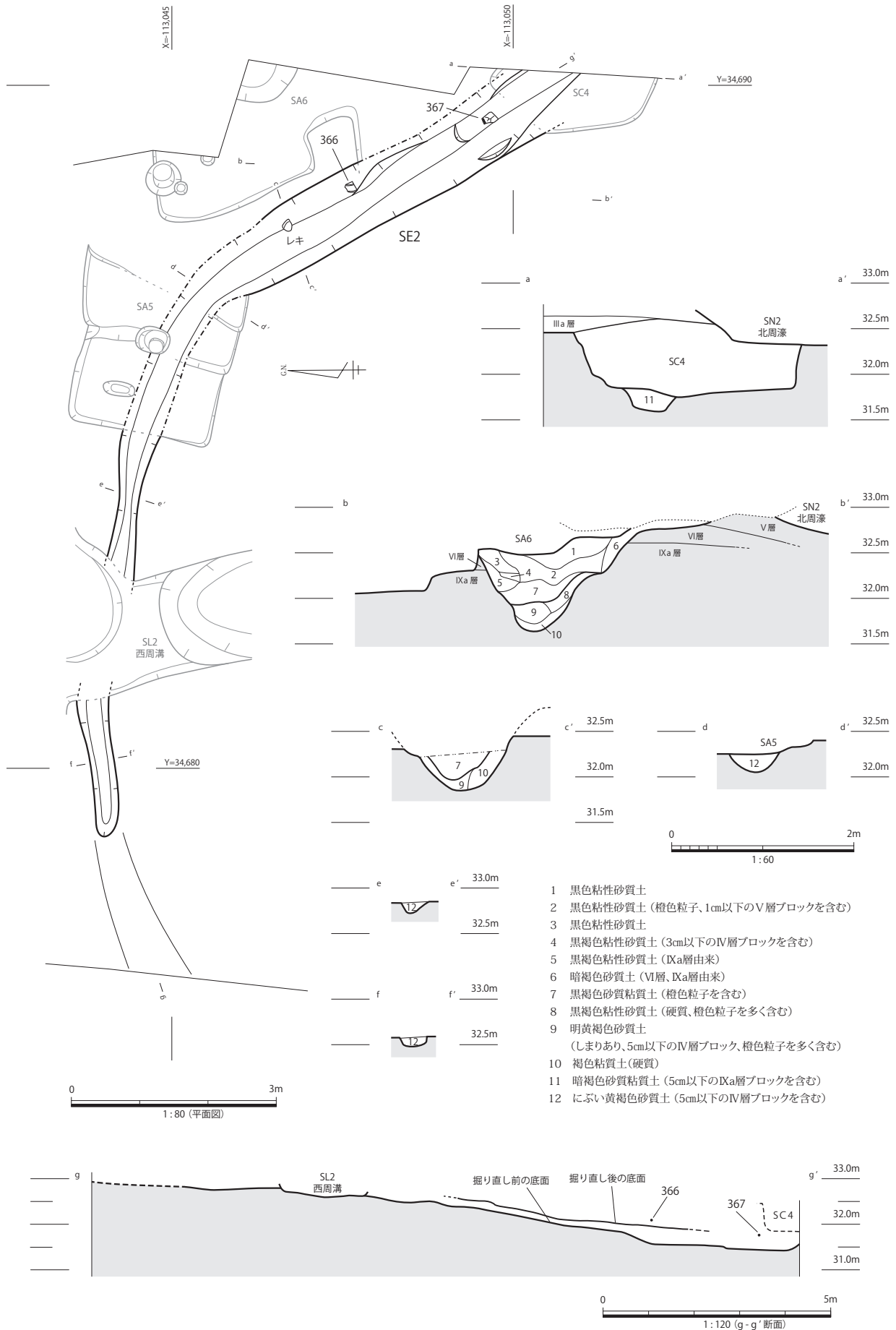
遺物は細片が多く、図化し得たものも小さな破片のみである。**356**は外反する壺の口縁部で、端部に面を作る。**357**はSD2出土の小型壺**349**とよく似た個体で、同一の可能性もある。**358**は頸部から口縁部にかけて緩やかに「く」の字に屈曲させる甕である。**359・360**は高杯で、**359**の口縁端部は玉縁状に仕上げ、**360**は面をもつ裾部端部の上下をつまみ上げる。



- 1 黒褐色粘質土 (黄色粒子を含む)
- 2 黒褐色粘性砂質土 (2cm以下のIXa層ブロックを含む)
- 3 褐色粘質土 (5cm以下のIXa層ブロックを含む)

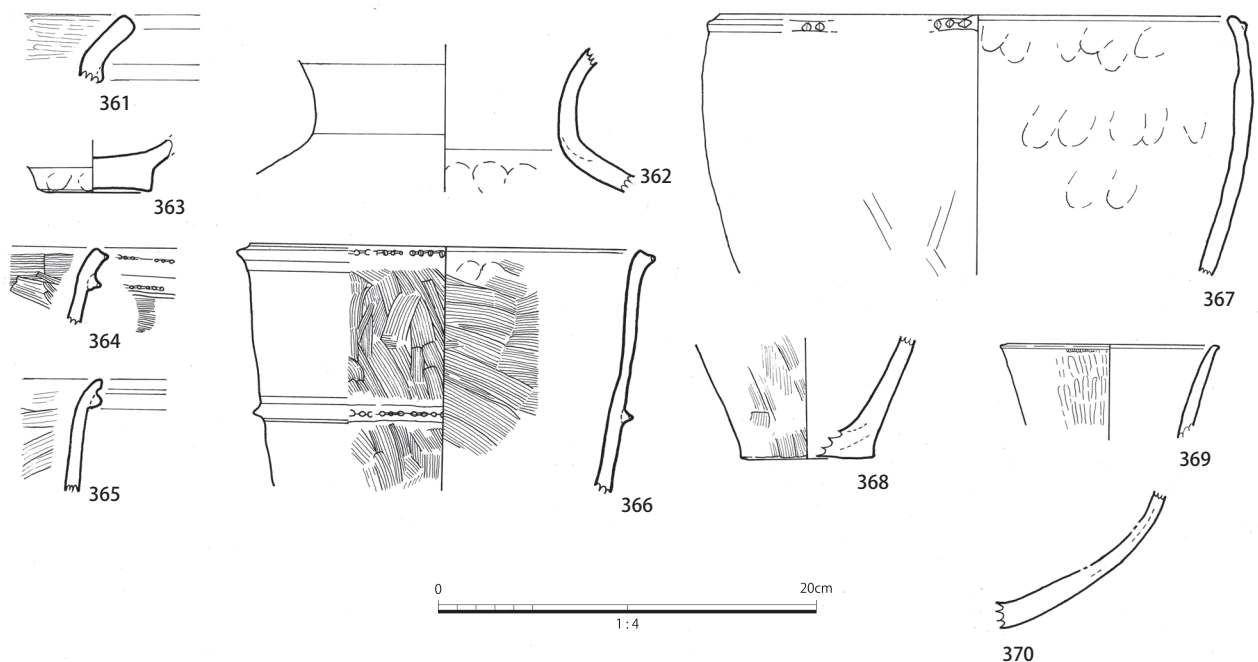
第84図 SE1 断面図および出土遺物





- 1 黒色粘性砂質土
- 2 黒色粘性砂質土 (橙色粒子、1cm以下のV層ブロックを含む)
- 3 黒色粘性砂質土
- 4 黒褐色粘性砂質土 (3cm以下のIV層ブロックを含む)
- 5 黒褐色粘性砂質土 (IXa層由来)
- 6 暗褐色砂質土 (VI層、IXa層由来)
- 7 黒褐色砂質粘質土 (橙色粒子を含む)
- 8 黒褐色粘性砂質土 (硬質、橙色粒子を多く含む)
- 9 明黄褐色砂質土  
(しまりあり、5cm以下のIV層ブロック、橙色粒子を多く含む)
- 10 褐色粘質土 (硬質)
- 11 暗褐色砂質粘質土 (5cm以下のIXa層ブロックを含む)
- 12 にぶい黄褐色砂質土 (5cm以下のIV層ブロックを含む)

第85図 SE2 平面・断面図



第86図 SE2 出土遺物

SE2（第85・86図） 7D・7E区で検出した北側に弧を描く溝で、内環濠の北側にあたる。町道建設に伴って環濠西側の上位部が失われており、東側についてもSA5、SA6、SL2西周溝、SC4によって攪乱を受けているため、遺構の大半が第Ⅸa層中での検出となった。東側は調査区外に延びてゆき、西側についても平面では検出できなかったが西壁断面に形状が確認できた。このため検出長は約16.5mとなり、東側に向かって徐々に深くなっていくことがわかる。断面形状は全体としてV字形を呈するが、本来の遺構構築面と考えられる第Ⅴ層が残存するb-b'断面をみると、外（北）側は急傾斜ではあるが途中で小さく段をもち、内（南）側についても段が認められる。この段を境に、傾斜角度が変わることとc-c'断面の7層のような新たな掘削の痕跡が確認できることから、掘り直しが行われたと考えられる。検出できた最終的な環濠の規模としては、環濠本体であるV字形をなす内肩よりさらに内側の約1.0m程度が緩やかに掘削されていることから、断面で確認できる最大幅は3.0m近くなり、掘り直し以前の最深部は約1.4mを測る。また、環濠の内側については、本来緩やかな谷状地形となっていたことが断面で確認できることから、低いながらも見掛け上は土塁状となっており、環濠より外側も緩やかに傾斜しているため、環濠の内外肩は0.4～0.5m程度の比高差がある。ただしこの現象については、台地の縁辺部で検出できたものであるため、環濠に囲まれた集落全体がこのような状況にあったかは上位層の削平が著しいこともあり定かではない。

埋土は掘り直し以前のものとして、最下層に第Ⅴ層あるいは第Ⅵ層由来の硬質の黒褐色粘性砂質土が堆積する一方、拳大の第Ⅳ層（アカホヤ）ブロックを多く含む明黄褐色砂質土が塊になって堆積していた。第Ⅳ層については近接する場所には基本層として確認できないことから、自然堆積ではないことは明らかであるが、やや外側に堆積する状況から外側の土塁として利用していたものが崩落したとも考えられる。掘り直し後の堆積は、小さな地山ブロックを含む黒褐色粘性砂質土を主体とする自然堆積の層であった。

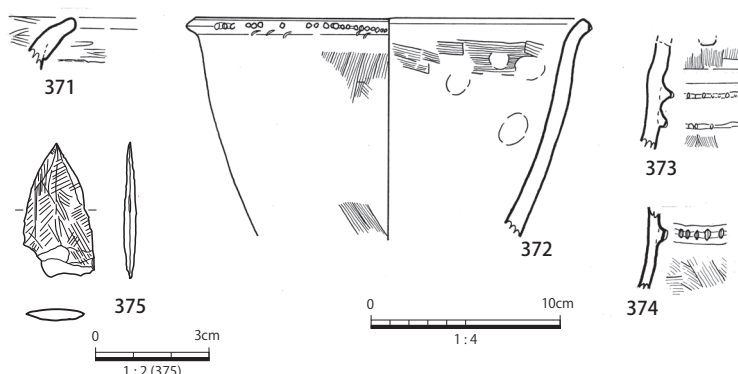
出土遺物の大半は、掘り直し後の埋土中からのもので、掘り直しの底面近くで甕**366・367**が出土した。**361**は端部を面に仕上げた大きく外反する口縁部をもつ板付式系の壺で、突帯を設けて頸部との境にする。**362**は広口壺で、やや直立する頸部から緩やかに外反させる口縁部をもち、外面にかすかに縦方向のハケメが認められる。**363**はやや上げ底の壺の底部。**364～368**は下城式系の甕である。このうち、**365**は口縁端部を強く外反させ直下に刻目突帯を有し、**367**は体部から口縁部にかけて内湾しながら伸び口縁端部に刻目突帯を貼り付ける。**368**は平底になる甕の底部で体部が直線的に開く。**369**は小型の直口壺で、外側をつまみ出す口縁端部は面をなす。**370**は鉢の体部である。なお、**369**と**370**に関しては、後出する遺構との分離が不十分であったため混入したものであるが、ここで報告している。

**SE3**（第87・88図） 11D区で検出した溝で、内環濠の南側にあたる。町道建設に伴って上位部の一部が失われており第V層中での検出であったが、第IV層の土壤化層が構築面である近接するSA8の状況を鑑みると、上位の削平は0.2m程度であったと考えられる。東側は調査区内で終息するため傾斜をもって立ち上がり、西側についてはSC8・SC9によって攪乱を受けているが調査区外に延びてゆく。国富町調査地で確認できる環濠には陸橋が掘り残されていることから、SE3東側の終息部は陸橋の可能性もあったが、調査区の東側が崖面になることから追認することができなかった。

直線状に掘削された検出長は約5.0mで、断面形状は全体としてV字形を呈するが1層で確認できるように掘り直しが認められる。なお、掘り直し以前の底面は、ほぼ水平に仕上げられている。掘り直し以前の壁面については、両壁面とも角度をもって掘削されているが、掘り直し後の壁面は内（北）側に段をもち、底面幅は約0.4mとやや広がっている。そして、掘り直し以前の規模は検出面で幅約1.3m、深さ約0.8m、掘り直し後の深さは約0.5mを測るが、深度については前述のとおり0.2m程度の削平が認められる。

埋土は掘り直し以前のものとして、最下層に第V層あるいは第VI層由来の硬質の黒褐色強粘質土が堆積しており、掘り直し後の堆積としては黒色粘質土の単一層であった。

出土遺物の大半は、SE2同様に掘り直し後の埋土中からのものであったが、掘り直しの以前の埋土中から甕**372**が出土している。**371**は短く外反する口縁部をもつ壺で、粘土のつなぎ目をそのまま残す形で頸部との境にする。**372～374**は下城式系の甕である。**372**は内湾しながら外に開くもので、外側に刻目をもつ口縁端部を外反させる。**375**は磨製石鏃で、欠損のため基部形態は不明である。



第87図 SE3 出土遺物

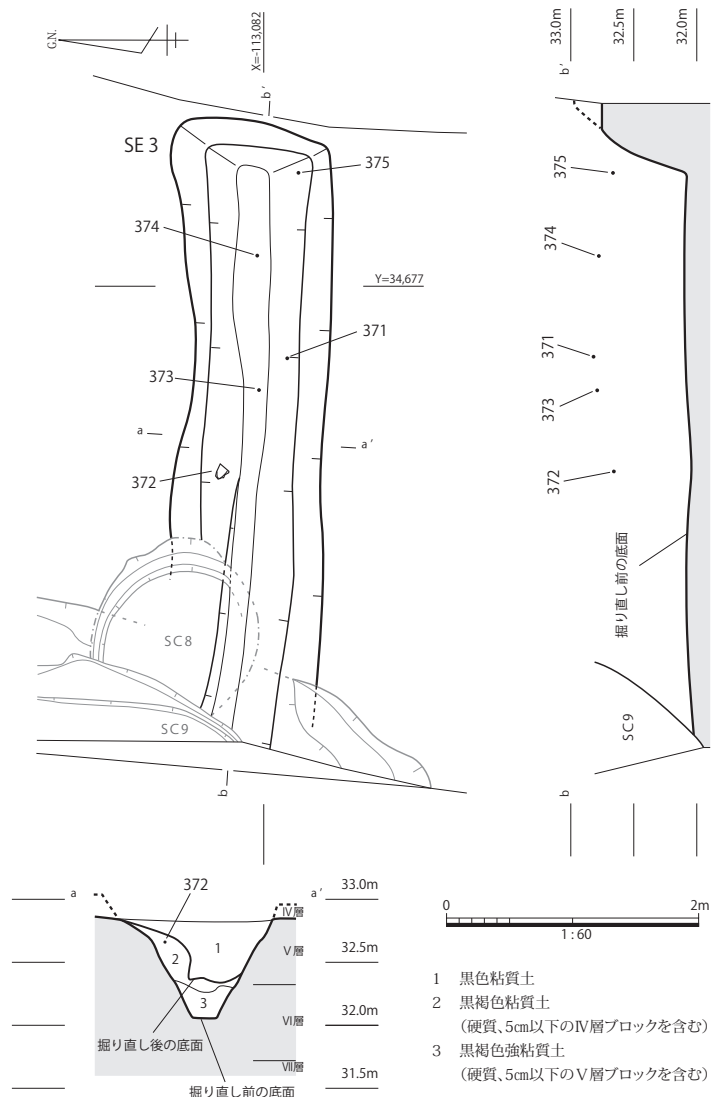
**SE4・SE5（第89・91・96図）**

弥生時代の集落を囲う3条の環濠のうち、中央環濠SE4と外環濠SE5の一部にあたる。両環濠はともにJ1地点の最南部に位置し、台地端でもさらに東側に突出する場所に立地している。SE4の東側とSE5の南側は2m程度で急傾斜地になるためか基本層そのものの流出が著しく、また町道建設に伴って調査区西端の上位部が失われていたこともあり、どちらについても遺構の大半が風化した第VI層中での検出になった。ただし、SE4ではa-a'断面、SE5ではf-f'断面で第V層から掘削されていることと最終的に第II層に包含されていることが確認できた。両環濠間の距離は西側で約4.0m、東側で約7.0mを測る。

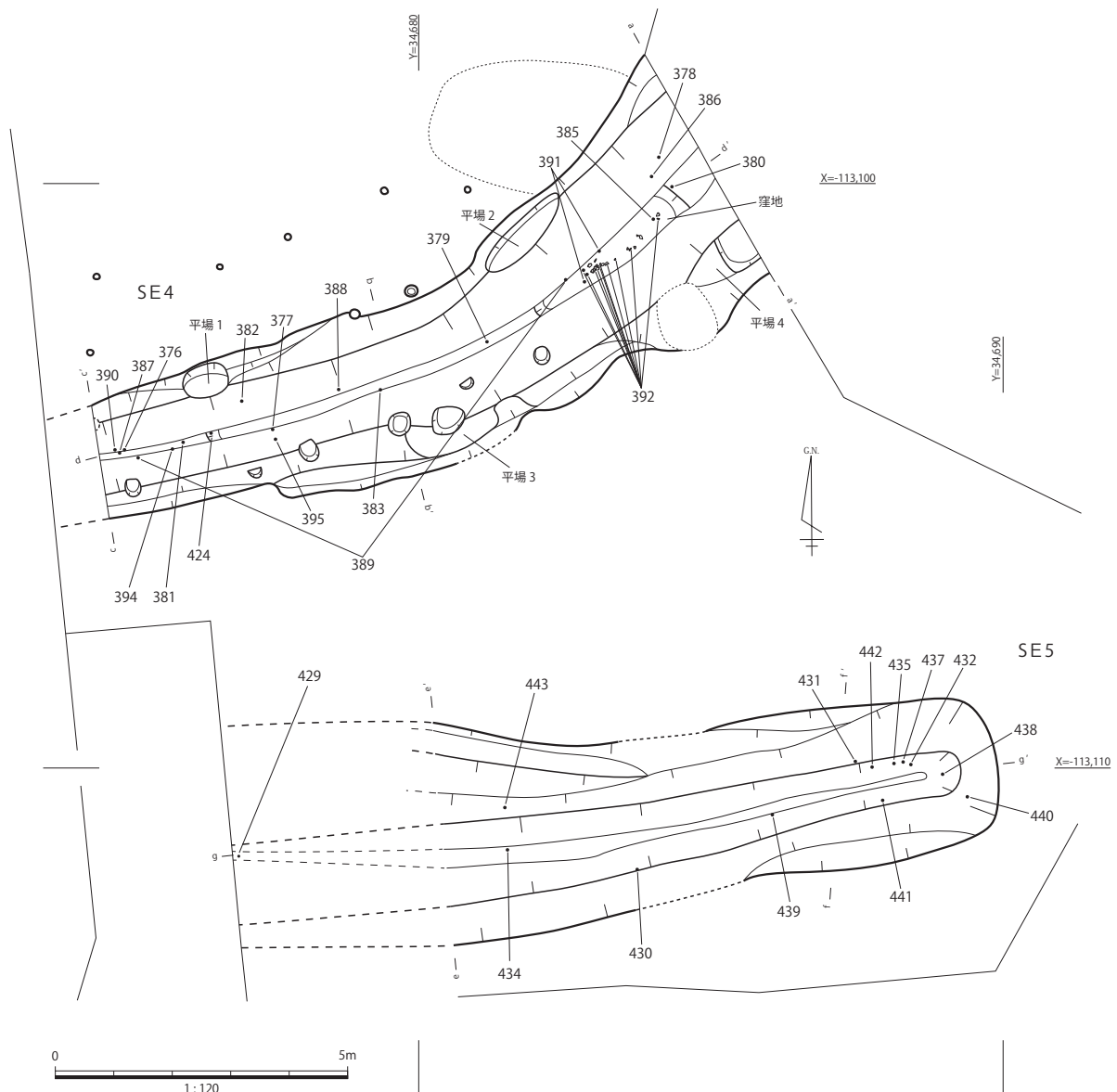
SE4は東西ともに調査区外へと延び、検出面での長さは約12.5mとなる。SE5の西側については調査区外に延びていくが、東側は調査区内で完結する。調査終了時に西側の延長を確認したことから、検出長としては約13.0mである。当然維持管理のための溝さらえ等も行われていたであろうが、断面観察によってSE4では大きく3段階、SE5では大きく5段階の掘り直しが確認できた。

両環濠間の空間には弥生時代を通じて遺構はない。これは、後段の個別の解説でも触れるが、両環濠間に版築様に盛土された土塁が存在したからで、環濠埋土の状況から環濠開始期には構築されたものであったと考えられる。土塁については、埋土の状況からSE4の北側とSE5の南側にもあったと思われる。また、SE4の北側では外肩から1.0～2.0mの位置に、柵列と考えられる径0.1m程度の小穴を数基確認した。遺物等がなかったことから、環濠のどの段階での柵列かは判断しにくい。北側の土塁の規模を考えると環濠がある程度埋まったあとに設けられたと考えておきたい。

環濠における雨水の処理については、SE3やSE5では環濠が完結していたため、雨水の逃げ場がないように思われた。しかし、調査期間中に環濠から溢れんばかりの大雨が降ったとしても、半日と経たず地下へと吸収されていき、かなりの水捌けの良さが体感できたことから、当ても雨水の処理については苦慮していなかったと思われる。



**第88図 SE3 平面・断面図**



第89図 SE4・SE5 平面図

SE4（第89～94図） 12E～13D区にかけて検出した中央環濠の南側にあたり、南側に弧を描く溝は東西に延びる。環濠幅は、どの段階でも丘陵端である東側に向かって幅を広くし徐々に深くなっていくが、第1段階の底面が最東端で立ち上がる状況から、崖を切ることなくSE5のように溝が終息していたとも推測される。それぞれの段階での環濠の上端幅は、掘り直しがあることから正確な規模を知ることは難しいが、あまり大差はないと思われ、検出長での規模で西側が約2.1m、東側が約4.5mとなり東側に向かって広がっている。

第1段階では、西側で0.2m程度であった底面幅をもつV字形の断面形状が、中央より東側で傾斜角を緩やかにしながら逆台形状へと変化し、底面幅も最大である東端で約1.0mを測る。検出面からの深さは、西側で約1.6m、東側で1.8～1.9mである。また、広くなる底面に設けられた窪地において、甕391や392などやや大きめの弥生土器片数点が1.0m程度の範囲で間隔をもって出土した。土器片が床面に位置することと窪地の中に納まることを鑑みると、何らかの意図をもって破棄されたものであろう。第1



段階の最下部の33層は、細礫を多く含む黒褐色粘性砂質土で硬くしまることもあり、溝の底部に溜まる自然堆積土とは考えにくいことから、突き固められた土塁の盛土が崩落したものとしておきたい。また、その上位層の30・31層の形状を見ると溝さらえの痕跡も確認できる。なお、同層はa-a'断面を見ると山なりに堆積する状況であったことから、人為的な埋戻しの可能性もある。さらに30層には、炭化物が含まれることから、かがり火なども想起される。

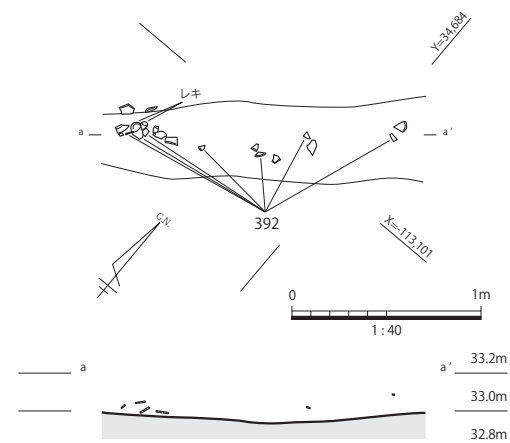
第2段階は中心を第1段階より北側に寄せて掘り直しが行われている。断面形状については、東側に向かってV字形から逆台形状に変化することが確認できるが、規模は縮小するようで東側の底面幅は0.5m程度であった。検出面からの深さは、西側で推定1.2~1.4m、中央~東側で1.6m程度である。埋土は黒褐色粘質土など自然堆積が中心であるが、20・21層で見られる砂質土については、第1段階同様に濠底付近の埋土としては硬くしまることから、環濠内側に版築状に盛土された土塁の崩落土とみておきたい。

第3段階の掘り直しは中心を第1段階と同じにしており、断面形状については第1・2段階とは逆に東側に向かって逆台形状からV字形に変化させている。第1・2段階と変わらない広い上端幅であるが、中位あたりから傾斜を変えて掘り込むことから断面形状は漏斗状にも見える。検出面からの深さは1.4m程度とほぼ一定であるが底面は東側にやや傾斜をもつ。濠底には自然堆積である黒褐色粘質土が溜まるが、その上位には10層の褐色粘質土と11層のぶい黄褐色粘性砂質土が堆積し、ともに硬くしまっている。これは第1・2段階でも確認できる土塁の盛土層と考えられ、版築状に盛土されたものが環濠外側から流入したのだろう。この段階で下位のV字形の掘り込みは完全に埋まり、その後は大規模な掘り直しを行っていない。そして環濠としての機能を失っていく過程で、1~8層の黒色系の砂質土が堆積してゆき、特に4層からは弥生土器を中心とする大量の土器類が集中して出土している。同一個体がまとまっていることが多いことから、4層の段階では一括廃棄の様相を示しているが、その前後の各層位にもある程度の土器の出土があったことから、窪地を廃棄場として利用していたのであろう。

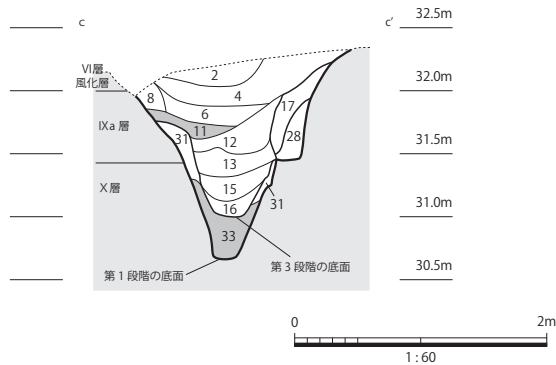
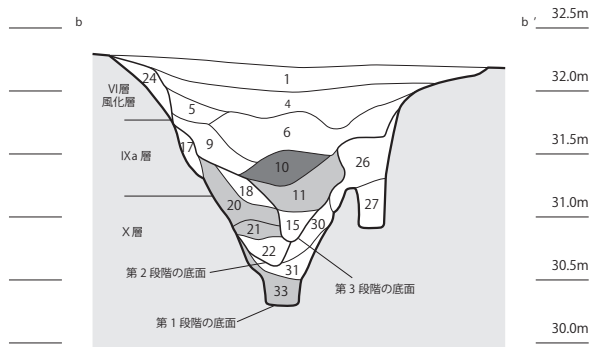
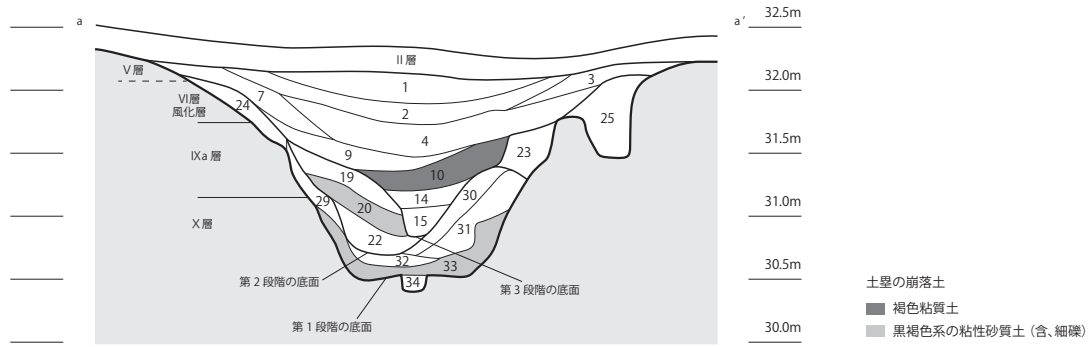
なお、環濠内外壁面には、中位から上位の数か所に平場や足かけの窪みが設けられており、環濠の掘削時あるいは機能時における利用が考えられる。このうち南側中央付近に設けられた平場3には、平場を覆う埋土(26層)に炭化物が多く包含されており、ここでの火の利用が考えられる。

また、環濠内外壁面の上位や肩部には、25層・27層・28層のような径0.4m以下の小穴が数か所設けられており、深いもので肩から1.3m程度を測る。これら小穴の用途についての判断は難しいが、橋脚や土塁の土留めなどが想定される。

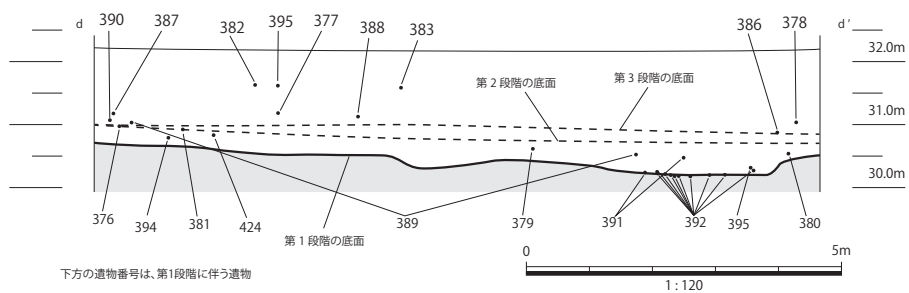
出土遺物は4層から上位のもの以外は、概ね個別に取り上げているが、第2段階と第3段階のものを完全に分離できたわけではない。ただし、第1段階にともなう遺物については、第91図の縦断面の下段に示している。



第90図 SE4 第1段階底面の遺物出土状況図

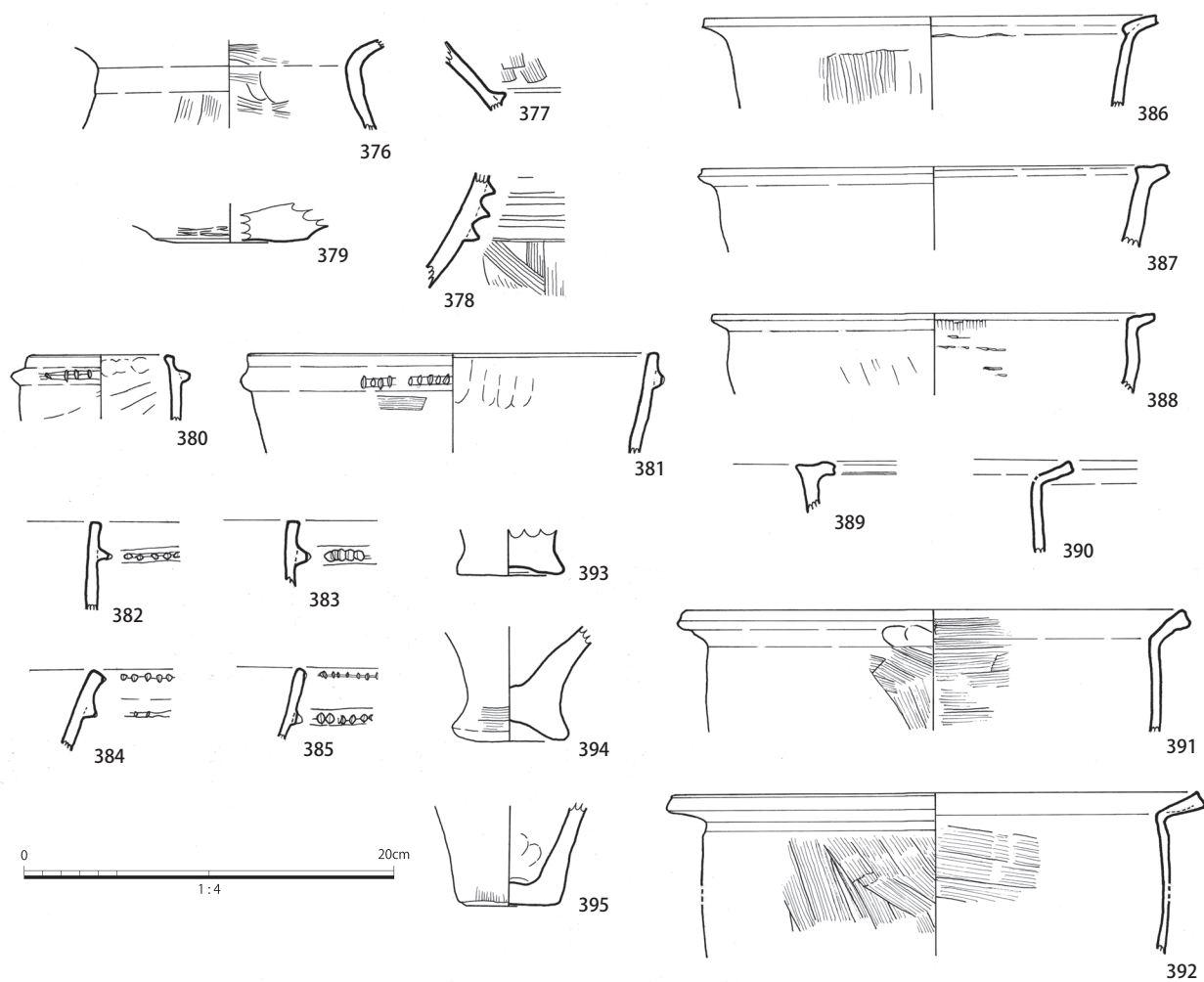


- 1 黒色砂質土
- 2 黒褐色砂質土 (細礫を含む)
- 3 黒褐色砂質土
- 4 暗褐色砂質土 (細礫、炭化物、橙色粒子を含む)
- 5 灰黄褐色砂質土
- 6 黒褐色粘性砂質土 (細礫、橙色粒子を含む)
- 7 黒褐色砂質土
- 8 暗褐色砂質土 (細礫を含む)
- 9 にふい黄褐色砂質土
- 10 褐色粘質土 (硬くしまる)
- 11 にふい黄褐色粘性砂質土 (硬くしまる、2cm以下のV層ブロックを含む)
- 12 黒褐色粘性砂質土 (5cm以下のVI層ブロックを含む)
- 13 暗褐色砂質土 (しまりなし)
- 14 暗褐色砂質土 (2cm以下のIXa層ブロックを含む)
- 15 黒褐色粘質土 (1cm以下のIXa層ブロックを含む)
- 16 暗褐色粘質土 (1cm以下のIXa層ブロックを含む)
- 17 暗褐色砂質土 (しまりなし)
- 18 にふい黄褐色砂質土 (細礫を含む)
- 19 黒褐色砂質土 (3cm以下のIXa層ブロック、橙色粒子を含む)
- 20 黒褐色砂質土 (硬くしまる、細礫、橙色粒子を含む、X層が混在)
- 21 にふい黄褐色砂質土 (硬くしまる、橙色粒子を含む)
- 22 黒褐色粘質土
- 23 暗褐色砂質土 (細礫を含む)
- 24 にふい黄褐色砂質土 (VI層由来)
- 25 暗褐色砂質土 (pit)
- 26 にふい黄褐色砂質土 (炭化物を含む、IXa層由来)
- 27 暗褐色砂質土 (細礫を含む、pit)
- 28 暗褐色砂質土 (2cm以下のIXa層ブロックを含む、pit)
- 29 灰黄褐色粘質土
- 30 にふい黄褐色粘性砂質土
- 31 暗褐色粘性砂質土 (炭化物、細礫を多く含む)
- 32 黒褐色粘質土 (X層が混在)
- 33 黒褐色粘性砂質土 (硬くしまる、細礫を多く含む)
- 34 暗褐色粘質土 (X層が混在、pit?)



下方の遺物番号は、第1段階に伴う遺物

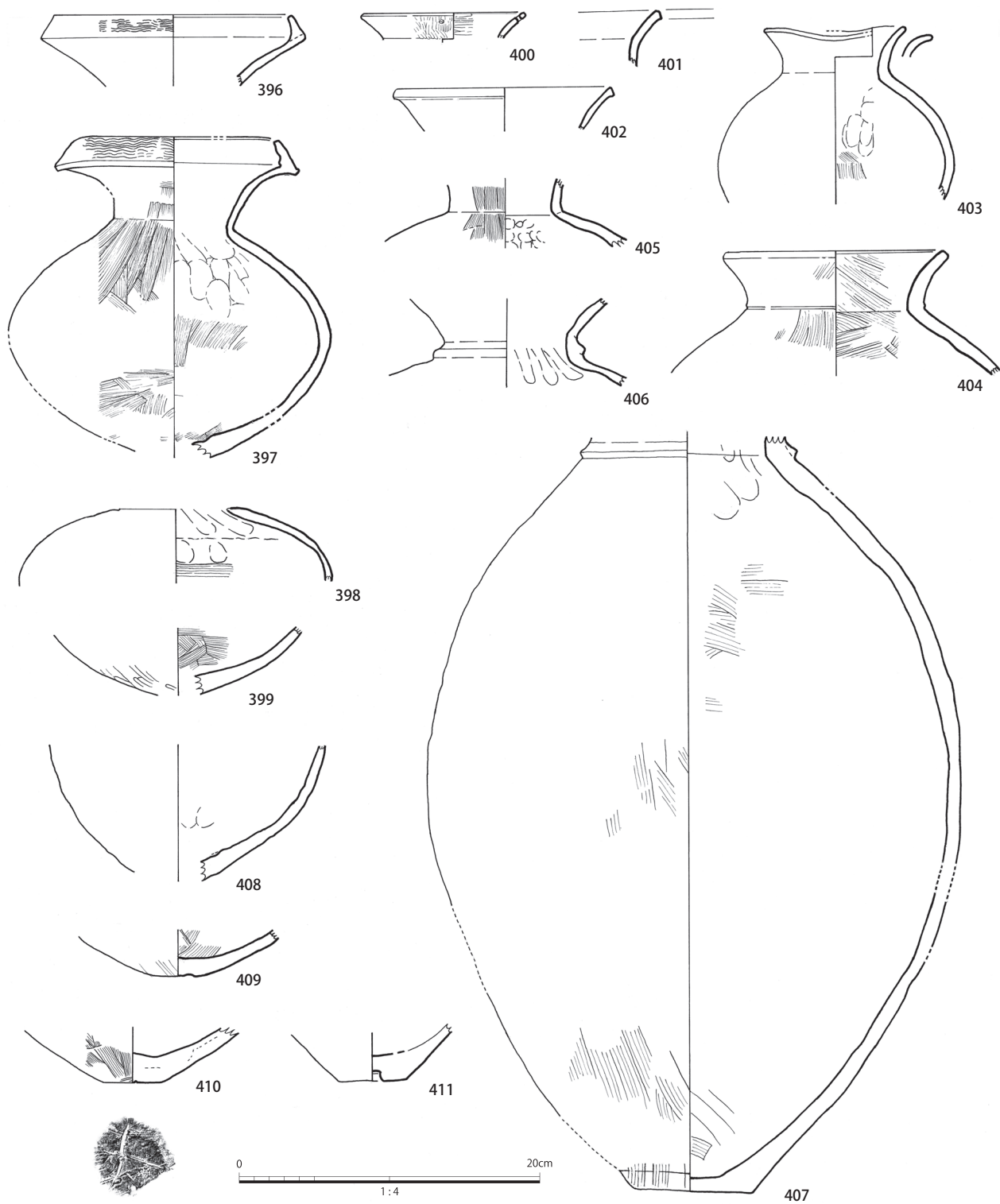
第91図 SE4 断面図



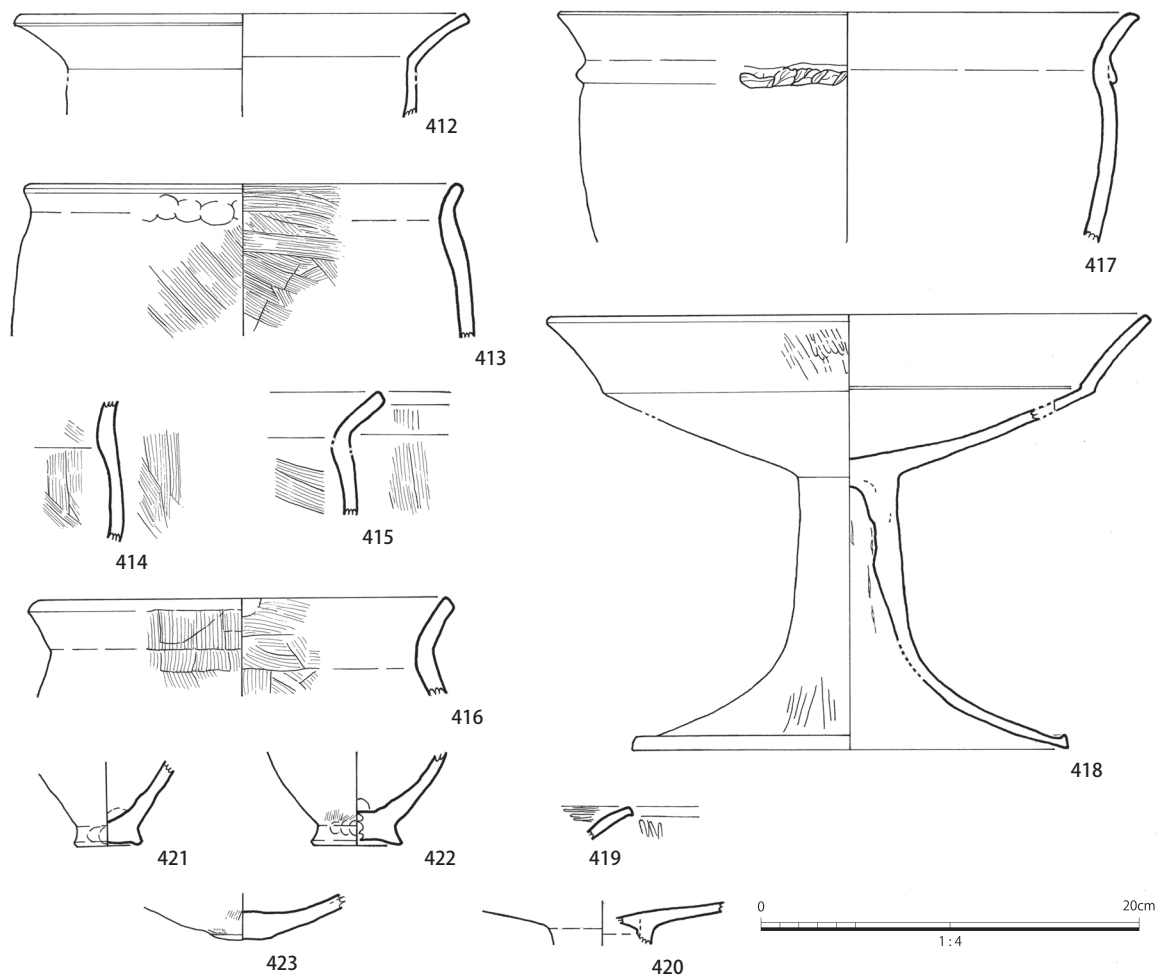
第92図 SE4（維持・管理期）出土遺物

376～395は環濠の維持・管理期にともなう土器類である。376は板付式系の壺で、やや内傾する頸部から短く外反する口縁部をもつ。377・378は三角形の突帯をもつ壺の体部、379は平底になる壺の底部である。380～385は下城式系の甕で、380については口径7.2cmと小型のものである。386は口縁部を外方に折り曲げる甕である。口縁内側を鋤先状に突出させ、下部には粘土のつなぎ目を残す。387と389は台形状の、388は小さく器壁の薄い三角形の口縁部を貼り付ける甕で、387と389の内側はやや突出する。390～392は口縁がやや短く「く」の字に屈曲し端部が面をなす甕である。391と392は凹線がめぐる端部を肥厚させ、391はさらに上面をつまみ上げる。393・394は裾部が外に広がる脚台状の甕の底部である。395は厚みのない平底の底部で、下条式系甕のものになる。

396～423は4層出土の土器類である。396・397は口縁部外面に櫛描波状文を描く複合口縁壺で、397は底部を除きほぼ完形に復元できる。同一の個体の398と399は複合口縁壺の可能性がある。400は小型の精製壺で、口縁部直下に小さな焼成前の穿孔を有する。401～404は外に開く口縁部をもつ直口壺である。このうち403は口縁部の一部を片口状にする。405は頸部がほぼ直立する直口壺である。406・407は体部と頸部の境に小さな三角形の突帯をもつ壺で、大型の407は砲弾形の体部と平底の底部をもつ。408も砲弾形をなす壺の体部から底部付近にあたる。409～411は壺の底部である。410については小さな平底の底



第93図 SE4 (第4層) 出土遺物 1



第94図 SE4（第4層）出土遺物 2

面に十字のヘラ書きを施す。**411**は平底をなす底面中心に円形状の窪みをもつ。**412**は頸部から口縁部にかけて明瞭に「く」の字に屈曲する甕で、粘土痕を残したまま屈曲部の内側に稜を設ける。器壁全体がミガキによって整えられやや光沢をもつ。**413**は短く外反する口縁部をもつ甕で、口縁端部はやや丸みをおびる。**414**は頸部から口縁部にかけての屈曲部内側に稜を設ける甕である。**415・416**は口縁端部を面に仕上げる頸部から口縁部にかけて「く」の字に屈曲させる甕である。**417**は頸部外面に斜位の刻目をもつ三角形の幅の広い突帯を有する甕である。**418～420**は高坏である。**418**は図上で完形に復元できるものである。脚部と坏部は別作りで仕上げ、坏底部に充填をするものか。また、脚柱内面の上位には成形時の絞り痕がある。**419**は面をなす口縁端部下端がつまみ出される。**420**は脚部から坏部を連続して成形するもので、坏部底に円盤充填の痕跡が確認できる。**421・422**は上げ底状の脚台を、**423**は円盤状の底部をもつ鉢である。



磨製石鏃については、一括して報告する。424～427は基部がやや凹み、このうち、425～427には鏃をつくる。428は平基式で、研ぎ直しによるものか切先が漏斗状になる。これは424にも認められる。また石材違いか、425と428は遺跡出土のすべての磨製石鏃と比べて青味掛かる。

SE5（第89・96・97図） 14D・14E 区で検出した直線状の溝で外環濠にあたる。東側は調査区内で終息するが、西側は調査区外に延びてゆく。環濠の維持管理のための溝さらえ等も行われていたが、断面観察によって大きく5段階の掘り直しが確認できた。環濠の上端幅はSE4と同様に掘り直しがあることから正確な規模は知れないが、それぞれの段階であまり大差はないと思われる。検出面での規模で西側が約4.0m、終息する東側が3.0m程度を測る。なお、環濠はもともと斜面地の等高線に平行するよう造られていることから、内外肩の構築面の標高は異なっているため0.5～0.8mの比高差が認められる。

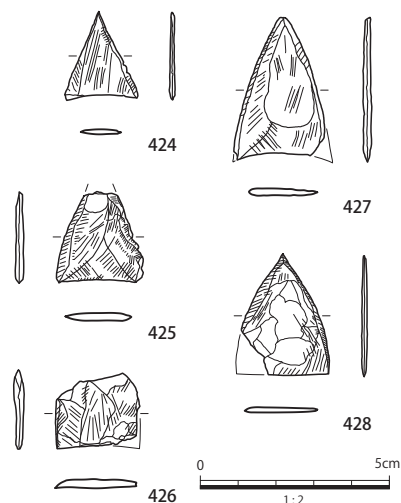
第1段階では、西側で0.5m程度の底面幅をもつU字形に近い断面形状を、中央のやや西より付近から東側でV字形の断面形状へと変化させ、底面幅も約0.2mとかなり狭くさせる。内肩の検出面からの深さは、西側が最大で約2.6m、環濠端から約1.0m付近で深さ2.0m程度になり鋭角で立ち上がる。埋土は27層以外すべて硬くしまる粘質土～粘性砂質土で、溝の底部に溜まる自然堆積土とは考えにくい。やはりSE4でも確認できた土塁の盛土が流入したとしておきたい。なお、e-e'断面の26層やf-f'断面の27層は、維持管理のための溝さらえの痕跡と思われる。

第2段階の痕跡は少ないが23～25層で確認でき、概ねV字形の断面形状で掘り直されている。内肩からの深さは、西側が2.3m程度で東側に向かって約1.7mと浅くなっていく。埋土は、版築状に構築された褐色粘質土と暗褐色粘質土の土塁の盛土が流入している。

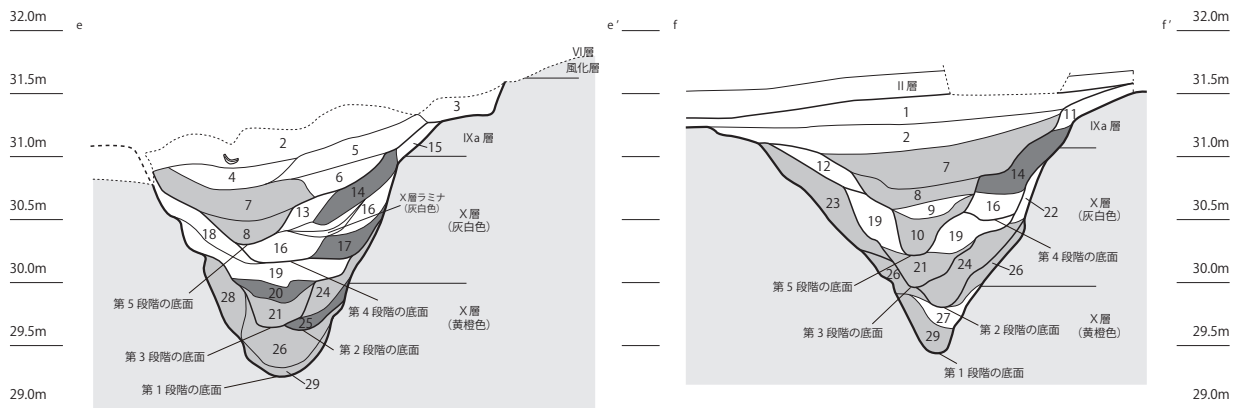
第3段階の断面形状はV字形を意識しているが、第1・2段階と変わらない広い上端幅から緩やかな傾斜をもち、中位あたりで傾斜を変えて掘り込んでいる。内肩からの深さは、西側が2.3m程度で東側に向かって約1.6mと浅くなって終息する。濠底には互層になった硬くしまる版築状の盛土20・21層が堆積し、その上位は第Ⅷ層に由来する壁面の崩落土や自然堆積である黒褐色粘質土が堆積する。

第4段階は中心を第1段階より北側に寄せて掘り直しが行われており、断面形状はe-e'断面で見ると逆台形状に掘削されている。底面幅は約0.8mを測り、内肩からの深さは西側が1.7m程度で東側に向かって約1.1mと浅くなっていく。埋土は土塁の盛土である褐色粘質土と第Ⅷ層が混在するにぶい黄褐色粘質土の互層が濠底に堆積している。

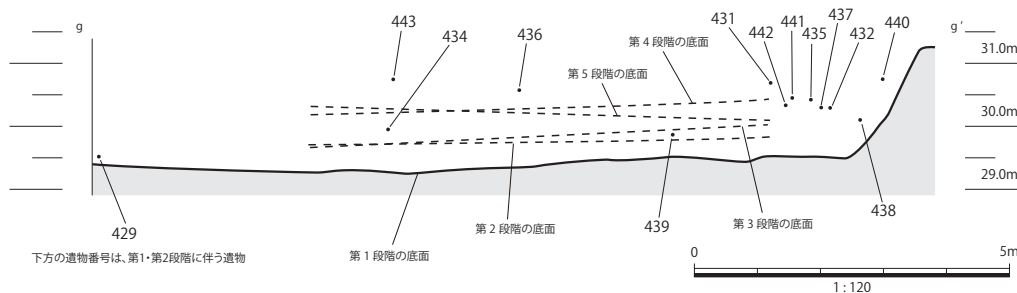
第5段階は中心を南側に寄せて掘り直されている。断面形状はV字形をなすが、西側は角度が浅く、東側で中位あたりから傾斜を変えて掘り込んでいる。内肩からの深さは西側が1.6m程度で東側に向かって約1.4mと浅くなっている。濠底から中位までは硬くしまる黒褐色系の粘性砂質土が堆積する。硬くしまる土質であることから濠に溜まった自然堆積土とは言い難いが、下位段階に認められる褐色系で占められる土塁の盛土層とは明らかに違いがある。しかしながら、環濠の本来の構築面が第Ⅴ層や第Ⅵ層な



第95図 SE4 出土磨製石鏃



- |  |  |   |
|--|--|---|
| <p>第5段階</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>1 黒色砂質土</li> <li>2 黒褐色砂質土 (細礫を含む)</li> <li>3 黒色粘性砂質土 (5cm以下のIXa層ブロックを含む)</li> <li>4 黒色粘質土</li> <li>5 黒褐色粘質土 (細礫を含む)</li> <li>6 灰黄褐色粘性砂質土 (細礫を含む)</li> <li>7 黒褐色粘性砂質土 (硬くしまる、細礫を含む、X層混在)</li> <li>8 暗褐色砂質土 (硬くしまる、細礫を含む、X層混在)</li> <li>9 暗褐色砂質土 (2cm以下のIXa層ブロックを含む、X層混在)</li> <li>10 黒褐色砂質土 (硬くしまる、2cm以下のIXa層ブロック、細礫を含む、X層混在)</li> </ul> <p>第4段階</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>11 黒褐色粘性砂質土</li> <li>12 黒褐色砂質土 (X層混在)</li> <li>13 暗褐色粘性砂質土</li> <li>14 褐色粘質土 (硬くしまる、細礫を含む)</li> <li>15 灰黄褐色粘質土</li> <li>16 にぶい黄褐色粘質土 (X層混在)</li> <li>17 にぶい黄褐色粘質土</li> </ul> | <p>土壁の崩落土</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>■ 褐色粘質土</li> <li>■ 黒褐色系の粘性砂質土 (含、細礫)</li> </ul> | <p>第3段階</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>18 黒褐色粘質土</li> <li>19 暗褐色砂質土 (X層混在)</li> <li>20 にぶい黄褐色粘質土</li> <li>21 にぶい黄褐色粘質土 (硬くしまる、X層混在)</li> </ul> <p>第2段階</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>22 褐色砂質土 (X層混在)</li> <li>23 にぶい黄褐色砂質土 (硬くしまる、細礫を含む、X層混在)</li> <li>24 暗褐色粘質土 (硬くしまる、細礫を含む)</li> <li>25 褐色粘質土 (橙色粒子を含む)</li> </ul> <p>第1段階</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>26 灰黄褐色粘質土 (硬くしまる、細礫を含む、X層混在)</li> <li>27 黒褐色粘質土 (X層混在)</li> <li>28 黒褐色粘性砂質土 (硬くしまる、細礫を含む、X層混在)</li> <li>29 灰黄褐色粘性砂質土 (硬くしまる、細礫を含む、X層混在)</li> </ul> |
|--|--|---|



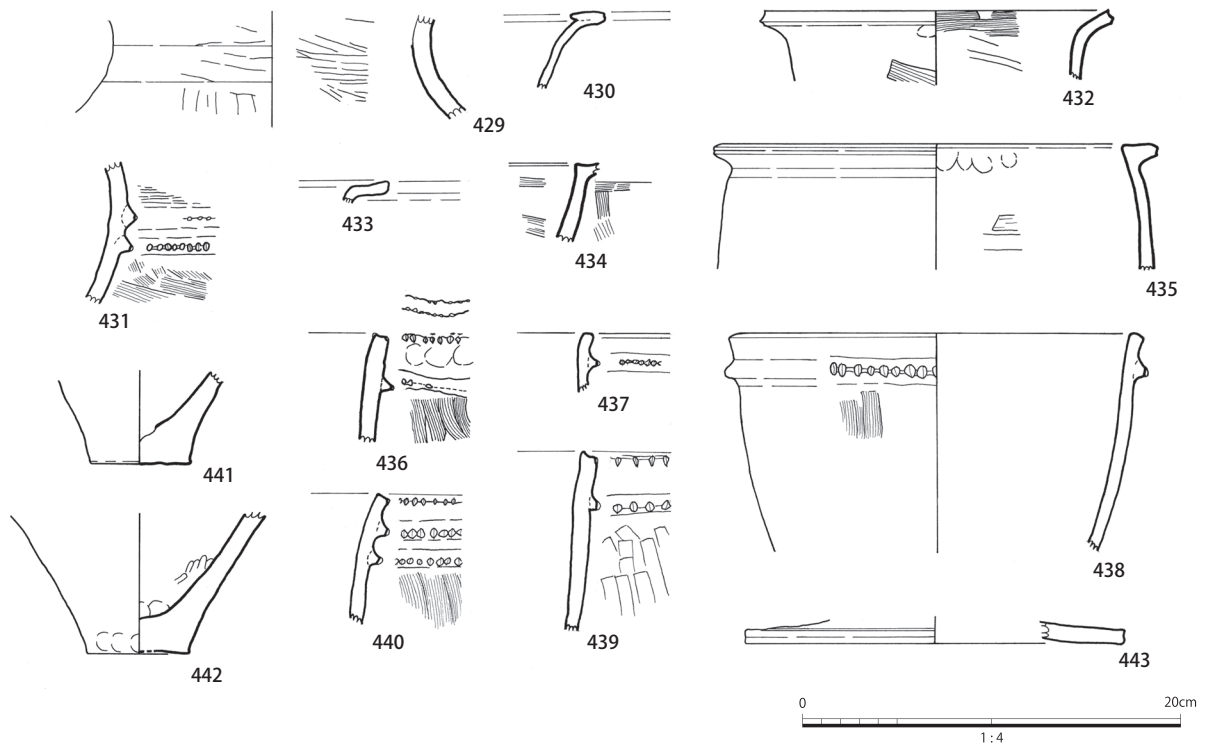
第96図 SE5 断面図

どの黒色系ローム層を掘り抜いて構築されていることから、7～10層も掘削土を盛土としたものがあるいは基本層そのものが流入したと考えておきたい。

その後は大規模な掘り直しを行っていないが、6層は簡易的な溝さらえの可能性はある。そしてSE4と同様に、1～5層の黒褐色系の砂質土が堆積してゆき、環濠としての機能を失っていく。ただし、この層中にはSE4で確認された土器類の大量廃棄は認められなかった。これはSE5が大外の環濠でもあり、生活の中での利用が薄かったことも起因しているのかもしれない。また、出土の遺物もSE4と比べて格段に少ない。この現象についても、居住域からの距離が関係していると思われる。

なお、SE4の壁面に認められた平場や小穴については、SE5に関しては明確なものが確認できなかった。

利用開始期にともなう遺物としては、1段階目の底面近くより壺429が出土した。また、2段階目の底面近くでは甕438・439などがある。最終的に溝を埋める黒褐色系砂質土からは器台443などが出土している。



第97図 SE5 出土遺物

429は板付式系の壺で、内傾する体部からやや外反させながら直立する短い頸部をもつ。頸部外面には強いヨコナデが残る。430は口縁部を水平にする広口壺である。口縁内側を鋤先状に突出させ、口縁端部には凹線がめぐる。431は2条の三角形の刻目突帯をもつ壺の体部で、突帯より上位がミガキ、下位がハケで調整する。432は口縁が緩やかに屈曲する甕で、面をなす端部に凹線がめぐる。433は口縁部を水平に屈曲させる甕で、内面の屈曲部に稜が見られる。肥厚させた端部をやや面に仕上げる。434は小さな三角形の、435は台形状の端部を貼り付けて口縁部を逆「L」字にする甕で、どちらも内側にやや突出が認められる。436～440は下城式系の甕で、436については端部内面にも刻目をもつ。441・442は平底で直線的に伸びる体部となる甕の底部である。443は器台の裾部で、端部は面に仕上げ凹線がめぐる。

## (6) 周溝状遺構 (SL1・2)

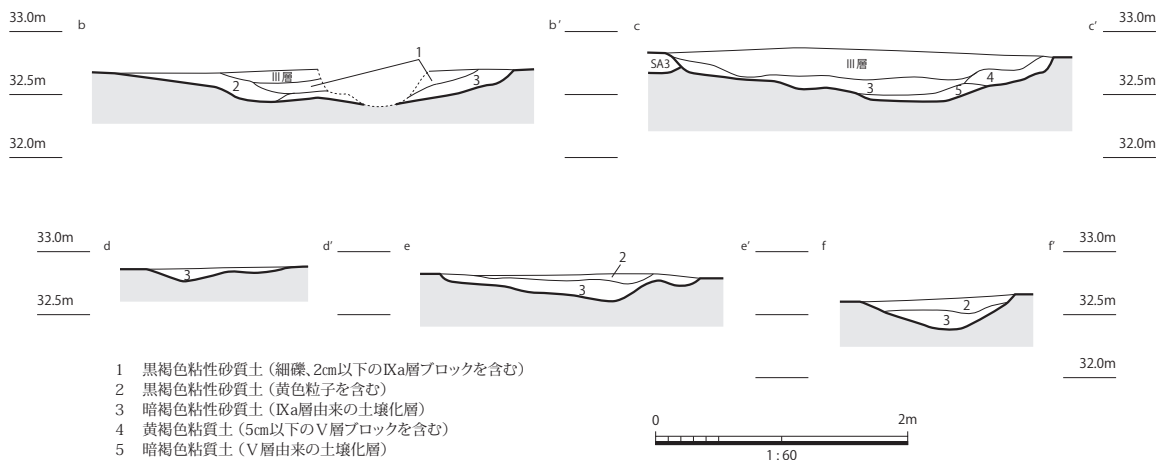
SL1 (第98～101図) 6D～7E区で検出した東西方向に軸をもった楕円形の周溝状遺構である。北周溝の半分ほどは第Ⅲ層の除去後に検出できたが、溝上位部の大半が町道建設に伴って失われているため、基本Ⅸa層中での検出となった。東側については調査区外に至り、SA2・SA3の南側を切るが、SC3との先後関係は不明である。周溝幅については、北側が最大で3.2mと広く、南側は最大で2.2mと差が認められるが、この差は南側の上位部が削平されている影響も大きい。周溝は南北ともに東に向かって傾斜してゆき、検出面からの最大深度は約0.4mを測る。周溝内肩からの規模は、検出面で南北約8.5m、東西7.5m以上となる。なお、西周溝の中央付近は浅く陸橋状を呈しており、幅も約1.0mと狭くなる。周溝埋土については、下位が自然堆積である地山ブロックを含む黒褐色系の粘性砂質土で埋まっており、埋没が進まなかった上位の窪地に第Ⅲ層が堆積している。

周溝より内側については、本来なら第Ⅴ・第Ⅵ層の堆積があったと考えられ、検出面より0.4m程度は高かったはずであるが、町道建設に伴う削平により失われており、周溝の掘削土が周溝内側に積まれたのならばさらに高かったと推測される。

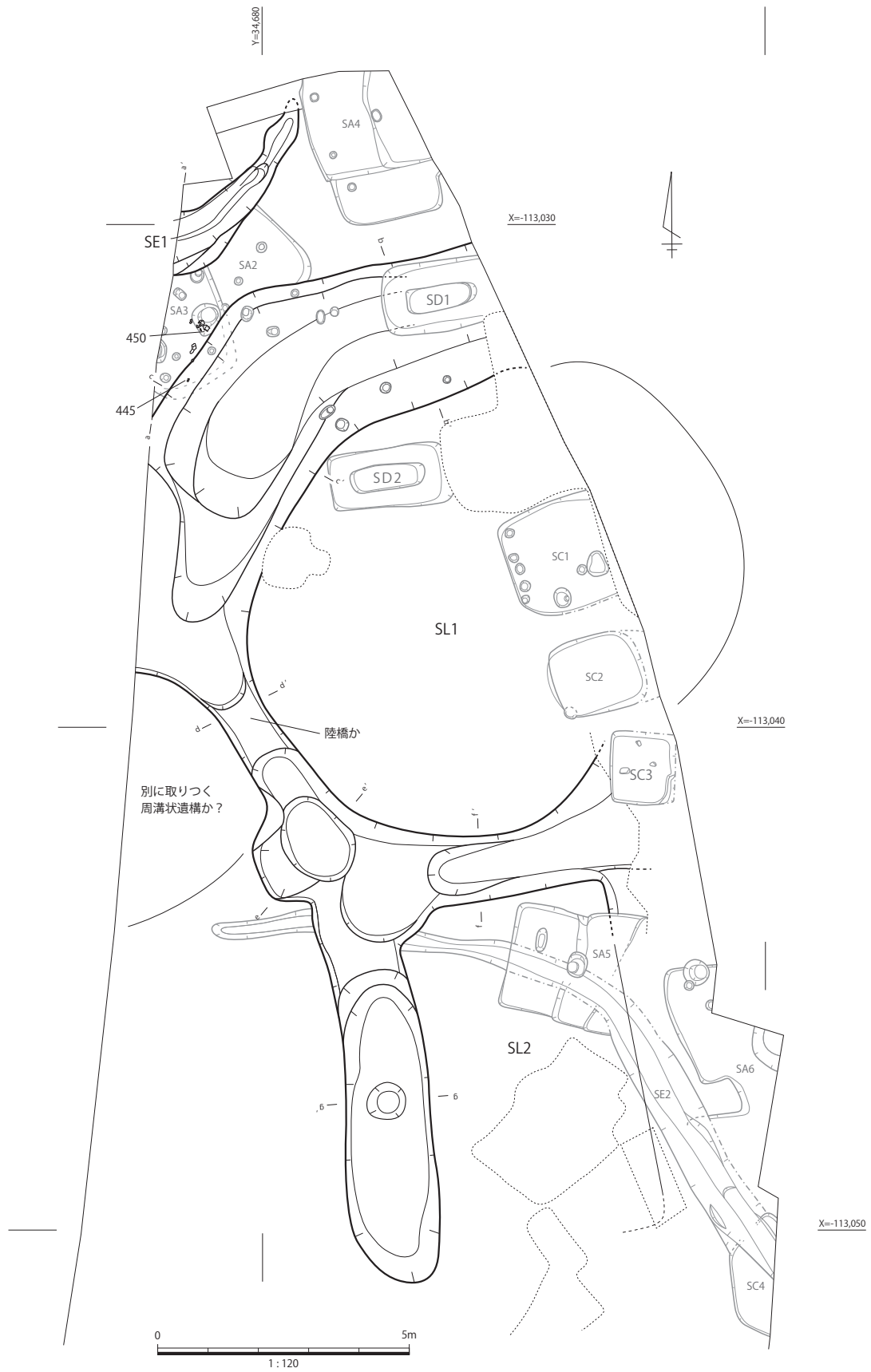
遺物は埋土中から壺を中心に甕・高坏・鉢などが出土したが、上位が削平されていない北周溝での出土量が多い。また、北西側の周溝外肩近くには壺450などの土器が集中する場所があった。SL1と有機的に結びつく何らかの所作が行われた可能性がある。

遺構の帰属時期を示すものは第100図に掲載したが、先行するSE2の埋土などから混入したと思われる弥生時代中期を中心とする土器群(第101図)も多く出土した。

444は小型壺で、口縁端部を小さく玉縁状に仕上げる。445は直線的に立ち上がる頸部から短く外反する壺の口縁部で、面をなす端部の下端がやや下がるものである。土佐V様式の長頸壺に器形が似る。446・447は直立する短い口縁部をもつ複合口縁壺である。448は無頸壺で、端部を面に仕上げる。449～451は壺の底部で、449・450は平底、451は円形の小さな底部をもつ。452は頸部から口縁部にかけて緩やかに屈曲する甕で、口縁端部を面にする。453は頸部から口縁部にかけて明瞭に「く」の字に屈曲する布留傾向甕で、薄手に成形された体部外面は横方向のハケで調整する。454は高坏の坏部で、面をなす端部の外側をつまみ出す。455・456は高坏の裾部としたが、456は器台の可能性もある。458は小型の鉢と

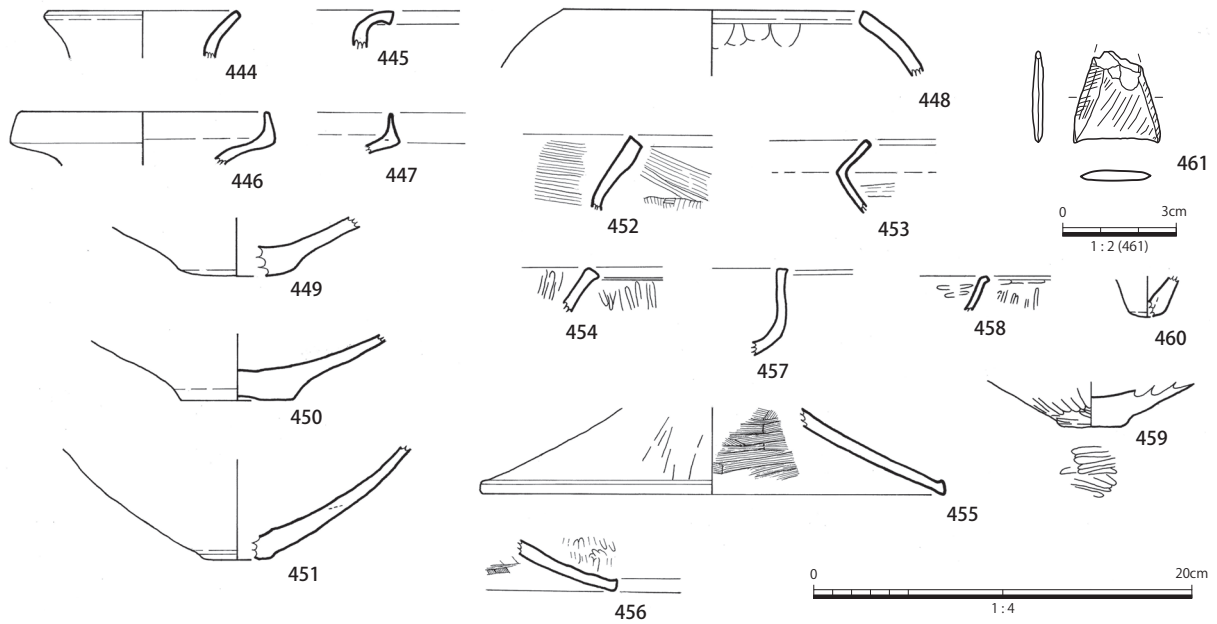


第98図 SL1 断面図



第99図 SL1・SL2 およびSE1 平面図



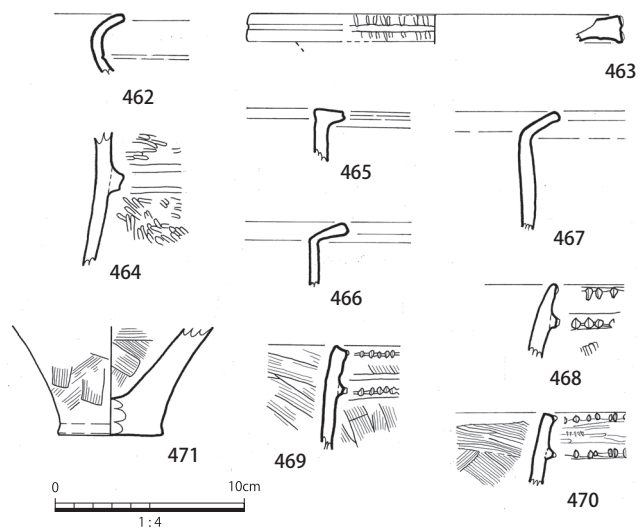


第100図 SL1・SL2 出土遺物 1

SL1 : 444~456・458~461、SL2 : 457

考えられるもので、小さく内湾しながら立ち上がる口縁部に、玉縁状の端部をもつ。459は円盤状の平底の鉢で、底部にも丁寧なミガキが認められる。460はミニチュアの鉢になるものか。461は基部がやや凹む磨製石鉢である。

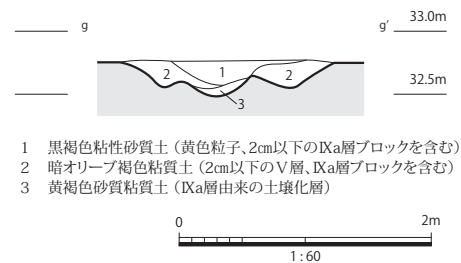
463は広口壺の口縁部で、刻目をもつ面をなす端部に凹線がめぐる。464は台形状の突帯をもつ壺である。469・470は下城式系の甕である。465は口縁部に台形状の端部を貼り付ける甕である。466・467は頸部から口縁部にかけて明瞭に屈曲する甕である。471は平底になる甕の底部である。



第101図 SL1・SL2 出土遺物 2

SL1 : 463~467・469~471、SL2 : 462・468

SL2 (第99~102図) 7E 区において第IXa層中で検出した南北方向に軸をもつ長方形の周溝状遺構である。SL1の南周溝を共有し、南北方向の溝を取り付けて周溝とするが、東周溝の大部分は後世の削平により失われている。南周溝については後世の削平の影響もあり全体的には確認できなかったが、西周溝との接続に関しては当初から構築されていなかった可能性が高い。東周溝については、最大幅約1.7m、最大深度は



- 1 黒褐色粘性砂質土 (黄色粒子、2cm以下のIXa層ブロックを含む)
- 2 暗オリーブ褐色粘質土 (2cm以下のV層、IXa層ブロックを含む)
- 3 黄褐色砂質粘質土 (IXa層由来の土壌化層)

第102図 SL2 断面図

約0.3mを測る。これらを踏まえて、周溝内肩からの規模を見ると、検出面で南北約7.0m、東西約4.0mとなる。周溝埋土については、地山ブロックを含む黒褐色系の粘性砂質土を主体とする自然堆積の層である。

なお、SL1の南周溝とSL2の西周溝が接続する地点で、SL1の南周溝から少しだけ西に張り出す場所がある。SL1とSL2のあり方を踏まえると、さらに別の周溝状遺構がSL1に取りついていた可能性もある。

出土遺物は少なく細片が多い。直接的な帰属時期を示すものは、鉢**457**のみが図化できた。SL1と同様に混入した土器群もここに掲載している。

**457**は碗状の鉢で、口縁端部を面に仕上げる。**462**は板付式系の壺で、頸部から短く外反する口縁部をもつ。頸部との境に沈線を設ける。**468**は下城式系の甕である。

## (7) 遺構に伴わない遺物

### SC9 出土の遺物 (第103図)

土坑 SC9 は古墳時代後期以後の大型土坑であり、埋土中からの出土遺物が多いが、その大半が先行する SE4 や基本Ⅲ層から混入したものであった。このため、それらの遺物に限ってここで報告する。

**472**は山ノ口式系の壺で、貼り付けで形成された口縁部が下方に向かって下がる。**473**は複合口縁壺で、口縁部外面に櫛描波状文をもつ。**474**～**477**は下城式系の甕である。**478**は甕の底部である。**479**は高坏の口縁部で、端部の内外をつまみ出して突出させる。

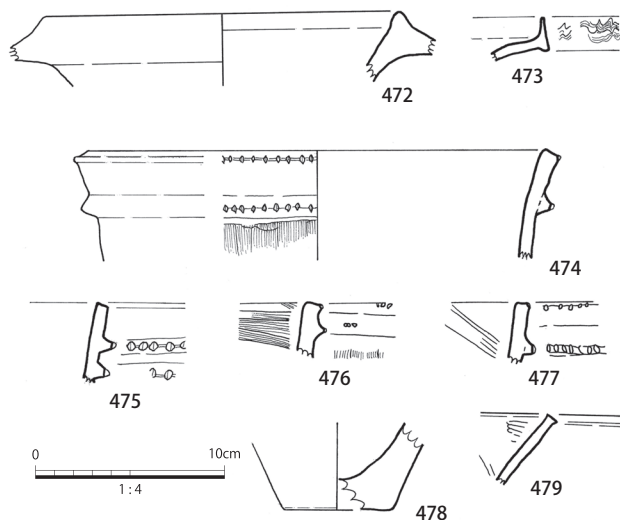
### SN2 盛土出土の遺物 (第104図)

次章で報告する古墳 SN2 では、周溝を掘り上げた掘削土を用いて墳丘が築造されていることから、古墳の盛土中から第Ⅲ層に包含される遺物が出土した。古墳そのものに直接係わることがないため、切り離して報告する。

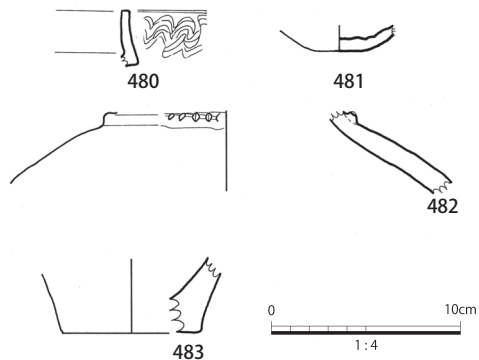
**480**は複合口縁壺の口縁部で、外面に櫛描波状文をもち、端部を面にする。**481**は壺の底部で、小さな平底を呈する。**482**は壺の肩部にあたり、頸部との連結部に刻目をもつ三角形の突帯をめぐらす。**483**は平底になる甕の底部と思われる。

### 基本層内出土の遺物 (第105図)

**484**は下城式系の広口壺である。水平になる口縁部上面に円形浮文をもち、面をなす口縁端部に2段の竹管文を施す。**485**は内傾する頸部から短く外反する口縁部をもつ板付式系の壺で、端部をやや面にする。**486**・**487**は広口壺の口縁部である。**488**は三角形の口縁部をやや下方に向かって下げる壺である。口縁部上面にはミガキが施され、欠損するが内側に小さな突出をもつ。**489**は小型の直口壺である。**490**は2条の連続する三角形の突帯をもつ壺の体部で、突帯上位の外面にミガキが確認できる。下城式のものか。**491**は台形状の突帯上に深い沈線を設ける壺の体部である。須玖式系のものか。**492**は内傾する体部からやや外反気味に直立する頸部をもつ壺で、体部と頸部の境界に三角形の突帯を設ける。外面は赤味が強い。**493**～**498**は壺の底部である。**493**は扁平な球形をなす壺と思われ、底面を含めた外面に丁寧なミガキが施されている。**494**はやや大きめの円盤状の底部を貼り付ける。**495**～**498**は広い平底となる。**499**～**507**は下

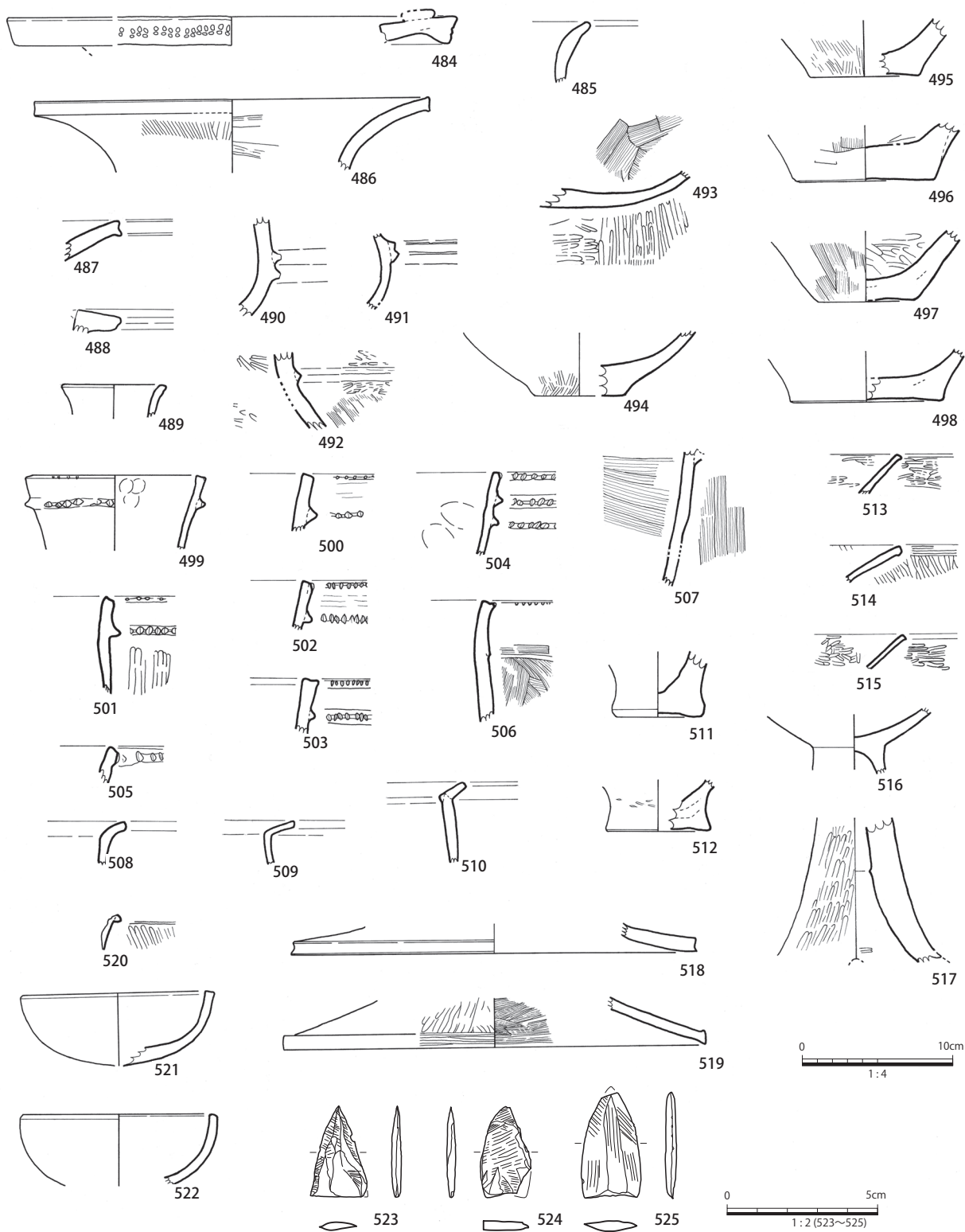


第103図 遺構に伴わない遺物 (SC9)



第104図 遺構に伴わない遺物 (SN2 盛土)

城式系の甕である。506は突帯が欠落するが、貼り付けのためか器壁に横方向のハケが確認できる。508は緩やかに屈曲する短い口縁部をもつ甕である。510は口縁部がやや逆「L」字をなす甕で、口縁内側に突出部が見られる。511・512は甕の底部で、511は裾部があまり外に広がらない脚台状で、512は端部が外方に張り出す。513～517は高坏である。513～515は口縁端部を面に仕上げて外面をつまみ出す。516は脚部から坏部、517は脚部で、脚柱部と裾部との境に円形の透かしが確認できる。518・519は器台の裾部で、518は端部に凹線がめぐり、519は面をなす端部の上下面ともつまみ上げられている。520は小型の鉢で、玉縁状の口縁端部をもつ。521・522は碗状の鉢で、口縁端部を面に仕上げている。523は平基式、524・525は基部がやや凹む磨製石鏃である。



第105図 遺構に伴わない遺物（基本層内）

## 5 古墳時代終末期以降の遺構と遺物

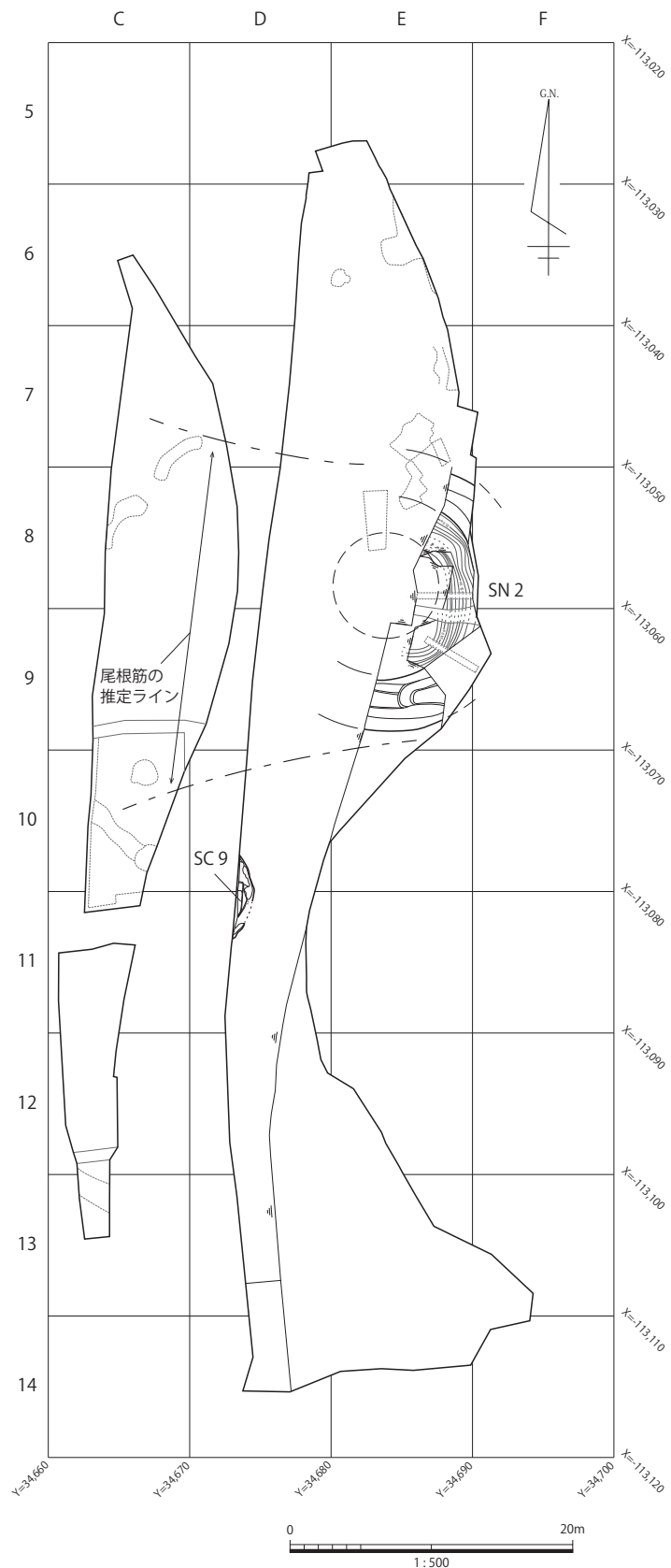
### (1) 遺構の分布 (第106図)

本来ならば遺物包含層である第Ⅱ層の除去後に検出することができる、古墳時代終末期の生活面である。ただし、第Ⅱ層についてはJ1c地点の台地東端でしか確認ができず、生活面そのものも造成工事などで削平が及んでいる場所がほとんどである。このため、遺構の検出はJ1c地点だけであったが、円墳1基と大型土坑1基を検出した。

J1c地点の旧地形としては、調査地点の中央北より付近に東西方向の小さな尾根筋が形成されており、円墳はその最東端に築かれている。大型土坑は、円墳より南西側の尾根筋を下った地点にあり、西側の大部分が国富町調査C地点で検出されているものである。

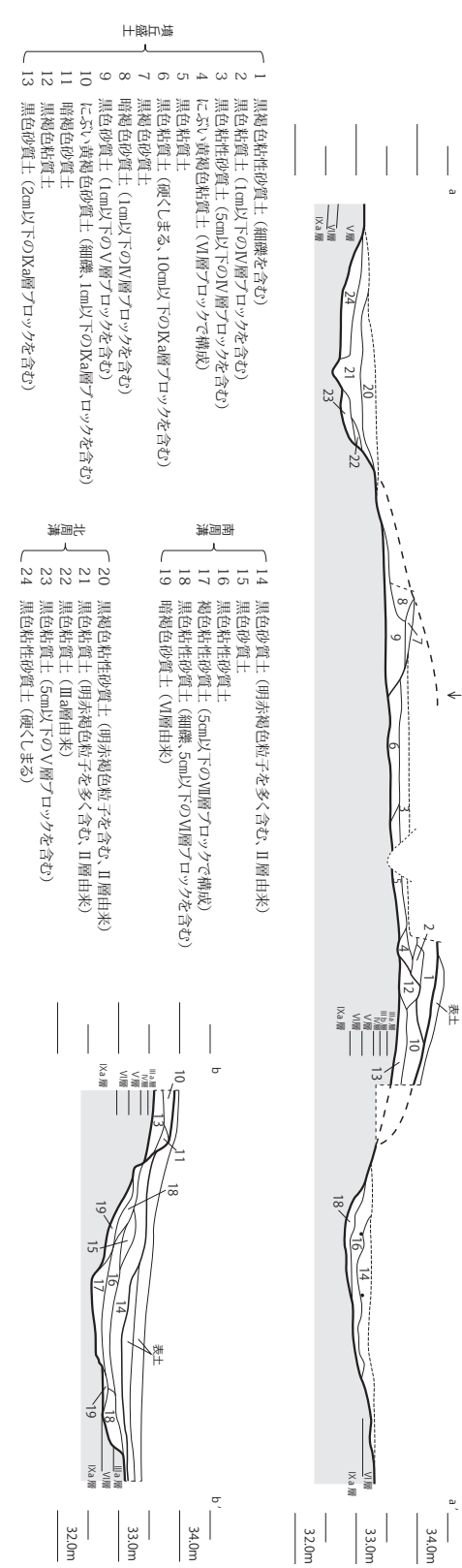
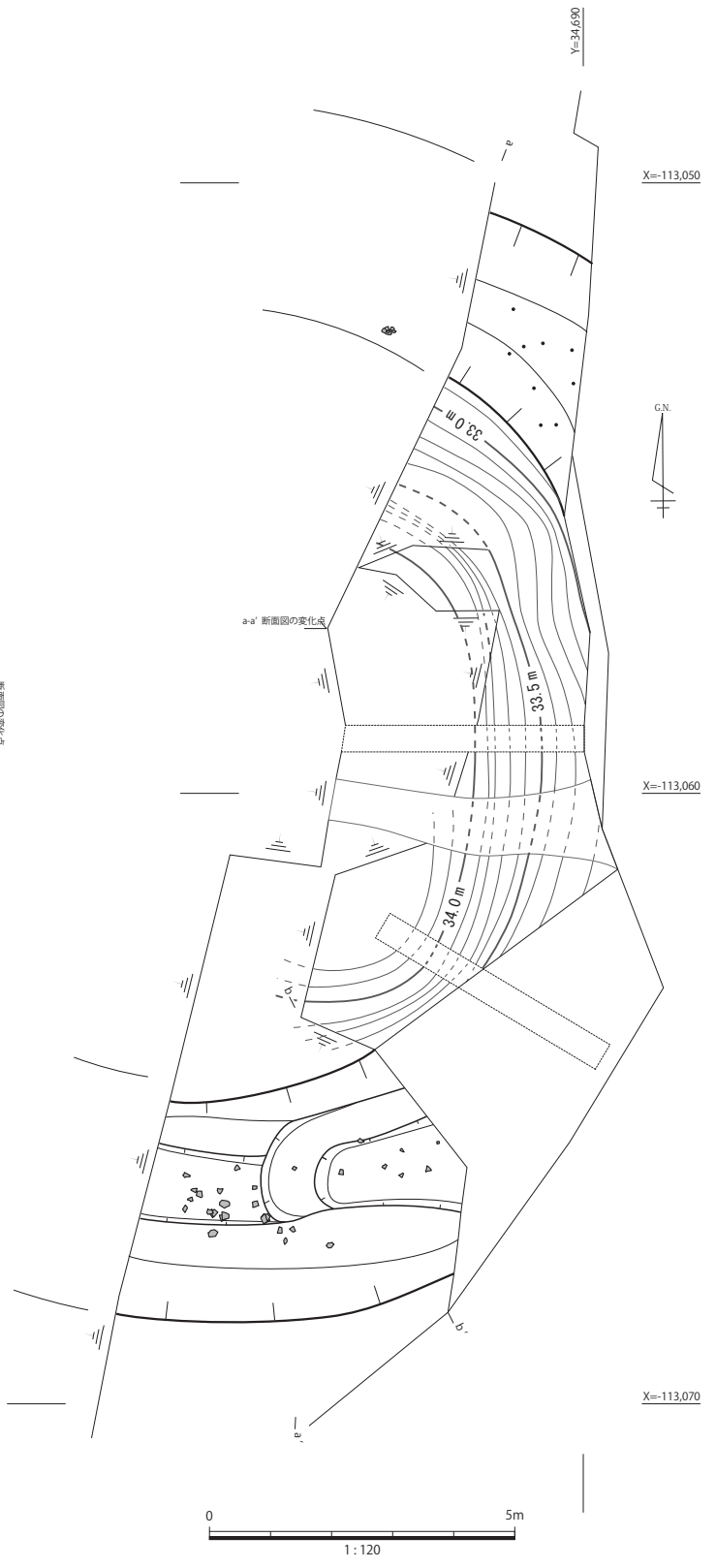
### (2) 古墳 SN2 (第107～110図)

8E・9E区で検出した円墳で、地形の高まりは調査以前の地表観察において確認できたが、町道建設に伴って西側の大部分が消滅している。塚原台地の縁辺において東西方向に形成された小さな尾根筋の最東端に立地する。標高は33.6mで、墳丘構築面については当該調査区の中でも最高地点である。周溝の外肩とは南北方向のみ約0.5mの比高差がある。なお、調査地点の東側は崖面にあたり、安全を考慮した控えを取ったため、詳細な調査を行っていない。



第106図 古墳時代終末期の遺構分布図





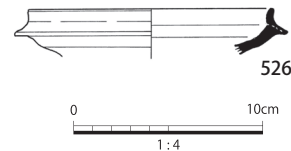
- |  |   |   |
|--|---|---|
| <p>埋設土</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>1 黒褐色粘性砂質土 (細礫を含む)</li> <li>2 黒色粘質土 (1cm以下のIV層ノロツクを含む)</li> <li>3 黒色粘性砂質土 (5cm以下のV層ノロツクを含む)</li> <li>4 にごい、黄褐色粘質土 (VI層ノロツクで構成)</li> <li>5 黒色粘質土</li> <li>6 黒色粘質土 (狭くしまる、10cm以下のIXa層ノロツクを含む)</li> <li>7 黒褐色砂質土</li> <li>8 暗褐色砂質土 (1cm以下のVI層ノロツクを含む)</li> <li>9 黒色砂質土 (1cm以下のV層ノロツクを含む)</li> <li>10 にごい、黄褐色砂質土 (細礫、1cm以下のIXa層ノロツクを含む)</li> <li>11 暗褐色砂質土</li> <li>12 黒褐色粘質土</li> <li>13 黒色砂質土 (2cm以下のIXa層ノロツクを含む)</li> </ul> | <p>断層</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>14 黒色砂質土 (明赤褐色粒子を多く含む、II層由来)</li> <li>15 黒色砂質土</li> <li>16 黒色粘性砂質土</li> <li>17 褐色粘性砂質土 (5cm以下のVII層ノロツクで構成)</li> <li>18 黒色粘性砂質土 (細礫、5cm以下のVI層ノロツクを含む)</li> <li>19 暗褐色砂質土 (VI層由来)</li> </ul> | <p>北層溝</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>20 黒褐色粘性砂質土 (明赤褐色粒子を含む、II層由来)</li> <li>21 黒色粘質土 (明赤褐色粒子を多く含む、II層由来)</li> <li>22 黒色粘質土 (IIa層由来)</li> <li>23 黒色粘質土 (5cm以下のV層ノロツクを含む)</li> <li>24 黒色粘性砂質土 (狭くしまる)</li> </ul> |
|--|---|---|

第107図 SN2平面・断面図

① **墳丘** 墳丘は表土直下すぐに検出でき、全体の1/3程度、東西約5.0m、南北約11.0mの規模で残存していた。残る墳裾を頼りに推定される墳丘の規模は、直径約12.7mの円墳が想定できる。墳丘は第Ⅲa層をベースにすべて盛土で構成されており、最大0.6mの高さが残っている。墳丘の構造は断面観察によって確認ができ、構築面をある程度平らに整地し、黒褐色系の砂質土を主体に墳丘裾をめぐるよう土手状に盛土を施した後、土手の内部を黒色系の粘質土で埋めて積み上げている。盛土はどちらの段階も比較的大きな単位で構成されており、意識的に突き固めた様子は見受けられなかった。墳頂平坦面と埋葬主体部については削平のため判然としないが、墳丘斜面の鈍い傾斜角度を考えると周溝の掘削土を盛り上げた程度の低い墳丘に広い平坦面であったと考えられる。ただし先述のとおり、南北方向にのみ墳丘と周溝外肩のベース面に0.5m程度の比高差があることから、南側からの見かけ上の墳丘高は1.1mを超える。

② **周溝** 周溝については北側と南側の一部を確認した。東側は調査地外となるが、すぐに崖面になることを考えると、周溝は一周しない可能性もある。周溝幅は北側が約3.7m、南側が約5.0mの規模であったことが断面観察により確認でき、南側が広く設定されていることがわかる。残りのよい南周溝を概観してみると、東側に傾斜させながら基本層を掘り込んだ周溝の深さは外肩から最大で約0.4mを測り、埋没の過程としては、内外壁面に18層・19層のような基本層ブロックで構成される周溝掘削時に生じた層が見られ、最下部に墳丘の崩落土である17層が堆積する。古墳造営以後は黒色粘性砂質土（16層）が溝底に徐々に溜り、最終的に第Ⅱ層を由来とする明赤褐色粒子を多く含む黒色砂質土（14層）で包含されていた。

③ **出土遺物** 古墳に伴う遺物は周溝内からの出土がほとんどであるが、須恵器坏身**526**のみが墳丘上で出土した。周溝内での遺物は、残りの良い南側での出土が多く、先の14層の下位に集中しており、数個体分の須恵器甕の破片が散らばっていた。須恵器の出土位置が、周溝が半分程度埋まった高さであること、周溝内に散らばっていること、墳



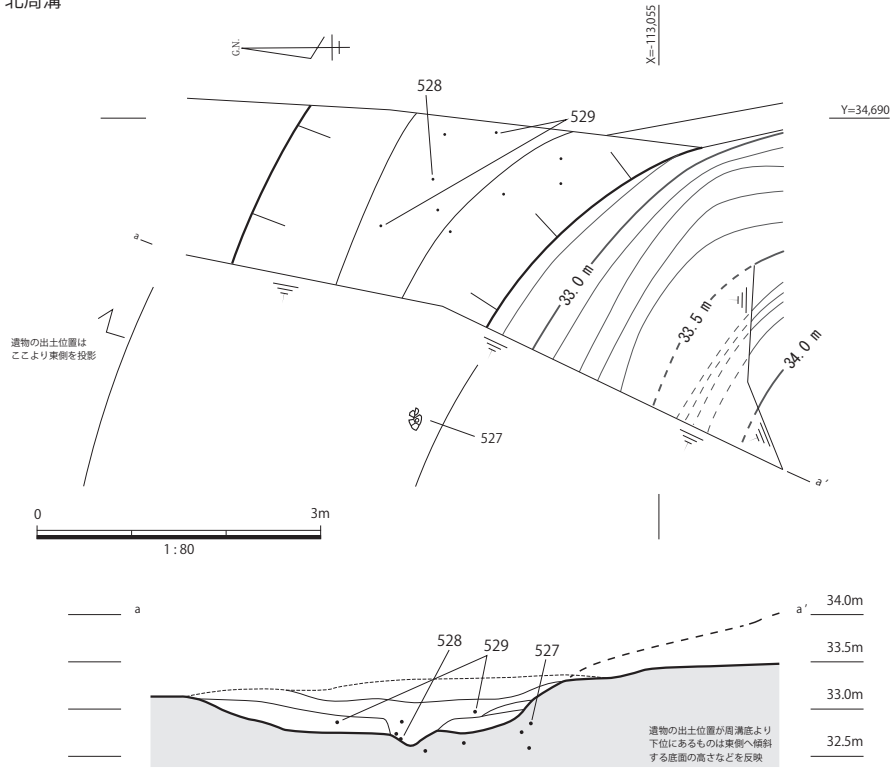
第108図 SN2 墳丘平坦面出土遺物

丘に近いほど量が多くなることなどを鑑みると、古墳築造後、ある程度してから墳丘平坦面上で祭祀が行われた後に、破碎の上にはばまかれたものと考えられる。北周溝に関しても須恵器甕などが出土し、見掛け上底面に近いものが多いが、第Ⅱ層由来の21層下層からのものである。なお、北周溝のうち削平された西側の底面付近にあたる場所で、坏部を下に向けた土師器高坏**527**が出土し、これに関しては、ほぼ完形に近い形を保った状態であったことから、墳丘平坦面で供献土器が転落したものとする。

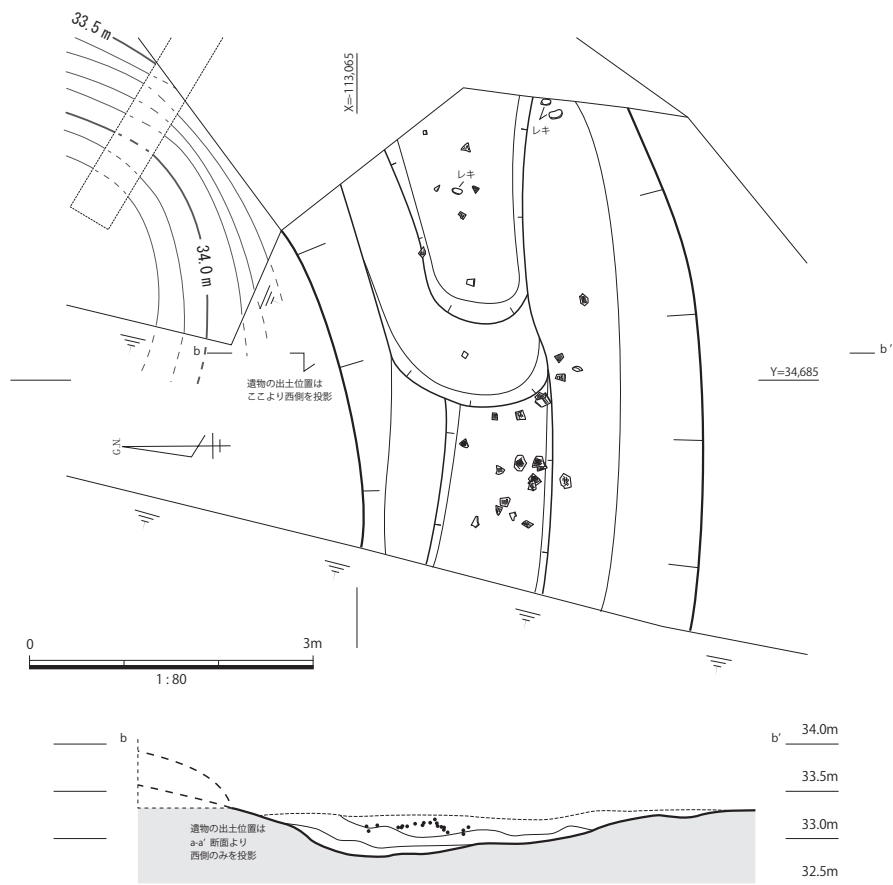
**526**は墳丘平坦面出土遺物である。須恵器坏身で、外反しながら直立する短い口縁部をもつ。断面の色調が赤褐色を呈し、焼き上がりはあまい印象がある。陶邑編年TK209形式に属するものと思われる。

**527～530**は北周溝内出土遺物である。**527**は土師器高坏で、小型のものである。脚部は低い脚柱から大きく外反させる裾部をもち、扁平な坏部は内湾させながら外に開き、口縁端部を鋭くつくる。**528～530**は須恵器甕である。**528**は外面に縦位の平行タタキを施したのちに、カキメ調整がなされる。内面にはナデにより摺り消されるが、同心円痕が確認できる。外面には自然釉が見られ、釉が垂れたものか内面に黒色粒が散見される。断面の色調は黒紫色を呈し、硬質に仕上がる。**529**は外面に平行タタキを格子状に施す。内面には同心円痕が残るが、上位がナデによりやや摺り消される。**530**は外面に横位の平行

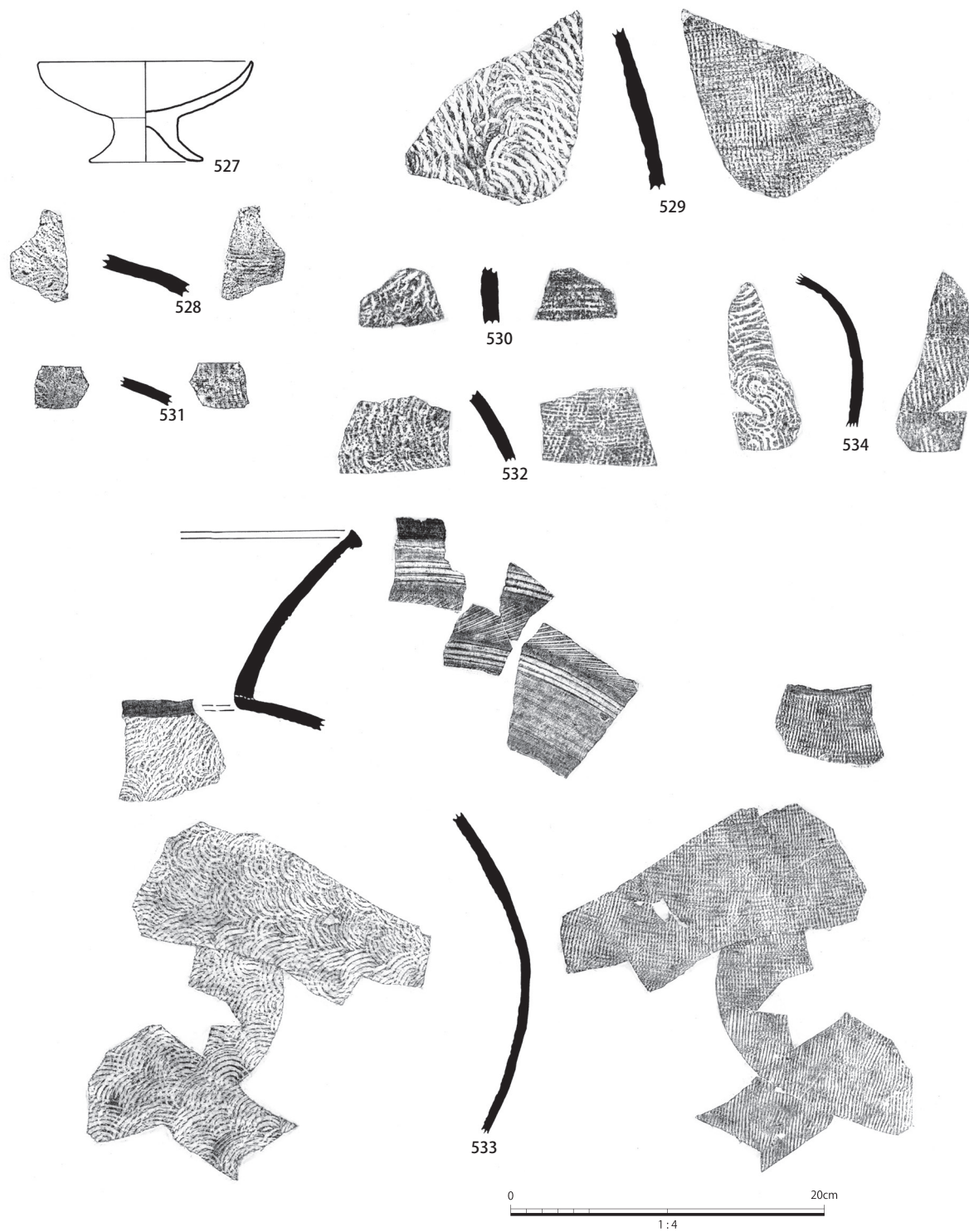
北周溝



南周溝



第109図 SN2 周溝平面・断面図および遺物出土状況図



第110図 SN2 周溝内出土遺物  
北周溝：527～530、南周溝：531～534

タタキ、内面に同心円痕が確認できる。断面の色調は褐色で、軟質の仕上がりである。

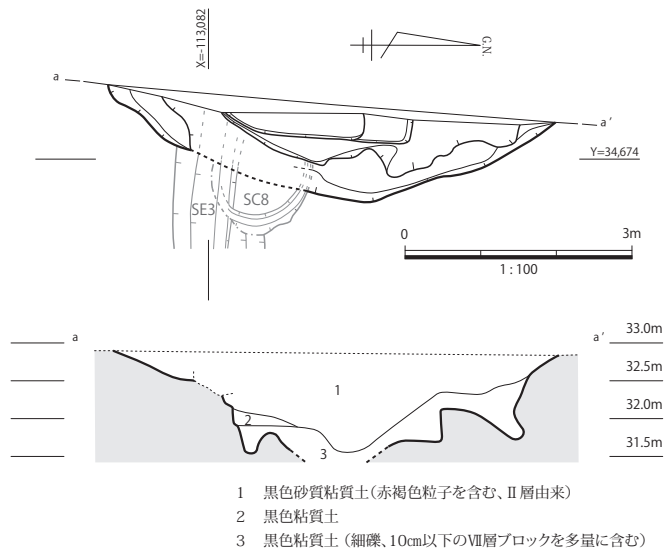
531～534は南周溝内出土遺物である。531～533は須恵器甕である。531・532は外面に縦方向の平行タタキののちにカキメで調整する。内面には同心円痕がみられるが、ナデにより摺り消される。このうち531は内外面ともに黒色で、断面の色調は赤紫色を呈する。SC9出土の536とよく似る。532は528と同一個体の可能性があり、それぞれ南北の周溝内から出土していることから、人為的な投げ入れがあったことは想像に難くない。533は図上で復元したものである。口縁部のやや下方と頸部中位にともに3条の沈線をめぐらせ、その間に連続する斜位のヘラ描き沈線文を施す。口縁端部は粘土帯を貼り付けて外側を三角形にし、さらにヘラ状工具で下部に沈線をめぐらし下垂させているが、口縁部との接続をナデ等で仕上げていない。また、内側は強いナデによってつまみ出されている。体部上位は平行タタキを施し、横位ののちに縦位をなすことで格子状に見える。下半は縦位の平行タタキのみである。内面は同心円痕が明瞭に残る。534は須恵器平瓶の肩部にあたると思われる、縦位の平行タタキを施したのち、カキメがなされている。外面には自然釉が見られ、断面の色調は赤紫色を呈し、硬質な焼き上がりである。

### (3) 土坑

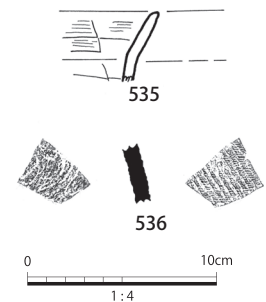
SC9 (第111・112図) 10D・11D区で検出した円形に復元できる土坑で、国富町調査C地点で検出した大型土坑の東端にあたる。町道建設に伴って上位部が失われてはいるが、第V層中で検出できた。検出面で東西1.3m以上、南北約6.0mを測るが、国富町調査の規模を合わせると直径約7～8mの土坑となる。安全面を考慮して底面までの掘削は行っておらず、検出面から約1.5mまでを確認した。断面形状は全体として播鉢状になっているが、構築時の作業に供するためか所々に平場が確認できる。埋土は3層に細分でき、下層は大きめの地山ブロックを含む黒色系の粘質土を主体に堆積するが、上位の大半が第II層由来の埋土で構成されており、最終的に一気に埋まった感じが認められる。

埋土中からの出土遺物は多いが、その大半が先行するSE4や第III層から混入したもので、土坑本来の時期を示すものは土師器甕535、須恵器甕536など少ない。535は頸部から口縁部にかけて緩やかに屈曲するが、内面の境界にやや稜をもつ甕で、端部は内傾する面にする。536は須恵器甕で、外面に縦方向の平行タタキを施したのち、カキメで調整する。内面には同心円痕がみられる。内外面ともに黒色で、断面の色調は赤紫色を呈し、硬質に仕上げている。先述のSN2南周溝出土の531とよく似る。

埋土中からの出土遺物は多いが、その大半が先行するSE4や第III層から混入したもので、土坑本来の時期を示すものは土師器甕535、須恵器甕536など少ない。535は頸部から口縁部にかけて緩やかに屈曲するが、内面の境界にやや稜をもつ甕で、端部は内傾する面にする。536は須恵器甕で、外面に縦方向の平行タタキを施したのち、カキメで調整する。内面には同心円痕がみられる。内外面ともに黒色で、断面の色調は赤紫色を呈し、硬質に仕上げている。先述のSN2南周溝出土の531とよく似る。



第111図 SC9 平面・断面図



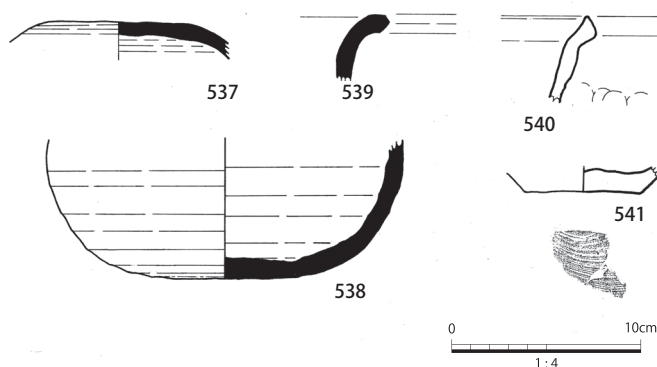
第112図 SC9 出土遺物



#### (4) 遺構に伴わない遺物 (第113図)

遺物包含層等から出土した古墳時代終末期以降の遺物のうち、特徴的なものをここで報告する。

537は須恵器坏蓋である。天井部は回転によるヘラケズリで調整され、扁平に仕上げている。硯あるいは砥石などとして転用したものか、天井部は非常に平滑である。538は須恵器壺の平底になる底部で、下半はヘラケズリで調整される。539は陶器の甕で、外反する口縁部の端部を玉縁状にする。540は瓦質の鍋である。口縁端部を上方につまみ上げる。下端を強いナデによりへこまして断面を三角形にする。541は土師質皿で、底面に糸切り痕が残る。(二宮)



第113図 古墳時代終末期以降の基本層等出土遺物

## 6 J1 地点のまとめ

塚原台地の最東先端に位置するJ1地点では、調査区中央の北よりにある東西方向の小さな尾根を境にして、南北方向に徐々に傾斜する旧地形で、傾斜がきつくなる最南端ではさらに東側に突出している。

### (1) 旧石器時代の様相

旧石器時代では、始良 Tn 火山灰層 (第IX層) 上位の第VII層と第VI層で石器群を確認し、第VII層を第I文化層、第VI層を第II文化層とした。

第I文化層である第VII層は、J1地点を横断する尾根筋上で確認しており、橙色粒子および霧島小林降下軽石を含む暗オリーブ褐色粘質土で、やや硬くしまるローム層である。遺物量は少ないが、ナイフ形石器、石核、礫器、磨石等が確認されている。ナイフ形石器は弥生時代の竪穴建物の埋土より出土しているが、第I文化層の遺物として取り扱った。一部石器の集中がみられる箇所では剥片と石核の接合資料を確認しており、何らかの作業が行われていた可能性が高い。石材は頁岩が大部分を占め、砂岩、ホルンフェルスも出土している。また、礫群は2基確認されている。礫は破碎したものが多く、僅かに掘り込みが確認できる。

第II文化層は第VI層で確認されており、細石刃、細石核、スクレイパー、石斧、砥石等が出土している。細石核は、船野型、畦原型、野岳・休場型に相当するものを確認した。船野型の細石核打面上には、細石刃剥離とは直接関係しない側面からの調整が認められるものがあり、これは、従来から指摘されている細石刃剥離に伴う固定具装着の可能性があると(宮田1998)。(後藤)

### (2) 縄文時代の様相

縄文時代早期では、遺構として炉穴1群、集石遺構23基、配石遺構1基を確認した。炉穴の遺物は、早期の貝殻文系土器に属する土器片3点と砂岩製の破碎した台石1点が出土した。

集石遺構は、掘り込みや配石の有無、礫の密度による分類を行った結果、8分類中7分類に分けるこ

とができ、約半数を占めたのが掘り込み有り・配石無し・礫密集の12基だった（第2表）。種別の比でみると、掘り込みの有無では15：8、配石の有無では5：17、礫の密集・散乱では16：7であり、種別としても、掘り込み有り・配石無し・礫密集の形式を好まれる傾向にあることがわかる。遺物は、貝殻文系に属する土器片5点、何れも頁岩製のスクレイパー3点と打製石斧1点が出土している。ただし、SI9と20から出土した遺物は、掘り込みを持たない類型の遺構で礫に混在して出土したもので、その性格上、厳密に遺構との同時性について言及できない。

配石遺構は、掘り込みの軸はほぼ南北をとり、長軸1.15m・短軸0.6mに大型の礫を配置した長方形の箱型を呈し、掘り込み底部に円礫2個を配置している。礫に囲まれた部分の埋土は周囲のV層と酷似しており、早期の所産としたが、埋土中より遺物が出土していないため厳密な時期や用途は不明である。なお、同時期における類似形態の遺構は、小林市の内屋敷遺跡（宮崎県埋文セ1999）などで確認されている。

縄文時代早期の土器は、丘陵の先端部付近とその北にある谷の頂部の近くに濃密に分布している。ここまで「貝殻文系」と表記してきた出土土器の中で多数を占める一群は「早期九州貝殻文系土器様式」（新東1989）や「南九州貝殻文系土器」（黒川忠広編2002）と総称されてきたものである。最も数量的に多い加栗山式のほか、前平式の新段階や吉田式の中でも古段階に位置づけられる吉田I式（上杉2003）、「宮崎における貝殻文系土器」たる別府原式2式・3式（金丸2004）など、主に早期前葉から中葉にかけての型式と、中葉でも後半段階にあたる下剥峯式に加え、押型文系に属する手向山式も出土している。205は密に施された楔形突起の特徴が吉田I式に近似するが、吉田式を特徴付ける貝殻腹縁の押し引きによる胴部文様とは異なり、縦方向に列点状の圧痕文を施しており、器面から施文具を話すことなく連続させていたか否かは明瞭でないが、押引文との関係をうかがわせる施文方法となっている。加栗山式と吉田式の間を埋める小牧3A段階（前迫2000）に該当する可能性もある。211は前平式に該当する個体と考えられるが、斜め方向にやや波打ちながら不規則に条痕を施しており、前平式の規範が崩れつつある現象とも考えられる。213は別府原2式の特徴を備えているが、口縁部外面の文様が縦方向の条痕文となる。216・217は口唇部形態や内面の丁寧なナデ調整から別府原3式に類似するものと判断したが、口縁部外面の工具による刺突文などの文様は認められない。228・229は貝殻文系土器の底部で、底径の大きさからして前平式か加栗山式に相当する個体のものと考えられる。当地点出土の加栗山式の破片は、多くは橙色系の色調を呈しており、色調の類似から当型式に属する可能性が高い。

石器は、石鏃、尖頭状石器、スクレイパー、石斧、石錘、礫器、磨石、敲石、砥石等が確認されている。土器と分布状況に大きな差異はない。（後藤・吉本）

### （3）弥生時代前期末～古墳時代前期前半の様相

今回の調査での特筆すべき成果である集落を囲う3条の環濠は、国富町調査E地点の成果を踏まえて円形にめぐることが確認できた内環濠SE2（北側）とSE3（南側）が調査地点の中央付近から北側で、中環濠SE4と外環濠SE5が最南端で検出できた。環濠内の距離が南北方向で約38.0mを測る内環濠は、弥生時代前期後半に環濠として整えられており、1度の掘り直しののち、前期末～中期初頭には環濠としての役割を終えていたと考えられる。そして、内環濠より約20～25m南の位置に、内環濠と比べて規模が非常に大きくなる中環濠SE4と外環濠SE5を設けている。中環濠で3段階、外環濠で5段階の掘り直しが確認できるが、最初期の構築時期に関しては、ともに前期末～中期初頭が想定できる。中期以

降、出土する土器類の量が調査地点全体で増えることもあり、塚原台地上の集落規模が大きく展開するのに対応する形で、内環の廃絶後まもなく中・外環濠が構築されたと考えられ、あるいは同時併存していたとしてもその期間は短かったものと思われる。最初期の中・外環濠は、中期中葉頃を境に数度の掘り直しを行いながら規模を縮小させてゆくが、環濠そのものの維持と管理は後期以降には継続していかない。また、検出面では確認できなかったが、断面観察によって土塁の存在が指摘できる堆積が認められ、基本的には中環濠と外環濠の間に構築されており、時期によっては内環濠の内側と外環濠の外側にも存在していたと考えられる。

環濠が維持されていた時期の遺構としては、中・外環濠構築以後の竪穴建物が主流で、建物の時期としては凡そではあるが、SA2 (SA3に先行)・SA3 (中期末～後期前半)・SA7 (中期後半期)・SA8 (中期前半期)・SA12 (中期後半期)があり、建物配置に関する利用時期による傾向は、特に認められなかった。なお、内環濠の維持期である前期後半～中期初頭に帰属する遺構は今回の調査では検出できなかったが、町道建設による削平によって内環濠の内側について失われた場所が多いことに起因する可能性も高い。

弥生時代後期には塚原台地の集落は一度衰退するが、台地上に再び人々の営みが戻ってくるのは後期後半頃と考えられ、古墳時代初頭との明確な分離は難しいところではあるが弥生時代終末期までの遺構数が増加する。この時期の集落は、竪穴建物 (SA4・SA5・SA6・SA9) と土坑 (SC1～SC8) で構成される。竪穴建物に関しては、深い主室を設けて、段差を付けた棚状の副室を取り付けるものが多い。土坑のうち、SC7は袋状土坑であるのに対して、SC1～SC5は正方形ないし長方形を呈するもので、なかでもSC1～SC3は規模も大きく深度も約1.0mと深い (SC3については配石をもつなど形態に違いがある)。いずれも貯蔵穴であったと考えられ、SC1～SC3のように連続して群をなす状況は特徴的である。また、円柱形で底面に壁溝をもつSC8は、国富町調査E地点で検出された同形態のものがあ、検出地点としてはこの周辺に限定できる。

なお、弥生時代中期集落を囲う環濠としての役割を終えた中環濠SE4・外環濠SE5は、この段階でも埋没することはなく0.5m程度の深さがある溝として存在していた。また、中環濠SE4の北側には柱穴列が確認でき、環濠が維持・管理されていた際には土塁が設けられていた場所であったことから、柱穴列は後期以降に設けられたと考えられる。このことから、規模の縮小した中環濠SE4は、集落を限る溝と柵列としての役割を担ったと考えられ、集落の廃絶にともなうものか、最終的に土器類の大量廃棄が認められた。ただし、外環濠SE5には土器類の廃棄はほとんどなかったことから、集落域としての認識はなかったのかもしれない。

古墳時代になるとJ1地点ではそれまでの主要な生活の場ではなくなり、初頭頃に2段に掘削される土壌墓SD1・SD2が調査地点の北側において造られる。最北に位置する弧をなす溝SE1も同時期のもので、形状から周溝状をなすと考えられる。続く前期前半頃では同じ場所に周溝を共有する周溝状遺構SL1・SL2が構築される。周溝状遺構の性格にもよるが、J1地点の北半は、古墳時代以降、生活とは切り離された場所になったと考えておきたい。なお、J1地点の南半には、前期前半～中葉頃の竪穴建物SA1・10があり、集落規模としてはかなり縮小することが判明した。遺構数に限りがあるために一概には言えないが、調査地中央の尾根を境とした可能性もある。

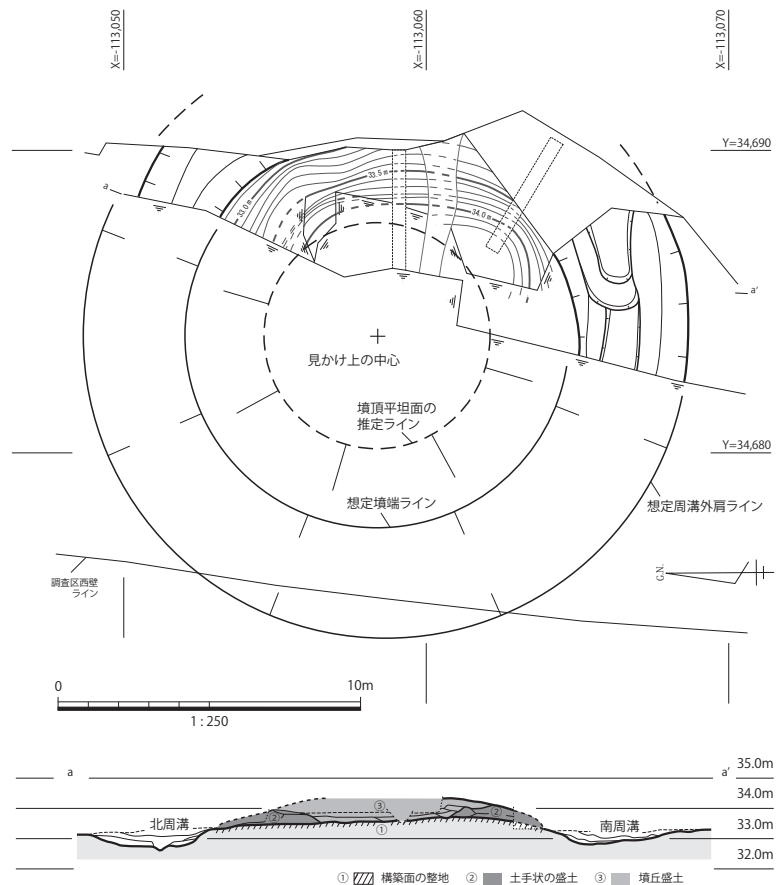
#### (4) 古墳時代終末期の様相

J1 地点では、古墳時代前期前半以降、目立った土地の利用はなかったが、古墳時代終末期になると調査地点の中央北より付近にある東西方向の小さな尾根筋の先端に円墳 SN2 が築かれており、円墳の南西側で大型の土坑 SC9 が同時代頃に掘削されている。

円墳 SN2 は全体の1/3程度が残っているだけであったが、墳丘の推定規模としては直径約12.7mの円墳が想定できた。また、埋葬主体部は失われているが、墳丘斜面上で陶邑編年 TK209 形式相当の須恵器坏身が、北周溝の底面で転落した土師器高坏が出土しており、墳丘平坦面上で飲食の儀礼としての土器供献があったと考えられる。さらに埋葬後は、ある程度周溝が埋まった段階で、後の祭祀として墳丘平坦面上から破碎した須恵器甕を周溝内に投げ入れる行為が行われたことが判明した。ただし、投げ入れられた須恵器甕が陶邑編年 TK217 形式に並行することから、時間的な経過としては、大きな隔たりはなかったと考えられる。また、同時代の円墳には地下式横穴墓を構築して追送する事例が多いことから周溝内の調査も慎重に行ったが、SN2 については円墳単体で構築されており、地下式横穴墓が取り付くことはなかった。

大型土坑 SC9 については、国富町調査時においても完掘しておらず、今回も安全を優先して途中で掘削を止めていることから十分な情報が得られた訳ではない。ただし、直径約7～8mで掘鉢状の断面形態が見て取れることから井戸の可能性もあり、周辺に同時期の集落がないことを鑑みると、近接して築かれた円墳との関係性を考える必要があると思われる。

以上のことから、古墳時代終末期段階の当該地点は、削平を受けていたとしても生活の場としての痕跡は乏しく、墓域として利用されていたことが判明した。(二宮)



第114図 SN2 模式図



## 第5節 J2地点の調査

### 1 基本層序（第115図）

J2地点はJ地点の中央より南に位置する。調査対象地の現況は、町道とその東側丘陵端にある雑木林である。調査は、丘陵端から北東側斜面にかけて幅3～6mの範囲を行った。現地表面の標高は、北東側斜面の最も低い場所で約33.5mを測り、町道側の最も高い場所が約34.6mであった。調査前は幅約3mの町道が造成されていた場所で、現地表面下約1mまでは暗褐色土の造成土を確認した。調査区南側のJ3地点では見られる鬼界アカホヤ火山灰層は、J2地点では層として確認できず、造成土中にブロックとして確認できるのみであったため、道路造成による攪乱で滅失したものと考えられる。ただし、アカホヤ火山灰層が失われているものの、その下位と考えられる層はJ3地点と類似しているため、基本層序としてはJ3地点と対応した番号を振り分けた。（第6節1参照）

基本的な堆積については、第IV層は、調査区南部の攪乱を受けた一部を除く全域で、層厚約0.3mの値で確認できた。第V層も全域で層厚約0.5mの値で確認できた。

遺物は主に後期旧石器時代が第V層から、縄文時代早期が第IV層から出土した。基本層序は次の通りである。

第I層は表土及び造成土である。

第II・第III層は造成により消失している（第III層は鬼界アカホヤ火山灰層）。

第IV層は暗褐色土で、土質は少しやわらかく、しまりがない。多量の礫を包含する。縄文時代早期の遺物包含層で土器片・石器類の出土も多い。

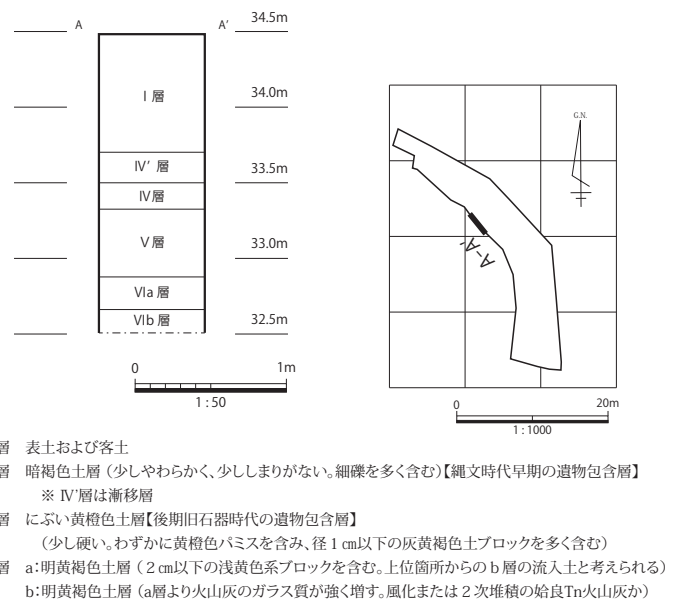
第V層はにぶい黄橙色土で、土質は少しかたい。わずかに1mm以下の黄橙色パミスを含む。層全体に1cm前後の灰黄褐色土ブロックを多く含む。後期旧石器時代の遺物包含層で、下位にナイフ形石器、上位に細石刃等の石器類を多く含む。

第VIa層は明黄褐色土で、火山成のガラス質を含む。径2cm以下の浅黄色系のブロックを含むことから崩落等による流入土の可能性はある。

第VIb層は明黄褐色土で、土質は第VI層と似ているが、第VIa層よりガラス質が強く増す。風化または2次堆積の始良Tn火山灰と考えられる。

### 2 旧石器時代の遺構と遺物（第116図）

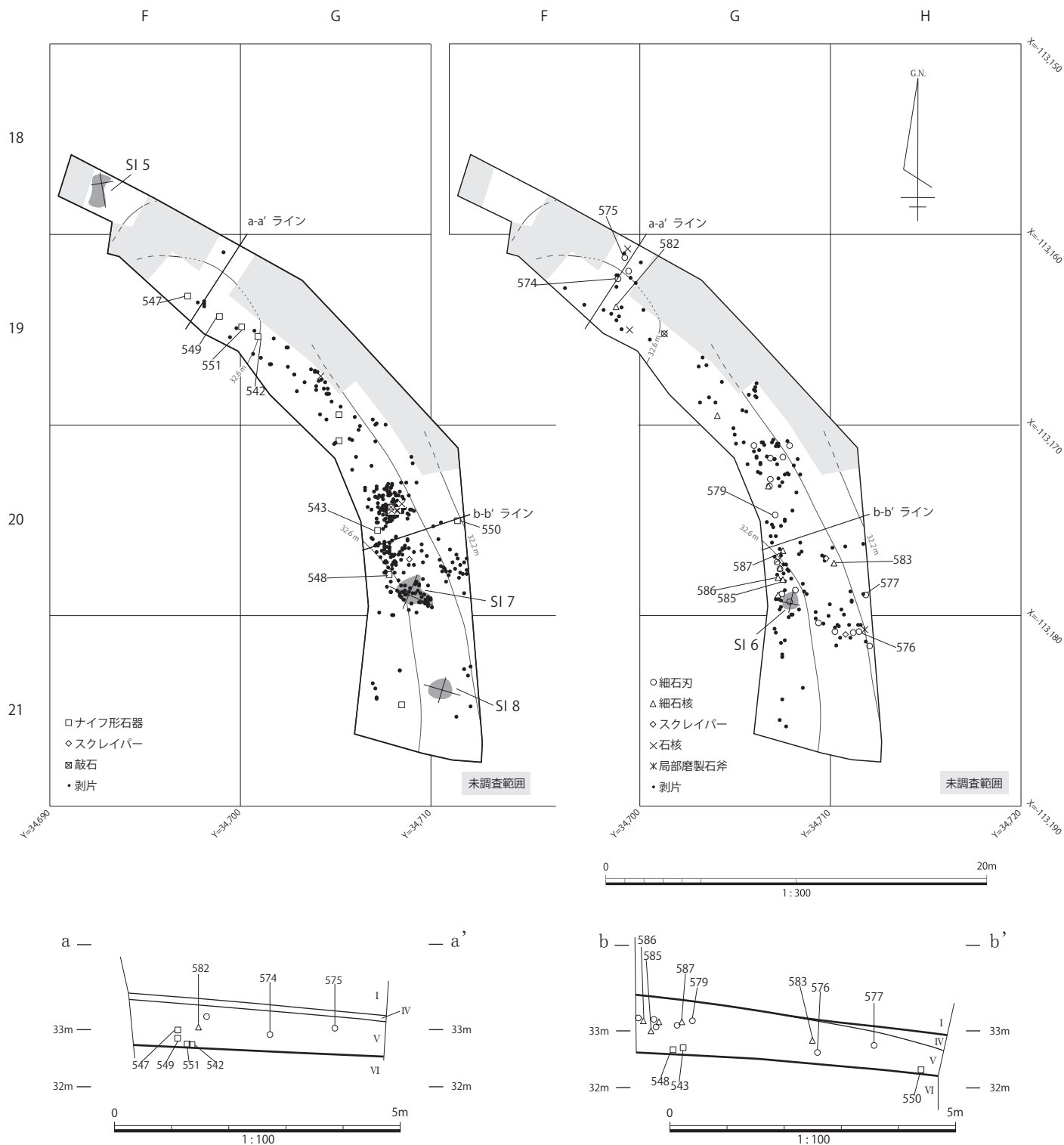
J2地点では、第IV層の調査終了後に第V層をトレンチ掘削による掘り下げを行い、遺物が確認でき



第115図 J2地点 基本層序柱状図



た範囲を広げる形で調査を行った結果、礫群が4基、石器はナイフ形石器、細石刃等が出土している。同一層の検出であるが、相対的に第V層下位で礫群3基とナイフ形石器、第V層上位で礫群1基と細石刃・細石核が確認されている。層の上位と下位が明確に分けられない箇所もあるが、第V層下位を第I文化層、第V層上位を第II文化層とした。



第116図 旧石器時代出土石器分布図

## (1) 第 I 文化層

第 I 文化層の調査では、第 V 層下位より後期旧石器時代の礫群 3 基とナイフ形石器を含む石器群を検出した。礫群の分布は、調査区北西端で 1 基、調査区南側で 2 基検出している。ナイフ形石器の分布は、調査区北西側と中央南寄りにやや集中している。また、調査区中央南寄りに剥片が集中する箇所もみられる。

### ① 遺構

**礫群 (SI5・7・8、第117・119図、第3表)** 礫群は 3 基確認し、SI5 は調査区北側、SI7・8 は南側に集中している。検出層は第 V 層下位で、それぞれの礫群を構成する礫は破碎したものが多く、SI5・8 は 60 点を超えるが、SI7 は 38 点と少ない。

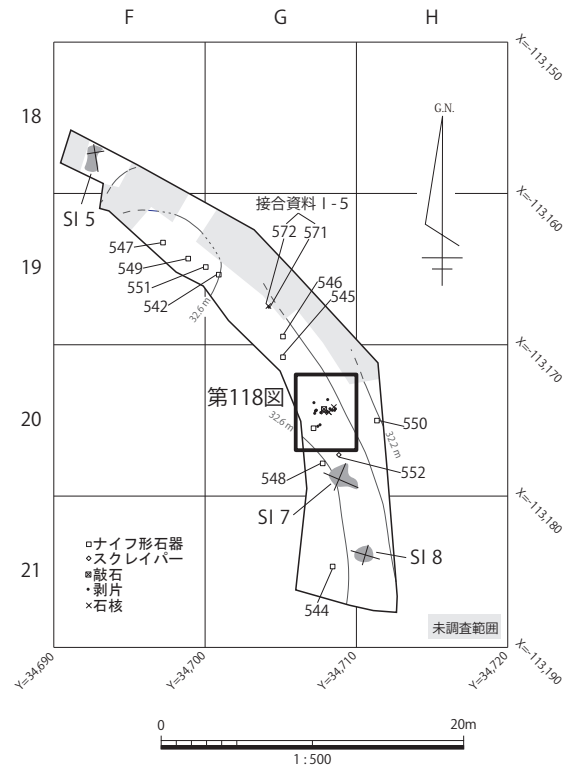
なお、SI8 は礫の密度が高く、掘り込みが認められる。土坑の土質は周囲の第 VI 層と似て火山灰層であるが、径 1 cm 前後の明黄褐色土のブロックを多く含み、わずかに炭化物粒 (1 ~ 2mm 程) を含む。

### ② 遺物分布 (第116・117図)

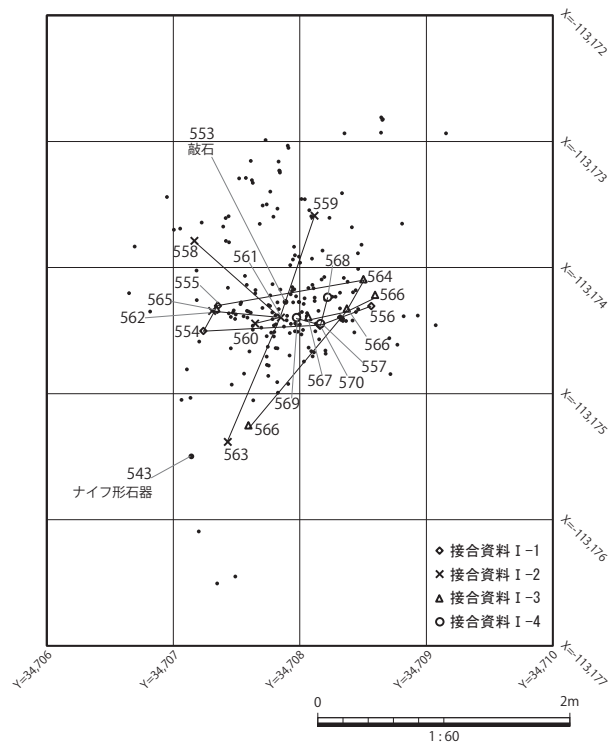
遺物はナイフ形石器、スクレイパー、敲石、石核等が出土している。調査区北西側と中央南寄りに分布し、そのうち 20G 区内に比較的集中する箇所が見られる (第118図)。この箇所ではナイフ形石器、敲石、剥片、石核等が出土しているほか、接合資料も 9 例 (接合資料 I-1 ~ 4 を含む) 認められる。

### ③ 出土遺物 (第120 ~ 124図)

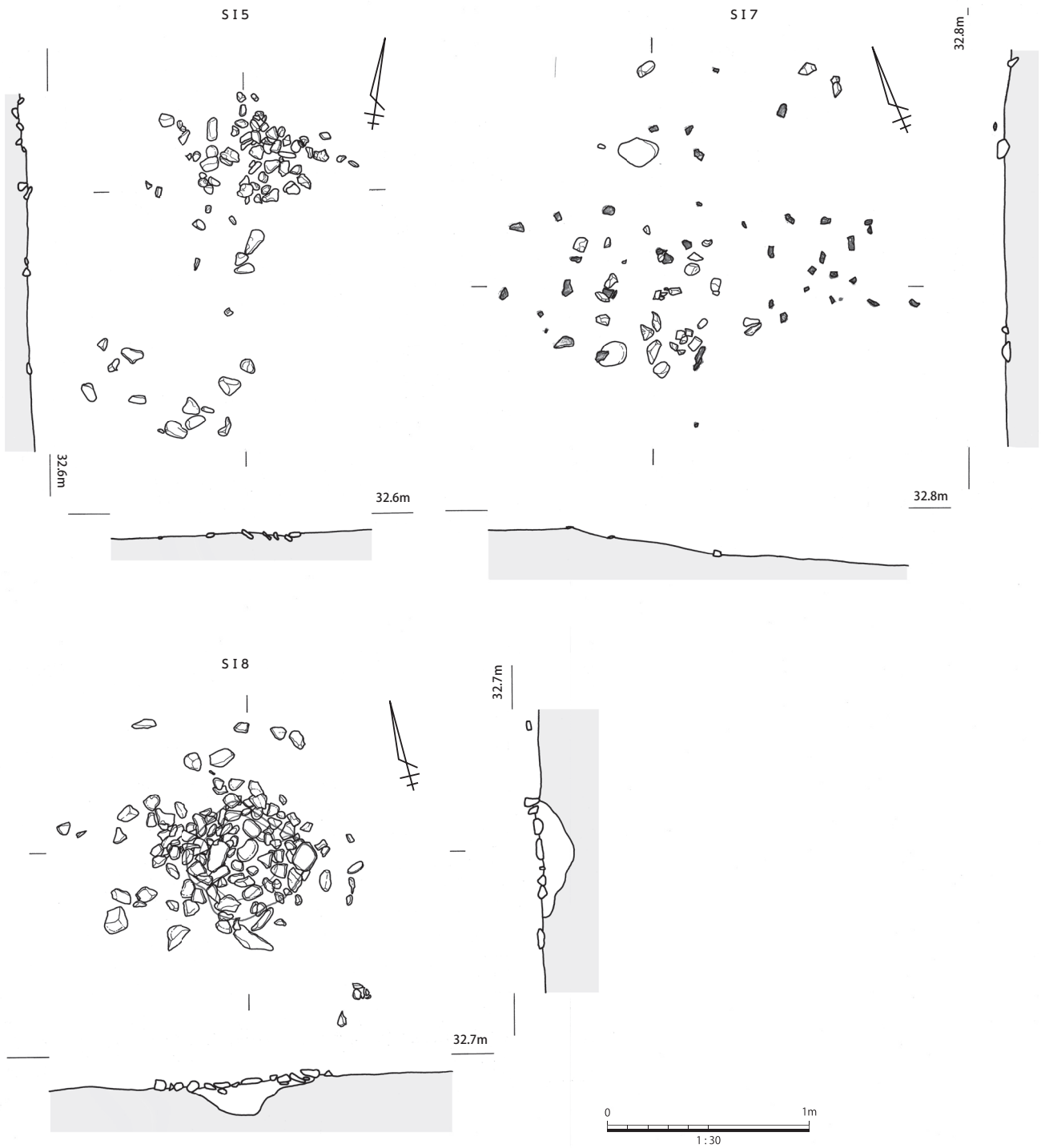
542~551 は、ナイフ形石器である。542~548 は細身の縦長剥片を利用した基部加工のナイフ形石器である。このうち 542~546 は素材剥片の打面を残すのに対し、547・548 は打面を残さず、基部を作出している。基部加工は、殆どが主要剥離面から行っているが、546 のように表面側からも行っているものも認められる。また 545・546 は先端部が欠損しているため不明だが、他のものは先端部にも加工が認められる。549・550 は、横長の剥片を利用した二側縁加工のナイフ形石器である。打面側は



第117図 旧石器時代第 I 文化層遺構・主要遺物分布図



第118図 20G 区の石器の分布と接合関係



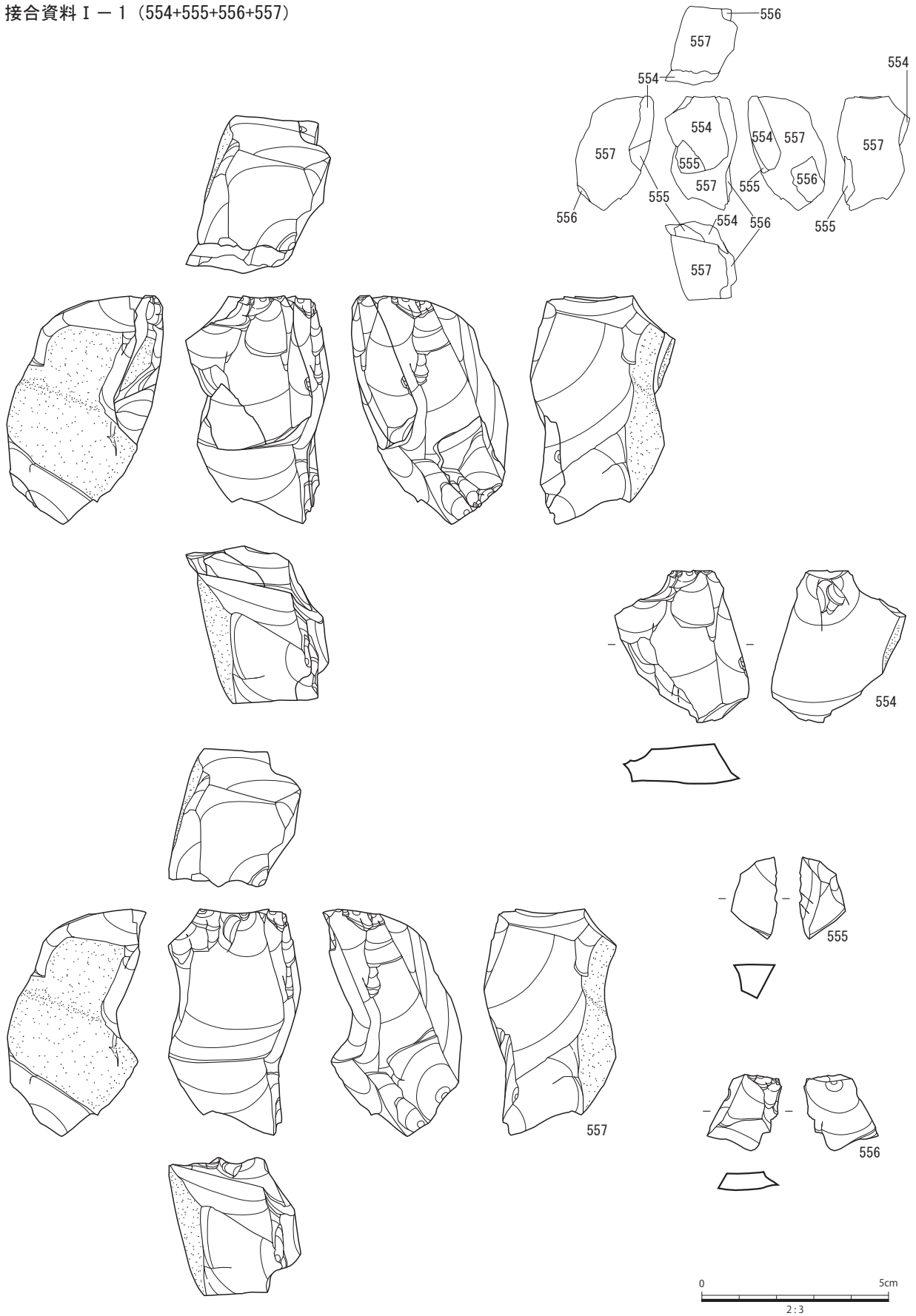
第119図 礫群SI5・SI7・SI8平面・断面図

第3表 J2地点旧石器時代第I文化層礫群一覧表

遺構番号	層位	調査地点	Gr.	出土遺物	礫の範囲(m) 最大長×最大幅	掘り込み規模(m) 最大長×最大幅×深さ	礫層個数	礫の密度	備考
J2-SI5	V	J2	18E	-	1.70×1.38	-	63	密	
J2-SI7	V	J2	20G	剥片	1.56×1.34	-	36	散	
J2-SI8	V	J2	21H	-	1.51×1.16	0.65×0.59×0.20	108	密	



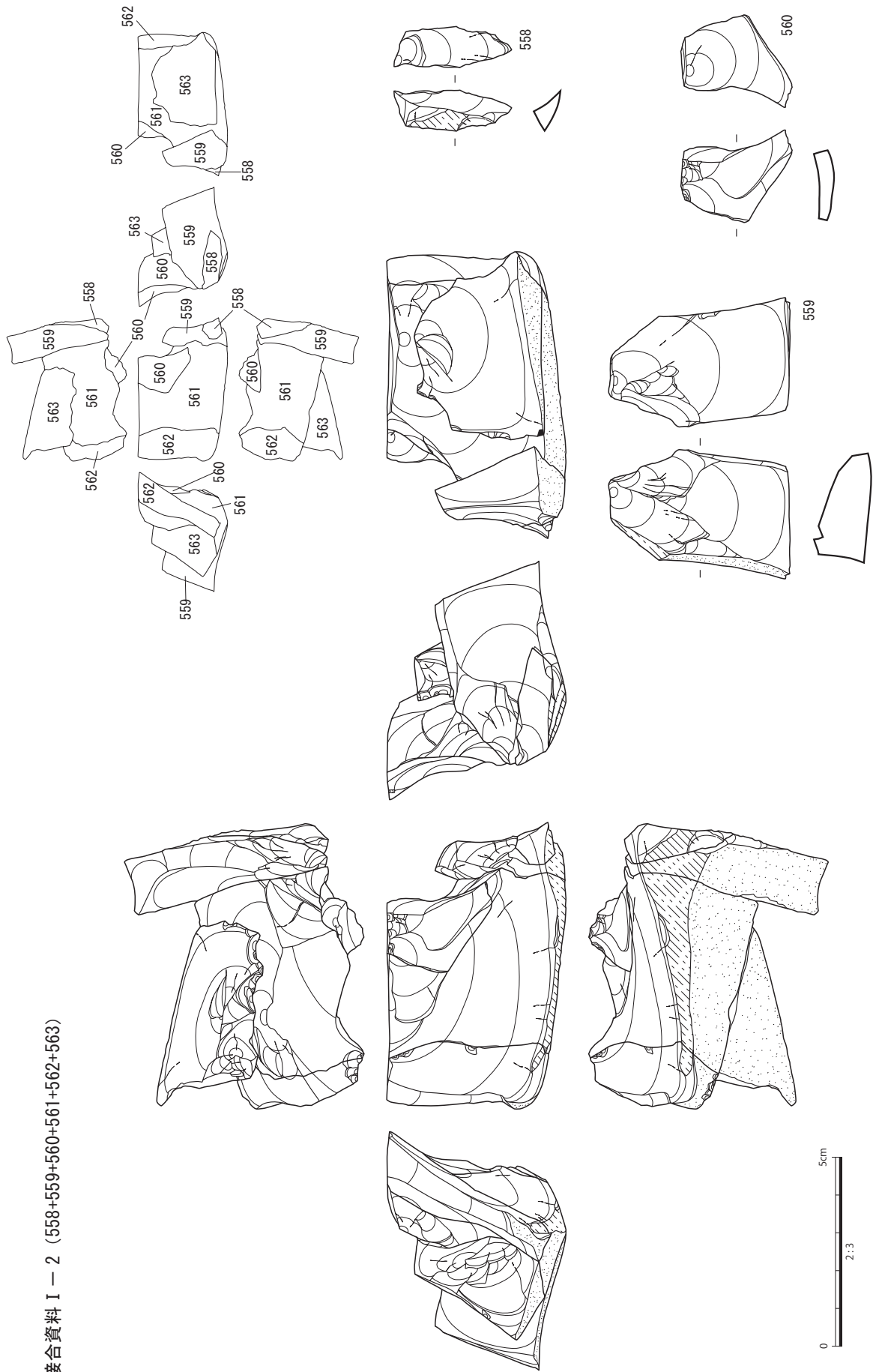
第120图 旧石器时代第I文化层出土石器 1



第121図 旧石器時代第I文化層出土石器2



接合資料 I - 2 (558+559+560+561+562+563)



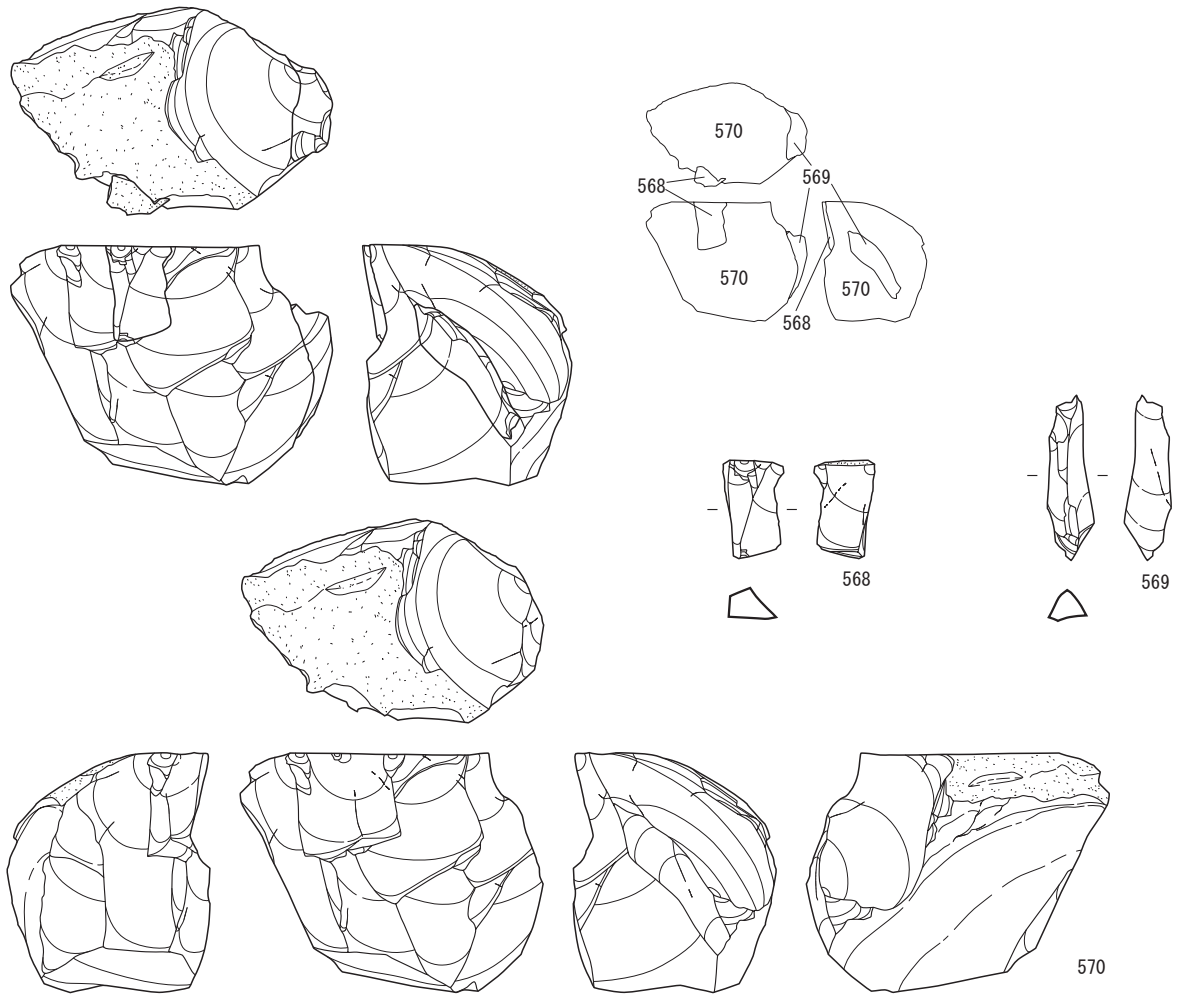
第122図 旧石器時代第I文化層出土石器3



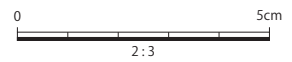
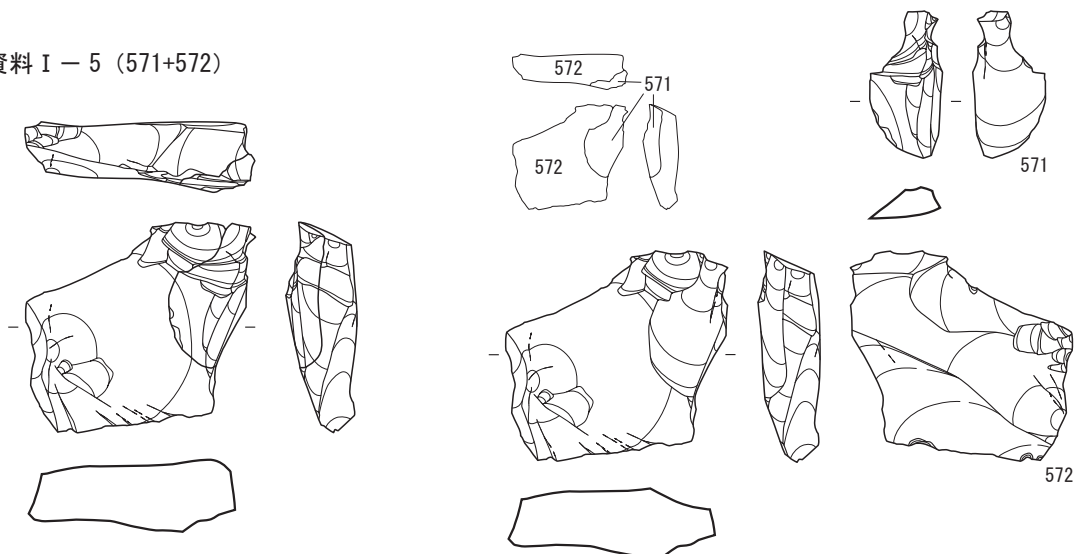
接合資料 I - 3 (564+565+566+567)

第123圖 旧石器時代第I文化層出土石器4

接合資料 I - 4 (568+569+570)



接合資料 I - 5 (571+572)



第124図 旧石器時代第I文化層出土石器 5

基部から先端部にかけて、もう片縁は基部付近を主要剥離面から加工を行っている。**551**は小型の縦長剥片を利用した二側縁加工のナイフ形石器である。右側縁に設定されている刃部は欠損後、再加工が行われている。なお、利用石材は**542～550**が頁岩製、**551**がガラス質安山岩製である。

**552**はサイドスクレイパーで、頁岩製の縦長剥片を素材としている。刃部は、左側縁は表面から、右側縁は主要剥離面から作出されている。

**553**は敲石である。右側面上部と下部に敲打痕による凹みの集中が観察される。砂岩製である。

接合資料は10例確認し、そのうち5例を図化した。流紋岩製で同一母岩によるものである。残されている礫面には、被熱による赤化や熱破碎が認められる。

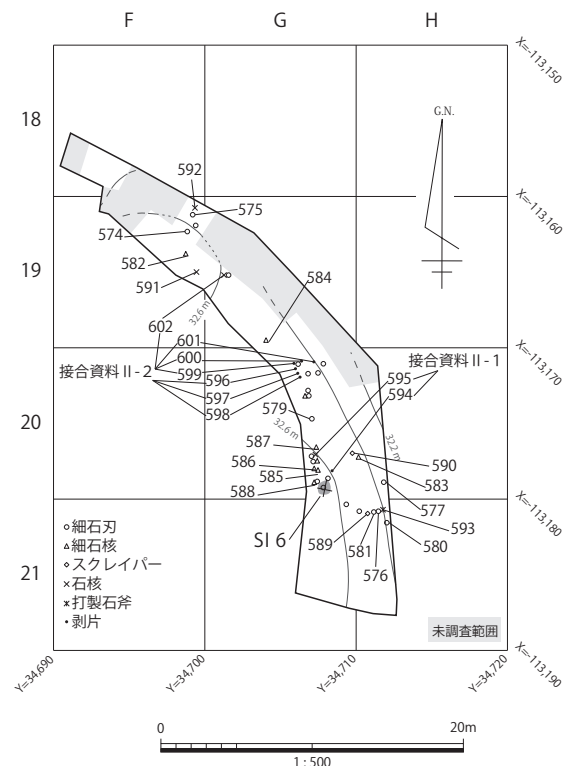
**接合資料 I - 1 (554～557)** は石核1点と剥片3点の合計4点で構成されている。**557**は分割礫を素材にした石核で左側面に礫面を残す。上部分割面や下面熱破碎面を打面にして**554 + 555**や**556**を剥離している。なお**555**は潜在割れの可能性が高い。

**接合資料 I - 2 (558～563)** は石核1点と剥片5点で構成されている。上面と正面の2箇所を打面を設定して、打面を入れ替えながら剥片剥離作業を実施している。このうち**563**は、打面再生のため剥離が行われている。また**561**は剥片素材の石核である。素材の打面をそのまま生かし、**562**の剥離を実施している。

**接合資料 I - 3 (564～567)** は、石核1点と剥片3点で構成されている。**564 + 565**の表面の剥離痕から打面を左側に設定して剥片を剥離した後、上面に打面を設定して、打点を右にずらしながら、**564 + 565 → 566 → 567**の順に剥片剥離を行っている。なお、**564 + 565**は、潜在割れの為に2分割されているが、**564**は石核として剥片剥離作業を実施している。また**566**も剥離の際、潜在割れの為に、4分割されている。

**接合資料 I - 4 (568～570)** は石核1点と剥片2点で構成されている。**570**は上部から裏面にかけて礫面が残る分割礫を素材にした石核で、上部の礫面を打面に設定して、正面を作業面として剥離作業を行うが**569**の剥離前に行われた作業では、力が下まで抜けずにヒンジフラクチャーが発生し、**569**の剥離ではステップフラクチャーや垂直割れを起こしている。石核はその後、下面に打面を転移し、幅広の剥片を剥離する際に**570**も剥離されたものと考えられる。

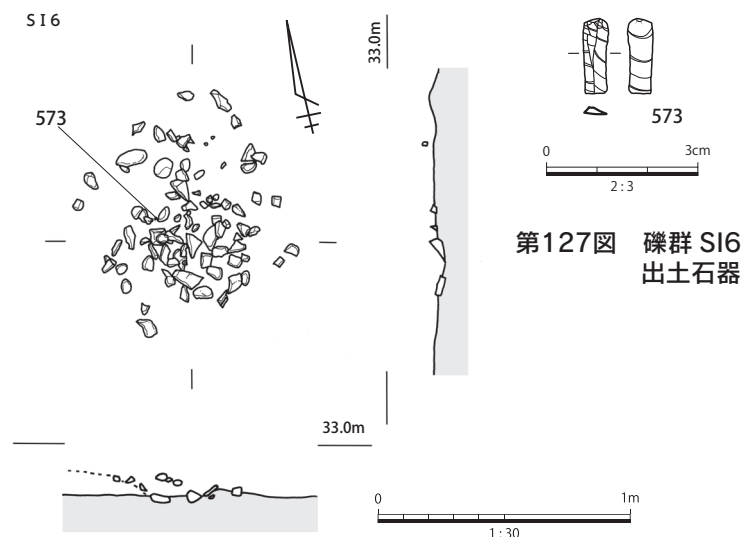
**接合資料 I - 5 (571・572)** は石核と剥片で構成されている。**572**は剥片素材の石核で、素材の左側縁下部の厚みのある面を打面にして、○→○→**571**の順で剥離を行っている。



第125図 旧石器時代第II文化層遺構・主要遺物の分布と接合関係

## (2) 第Ⅱ文化層（第125図）

第Ⅱ文化層の調査では、第Ⅴ層上位で礫群1基と細石刃を含む石器群を確認した。



第126図 礫群SI6平面・断面図

### ① 遺構

**礫群（SI6、第126・127図、第4表）**

礫群SI6は、調査区南側で検出した。検出層は第Ⅴ層上位で、それぞれの礫群を構成する礫は破碎したものが多く、80点を数える。遺物は細石刃が1点出土した。

### 遺構内遺物（第127図）

573は桑ノ木津留産黒曜石製細石刃で頭部の資料である。両側縁には、微細剥離痕が認められる。

第4表 J2地点 旧石器時代Ⅱ文化層礫群一覧表

遺構番号	層位	調査区	Gr.	出土遺物	礫の範囲(m) 最大長×最大幅	掘り込み規模(m) 最大長×最大幅×深さ	礫層個数	礫の密度	備考
J2-SI6	V	J2	20G	細石刃	0.97×0.90	-	80	散	

### ② 遺物分布（第125図）

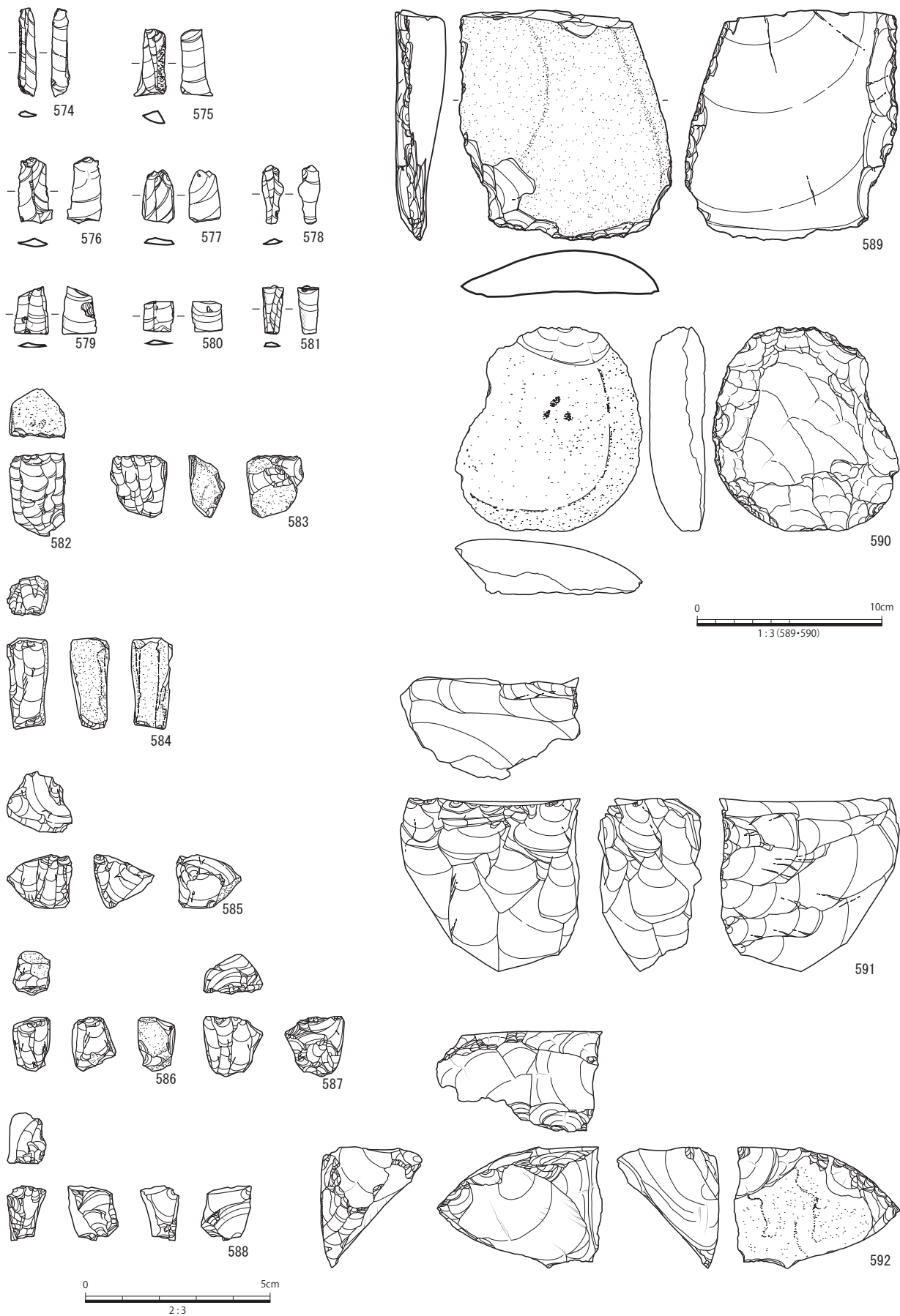
遺物は細石器やスクレイパー、石核、剥片、局部磨製石斧等が出土している。その分布は、調査区北西側及び中央、南寄りの3か所でみられる。特に中央の20G区北寄りでは細石刃や石核、剥片等が集中しているほか、接合資料Ⅱ-2が認められる。また、南寄りで出土している細石器は、SI6内（573）及びその周辺にまばらに分布する。

### ③ 出土遺物（第128～130図）

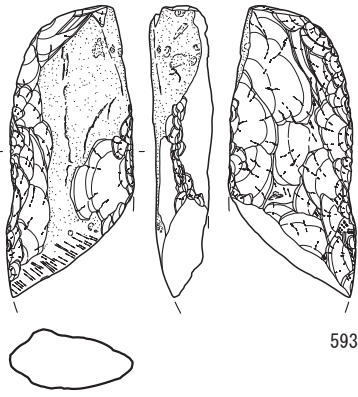
細石刃は、第Ⅴ層中より21点出土した他、その他上位層・後世の遺構より2点出土したが、そのうち8点（574～581）図化した。石材は574・575・578・581が桑ノ木津留産黒曜石製、576・577・579・580は腰岳産黒曜石製である。部位別で見ると574・575は完形、576～578は頭部、579～581は中間部の資料である。なお574は右側縁、577・579・580には左側縁、576・581は両側縁に微細な剥離痕が認められる。575は厚みがあることから失敗品と思われる。

細石核は、第Ⅴ層中より9点出土し、7点（582～588）図化した。石材は585が日東系黒曜石製、他は桑ノ木津留産黒曜石製である。582～588は小角礫もしくは小亜角礫を素材にした一群で、礫面をそのまま打面に設定して細石刃剥離作業を行うもの（582・583）や打面作出等石核調整後に細石刃剥離作業を行うもの（584・585）、石核調整後に打面調整を行うもの（586～588）が認められる。このうち打面調整を行う一群は作業面側から調整が行われている。また583・585・586・588は打面転移を行って複数の作業面を有している。このうち583では、左側面に打面を転移させて裏面でも細石刃剥離作業





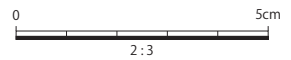
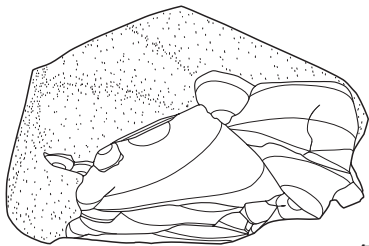
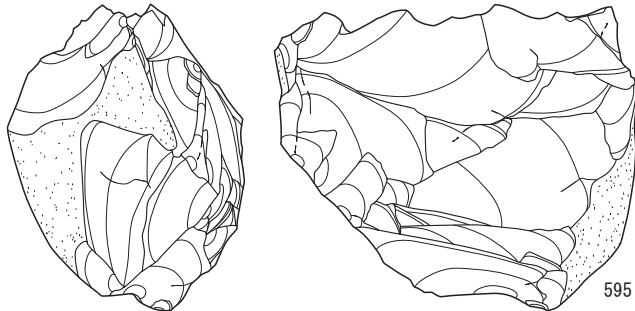
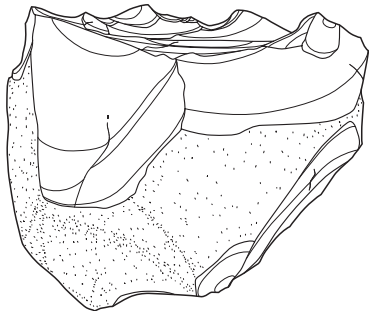
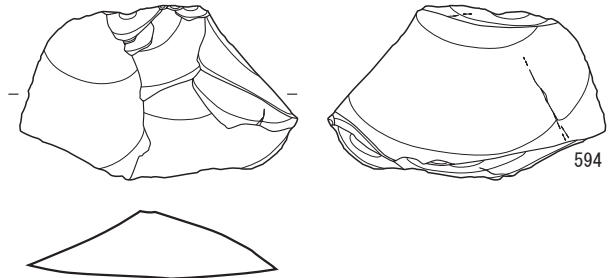
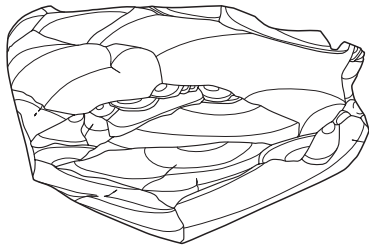
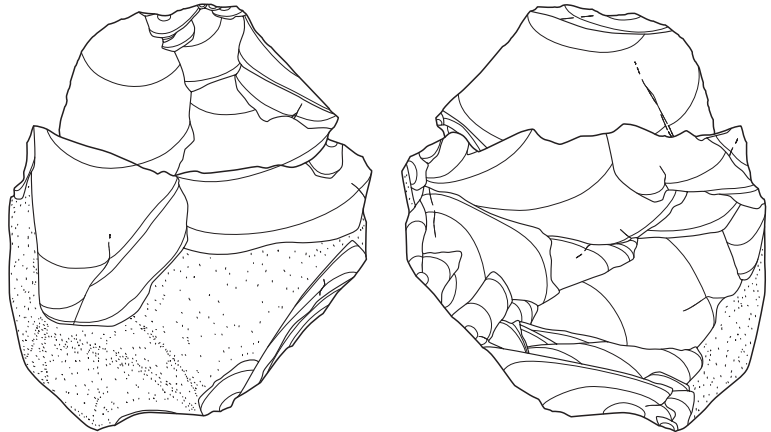
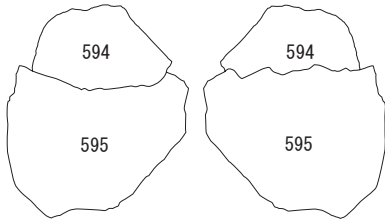
第128図 旧石器時代第Ⅱ文化層出土石器 1



593



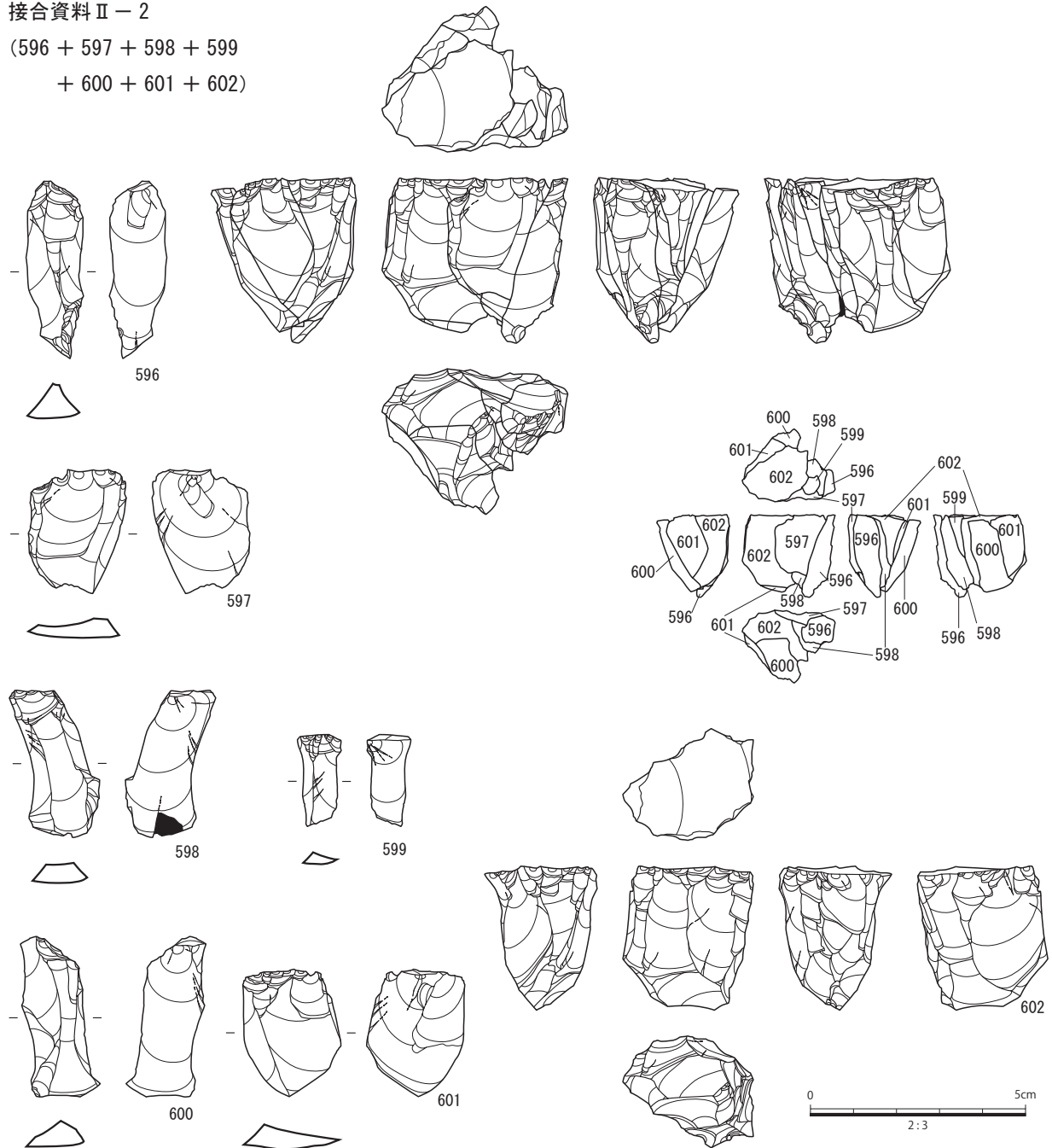
接合資料Ⅱ-1 (594+595)



第129図 旧石器時代第Ⅱ文化層出土石器 2

接合資料Ⅱ - 2

(596 + 597 + 598 + 599  
+ 600 + 601 + 602)



第130図 旧石器時代第Ⅱ文化層出土石器 3

を行うが、力が下に抜けずにステップフラクチャーが発生し、作業を終えている。**585**は上面を打面に設定して正面で細石刃剥離作業を終えた後、左側面を打面に設定して上面で作業を実施している。

**589・590**は、大型の礫面を有する剥片を素材にしたスクレイパーである。このうち**589**は頁岩製のサイドスクレイパーで左右側縁は主に表面から、下側縁は主要剥離面から刃部形成を行っている。**590**は尾鈴山酸性岩類製のラウンドスクレイパーで、礫面から縁周を加工し、刃部を作出している。なお礫面には磨面が形成されていることから磨石を転用したものと考えられる。

**591・592**は、頁岩製の石核である。**591**は上面及び右側面を打面として、正面及び裏面を作業面として剥片剥離を実施している。**592**は分割礫の上面を打面として左側面から正面にかけて剥片剥離作業を行う。

593は、ホルンフェルス製の局部磨製石斧である。垂角礫を分割して、左側縁全体及び右側縁中央に両面から調整加工が行われている。刃部は欠損しているが、下部に研磨痕が観察される。

接合資料は2例確認されている。**接合資料Ⅱ-1 (594・595)**は頁岩製の石核と剥片で構成されている。石核は、打面を転移させながら剥片剥離作業を行っており、上面を打面にして正面で594を剥離するが、力が下まで抜けずにヒンジフラクチャーが発生している。その後、作業面を裏面・正面に交互に入れ替えながら作業を行うが、ヒンジフラクチャーが多発したため、作業を終了している。**接合資料Ⅱ-2 (596~602)**は頁岩製の石核1点と剥片6点で構成されている。分割礫の分割面を打面に設定して596→597→598→599の順で剥離を行った後も剥片剥離を続け、途中打面を上下に転移させながら最終的には600→601を剥離して作業を終えている。

### 3 縄文時代早期の遺構と遺物

第Ⅰ層（造成土）を除去した後、道路造成の攪乱を受けず残存した縄文時代早期の包含層である第Ⅳ層の人力掘削を行い、第Ⅳ層下位で掘削範囲全面に高密度の散礫を検出した。礫は破碎した砂岩で、礫の密度は調査区中央や南側で特に密集する傾向にある（第131図）。この散礫を除去した第Ⅳ層下面で、縄文時代早期の集石遺構4基を確認した。

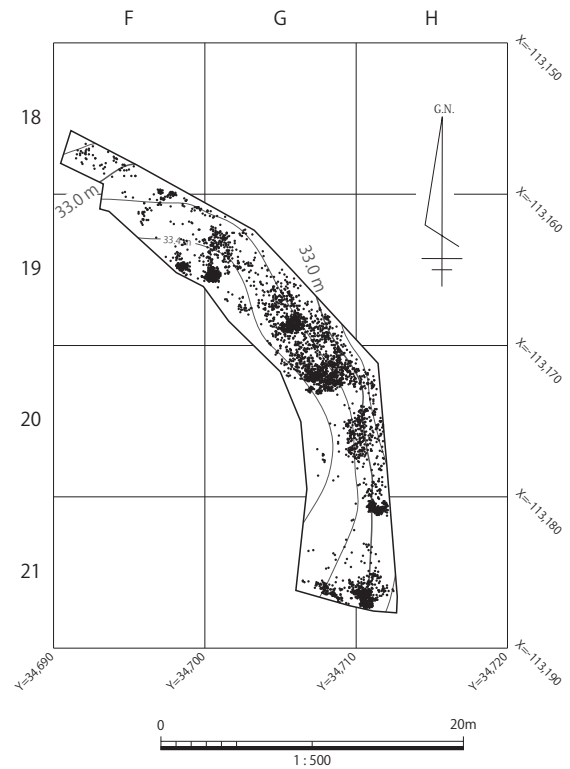
#### (1) 縄文時代早期の検出遺構

##### 集石遺構 (SI1 ~ 4、第132・133図、第5表)

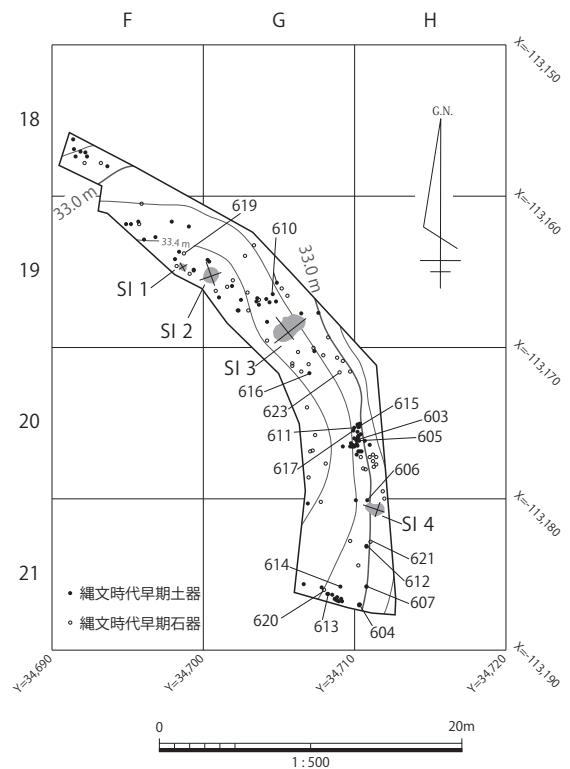
集石遺構は4基確認でき、調査区北側から中央にかけて、SI1 ~ 3、南側にSI4が分布している。

前述第4節3の集石遺構の分類のうち、Ia類とIVb類が該当する。

Ia類である掘り込みを有し、掘り込み内に配石が認められ、礫が密集するものは、SI1・2の2基が該当する。掘り込みは、いずれも平面が円形・断面がすり鉢状を呈し、規模では長軸が0.20mの小規模のもの(SI1)と1.06mの大規模のもの(SI2)に分かれる。また、掘り込みの深さはそれぞれ0.06m、0.22mと比較的浅い。掘り込み内の配石と礫の状況は、掘り込みの底部中央に扁平な砂岩がSI1は2個、



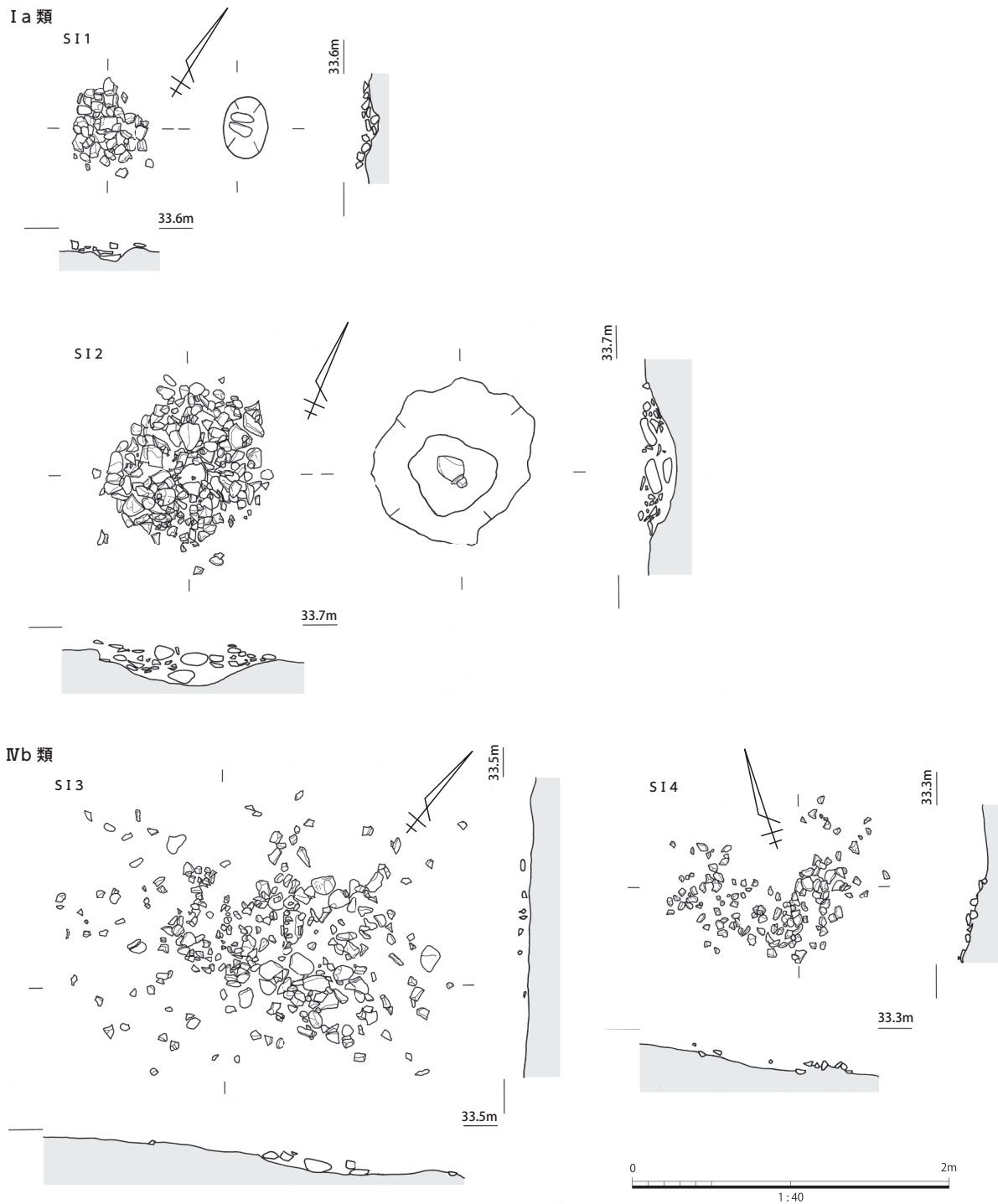
第131図 縄文時代早期散礫分布図



第132図 縄文時代早期遺構・出土遺物分布図

SI2は1個配置され、礫は掘り込み底部まで集積されている。出土遺物は認められない。

IVb類である配石・掘り込みを持たず、構成される礫が散乱するものは、SI3・4の2基が該当する。礫の範囲は長軸がそれぞれ2.6m(SI3)、1.4m(SI4)で大半が破碎礫で構成されている。SI3は中央半径0.4m以内に亜円礫が13個集中しており、配石の可能性もある。出土遺物は認められない。(後藤)



第133図 集石遺構 (SI) 平面・断面図



第5表 J2 地点縄文時代早期集石遺構一覧表

分類	遺構番号	層位	調査区	Gr.	出土遺物	礫の範囲(m) 最大長×最大幅	掘り込み規模(m) 最大長×最大幅×深さ	掘り込みの形状 (平面・断面)	礫の密度	配石	備考
Ia	J2-SI1	IV	J2	19F	-	0.63×0.52	0.2×0.2×0.06	円形・すり鉢状	密	2	
Ia	J2-SI2	IV	J2	19G	-	1.26×1.14	1.06×1.05×0.22	円形・すり鉢状	密	1	
IVb	J2-SI3	IV	J2	19G	-	2.60×1.78	-	-	散	×	中央半径0.4m以内に0.15~0.2mの亜円礫13個が配石の可能性有り
IVb	J2-SI4	IV	J2	21H	-	1.40×1.05	-	-	散	×	

## (2) 出土遺物

第IV層が当該期の主たる遺物包含層である。ゆるやかに張り出す丘陵の先端近くにあたる20・21G区に集中箇所が認められる(第132図)。

### 土器(第134図)

603~605は円筒形の器形と外面の横・斜方向の貝殻条痕文を特徴とする一群である。603・605の口唇部は断面形が角の取れた方形を呈する。604のみ口唇部に刻みを施す。606は斜方向の条痕を施す底部近くの破片で、全容は知り得ないが当類型に属する可能性がある。また、無文の口縁部613も、断面形や内面の調整などの特徴がこの一群に近い。

607~612・615は円筒形の器形で、地文として貝殻条痕を斜方向に施したのち、縦位の貝殻腹縁による刺突線文や連点状文を施文するものである。607・610には楔形の貼付突起が付され、その間に貝殻腹縁による刺突線文が縦方向に近接して施される。608・609・611は連点状文を近接して施文しており、609はV字を描くように配置される。609と611は近接した2列の連点状文が1つの単位となっている。612は胴下部~底部で、外面の下端部には縦方向の短沈線文が密接して施される。615も外面にわずかに短沈線文が認められる。どちらも底面は平滑に仕上げられている。

614は山形押型文を施すもので、底部に近い部位の破片。文様の山形は角が鈍角となり、間延びした印象を与えるものである。

616は口縁部が短く外反する器形で、屈曲部の内面は鋭い稜線を形成する。頸部に数条単位の横方向の沈線文を巡らせ、頸部以下に網目状の撚糸文を縦方向に回転して施文する。内面はナデ調整によって平滑となる。617の外面は、目は細いが粗いタッチで施された横方向の条痕がみられ、内面には接合の痕跡が認められる。

618はやや上げ底となる底部で、胴部に向けて立ち上がる接合箇所を剥離している。(吉本)

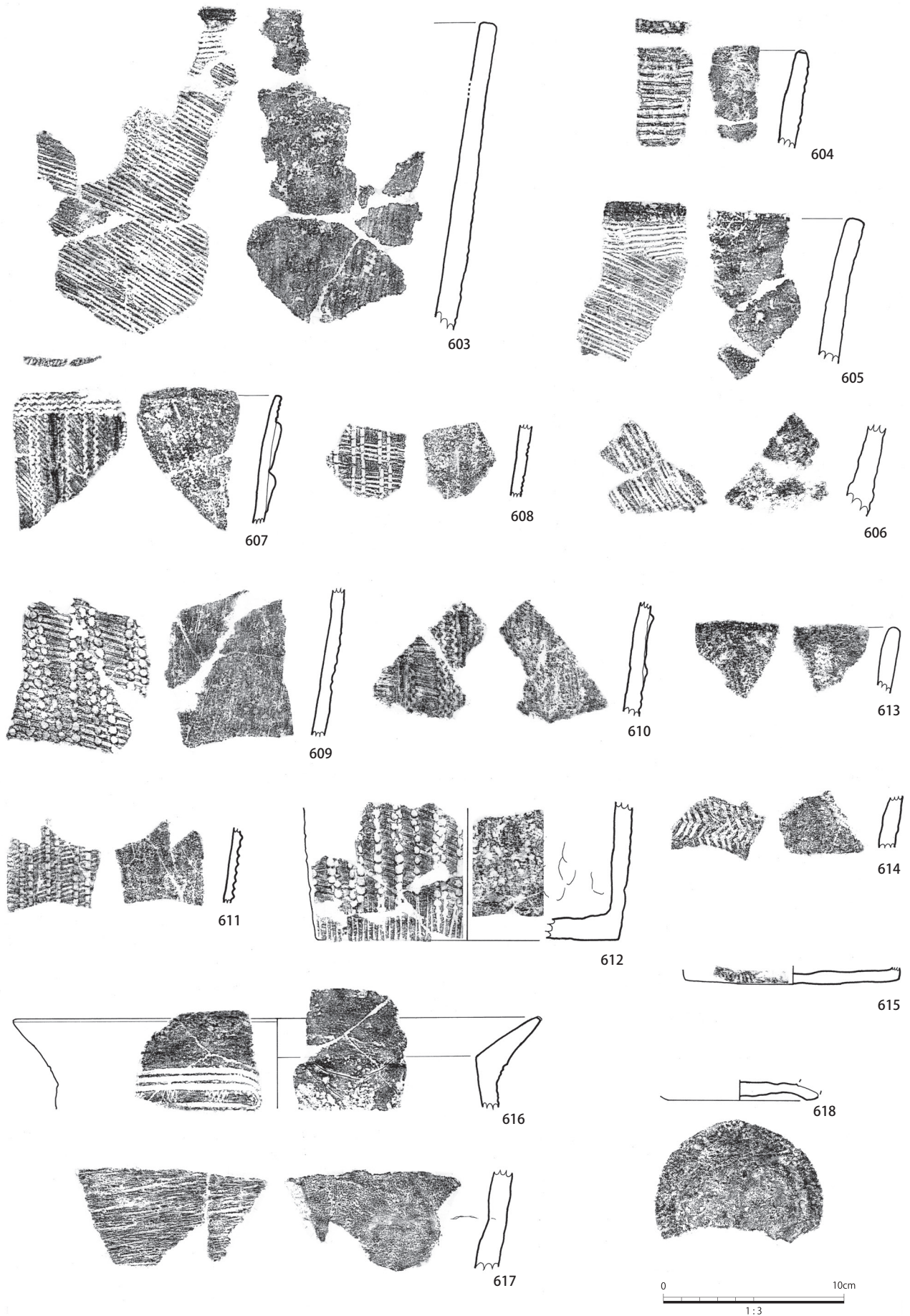
### 石器(第135図)

619は局部磨製尖頭器の先端部である。先端部が尖るように調整した後、研磨を施されている。ホルンフェルス製である。

620・621はサイドスクレイパーである。このうち620は桑ノ木津留産黒曜石製の石核を転用したものである。右側縁に刃部を作出している。621は頁岩製の礫面を有する縦長剥片を素材とし、右側縁に主要剥離面から加工を施し、刃部を作出している。

622は流紋岩製の打製石斧である。礫面打面を有する厚みのある縦長剥片を素材にして、両側縁に両面から加工を施している。刃部は素材の剥離面を生かし、片刃である。断面形は、刃部付近が蒲鉾形、基部付近がレンズ状を成す。なお622については、縄文時代早期以前の所産の可能性もある。

623は敲石である。砂岩製の扁平な円礫を利用し、下部と上部左右に敲打による潰れが認められる。



第134図 縄文時代早期出土土器

#### 4 J2 地点のまとめ

##### (1) 旧石器時代の様相

旧石器時代の石器が出土した第V層では、層の下位からナイフ形石器群（第I文化層）、上位から細石刃を中心とする石器群（第II文化層）の2時期が確認された。

第I文化層の遺構は礫群を3基検出し、分布は南北に分かれる。北西端のSI5は礫の密度が高く、南側のSI7は礫が散漫であるのに対し、SI8は礫の密度が高く、中心に炭化物を含む掘り込みを有しており、それぞれ性格が異なる。また石器が特に集中する中央では、同一母岩での接合資料が認められることから石器製作が行われていたものと考えられる。ナイフ形石器は、縦長剥片素材を利用して基部と先端部に加工したものが主体を占め、その特徴から終末期に位置付けられる。

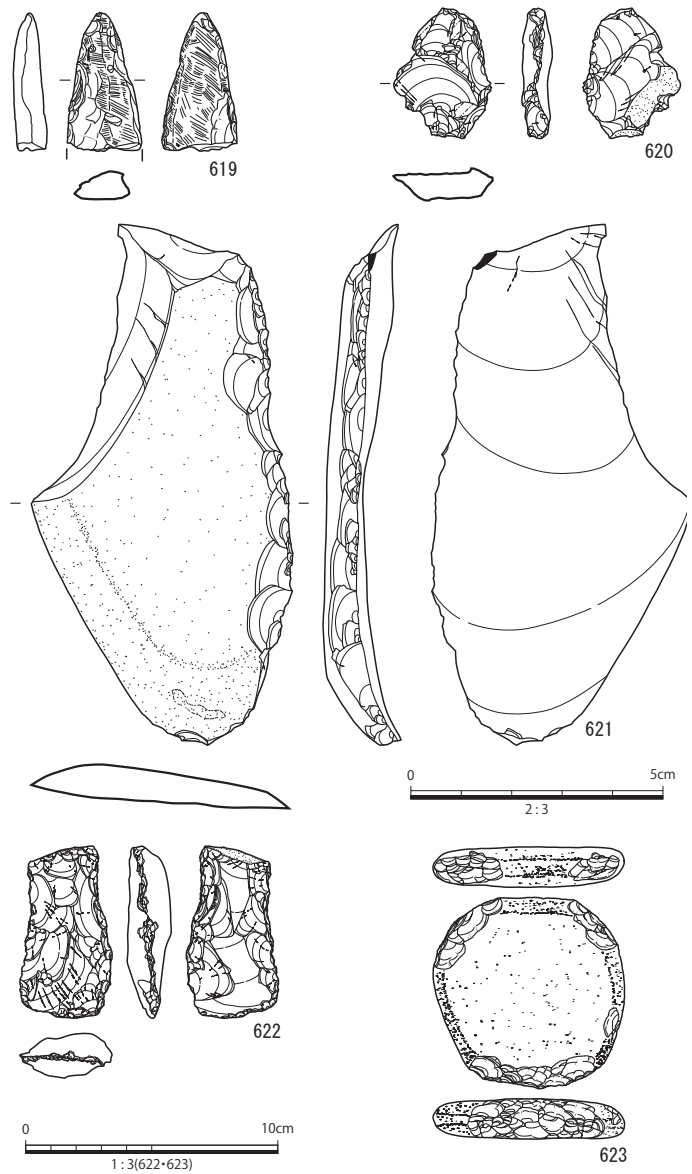
第II文化層の遺構は礫群を1基検出し、遺構内から細石刃が出土している。第V層上位の細石刃・細石核は、J1地点やJ3地点とは異なり、黒曜石製のみの出土となる。細石核については、野岳・休場型細石核の特徴を示すものが比較的多く認められ、桑ノ木津留や日東系といった南九州西部産黒曜石利用されている。一方で細石刃は桑ノ木津留産黒曜石がやや多いものの、北西九州の腰岳産黒曜石も認められ、興味深い。（後藤）

##### (2) 縄文時代の様相

縄文時代早期の遺構は、集石遺構4基を確認した。特徴は中央北より平坦面、調査区内では比較的高い位置に掘り込み・配石のある集石遺構が構築され、緩やかな斜面に掘り込みのない集石遺構が構築されている。

縄文時代早期の土器は、緩やかに張り出す丘陵の端部付近で、いくつかの集中箇所を形成して出土している。型式は貝殻文系に属するものが主体を占め、少量の手向山式と塞ノ神式が加わる。貝殻文系土器では別府原式3式（金丸2004）に含まれるものと考えられるが、607の口唇部に刻みが施される以外は目立った文様はない。口縁部の断面形が角張っている点は金丸編年では相対的に古い特徴となる。617は間延びした山形押型文を施す個体で手向山式（横手1998）に該当する。619は縦方向の撚糸文＋横方向の沈線文で文様が構成されるもので、塞ノ神式第6群（八木澤2008）に該当する。621は早期後葉に属する深鉢の底部と考えられる。

石器は、楔形石器、局部磨製尖頭器、スクレイパー、打製石斧、敲石等が確認されている。土器と分布状況に大きな差異はない。



第135図 縄文時代早期出土石器

（吉本）



## 第6節 J3地点の調査

### 1 基本層序 (第136図)

J3地点はJ地点の南部に位置し、平成9年度に当センターが調査した塚原遺跡C地区の西側に隣接した幅5～16m、長さ約40mの範囲を調査した。調査前は山林で杉や雑木が繁茂していたが、以前から周知されていた古墳の形状が低墳丘ながらも林の中によく残っていた。古墳より南側は近代に耕作地として使用された形跡があり、上部が攪乱、整地され、比較的平坦地となっていた。古墳より北側は傾斜地で基本層序がよく遺存しており、鍵層となる鬼界アカホヤ火山灰層(第Ⅲ層)が確認できている。

基本的な堆積については、古墳より北で墳丘盛土より下位層として第Ⅱ～第Ⅶ層を確認した。層厚は、第Ⅲ層で0.3m、第Ⅳ層で0.5m、第Ⅵ層で0.3mの値を確認した。

遺物は主に弥生時代の遺物が第Ⅱ層で、後期旧石器時代～縄文時代早期の遺物が第Ⅳ層より出土した。基本層序は次の通りである。

第Ⅰ層は表土及び造成土である。

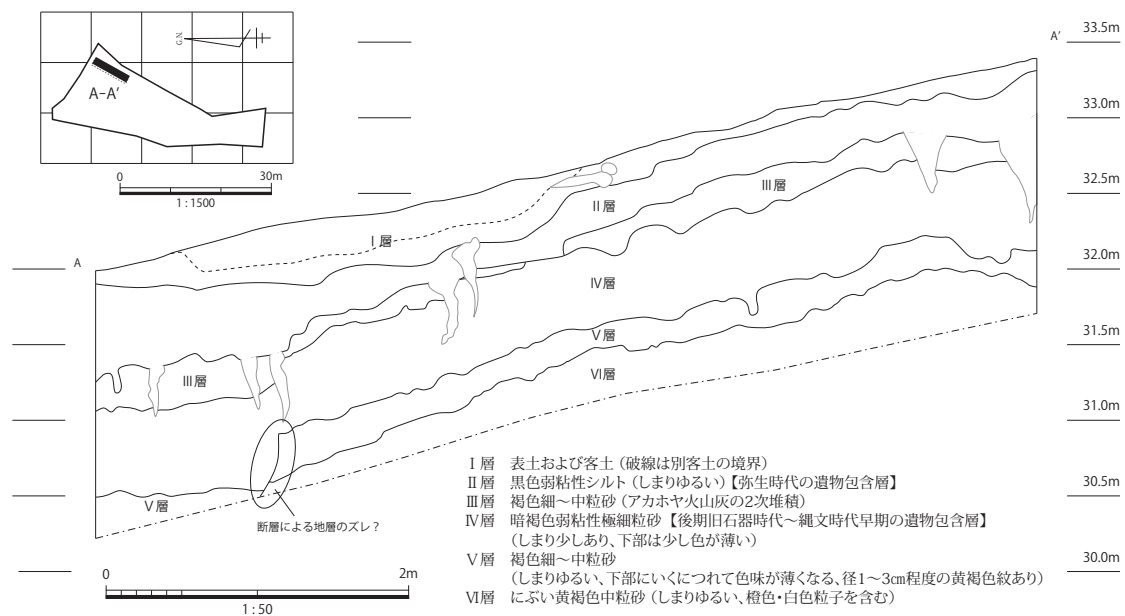
第Ⅱ層は黒色土で、しまりはなく、粘性も少し弱い。礫を多く包含し、弥生土器片等の遺物の出土も多い弥生時代の包含層である。

第Ⅲ層は鬼界アカホヤ火山灰層(K-Ah)である。

第Ⅳ層は暗褐色土で、しまりが少しあり、粘性はごく弱い。多くの礫や土器片・石器等の遺物を包含する。後期旧石器時代～縄文時代早期の遺物包含層である。

第Ⅴ層は褐色土で、しまりややあり、やや砂質となる。層全体に1cm前後のにぶい黄褐色斑紋(斑紋)を多量に含む。層の上部10cm程度に径1～2mmの橙色のパミスを含む。小林軽石関連の層と考えられる。

第Ⅵ層は褐色土で、しまりあり、やや砂質となる。風化もしくは二次堆積のシラスと推測される。



第136図 J3地点 基本層序

## 2 旧石器時代の遺物（第137図）

J3地点では、第V層についてトレンチ掘削による掘り下げを行い、範囲を広げていく調査を行った。一部については第VI層まで掘り下げを行った。

礫群等の旧石器時代に伴う遺構は確認できず、27H区の第V層中で剥片1点が出土したのみであった。ただし、第I層や古墳の盛土、縄文時代の包含層である第IV層中で細石刃・細石核など旧石器時代の遺物が出土している。隣接する塚原遺跡C地点の調査では、遺構の検出はないが旧石器時代の接合資料も確認できることから、J3地点についても本来はJ1・J2地点で確認できる第II文化層に相当する層が存在したが、調査区中央の古墳の造営等により消失したと考えられる。

### 石器（第138・139図）

細石刃は17点出土し、7点を図化した。部位別で見えていくと**624**は頭部、**625・626**は末端部、**627～630**は中間部の資料である。**624・628**は両側縁、**627**には左側縁下部、**629**は右側縁に微細な剥離痕が認められる。なお**625・626**の表面には礫面が残る。

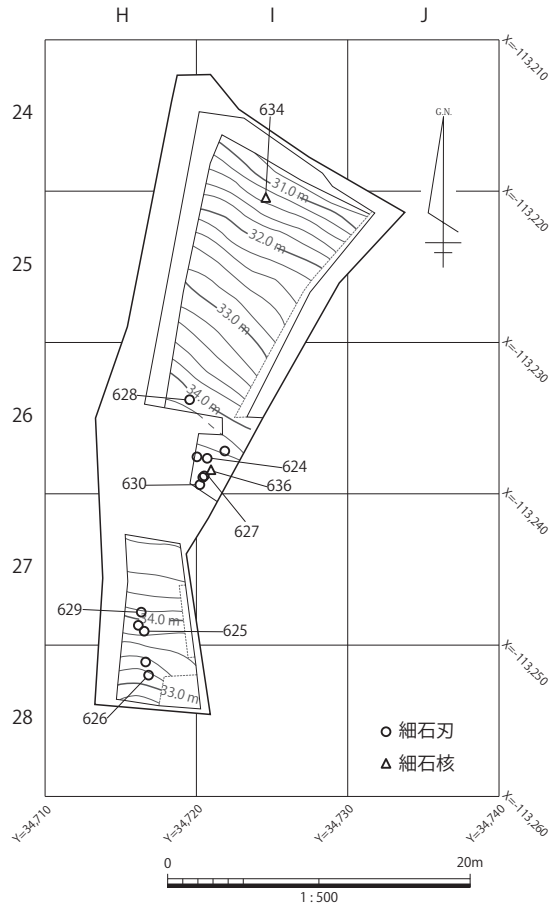
また**624**は頭部調整が行われていない。石材は**624・628・630**が頁岩製、**625～627**が砂岩製、**629**が流紋岩製である。

細石核・作業面再生剥片は15点出土し、10点を図化した。**631・632**は分割礫を素材にして、分割面を打面に設定し、そこから側面調整を行った後、両小口面で細石刃剥離作業が行われている。そのうち**632**は下縁調整及び打面に側面からの調整も行われている。船野型細石核に相当する。**631**は頁岩製、**632**は砂岩製である。

**633～638**は扁平な礫を分割して、分割礫の小口面（**637・638**）ないし両小口面（**633～636**）を作業面として細石刃剥離作業を行うもので、畦原型細石核に相当する。このうち**633・636・637**は熱を受けて赤化しているが、**633・637**の分割面や作業面については赤化が弱いことから、素材礫の状態でも熱を受けたものと考えられる。なお、利用石材は**633・636・638**が砂岩製、**634・635・637**はホルンフェルス製である。**639**は、桑ノ木津留産黒曜石の小亜角礫を素材にして、上面に打面を作出して打面調整を行い、正面を作業面として細石刃剥離作業を実施している。野岳・休場型細石核に相当する。

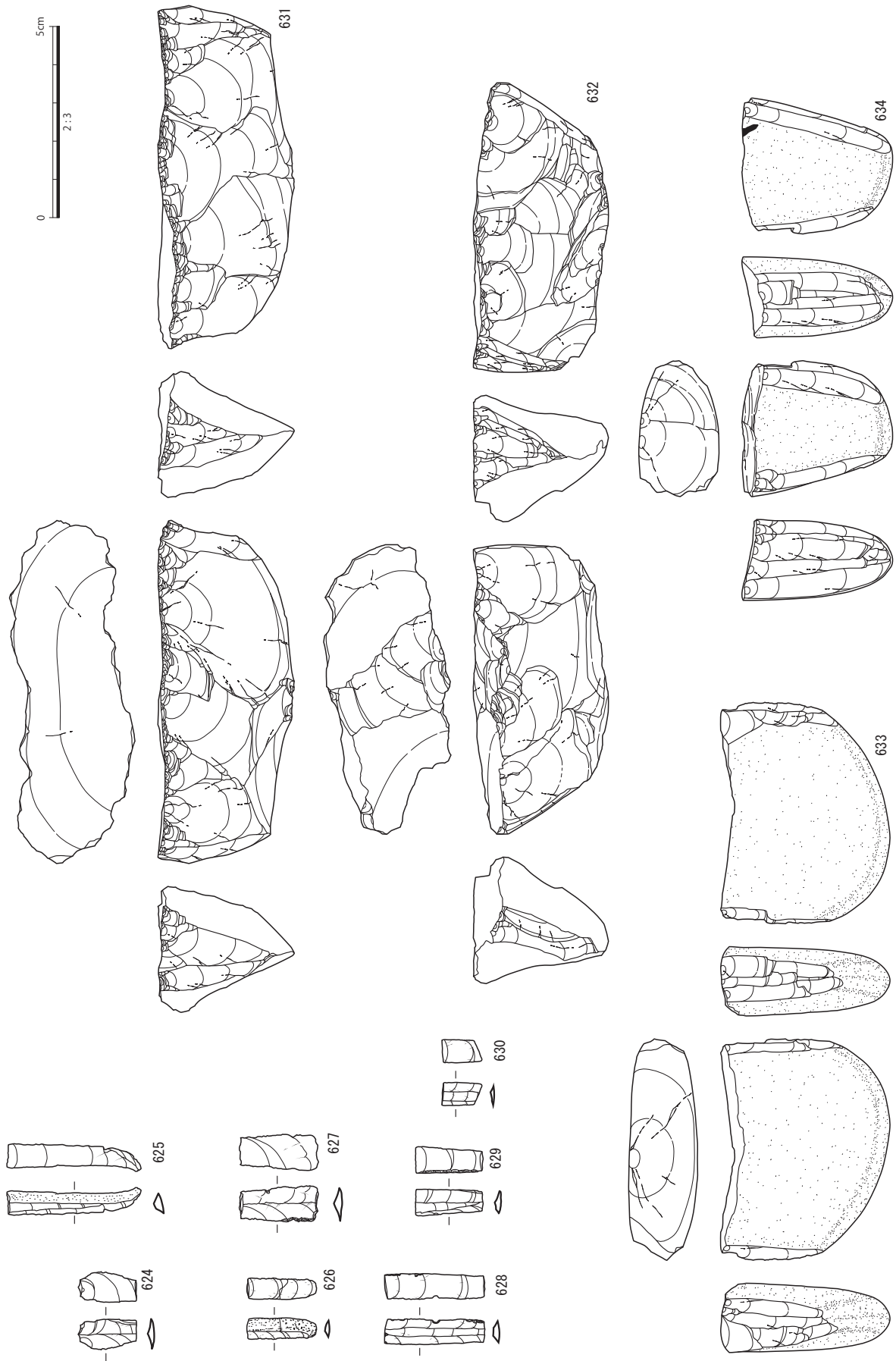
**640**は頁岩製の作業面再生剥片である。剥片剥離の際に力が下に抜けず、細石核内部に入り込んでウートラパッセを起こしている。表面には細石核の側面、右側面に作業面を残す。船野型細石核型から剥出されたものと考えられる。

（後藤）

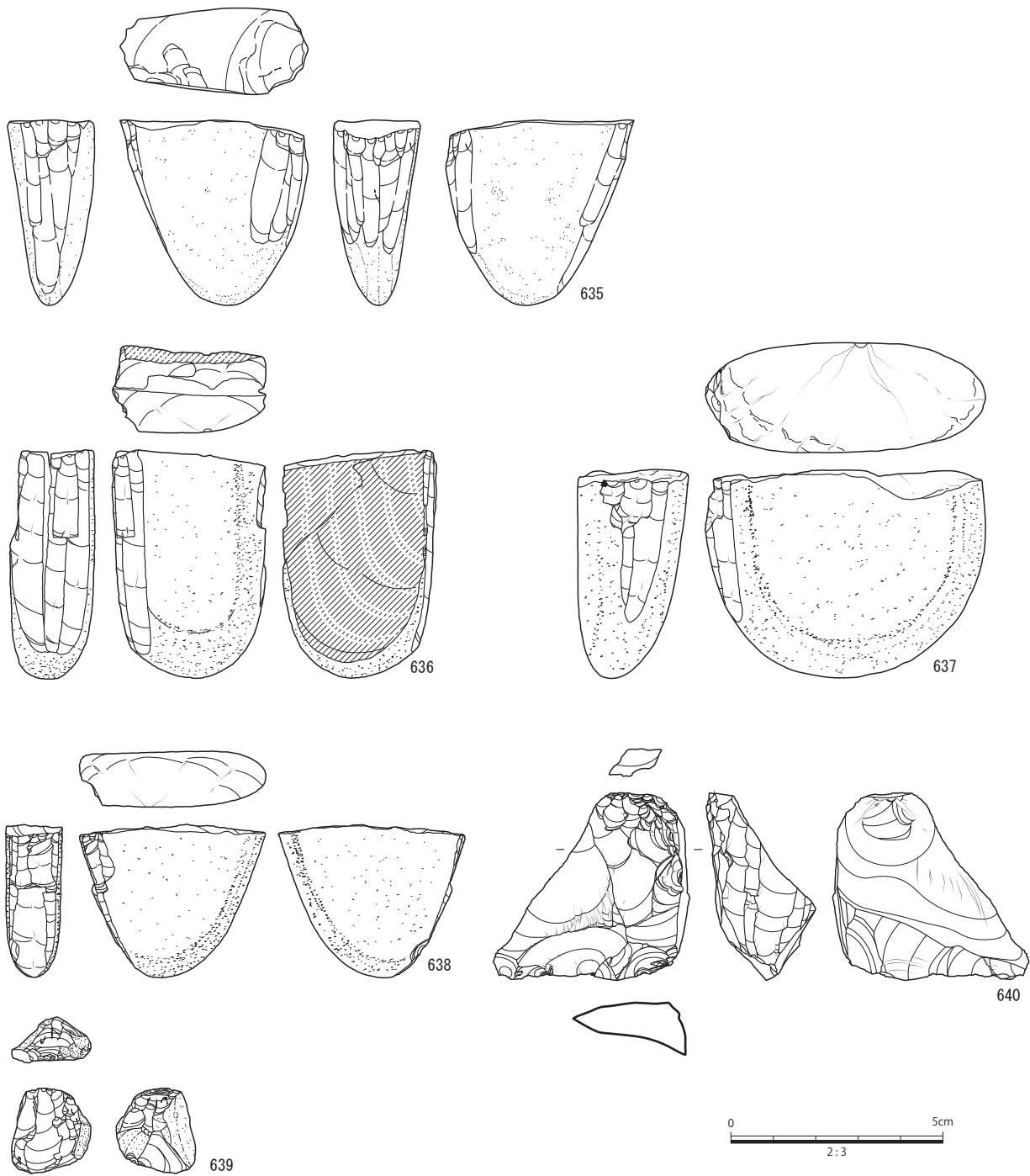


第137図 旧石器時代出土遺物分布図





第138图 旧石器时代出土石器 1



第139図 旧石器時代出土石器 2

### 3 縄文時代草創期・早期の遺構と遺物

表土や第Ⅲ層 (K-Ah) 除去後、縄文時代の遺物包含層である第Ⅳ層の人力掘削により、第Ⅳ層下位で散礫の広がりを確認した (第140図)。散礫は破碎した砂岩で構成される。一部、古墳の造営により攪乱を受けているが、調査区中央の尾根部頭頂部から南側で礫の密度が高く、尾根部より北側は急傾斜によるものか礫はまばらになる傾向がある。散礫の除去後、尾根部頭頂部東側の第Ⅳ層下面で集石遺構2基を検出した。

#### (1) 縄文時代早期の検出遺構

**集石遺構 (SI1・SI2、第140・141図、第6表)**

層序的には分離できないが、その特徴から検出された集石遺構は縄文時代早期の遺構として扱った。調査区東側で2基確認した。前述第4節3の集石遺構を掘り込みの有無、礫の配置及び密集度等より分類したものより、2基ともにIVa類とした。

IVa類は掘り込みを持たず、構成される礫が密集するものである。礫の範囲はそれぞれ1.9m、0.78mで大半が破碎礫で構成されている。

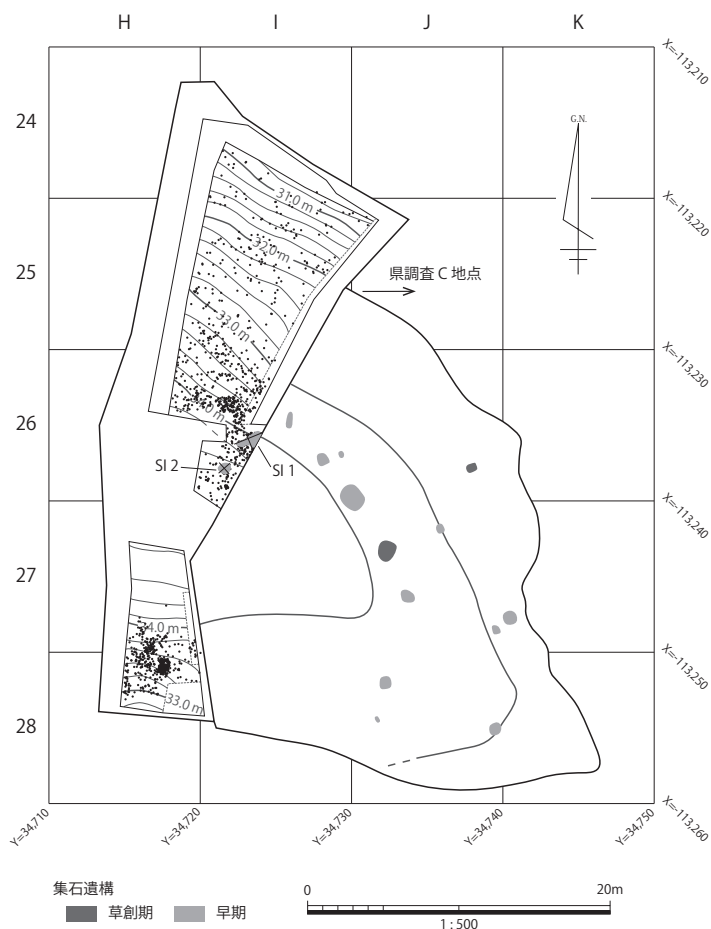
ともに遺構内からの出土遺物はない。

(後藤)

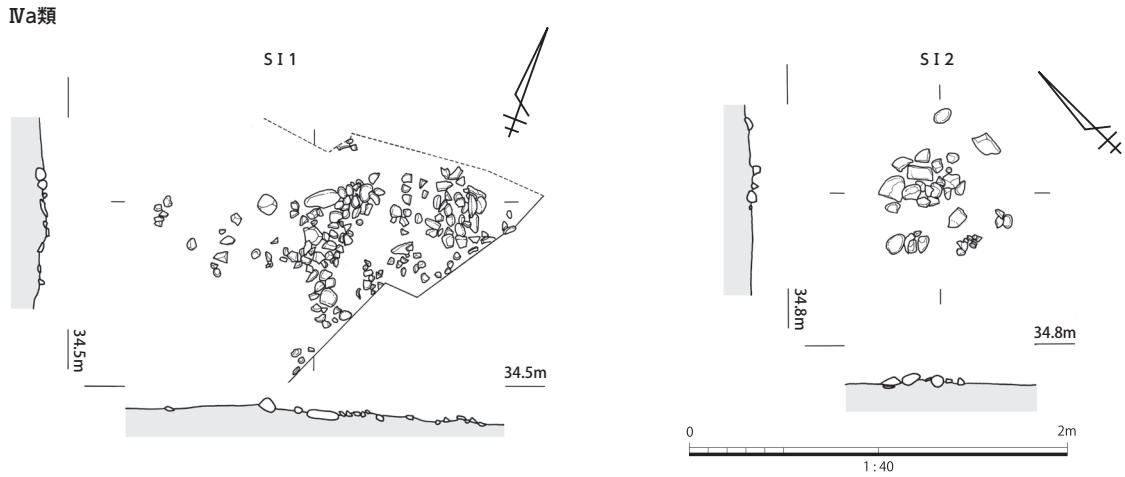
#### (2) 縄文時代草創期の土器 (第142～145図)

平面的には26I区、標高33.0～34.5m付近で多く出土している。主たる出土層は第Ⅳ層である。隆帯文を密に巡らせるもの多い。色調は黄灰色系統のものと橙色味を帯びたもの、黒褐色系統のものに大別できる。

641・642は確認できるだけで2条の隆起線文を口縁端部下位に施す。隆起線を貼り付けた後に横「ハ」字形の爪形状の文様が付く。642は貼り付けがやや弱く、器面との間にわずかな間隙が生じている。643は外反する口縁部の端部を肥厚させ、その下位に2条の隆帯文を施す。644も同様に口縁端部を肥厚させ、その下位に隆帯文を付けて、上端の外面にヘラ状工具による刻みを施す。剥落により詳細は不明だが、少なくとも3条巡ることは確かである。貼付部分が剥離した器面に爪形状文がかすかに認められる。赤味の強い胎土を使用している。645・646も644と同様の特徴を有する口縁部片である。ただし、646は口



第140図 縄文時代早期散礫・遺構分布図

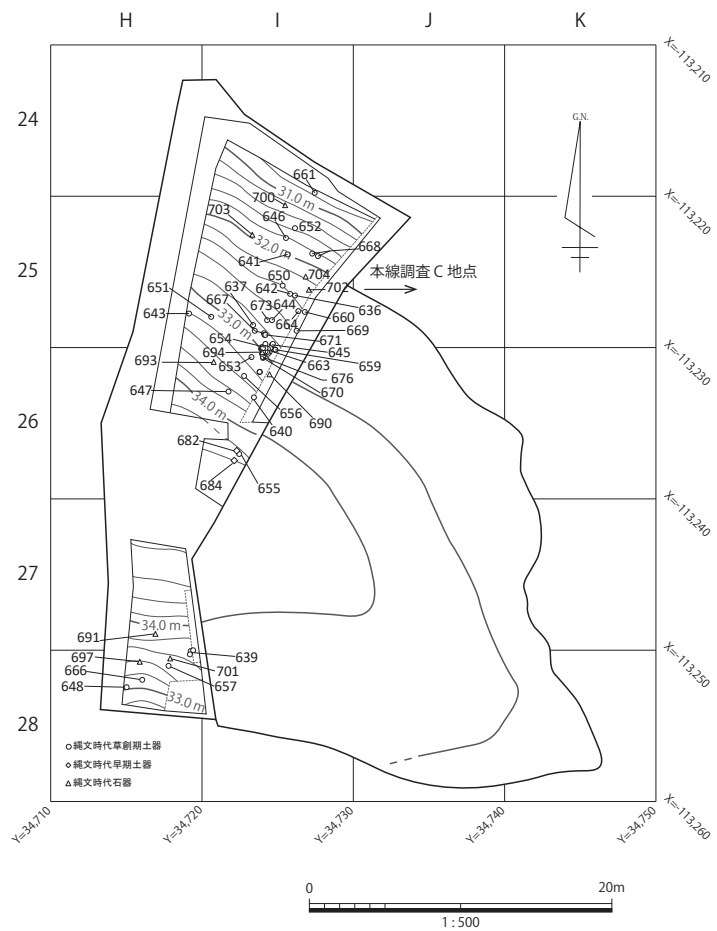


第141図 集石遺構 (SI) 平面・断面図

第6表 J3地点縄文時代早期集石遺構一覧表

分類	遺構番号	層位	Gr.	出土遺物	礫の範囲(m) 最大長×最大幅	掘り込み規模(m) 最大長×最大幅×深さ	掘り込みの形状	礫の密度	配石	備考
IVa	J3-SI1	IV	I26	-	1.90×1.23	-	-	密	×	
IVa	J3-SI2	IV	I26	-	0.78×0.70	-	-	密	×	

縁端部の外面ではなく、口縁端部の上面に爪形状の文様を付す。647は口縁部の下位に2条の隆帯を巡らせ、ヘラ状工具による綾杉状の刻線を隆帯の上下両面に施し、その上からさらに深い刻目を付けている。2条の隆帯は密接の度合いが高く、あたかも1条のそれにみえる。突帯や口唇部など部分的に鉄分を多く含み赤味の強い粘土を意図的に貼り付けたように見受けられる。648・649の口縁部断面形や隆帯の貼り付け方は645に近く、器面との貼り付けが弱く、間隙が生じている点も同じである。650も同様の2条の密接した隆帯を巡らせるものであるが、口縁部の立ち上がりは直に近い。651は口縁端部が外方に張り出す形となり、上面に刻目を施し、その下位に3条の密接した隆帯を巡らせる。焼成後、胴部に円孔を穿っている。652は小破片のため判断し難いが、2条の断面形台形の



第142図 縄文時代出土遺物分布図

隆帯を付し、その上に爪形状文を施す。ただし、図面の中心から右側は隆帯の高まりはなく、器面に直に爪形状文が施される。**653**は2条の隆帯が接しており、浅い爪形状文が施される。口縁端部は外面に向けて刻みが施される。**654**は口縁端部からわずかに下がった位置に2条の隆帯が密接して巡り、指によるつまみの痕跡が残る。さらにその上から2条の隆帯について同時にヘラ状工具による刻みが施される。また口唇部に上面に向けて刻目が付される。隆帯文の刻目と口唇部のそれは同一工具が用いられた可能性がある。**655**は特徴を文章化すると**654**とほぼ同様のものであり、同一個体である可能性も考慮すべきだが、隆帯の高さが**655**の方が明らかに高く、口縁上部の内面の形状に細かな違いもある。**656**は残存しているだけで3条の隆帯を密に貼り付け、見かけの上では1条の太い隆帯と似た感じとなる。ただし接合の様子から、3本の別の隆帯文であることは明瞭である。**657**は口縁部の小破片であり、不明な点も多いが、口縁端部に接する隆帯は、これまでに記述してきたものより太く、ヘラ状工具による刻目も大きい。**658**は密接して2条の隆帯を巡らせて、隆帯上に爪形状文を施すものである。**661**は比較的口径の小さな個体で、口縁端から幅約1.2~1.5cmの隆帯を巡らせる。口唇部から内面に向けて刻目が施される。**662**はより太く(約2.8cm)、厚い隆帯が巡り、その上に二枚貝の貝殻による圧痕文が横方向に連続して付される。**663**はつまみによって貼り付けられた隆帯がわずかに見えるが、詳細は不明である。外面に炭化物が付着している。焼成が極めて良好である。

**664**は、隆帯文の特徴は**648**や**655**などの一群に近いが、壺形に近い器形を呈する。底部を欠くものの、それ以外の全容がわかるまとまった資料である。2条の貼付隆帯文を密接して巡らせる。外面は工具によるナデ状の器面調整を行っているが、内面はそれほど顕著でなく、製作時に指頭によって接合痕を押さえた様子が読み取れる。焼成が良好で、明赤褐・橙色系の色調を呈する。また、胴部の下部に斜方向の沈線が認められる。先端部の尖ったヘラ状の工具で直線的に断面「V」字状に鋭く刻んでおり、掲載図の3条以外にも、接合しない破片の同部位でも認められることから、局地的な線刻ではなく一周するものと推定される。**665**は口縁部のみの破片で全形をうかがい知ることができないが、残存部分の傾きからみて**654**と同様の器形であった可能性がある。口縁端部はわずかに外方に反り、口唇部には外面に向けた刻目を付す。4条の隆帯文を密接して巡らせる。指頭で押さえて貼り付けた痕跡が隆帯上に残る。口縁部以下は横方向に列状を成す工具による刺突文が巡る。**666**は口縁部のみの小破片である。貼付突帯につまみの圧痕が残るタイプであるが、隆帯は他と比べて低い。**667**は残存部分の観察の限りでは、さらに隆帯が低く、深い爪形状の文様が目立つ。外面の口縁部直下には刺突文が横方向の列状に施される。**668**は口縁部のみの小破片で全容は不明であるが、口唇部に深い刻目が施される。文様の有無も特定できない。**669**は爪形状の文様が横方向に列状に巡らされるものである。**670**は底面から胴下部にかけての破片で、1条の隆帯が認められる。平底であるが丸みを帯びている。

**671**・**672**は連点状の刺突文が横方向に列状に巡るもので、**671**は口唇部の上面にも同じ刺突文を施している。**671**は基本的に2列の文様列であるが、1点のみ3列目に当たる位置にあり、全容はつかめない。

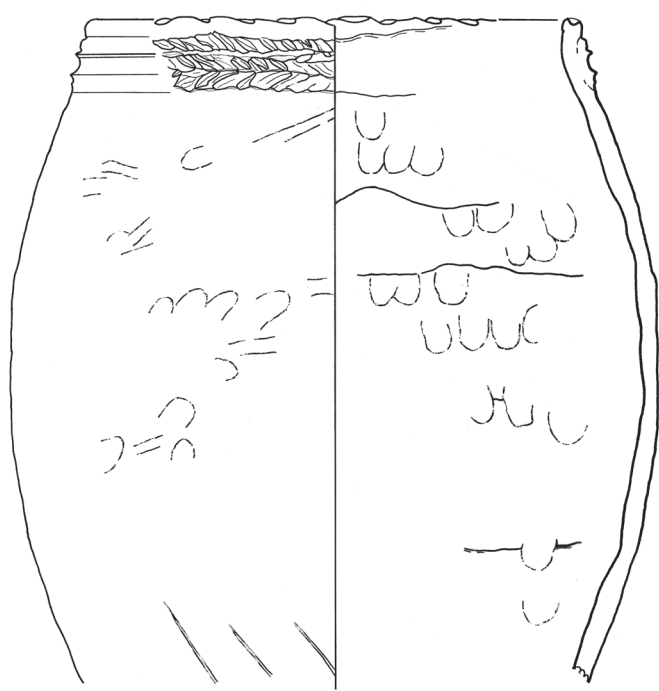
**673**~**681**はいずれも無文の破片である。**681**は底部近くの屈曲部と考えられる。

**682**と**683**も無文の個体で、深鉢の胴下部と思われる破片である。帯状に赤色の彩色が認められる点が特筆すべき特徴となっている。接合部分に鉄分の多い粘土を貼り付ける形で彩色した様子がうかがえる。特に**682**に顕著である。県調査のC地点(宮崎県埋文セ2001)で出土した赤彩土器と同様の帯状の赤彩部分を塗彩するものである。

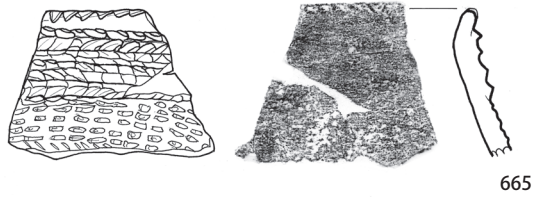




第143図 縄文時代草創期出土土器 1



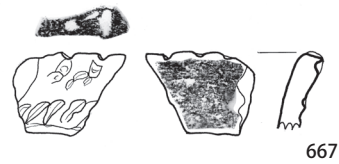
664



665



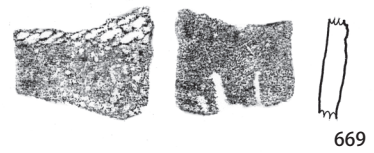
666



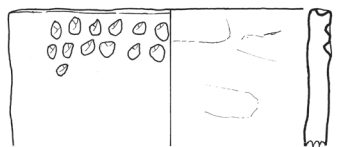
667



668



669



671



672



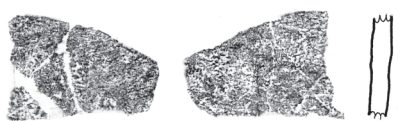
670



673



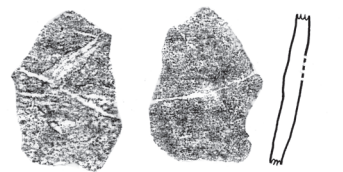
674



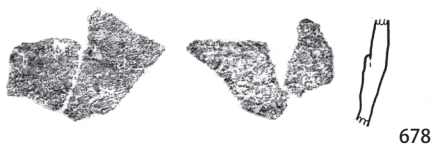
675



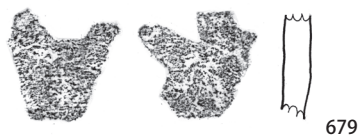
676



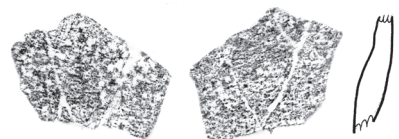
677



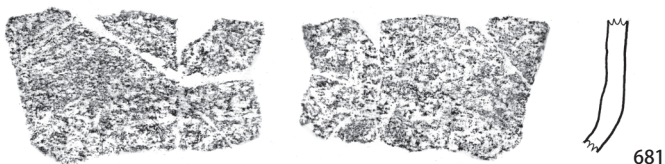
678



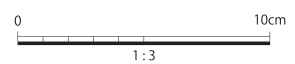
679



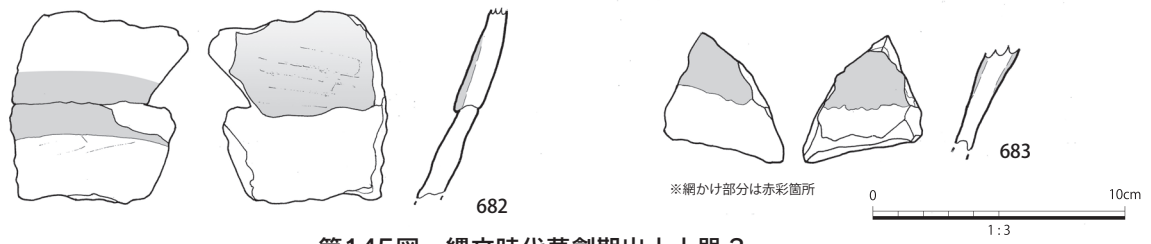
680



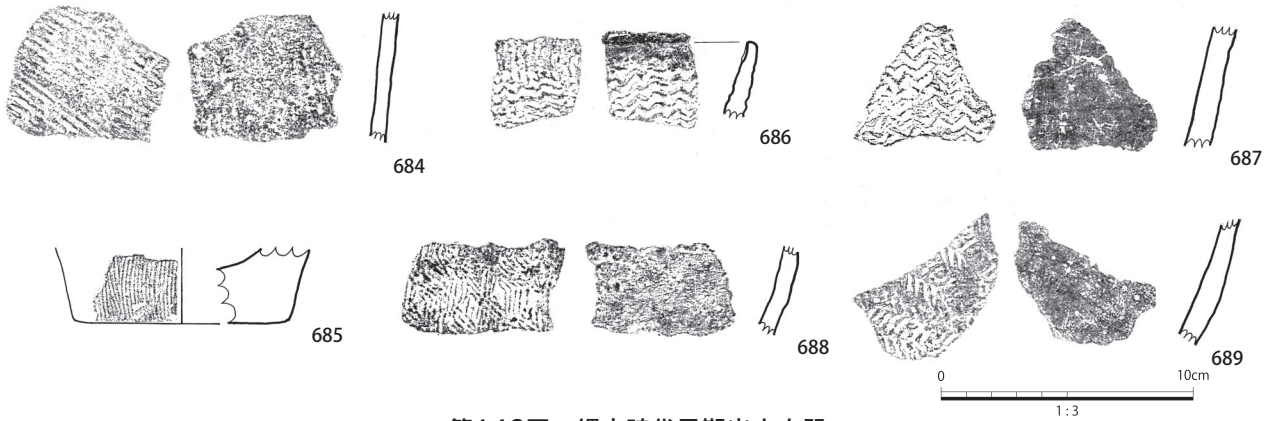
681



第144図 縄文時代草創期出土土器 2



第145図 縄文時代草創期出土土器 3



第146図 縄文時代早期出土土器

### (3) 縄文時代早期の土器 (第146図)

第IV層から出土している。平面的には26I区、標高33.0~34.5m付近に多くみられた。

684・685は貝殻文円筒形土器群に属するもので、684は外面に斜方向の貝殻条痕が施される。内面の器面では、赤褐色系と浅黄色系の胎土が混じり、マーブル状となっている。685は底部片で、外面に縦方向の条痕を施す。

686~689は押型文系土器である。686は口縁部の内面上部に縦方向の短沈線が施される。688の外面文様は菱形の押型文である。原体の彫りは細かい。689は山形文で、彫りは浅く、間延びした文様となっている。

### (4) 石器 (第147~148図)

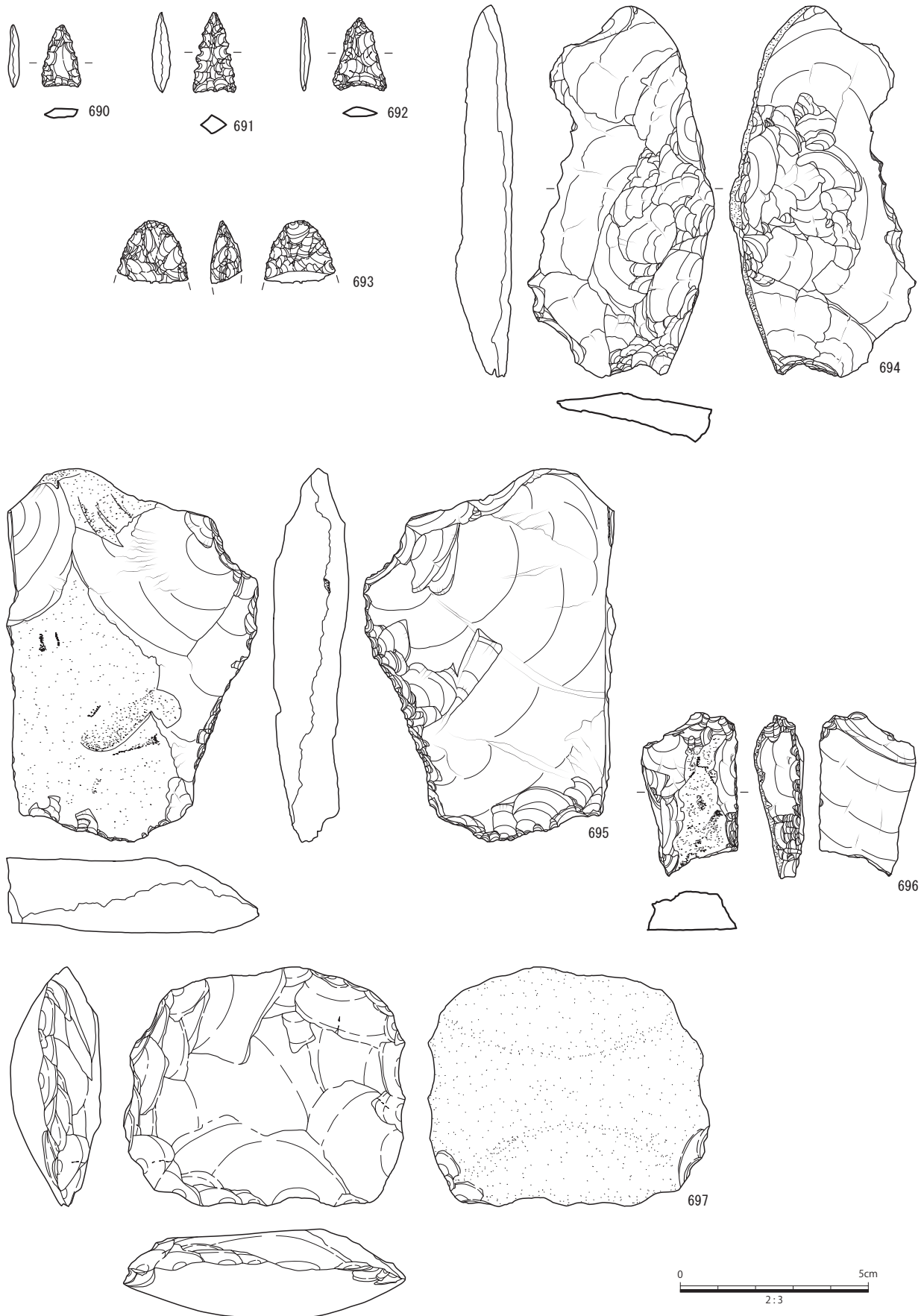
第IV層出土の石器は縄文時代草創期・早期の弁別が困難であるため、一括して掲載する。分布としては、平面的には26I区、標高33.0~34.5m付近でより多くみられた。

690~692は打製石鏃である。第4節3の分類からIIa類、IIIb類に該当する。690・691は、IIa類である。そのうち690は頁岩製で両面には節理面や素材時の剥離面を大きく残す。691はチャート製で側縁部が鋸歯状の加工が施されており、断面形は中央部が膨らんでいる。692はIIIb類で、先端部近くに屈折点がある。断面形は薄く、裏面には素材時の剥離面を大きく残す。ガラス質安山岩製である。

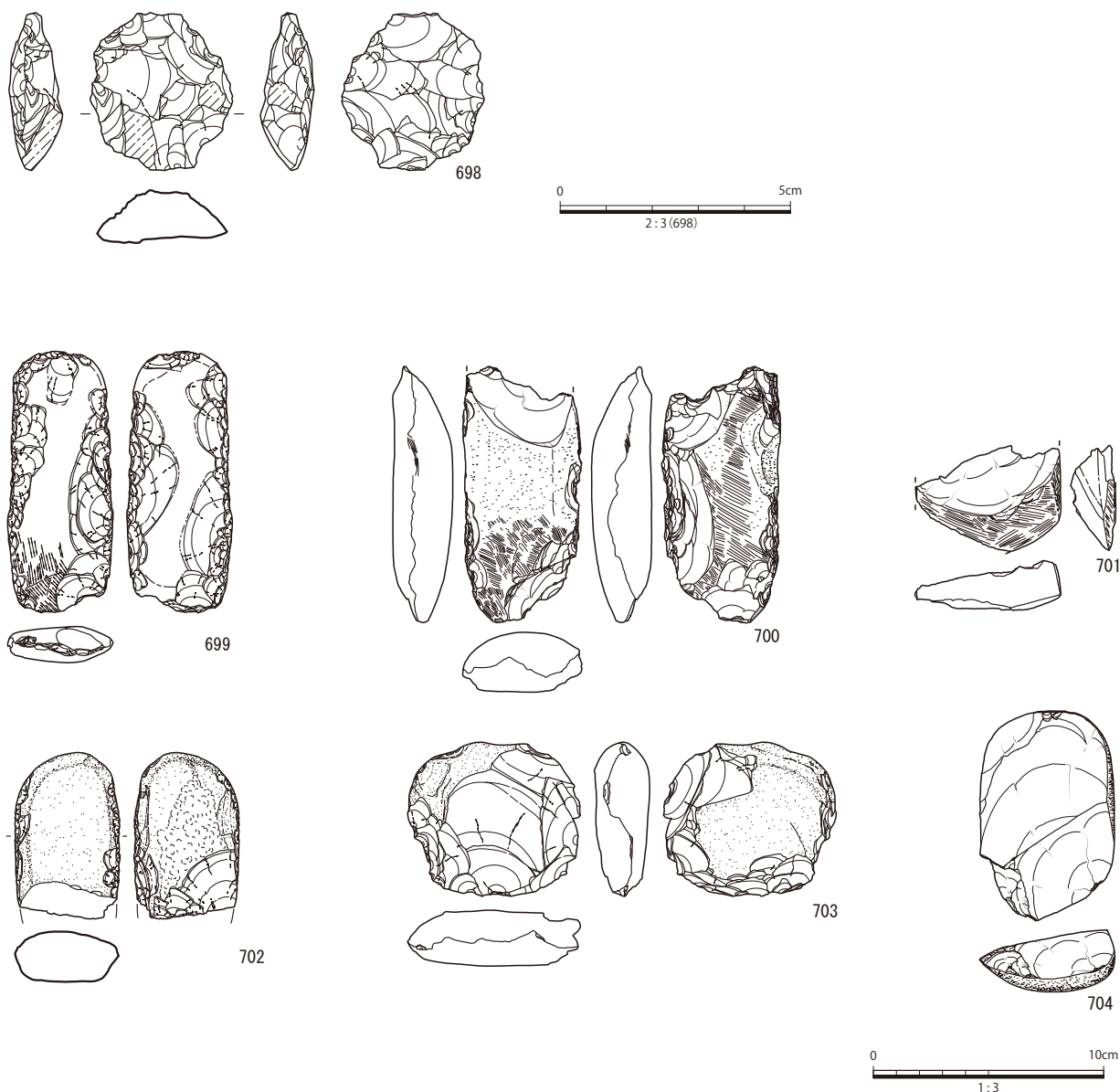
693はチャート製尖頭器の先端部の資料である。両面に細かな加工が施されている。

694~698は、スクレイパーである。694~696はサイドスクレイパーで、このうち694は、横長の剥片を素材にして、礫面打面に対向する縁辺に抉り状の刃部を作出している。礫面付近は比熱を受け、赤化している。695・696は礫面を有する縦長剥片を素材にして、695は右側縁から下縁にかけて、696は右側縁に刃部加工を施す。なお695の礫面はやや赤化している。694・695は頁岩製、696は日東産系黒曜石製である。697・698は周囲に刃部加工を施したラウンドスクレイパーである。なお、698は未製品の





第147図 縄文時代出土石器 1



第148図 縄文時代出土石器 2

可能性がある。697はホルンフェルス製、698は流紋岩製である。

699～701は、磨製石斧である。699はホルンフェルス製である。側縁は研磨により面取されているが、それを切る形で側縁調整が行われていることから、再加工が行われていると考えられる。700は頁岩製で棒状の扁平礫を利用して、素材の形状をあまり変えず、研磨等により、整形を行っている。なお、側縁等に認められる剥離については、再加工によるものと考えられる。701は頁岩製で、刃部の一部を残し大部分を欠損しているが、残存する部分は丁寧に研磨され、刃部は鋭利に仕上げられている。

702は、頁岩製の打製石斧である。刃部は欠損しているが、棒状の亜円礫を利用して側面調整が行われている。また片面中央には敲打痕が認められる。

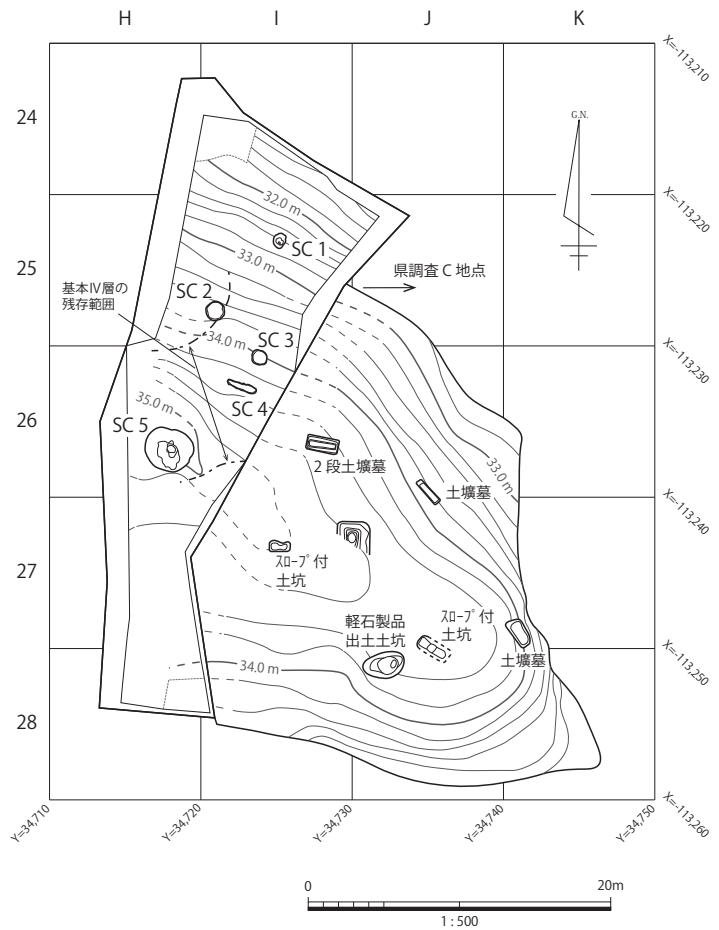
703・704は、頁岩製の礫器である。このうち703は、扁平礫の両面より打撃を加え、刃部形成を行っている。表面上部から裏面にかけて礫面が残る。また704は、分割礫に打撃を加え、刃部としている。



#### 4 弥生時代中期～終末期の遺構と遺物

##### (1) 遺構の分布 (第149図)

遺物包含層である第Ⅱ層を除去した後に検出することができる、弥生時代中期から終末期にかけての生活面である。J3地点は塚原台地から東側に延びる尾根の付け根付近に当たり、削平を受けてはいるが、旧地形としてはやや平坦地となる調査地点南半部を頂点に、北側では緩やかに傾斜し、南側はすぐに崖面となる。調査地点中央に位置する古墳SN1より南側に関しては、後世の削平によって第Ⅱ層以下第Ⅴ層までが失われていた。このため、弥生時代の遺構は調査地北半部にだけ残っており、中期あるいは終末期に属する2時期の遺構が重複している。J3地点では土坑5基が検出できた。



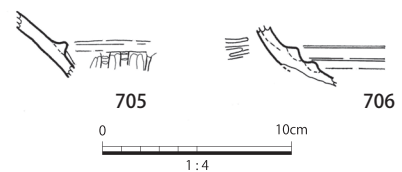
第149図 弥生時代中期～終末期の遺構分布図

##### (2) 土坑 (SC1～5)

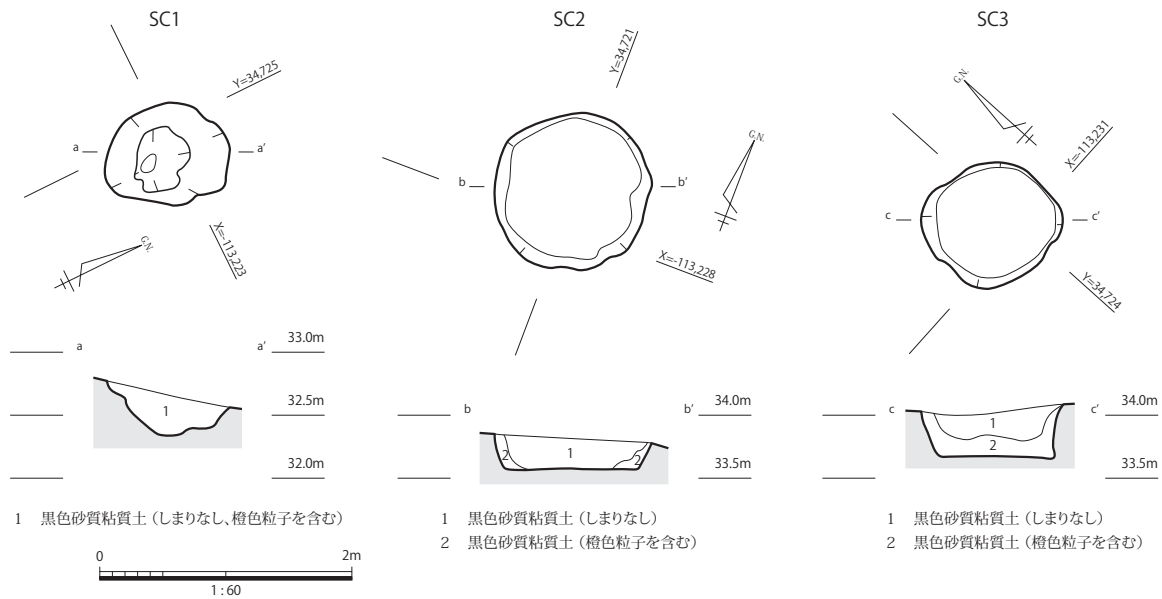
**SC1** (第151図) 25I区で第Ⅱ層の除去後に検出した楕円形の土坑である。北向きの斜面地にあり、SC2の北約5.0mに位置する。検出面で東西約0.8m、南北約1.0mで、上端となる南肩からの深さは約0.4mを測る。播鉢状になるが、底面はやや平坦であった。埋土は黒色砂質粘質土の単層であった。遺物は出土していない。

**SC2** (第150～151図) 25I区で第Ⅱ層の除去後に検出した径約1.2mの円形の土坑である。SC3の北東約4.0mに位置する。断面長方形に掘削され、検出面での深さは約0.25mである。埋土は黒色系の砂質粘質土を主体に2層に細分できた。なお、壁面に沿って堆積する橙色粒子を包含する埋土から、掘削土によってか土坑周縁に土墨を設けていたと思われる。

出土遺物は少なく細片が多いが、埋土中から壺705などが出土した。705は瀬戸内系の長頸壺の体部上半にあたる。欠損するが、2条の三角形の突帯間に3条の縦方向の貼付突帯を一組にして加飾するものと考えられる。



第150図 SC2・SC3 出土遺物  
SC2 : 705、SC3 : 706



第151図 SC1・SC2・SC3 平面・断面図

**SC3**(第150～151図) 26I区で第Ⅱ層の除去後に検出した土坑で、直径約1.0mのほぼ円形をなす。約1.5m南にSC4がある。検出面での深さは最大で約0.45mであり、ほぼ円柱状になるものである。埋土は黒色系の砂質粘質土を主体に2層に細分できる。底面から壁面に沿って堆積する橙色粒子を包含する埋土から、SC2と同様に土墨を土坑周縁に設けていたと考えられる。

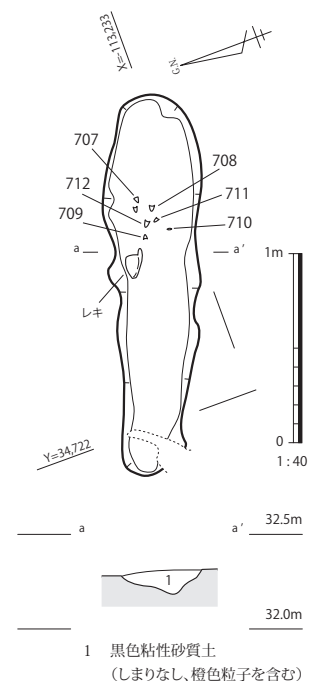
出土遺物は少ないが、壺706などが埋土中から出土した。706は三角形の突帯が2条認められる壺の肩部である。

**SC4**(第152～153図) 26I区で第Ⅱ層の除去後に検出した細長い土坑である。東西方向に溝状に延びるもので、全体的な形状は舟形を呈する。検出面での長さは約2.0mで、東側に膨らむ最大幅は約0.5mとなる。また、鈍角にV字状に掘削された最深部で深さ0.15m程度であった。埋土は黒色粘性砂質土の単層で橙色粒子を含む。

中央付近北側には0.15cm程度の扁平な礫が据えられており、その西側の底面近くで磨製石鏃7点が集中して出土した。これらの状況から調査時は土壙墓として考えていたが、当該地域での土壙墓は基本的に2段に掘削されたものであるため、土壙墓としての可能性も示唆しつつ、溝状に掘削された内に7点もの磨製石鏃が意図的に置かれている状況を鑑みると別用途も考えておく必要がある。

なお、SC4から出土した遺物は磨製石鏃7点のみであったが、調査中に石鏃1点を紛失する事態となった。取り返しのつかないことであるが、ここでお詫びしたい。(第152図には7点を描く)

707～712は磨製石鏃である。707・708は両面中央に鏃を設ける。707は平基式、708～712は凹基式のものである。711は基部面も調整し、712については全体的に長く、基部の挟りが深い。



第152図 SC4 平面・断面図

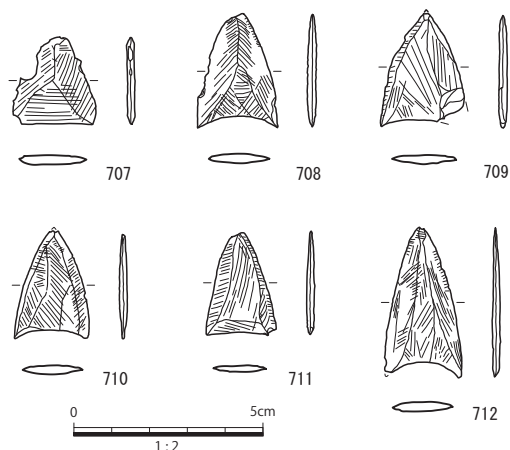
**SC5 (第154～155図)** 26H区で古墳SN1直下に堆積する第Ⅱ層を除去した後に検出した。東西約3.2m、南北約2.7mの楕円形となる大型の土坑で、SC4の約7.0m南に位置する。北側はスロープ状をなし、南側がL字になって平坦面をつくる断面形状で、底面の中央には窪みをもつ。検出面での深さは最大で約1.0mであり、埋土は黒色系の砂質粘質土の単層であった。遺物は細片ではあるが出土量は多い。甕**715・716**、紡錘車**717**などは底面に近い場所から出土しているが、大半は埋土中位から下位に集中する。

**713**は壺の肩部から頸部にあたり、2条の小さな三角形の突帯が肩部にめぐる。**714**は平底になる壺の底部である。**715・716**は下城式系の甕である。**715**は口縁端部と口縁部の高い位置に不明瞭ながら刻目突帯をもつ。**716**は口縁形状が内湾し、端部に刻目突帯がめぐる。**717**は土製の紡錘車である。直径4.5cmの円形をなし、ほぼ中心に0.6cmの穿孔を焼成以前に設けている。厚みは0.7cm程度である。

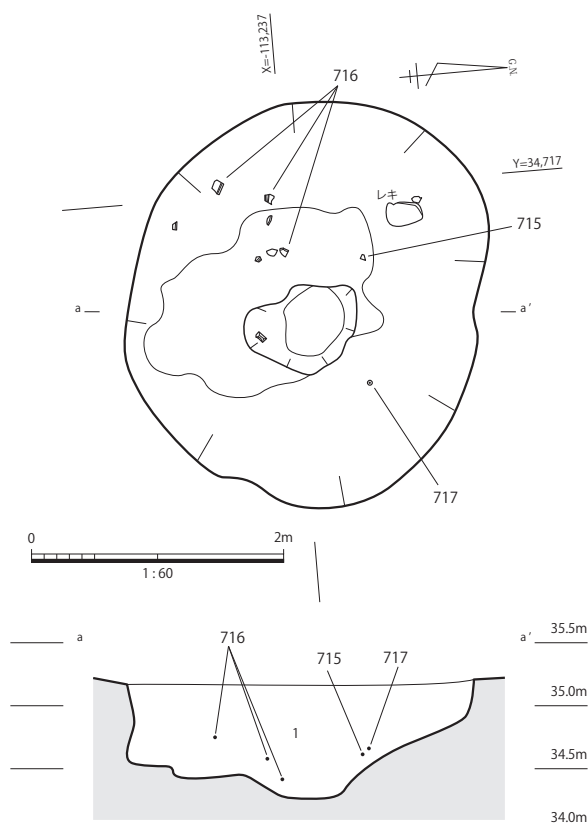
### (3) 古墳 SN1 盛土内の出土遺物 (第156図)

次節で報告する古墳SN1では、周溝を掘り上げた掘削土を用いて墳丘が築造されていることから、古墳の盛土中から第Ⅱ層に包含される遺物が多量に出土した。

**718**は板付式系の壺で、内傾する体部から短い頸部をへて、短く外反する口縁部をもつ。口縁端部はやや面をなし、体部と頸部の境に沈線を設ける。**719**は大きく外反する口縁部と口縁内部に三角形の突帯をもつ壺である。突帯には不明瞭ながら刻目の痕跡が認められる。**720～722**は広口壺の口縁部である。**723**は壺の肩部で、3条の

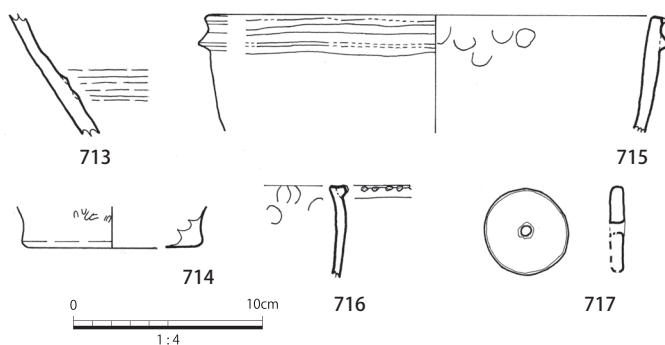


第153図 SC4 出土遺物

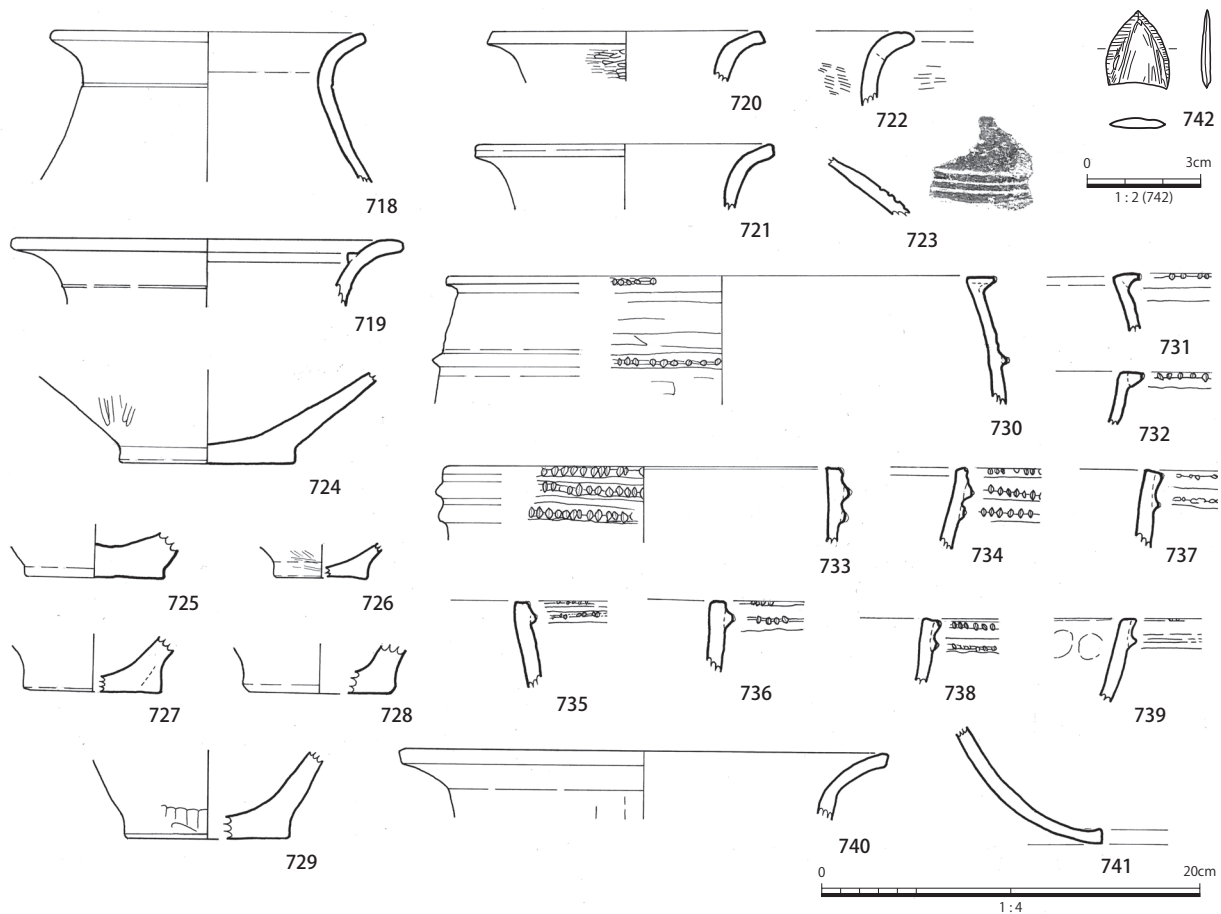


1 黒色砂質粘質土 (しまりなし)

第154図 SC5 平面・断面図



第155図 SC5 出土遺物



第156図 SN1 盛土内出土遺物

沈線がめぐる。724～729は平底をなす壺の底部である。730～739は下城式系の甕である。737～739は三角形状の端部と直下に小さな刻目突帯を有するもので、突帯は端部から連続する粘土帯を用いてつくる。740は頸部から口縁部にかけてやや緩やかに屈曲する甕である。741は外に大きく伸びる器台の裾部で、上方につまみ上げながら端部を面にする。742は凹基式の磨製石鏃である。(二宮)

## 5 古墳時代前期中葉以降の遺構と遺物

### (1) 遺構の分布 (第157・158図)

J3 地点は先述のとおり塚原台地の最南東から東側に延びる尾根の付け根付近に位置しており、調査地点の西側には台地上の平坦面が広がっている。古墳時代以降の生活面としては表土の除去後すぐに検出することができるが、地形の高まりについては調査前の地表観察においても明瞭に確認できたことから、当該地点における古墳の存在は容易に認識することができた。古墳は丘陵鞍部のやや平坦地である調査地点南半部に立地し、ここを頂点に北側は緩やかに傾斜する。古墳の南側については、狭い平坦地が認められるが、すぐに急峻な崖面となる。

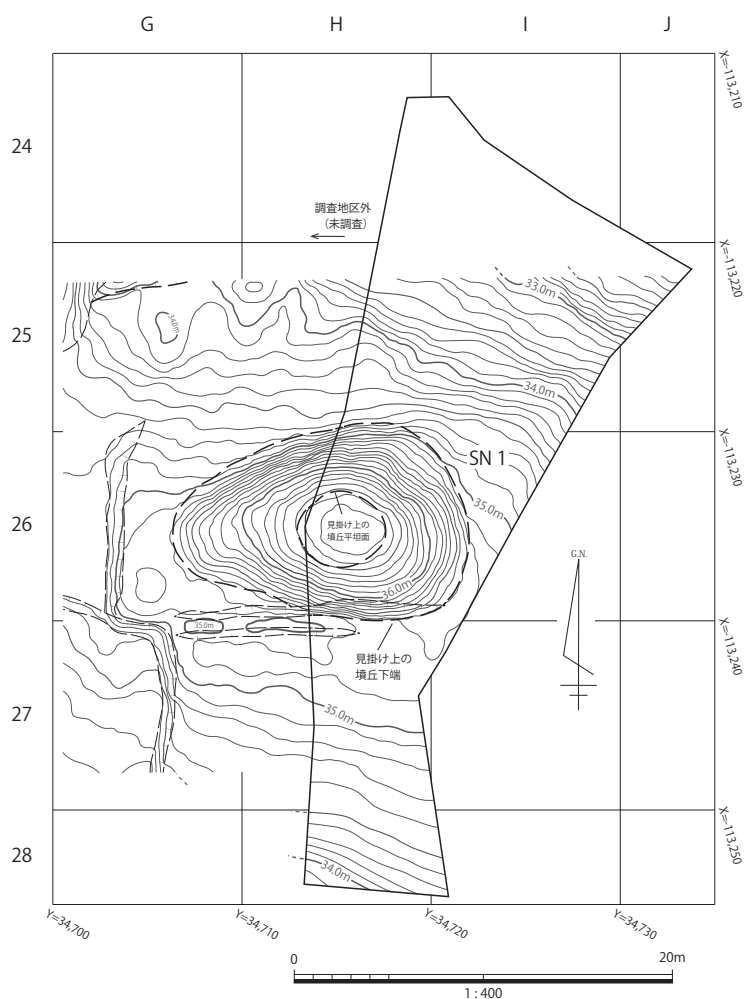
古墳の周辺は、近代以降、裾際ぎりぎりまで耕作地として利用されていたことや古墳の盛土に使用されたことで、J3 地点では上位の基本層が失われている場所が多く、古墳以南についてはより顕著な状況であった。このためか、J3 地点で検出できた遺構は、調査地の中央付近における古墳 1 基と付設の石列のみであった。また、塚原遺跡 C 地点、本来の尾根の先端であった位置において前期初頭に属する円墳 1 基が検出されており、さらに西側の台地内部には南縁に沿って県指定古墳も存在する。

なお、調査以前の古墳は、東側が高く西側に低い前方後円墳状の平面形を観察できたが、工事によって影響の及ぶ調査区域については、古墳東側の円形部分のうち東 3/4 程度であった。

### (2) 古墳 (SN1、第159～160図)

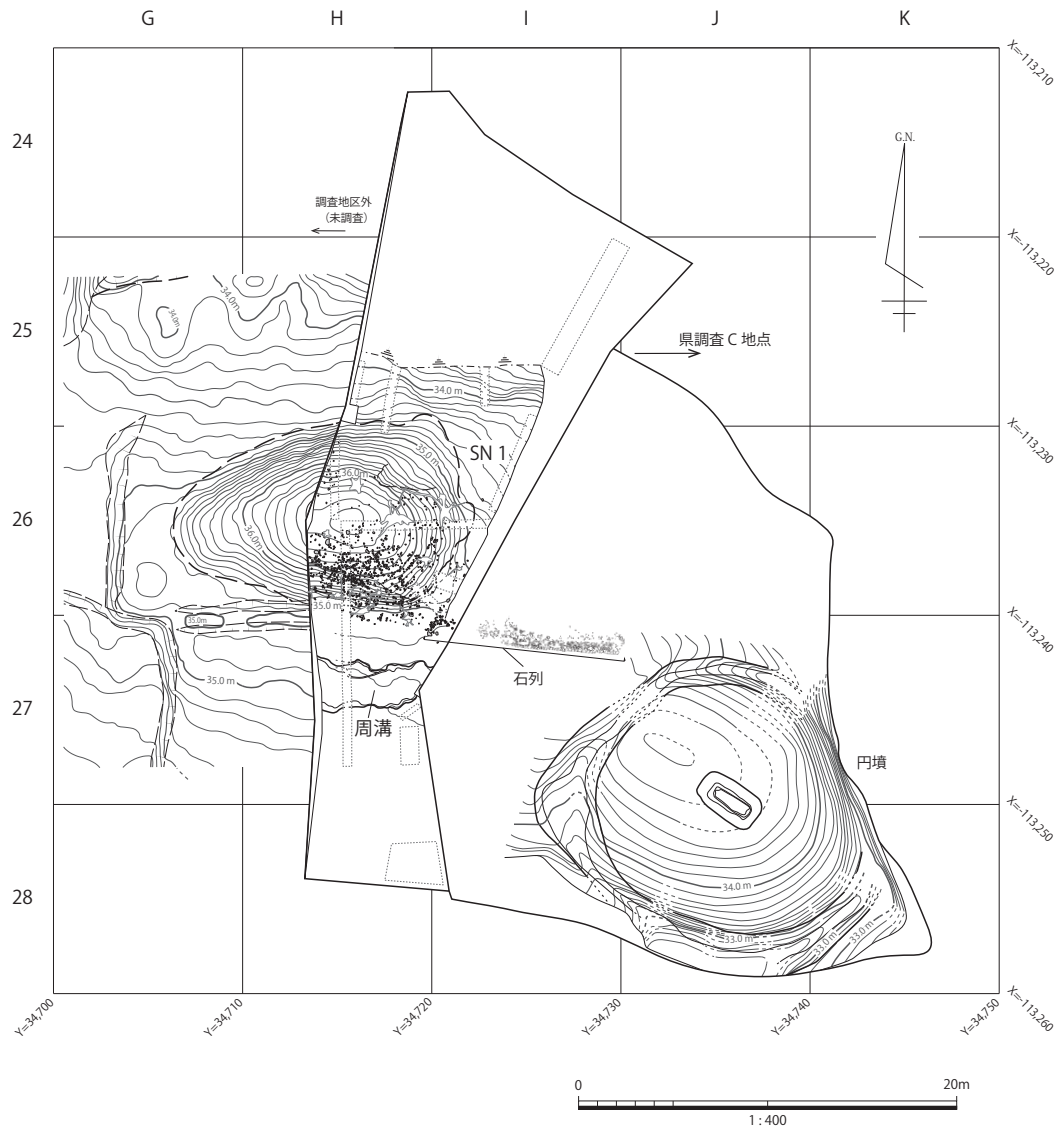
26H 区に位置する墳丘構築面の標高が35.5m付近にある古墳で、台地の最南東端において東西方向に形成された小さな尾根筋の付け根付近に立地する。先述のとおり調査以前より明瞭な地形の高まりが確認でき、東側が高く西側に低い前方後円墳状の平面形が観察できたことから、東西方向を軸に据えた先行トレンチを設定した。さらに、東側の円形部頂に見かけ上の中心を設けて直行する南北トレンチを設定し、これらで墳丘の堆積状況や造営の過程を観察しながら調査を実施した。

① 埋葬主体部 (第161・162図) 墳丘は第Ⅱ層をベースに楕円形あるいは長方形様に整地がなされ、この段階で東西に主軸をもつ墓壙を構築していることが判明した。整地面に対する墓壙の位置は、東西



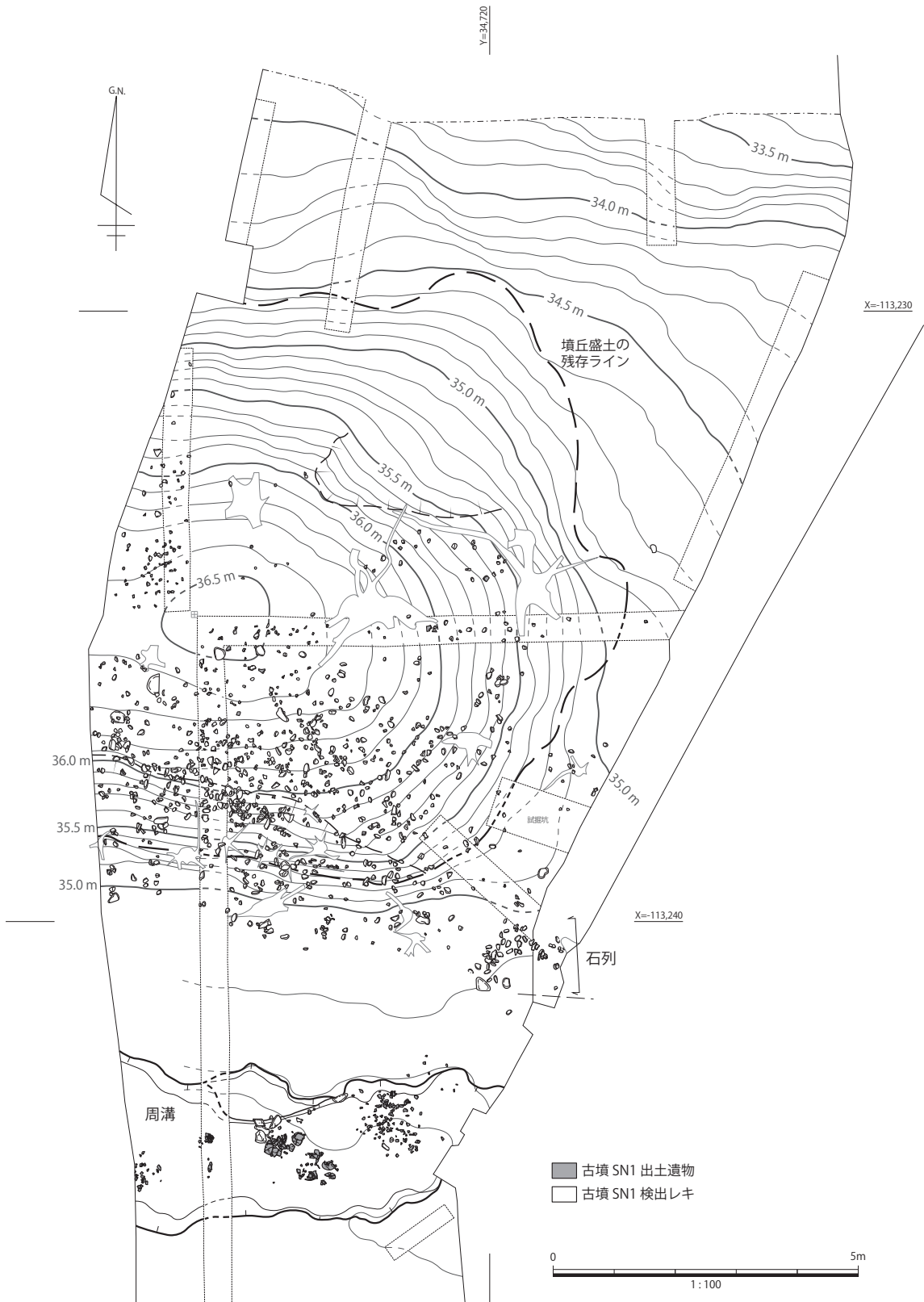
第157図 調査以前の墳丘測量図



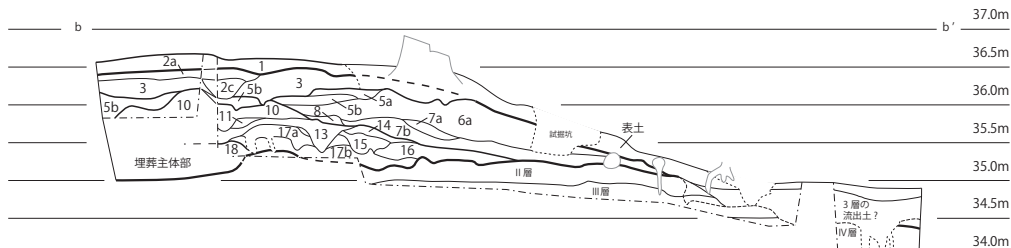
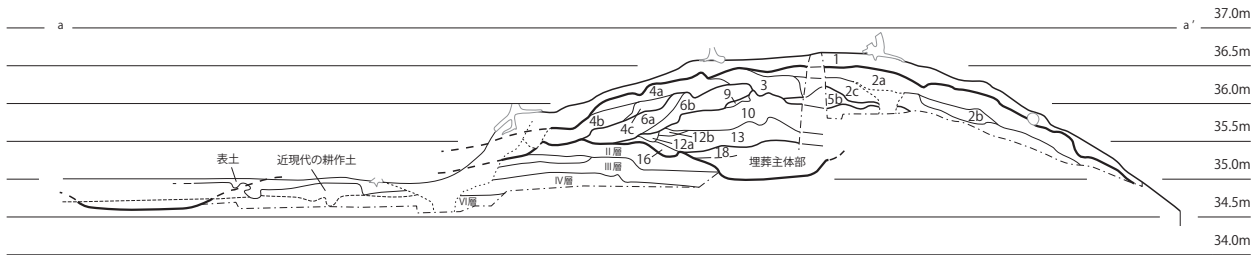


第158図 古墳時代前期の遺構分布図

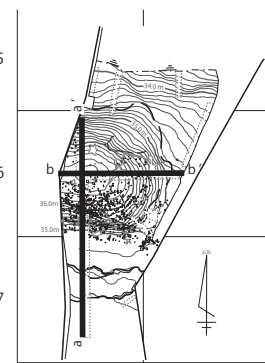
方向は判然としないが、南北方向ではほぼ東西の中心軸上に造られている。墓壇の西側は調査区外に至るが、掘形の平面形は長方形を呈し、検出面で長辺2.0m以上、短辺1.6~1.7mの規模となる。墓壇の掘削は、整地面がやや北側に傾斜することから、南側に段を設けて全体的に水平にしたのちに0.3m程度掘削し底面を平坦に整える。なお、北側壁面については埋葬に係わる作業場としてか、垂直ではなく一度平場を設けてから底面まで掘削している。さらに、底面には長さ0.6m以上、幅約0.3mの長方形で深さ0.1~0.2mの断面が半円形の掘り込みが、墓壇のほぼ中央の位置に確認できた。この掘り込みについては、埋葬部とするには小規模であることから、木棺を安定させる窪み、あるいは墓壇内の水抜き等に利用していたと考えられ、事実、木棺の裏込め土と思われる9層や10層に認められる弧を描く断面形状や上記の掘り込みを含めた底面に残る痕跡から遺体安置には割竹形の木棺が利用されていたものと推測される。底面に残る木棺痕跡は長さ1.1m以上、幅約0.6mを測り、木棺を安定させるためか黒褐色土が混ざる灰白色粘質土（13層）とブロック状のにぶい黄橙色粘質土（14層）を周囲にめぐらせている。そして、遺体安置後の埋戻しには第Ⅱ層由来の黒色粘質土が利用されている。



第159図 SN1 平面図



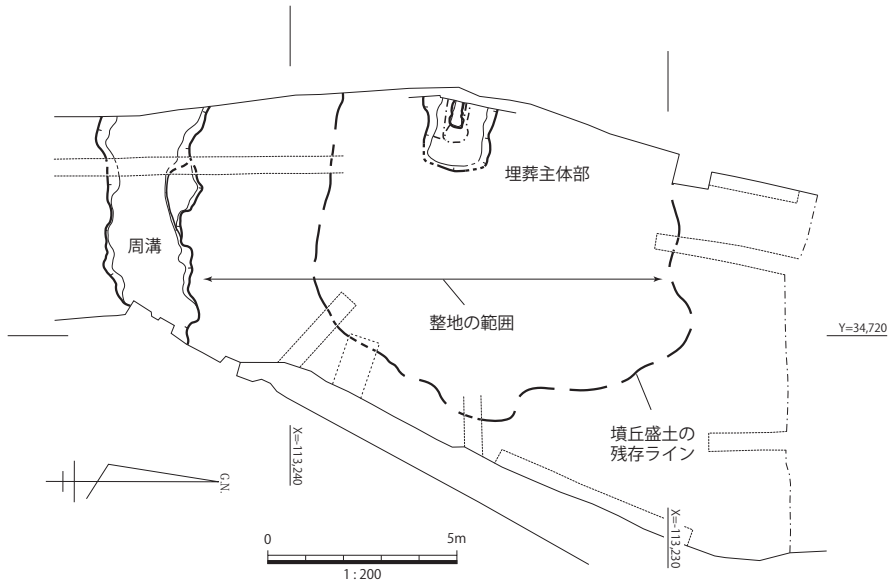
- 表土 1 暗オリーブ褐色砂質土（表風化が進んでいるが本来の墳丘盛土も一部含む）
- 2 a 黒褐色弱粘質土（Ⅲ層由来の黄褐色粒子とブロック、およびⅣ層由来のオリーブ褐色ブロックを含む）
- b 黒色粘質土（しまりなし。Ⅲ層由来の黄褐色粒子のみを含む）
- c 黒色粘質土（Ⅲ層由来の黄褐色土粒子と8cm程度のブロックを多く含む）
- 3 黒褐色粘質土（Ⅲ層由来の1～3cmの黄褐色ブロックを多く含む。水平に近い状態で堆積）
- 4 a 黒褐色粘質土（Ⅲ層由来の黄褐色粒子を多く含む。縄文時代の焼礫と推測される砂岩の礫を含む）
- b a層より少し黄色が強い色調となる
- c a層より色調が少し明るく、黄褐色土粒子の含有率が高い
- 5 a 黒褐色粘質土（Ⅲ層由来のブロックとⅣ層由来の暗オリーブ褐色土ブロックを含む。水平に堆積）
- b a層より大きいブロックを含む。同様に水平に堆積
- 6 a 黒色粘質土（Ⅲ層由来の1～2cmの黄褐色ブロックを含む）
- b 黒褐色砂質粘質土（a層より色調が少し明るく砂質感あり）
- 7 a 黒色粘質土（8cm以下の黄褐色ブロックと粒子を多く含む）
- b 黄褐色粒子のみを含む
- 8 黒褐色弱粘質土（黒色土と黒褐色土がブロック状に構成。黄褐色粒子を含む）
- 9 黒褐色粘質土
- 10 黒色砂質粘質土（ややしまりあり。Ⅲ層由来の黄褐色土粒子を多量に含む）
- 11 黒褐色粘質土（黄褐色粒子と黄褐色ブロックを多く含む）
- 12 a 黒褐色粘質土（黄褐色粒子をわずかに含む）
- b a層に暗オリーブ褐色ブロックを中心に、黒色および黄褐色ブロックを含む
- 13 黒褐色粘質土（黄褐色ブロック、暗オリーブ褐色ブロックを大量に含む）
- 14 黒褐色弱粘質土（わずかに黄褐色粒子とブロックを含む）
- 15 暗褐色弱粘質土（3cm以下の暗オリーブ褐色ブロックと1cm以下の黄褐色ブロックを含む）
- 16 黒褐色弱粘質土（層そのものがブロック状で、2cm以下の黄褐色粒子とブロックを多量に含む）
- 17 a 黒褐色弱粘質土（暗オリーブ褐色ブロックと1cm以下の黄褐色ブロック、および黄褐色粒子を含む）
- b a層よりブロックの含有率が高い
- 18 黒褐色弱粘質土（黒色、黄褐色、暗オリーブ褐色の小ブロックを多量に含む）



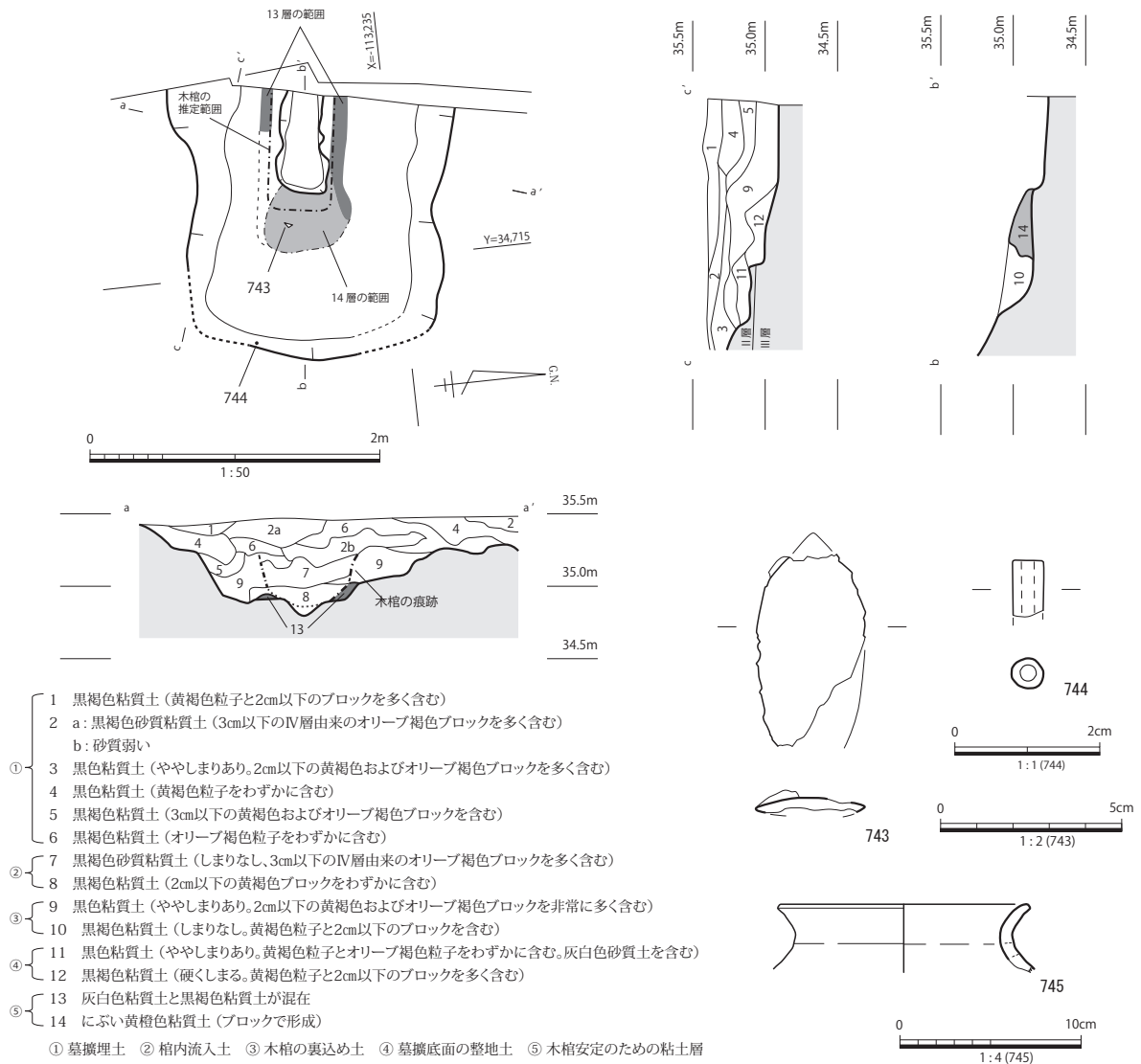
第160図 SN1 断面図

墓壇内からは、棺内の東端よりの位置から鉄鎌743が1点、棺外では墓壇東壁際で管玉744が1点出土している。なお、これら副葬品の位置を考えると、頭位は東側にあったと推測される。その他、土器類も木棺の腐朽後に流入した埋土（7層、8層）や墓壇内埋土から出土しているが、弥生時代の包含層である第Ⅱ層由来の遺物（第156図）が大半で、明らかに古墳にともなうものは少なく、復元・図化できたものは壺745だけであった。

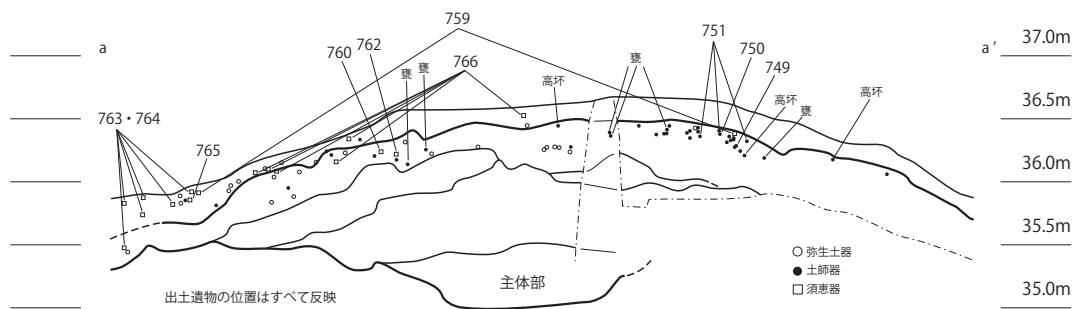
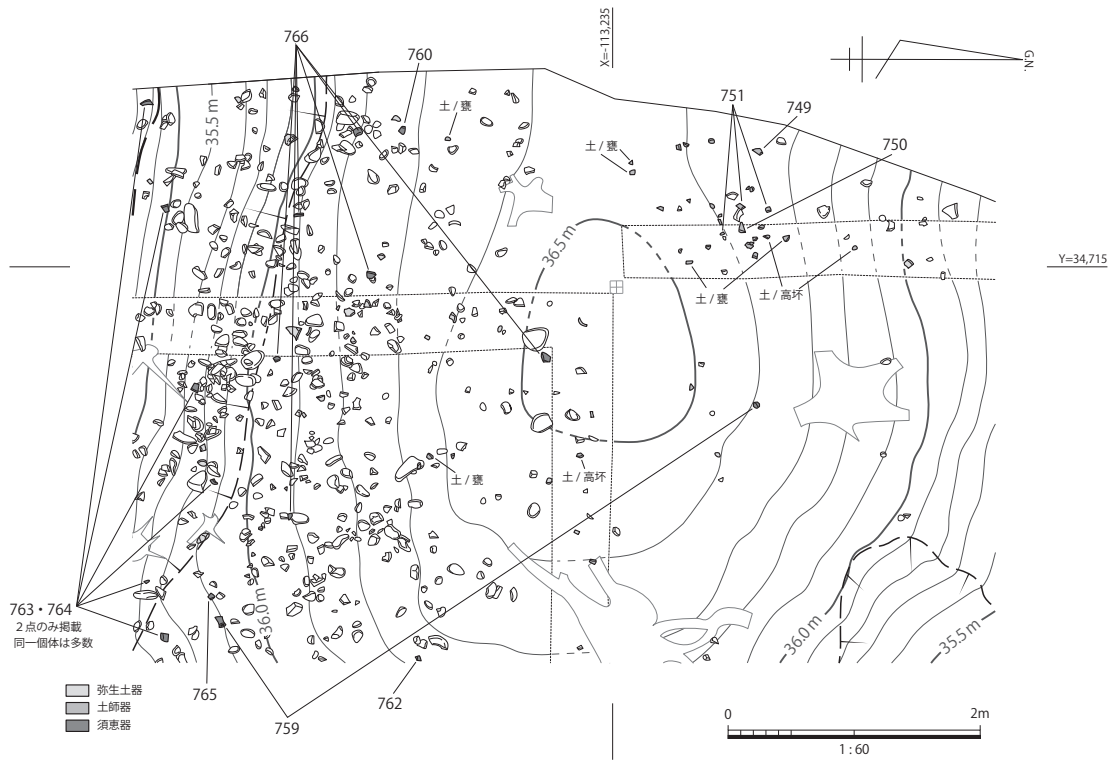
**埋葬主体部出土遺物** 743は柳葉形の鉄鎌と判断したが、腐食により刃部形態などは不明である。744は碧玉製の管玉である。欠損のため不明な点が多いが、残存する長さは0.7cmで、最大径0.4cm、中央の穿孔径は0.2～0.3cmである。色調は光沢のある緑色を呈する。745は短い頸部から口縁部が短く外反する壺で、口縁端部を丸くおさめるものである。



第161図 墳丘における埋葬主体部の位置図



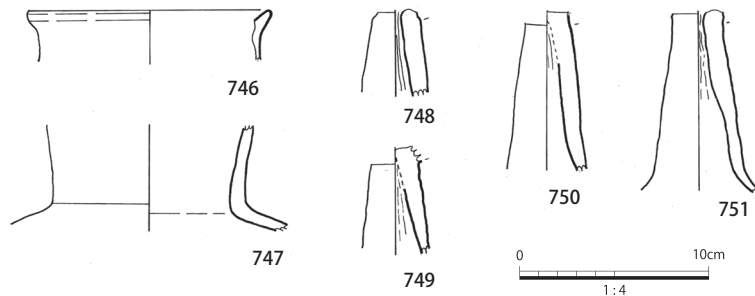
第162図 埋葬主体部 平面・断面図および出土遺物



第163図 墳頂平坦面遺物出土状況図

② 墳丘 (第160・163・164図)

墳丘の構築面は第Ⅱ層を整地して形成されていることはすでに言及したが、調査を実施した円形部だけの計測値で、南北約12.0m、東西7.0m以上の規模で平坦面を造成する。そして遺体の埋葬後に、円形部で構築面から約2.0mの高さを測る、すべて盛土によって構成された高い墳丘を構築しており、直径10.0mほどの円形部の南縁には幅2.0m程度の平坦面を造り出している。



第164図 墳頂平坦面 出土遺物

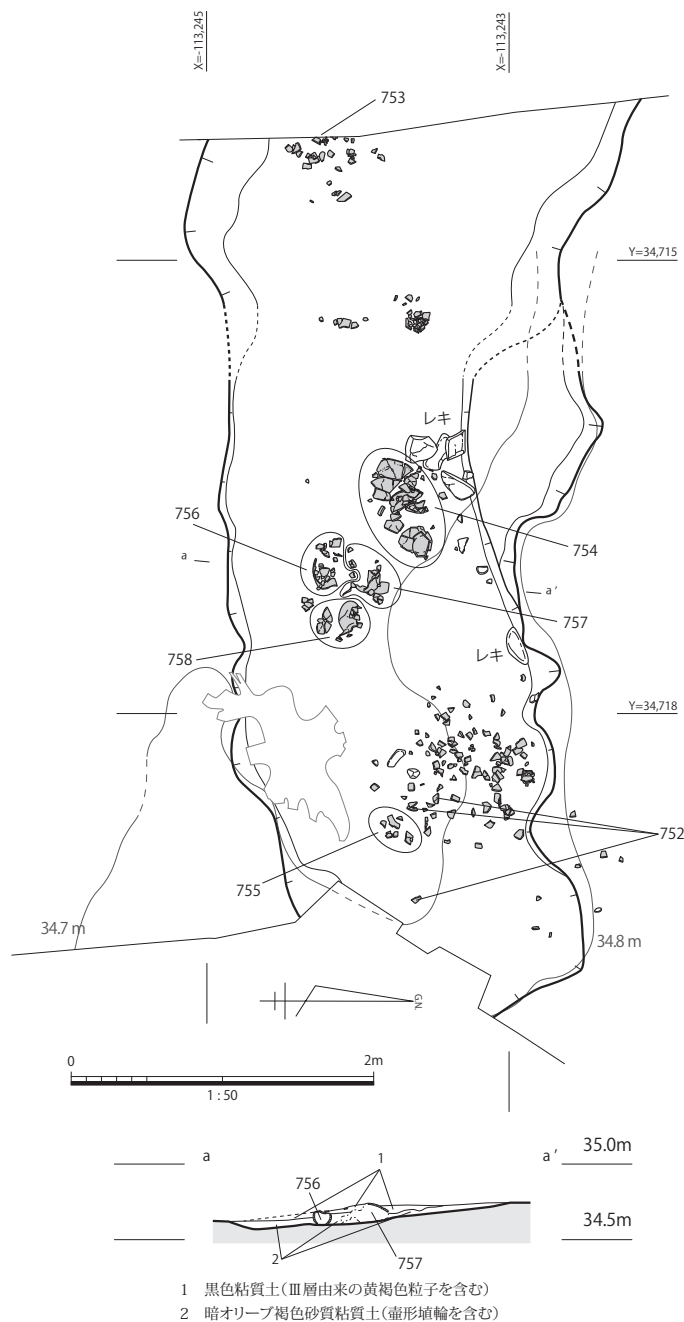
墳丘の構築過程は断面観察によって3段階の工程が確認できた。盛土Ⅰの工程では、整地面のうち中央付近から北側に対して、黒褐色系の弱粘質土を比較的小さな単位で縁辺から積み上げつつ中央に平坦



面を設けたのち、黒色砂質粘質土で山を造る。盛土Ⅱの工程では、山状の盛土Ⅰをさらに大きくするように東側を中心に黒色系の粘質土で盛土が行われており、最終的には上面を平坦にする。盛土Ⅲの工程では、さらに墳丘を大きくするように南北方向に対して黒褐色系の粘質土で成形しているが、整地面の南辺までを墳丘とせず、この段階において墳丘の南縁をめぐる平坦面を造り出している。円形状に造られた墳丘は直径約10.0m程度の規模で、墳頂には東西約4.0m、南北約3.0mの平坦面を設けている。盛土はどの段階も意識的に突き固めた様子はなく、また、周辺の縄文時代～弥生時代の遺物包含層が盛土に使用されたため、盛土内からは同時代の遺物が多く出土したが、古墳築造にともなう遺物は特に目立つものはなかった。

墳丘南縁の平坦面については、墳丘円形部に対して2.0m程度の幅でめぐっていたと考えられる。上位の削平や調査範囲の問題で形状や規模は判然としないが、残る等高線から推測すると墳丘東側にも若干回り込んでいた可能性もある。そして、平坦面上には後述する周溝内出土の壺形埴輪が樹立していたと考えられる。

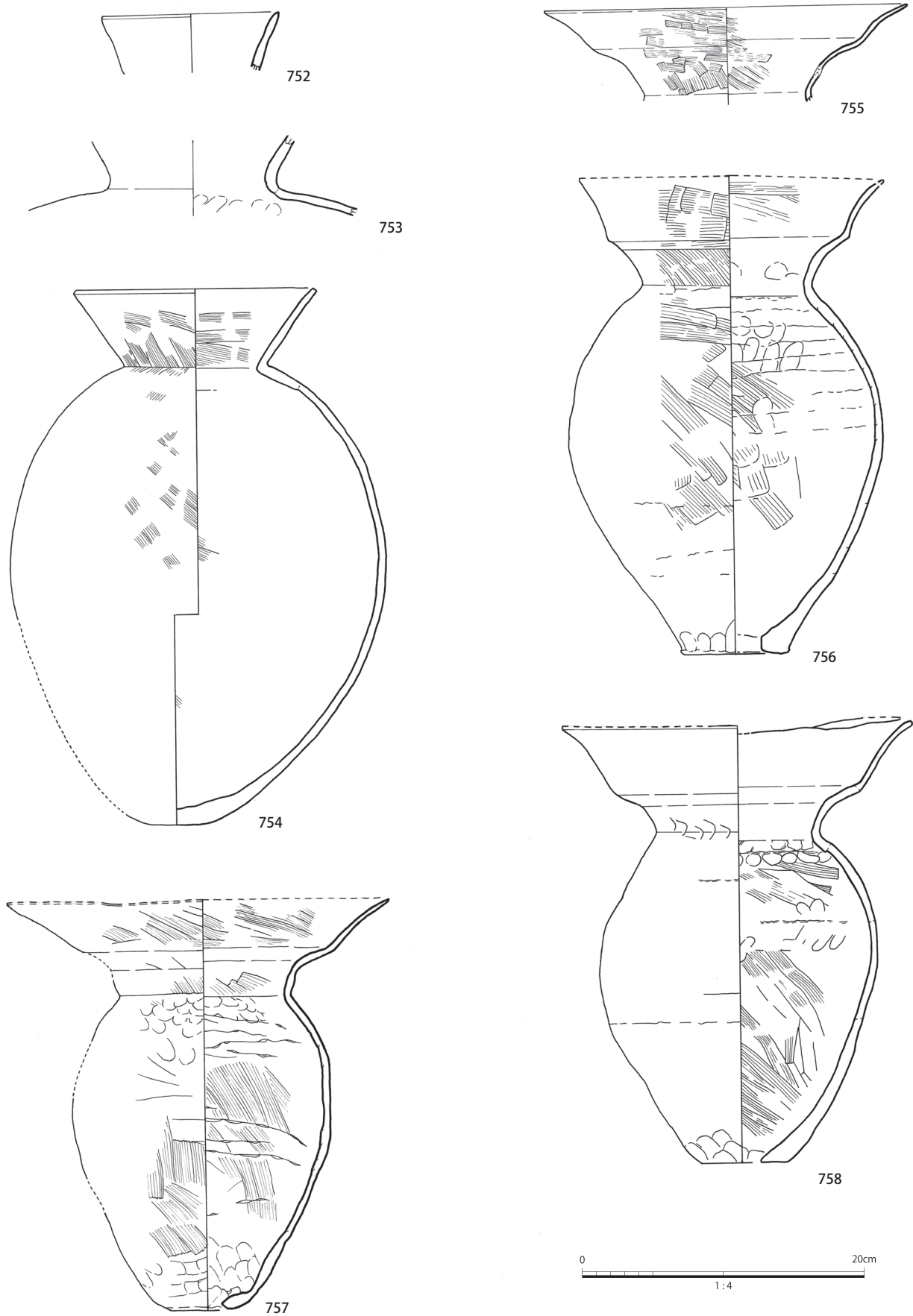
墳頂平坦面上には盛土下と別の埋葬施設は設けておらず、本古墳の埋葬主体部は先状の盛土下のものだけであった。墳頂平坦面では、壺や高坏などの破碎された土師器片が北西側を中心に出土している。**墳頂平坦面出土遺物** 746～751は土師器である。746は直立する頸部から短く外反する口縁部をもつ壺で、やや玉縁状をなす端部は丸くおさめている。747は直口壺の肩部から頸部にあたり、肩部の外面は丁寧なミガキによるものか平滑に仕上げている。748～751は高坏の脚柱部で細く長い。丁寧に平滑に仕上げられ、いずれも別作りの坏部と差し込みによって接合させるものとする。



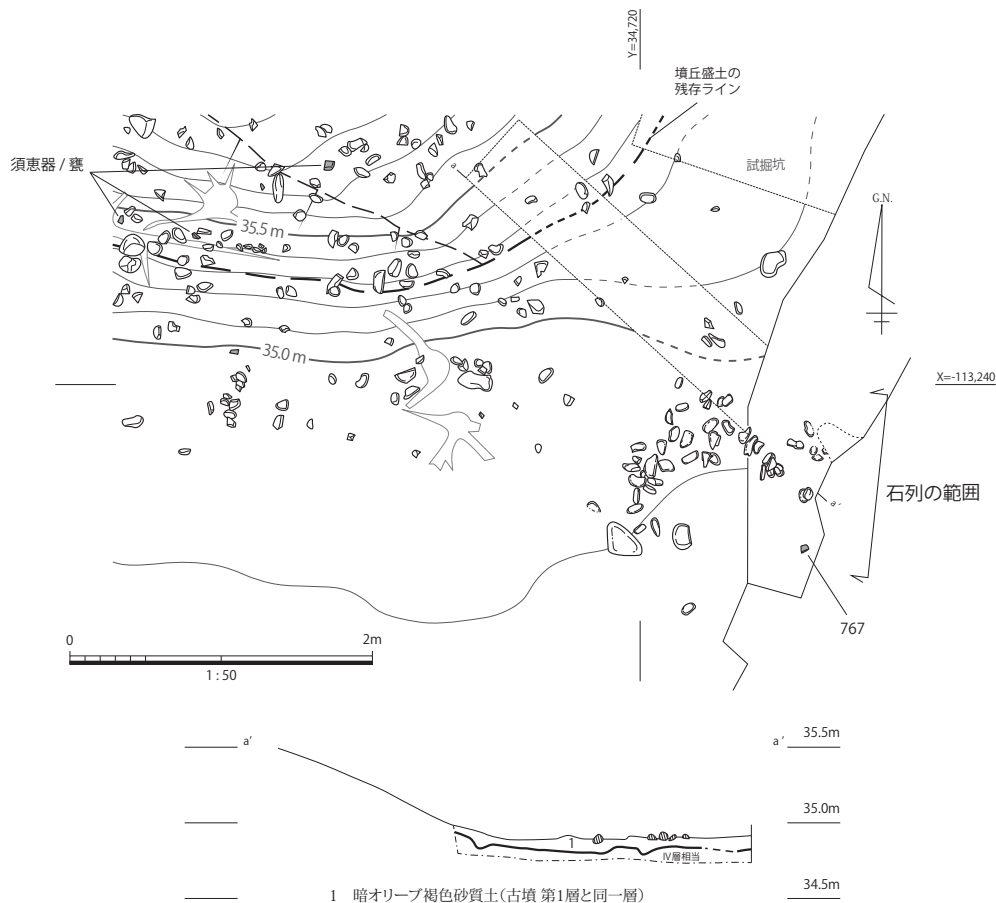
第165図 周溝内遺物出土状況図

③ **周溝**（第165・166図） 墳丘の南側では、やや弧を描きながら墳丘に沿って設けられた周溝を検出した。西側が調査区外になるため検出長で約6mとなる。近代以降の耕作によって周溝上位が削平されていたため、検出面で幅は最大2m程度、深さは0.15m程度しか残っていなかったが、周溝北側の中央付近に平場が確認でき、周溝内からは壺形埴輪数個体分が、横倒しになったものも含めそれぞれの個体の形をある程度保つようにして出土した。周溝の埋没過程は判然としないが、最下層には暗褐色系の砂質粘質土が堆積し、壺形埴輪などを包含する。このため、壺形埴輪は先述した墳丘南縁平坦面に樹立させた後、ほどなくして転落したものと考えておきたい。なお、南周溝の東側延長部分には、塚原遺跡C地点で検出したSC4の上位部分が連続する可能性があり、墳丘東側へと回り込まないことから、この位置で途切れると考えられる。また、北側の周溝については確認できなかったことから、旧地形の傾斜がきつい墳丘円形部の北側には周溝を構築していないことが判明した。

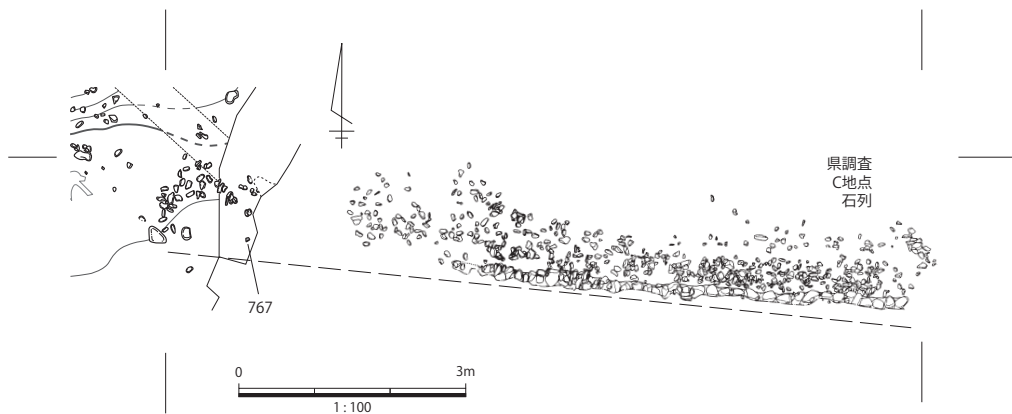
**周溝内出土遺物 752・753**は土師器直口壺である。**752**はやや外傾する口縁部から鋭くつくる端部をやや受口状にする。後述の壺形埴輪**754**と胎土や仕上がりがよく似ることから壺形埴輪の可能性もある。**753**は張りのある肩部から短く直立したのちに口縁部を外反させるものである。**754～758**は壺形埴輪である。**754**は単口縁形態のものである。二重口縁形態のものとはほぼ器高が同じで、小さな平底の底部をもち、縦に長い卵形の大きな体部から口縁部を明瞭に屈曲させ、端部を面にする。頸部の屈曲部から口縁部下半には縦方向のハケを施し、上半は横方向のナデで調整する。体部外面にも斜位のハケが所々確認できるが、基本的には丁寧なミガキが施され、器壁も薄く精緻な作りである。**755～758**は二重口縁形態のものである。**756～758**については体部の最大径をやや上位にもち底部に向かってしぼませるもので、平底になる底部の中央に、焼成前に円形の穿孔を設ける。器壁は薄く丁寧なつくりで、底部付近に黒斑が残る。いずれも頸部径は広く**755・756**は頸部から1次口縁までを緩やかに外反させ、**757・758**はやや直立する頸部から外反する1次口縁をもつ。2次口縁については、**756**がやや立ち上がり気味に外反するが、他は外方に伸びる。端部はいずれも鋭くつくる。外面の調整はハケが目立ち、2次口縁部が横方向か斜め、頸部が縦方向、体部上半が横方向、中位から下半にかけては斜めか縦方向を基本とし、底部にはユビオサエが認められる。内面は口縁部から頸部までは斜め方向のハケを施し、頸部と体部の境にはユビオサエが残る。体部は斜めか縦方向のハケで調整し、体部の内外面には一部に粘土のつなぎ目が残る。



第166図 周溝内 出土遺物

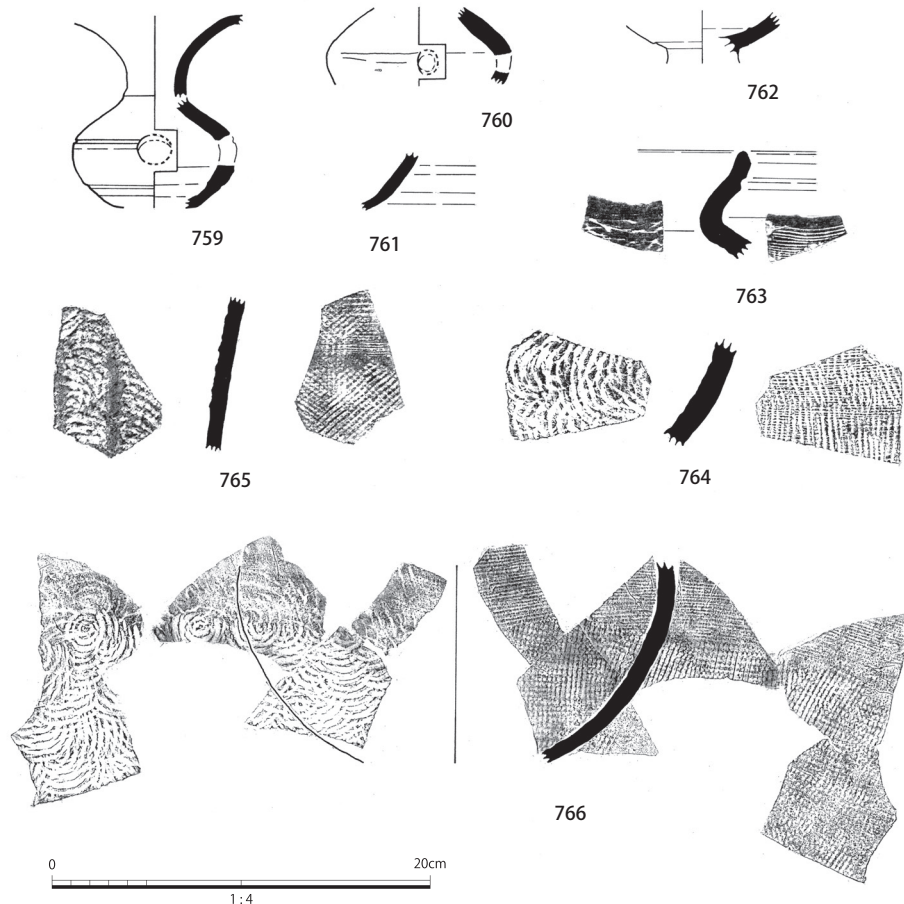


県調査C地点検出の石列との対応関係



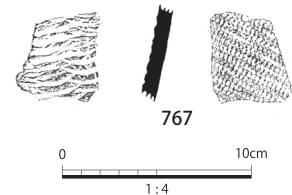
第167図 石列 平面・断面図

④ 「後の祭祀行為」と石列（第167～169図） 墳丘の調査を開始して間もなく、風化土のような表土の掘削途中から拳大程度の平礫が検出されはじめ、表土を完全に除去した後は、南側斜面を中心に平礫が散在する状況が認められた。平礫は葺石様に丁寧に並べられたものではなく、墳丘面に対して突き刺さることもないため、墳丘上から容易に滑り落ちる状況であった。さらに、平礫上やその間隙からは、甕や甗などの破碎された須恵器片が南斜面を中心に墳丘裾部まで散らばるように出土している。この段階において、墳丘平坦面上や周溝内等に墓壙が検出できず、出土した須恵器が後述する墳丘そのものの構築時期と年代的に大きな差があることから、平礫の散布と須恵器の破碎行為は、墳丘構築時期より後の時代の何らかの祭祀行為として捉えることができ、ここでは「後の祭祀行為」と呼称しておきたい。



第168図 墳丘上「後の祭祀行為」出土遺物

さらに、墳丘裾南東部において、1点ではあるが0.2~0.3m程度の礫が平らな面を南に向けて並べられているのを確認した。これは、県調査C地点で縄文時代草創期として報告された石列の延長にあたると思われる、拳大の平礫が石列北側でまとまって検出される状況も一致する。石列を構成する礫が縄文早期の包含層である第IV層を掘削して掘えられていること、平礫が墳丘上の散礫



第169図 石列内出土遺物

と同一の表土内で検出されること、散礫に混じって須恵器甕片767が出土することを踏まえて、今回の調査において石列の構築が「後の祭祀行為」と同時期であったことが確認できたことから、ここで訂正しておく。なお、県調査C地点からの石列の長さは約10.5mとなるが、周溝の内肩付近で出土する同規模の礫についてもこの石列の転落石と捉えるならば、総延長約14.0mの規模となる。

**墳丘上「後の祭祀行為」遺物** 759~766は須恵器である。759~761は甕である。759はやや扁平な球形の体部から外に大きく開く口頸部をもつ。欠損するが、口縁部が屈曲して伸びるものであろう。体部には肩部と底部の境にそれぞれ沈線を設けている。断面の色調が赤紫色を呈し、硬質な焼き上がりである。760はやや直線的な肩部を、761は丸みをもつ底部である。762は低脚の高坏の坏底部付近にあたる。763~766は甕である。763・764は同一のもので、口縁部を短く外反させ、端部を上方につまみ上げて外に面をつくる。端部近くに沈線がめぐる。外面は縦方向を中心とする平行タタキを施したのちにカキメで調整し、内面は同心円痕が見られるが、頸部付近はナデ消されている。765は体部の下半部にあたり、斜位



の平行タタキを格子状に施し、上位をカキメで調整する。内面には同心円の当て具痕が残り、ヘラ状工具による縦方向の太い筋が2条確認できる。**766**は球形に近い体部の下半部分で、最大径は23cmである。中位付近から上方はカキメで調整され、下部は横位ののちに縦位の平行タタキを施す。内面は外面のタタキと連動する場所に同心円痕が残る。分割成形の境であるためか、カキメ調整との際にあたる内面の当て具痕はナデ消されている。

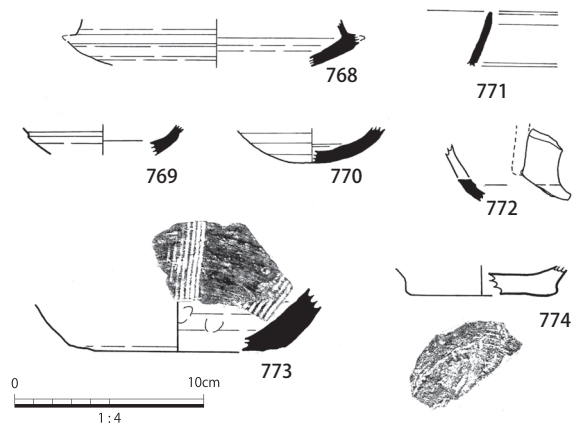
**石列内出土遺物 767**は須恵器の甕の体部で、外面に斜位の平行タタキを施し、内面には同心円の当て具痕跡が残る。外面の平行タタキには木目が直行する。

### (3) 遺構に伴わない遺物 (第170図)

墳丘上の表土を含む周辺域から出土した基本層内出土の遺物を一括して報告する。

**768**~**772**は須恵器である。**768**は坏身で、内傾する短い口縁部をもつ。陶邑編年 TK209 形式に属するものか。**769**・**770**は甗の底部にあたる。**769**については体部との境に沈線を設ける。断面の色調が**769**は赤褐色、**770**は赤紫色をなす。**771**は無蓋高坏の口縁部で内湾する端部は鋭い。下半に沈線がめぐる。**772**は透かしをもつ脚部である。**773**は備前系の播鉢である。縦方向の櫛目を施す。使用によるものか、内面は非常に平滑である。**774**は台状の底部をもつ土師皿で、糸切りによって底部の切り離しを行う。

(二宮)



第170図 古墳時代終末期以降の基本層内等出土遺物

## 6 J3 地点のまとめ

### (1) 旧石器時代の様相

J3 地点で出土した石器群は、縄文時代の包含層や古墳埋土中より出土している。明確に旧石器時代の層を確認できなかったため、旧石器時代の遺物は細石刃等を抽出した。細石刃・細石核は県調査 C 地点より出土した細石刃石器群と同一層で出土している。(宮崎県埋文セ2001) 細石核のうち、県調査 C 地点の船野型はブランクだけの出土に対し、J3 地点の船野型は残核や作業面再生剥片が出土しており、県調査 C 地点の結果を補うものとなった。また、台地上でみると J1 地点出土の細石刃・細石核の型式、石材等共通するものがあるが、J2 地点出土の細石核とは異なる点は、さらなる検証が必要である。(後藤)

### (2) 縄文時代の様相

縄文時代草創期の土器は、丘陵の平坦面から傾斜面に向かう辺りで数箇所弱い集中箇所を形成して分布している。県調査 C 地点においても同一層のほぼ同じ標高で当該期の遺物が出土している。県調査 C 地点では当該期に属すると判断された集石遺構が 2 基検出されているが、今回の調査区では明確な遺構は確認されていない。

当該期の土器には、器面に貼り付けられた粘土紐の幅が 5 mm 以下の微細な隆起線文は管見の限りでは認められず、主体となるのは隆帯文土器であり、特に数条の隆帯を密接させて貼り付けたものが多い。宮崎市清武上猪ノ原遺跡の「隆帯文土器 2 類」(宮崎市教委2018) に相当する一群で、この類型の示準期が県調査 C 地点を含めた当遺跡での活動のピークを示しているものと推定できる。当遺跡において主体をなす一群を、隆帯文土器の現在の編年に当てはめれば「隆帯文Ⅲ期」(児玉2008) に相当しよう。この「隆帯文Ⅲ期」の中には「堂地西段階」(雨宮1994) に加えて南九州の爪形文土器群も含まれており、さらなる細分も可能であり、桜島薩摩火山灰の影響の度合いなど、九州南部の中での地域差も考慮する必要がある(今村2018)。

662は上記の一群とは異なり、幅 3 cm に及ぶ口縁部の広めの隆帯に二枚貝の貝殻の圧痕文を施文するもので、秋成雅博氏が九州南東部地域に特徴的な一群として「貝殻押圧文土器」と命名して主要な出土遺跡を集成し、そのような口縁部の肥厚帯の上に施される貝殻文が九州南部における爪形文期を経て草創期末の水迫式土器、ひいては早期の南九州貝殻文土器につながると推定している(秋成2014)。

664は無頸壺のような印象を与える器形の個体である。器形や文様の類似する資料として川南町国光原遺跡(宮崎県埋文セ 2007) の完形資料があるが、爪形状の文様は共通するものの664の方は隆帯が高く明瞭である。

671・672にみられる刺突による列点文は、宮崎市の清武上猪ノ原遺跡第 5 地区の 4 号住居跡(宮崎市教委2018) や鹿児島県指宿市の水迫遺跡の 6 層(指宿市教委2002) で類似のものが確認されている。その編年的位置について、清武上猪ノ原遺跡の報告では隆起文土器の時期に含まれるものと推定された。一方、当該型式の土器を円孔文と共通する要素と、文様を多条に施すという南部九州的な爪形文の系譜を引く要素が融合して成立したものとする見解(村上2000) もあり、当該文様が草創期後葉における九州北部と南部の編年を交差させる役割を果たす可能性が示唆されている。

赤彩土器 682 と 683 は、彩色の効果を意図して、鉄分を多く含有し焼成後に赤く発色する粘土を接合部分に貼り付けたとみられる。これらは深鉢の底部近くの破片と考えられる。県調査 C 地点において出土し、既に報告されている個体(宮崎県埋文セ2001:p182-66) と比較したところ、明らかな別個体であ

るが、帯状に赤彩部分が土器に対して水平方向に巡るという特徴や器形が似通っており、関連する資料と位置づけられる。ただし、今回出土した682と683は粘土を化粧土のように貼り付けており、その点は技法が異なる。むしろ、県調査C地点の報告（宮崎県埋文セ2001）に実測図は示されていないが巻頭図版に掲載された2と3が製作技術的に近いものである。竹井真知子氏の観察によれば、これらに貼り付けられた粘土には高師小僧と呼ばれる褐鉄鉱の一種が含まれている。宮崎平野に広がる通山浜層の粘土には高師小僧が含まれ、塚原遺跡のほか、木脇遺跡の隆帯文土器の隆帯の発色にも利用されている（竹井2014）。682と683以外にも赤色に発色する粘土を用いている個体があり、色彩を意識していたことは確実である。県調査C地点の報告（宮崎県埋文セ2001）で示された通り、往時の精神文化を知る手がかりとなる資料であるが、「非実用的」とするほどの分化された器種であった可能性については、出土状況や色調以外の属性に特異性が認められない点もあり、さらなる検証が必要である。

早期の土器は中葉後半に属する個体が少量出土している。686は東九州押型文土器系列の早水台式に相当する個体である。

石器は打製石鏃、尖頭器、スクレイパー、打製石斧、磨製石斧、礫器等が確認されている。土器と分布状況に大きな差異はない。 (吉本)

### (3) 弥生時代の様相

塚原台地の最東南端に位置するJ3地点は、台地端において東側に延びる尾根の付け根付近に当たり、検出できた5基の土坑は調査地点北半に位置している。

中期初頭に属する直径約3.0mの大型土坑SC5は尾根鞍部に立地しており、大きく掘り込まれている点や紡錘車が出土するなど他の土坑とは違った様相である。また、断面形状が浅い舟形をなす溝状の土坑SC4は、当初、土墓壙と考えていたが、周辺域で検出される一般的な土墓壙が2段に掘削される深いものであることを鑑みると、別用途の可能性も高い。溝状に構築されていること、土坑内に磨製石鏃が集積されていることなどを踏まえて、飛躍がゆるされるならば、神聖な場所への結界としての役割を持たせたとも考えられる。これは、J3地点の東側、尾根先端に位置する県調査C地点において、前期末～中期初頭に比定される鳥形などの軽石製品が出土した土坑や木柱を立てたと考えられているスロープ状の土坑が検出されていることから、この地が同時代の精神文化を担った場所であった可能性が高いことに由来している。加えて、土坑SC4と同形態の土坑(県調査C地点の報告では土墓壙として報告)2基が、尾根北側の平坦面際において、一連の土坑群を取り囲むようにして、ほぼ同じ等高線上に配置されていることも示唆的である。また、2段に掘削された土墓壙や大型土坑SC5よりやや規模は小さいが大型の土坑も検出されており、包含層である第Ⅱ層由来の古墳盛土からも同時期の遺物が多量に出土することから、この尾根上での活動が盛んであったことは明らかである。

その後、しばらく尾根上を利用することはなくなり、終末期になってようやく円柱状に掘削された土坑SC2が設けられる。出土遺物は中期のものであるがSC3も同様の形態であることから同時期の所産と考えられ、これらは貯蔵穴であったと考えておきたい。 (二宮)

### (4) 古墳時代の様相

古墳SN1は、塚原台地の最南東において東側に延びる尾根の付け根付近に立地し、古墳時代における当該地点は墓域として選定されている。

古墳SN1の平面形状は、調査以前から東側が高く西側に低い前方後円墳状の地形の高まりとして観察

できたが、古墳東側の円形部分のみが調査対象であったことから、今回の調査では正確な墳形を導き出すことはできなかった。ただし、円形部分ではほぼ全面的な調査ができたことから、墳丘の構築過程を詳細に知ることができた。特筆すべきは、墳丘構築のための整地がおこなわれた後に、整地面の中央付近と思われる場所に埋葬主体としての墓壙を設けている点で、遺体埋葬後に墳丘を構築していることが判明し、吉井秀夫氏が示した「墳丘後行型」として捉えることができる（吉井2003）。遺体の安置には、断面観察や残る痕跡を頼りに割竹形木棺が使用されたと考えられるが、墓壙内の副葬品としては、棺内で柳葉形の鉄鏃1点、棺外で碧玉製管玉1点が出土したのみで全体的な量としては少ない。その他、出土の土器類は、埋葬後に供献されたものが墓壙内に落ち込んだものと考えておきたい。

墳丘の構築については、大きく3段階の工程が認められ、周辺の縄文、弥生時代の包含層を削り取って盛土しており、円形部で直径約10.0m、高さ約2.0mの規模を有する。墳丘の南縁には、幅2.0m程度の平坦面がめぐり、ここに壺形埴輪が樹立していたと推測される。また、墳頂平坦面では土器供献による飲食の儀礼が執り行われたと考えられ、壺や高坏などの破碎された土師器片が出土している。

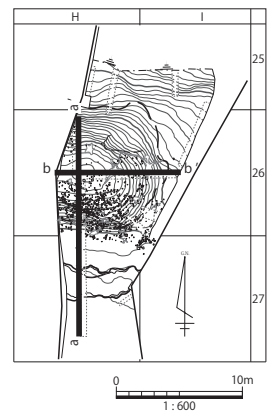
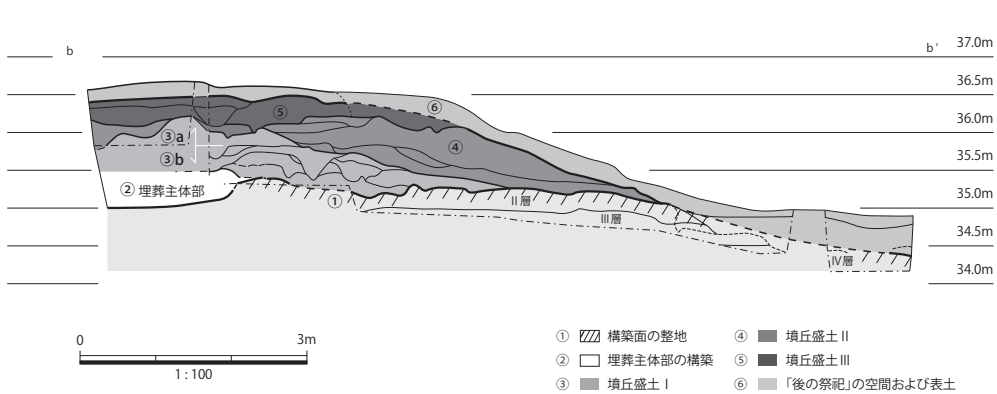
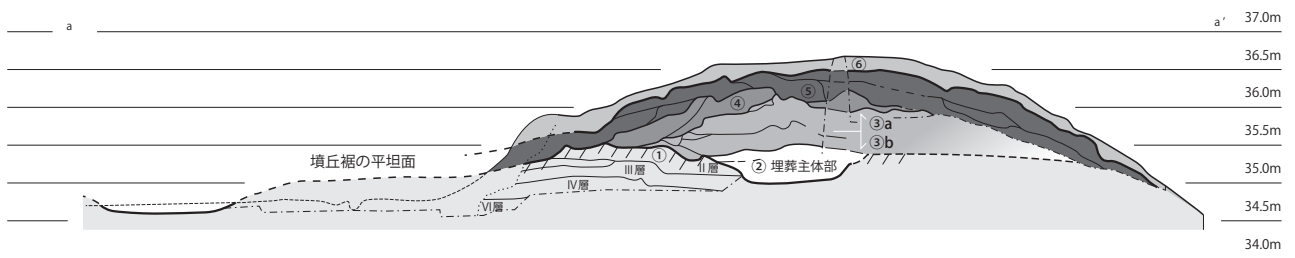
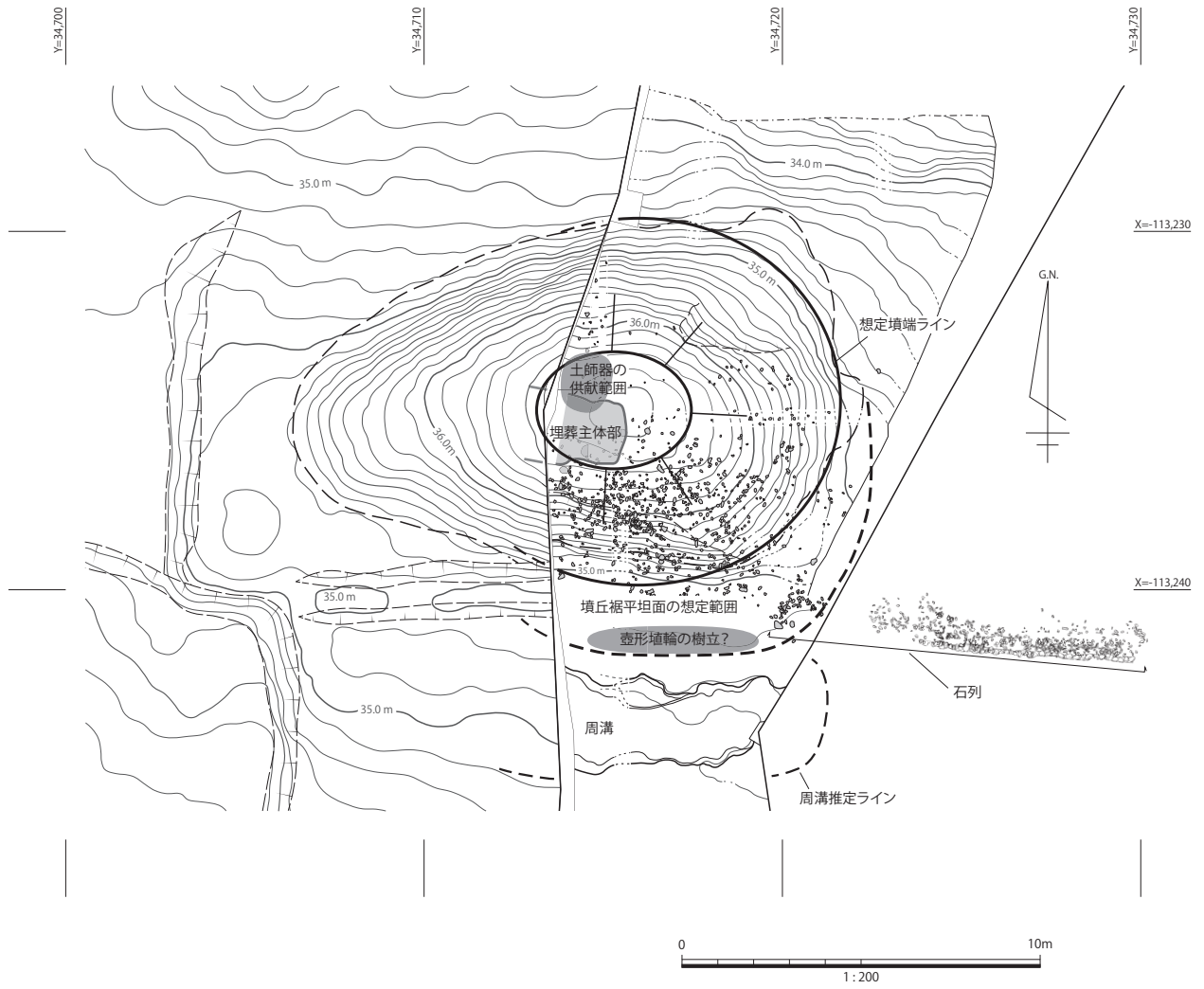
出土の高坏は、布留系統の細く長い脚を有するもので、西都市西都原13号墳出土のものによく似る。壺形埴輪については、宮崎市生日21号墳の報告でも指摘されるように、単口縁壺と二重口縁壺が共伴する例は後続する生日14号墳や5号墳、あるいは西都市西都原13号墳でも確認できることから、当該期の宮崎平野部における古墳祭祀の一端であることが示されており、本古墳も例に漏れないことが確認できた。出土の二重口縁壺は、生日21号墳資料や西都原13号墳資料に見られる直立気味の頸部から受口状の1次口縁をつくる形状とは違いがあるが、底部の形状は西都原13号墳資料に近く、頸部や1次口縁が短くなる本資料はこれらに後出するものと考えられる（宮崎市教委2016、宮崎県教委2001）。また、単口縁壺は今塩屋・松永編年2期に相当する（今塩屋・松永2002）。

以上の出土土器類を概観すると、古墳SN1の築造時期は古墳時代前期中葉に想定でき、墓壙内出土の鉄鏃とも大きな齟齬はないと考える。

なお、円形部だけの結果であるが、周溝は南側にだけ確認でき、旧地形の傾斜がきつい墳丘北側には周溝を構築していないことも判明している。

古墳SN1における、さらなる特筆すべき事象として、墳丘上での平礫の散布と甕や甕などの須恵器の破碎行為が確認できた。これは墳丘構築以後に行われた何らかの「後の祭祀行為」として理解ができ、墳丘東南裾付近から東へ向かう石列の構築も、この祭祀に伴う構造物であったと思われる。石列の詳細な用途は不明であるが、ひとつの考え方として、石列が古墳SN1より南東に位置する県調査C地点の円墳へと続くように見て取れることから、この円墳においても「後の祭祀行為」が行われたと考え、そこへ赴くための通路として設けられた可能性を指摘しておきたい。また、須恵器の破碎行為が南側に向けて行われていること、石列が南側のみを揃えて立て並べられていることをみると、「後の祭祀行為」が古墳の南側を意識していたことは明らかである。そして、「後の祭祀行為」が行われた時期としては、出土した須恵器類が陶邑編年TK209形式に相当することから、古墳時代終末期を想定する。（二宮）





- ① 〰 構築面の整地
- ② □ 埋葬主体部の構築
- ③ ■ 墳丘盛土 I
- ④ ■ 墳丘盛土 II
- ⑤ ■ 墳丘盛土 III
- ⑥ ■ 「後の祭祀」の空間および表土

第171図 SN1 模式図



## 第IV章 総括

今回の塚原遺跡（G・H・I・J地点）で確認された遺構、遺物個別の特徴や編年的位置づけ等については、各節の「まとめ」において記述したところである。本章ではそれを踏まえ、今回の調査箇所全体を時代ごとに概観し、むすびとする。

なお、今回の報告では、一部を除いて既往調査箇所まで含めた形での考察は成し得なかった。また、遺構・遺物の編年や年代観など取り上げるべき先行研究の全てを網羅できておらず、その点も含め、今後、様々な形で掘り下げた考察を行い、地域の様相について理解の深化を図りたい。

### 第1節 旧石器時代の様相

旧石器時代については、台地東縁から南東端のJ地点で風化または二次堆積の始良Tn火山灰層より上位からナイフ形石器（第I文化層）や細石器（第II文化層）の2時期の石器群を確認した。

このうち、第I文化層については、多くの接合資料により石器製作を実施していたことがわかった他、礫群の存在も認められており、当遺跡における初期の生活痕跡が確認できたことは意義深い。時期としては主体となるナイフ形石器の特徴から終末期に位置づけられ、同時期のものは清武上猪ノ原遺跡第5地区（宮崎市清武町）や小田元第2遺跡の第III文化層（宮崎市高岡町）、野首第2遺跡（高鍋町）等が挙げられる。

第II文化層については、第I文化層ほどではないが接合資料により石器製作が引く続き行われていたことが窺い知ることができる。石器群は広範囲に出土しているものの、細石核は地点によって様相が異なる。調査区の南北J1・J3地点では船野型細石核、畦原型細石核が主体をなし、石材は頁岩・砂岩等で構成されている。一方、J2地点では、野岳・休場型細石核が主体となり、石材は黒曜石製のみで構成されている。なお、J1地点では上記の細石核以外にも174・181のように剥片素材で小口部分を作業面とした細石核が認められる。これらは細石核の中では新しい特徴を持つもので縄文時代草創期まで下る可能性がある。

また黒曜石の利用については、第I文化層では南九州西部（桑ノ木津留）産の黒曜石利用が確認できているが、第II文化層になると西北九州（腰岳）産の黒曜石利用が加わり、当遺跡につながるルートがあったことが指摘できる。さらに縄文時代早期になると姫島産黒曜石が確認されることから上記のルートに姫島とのルートが新たに加わることになる。（後藤）

### 第2節 縄文時代の様相

草創期については、J3地点で隆帯文土器を中心とする土器が出土している。県調査C地点においてもほぼ同じ出土土器の様相が認められ、赤彩土器など関連する遺物も確認されている。草創期の土器の出土地点は、台地の縁辺が鋭角をなして南東方向に張り出した箇所の北・南側の斜面にほぼ限定される。この草創期の遺物の中で主体を占める隆帯文土器は、九州南部での出土例の増加とともに注目が集まっている。その年代に関しては、県調査C地点出土土器の中の2点を試料として付着炭化物のAMS法による年代測定が行われており、 $11,850 \pm 60^{14}\text{CBP}$ と $11,750 \pm 60^{14}\text{CBP}$ の測定結果が得られている（遠部・宮田2008）。それを含め、九州南部の隆帯文土器は、較正年代ではおおよそ14,000calBPより新しい時期に位置づけられる（工藤2015・2018）。当該期は晩氷期の温暖期とされ、九州南部においては定住化が促進された時期であるが、今回の調査ではそのことを実証する遺構・遺物は確認できていない。ただし、意図的に赤く発色する粘土を（おそらくは選別して）

帯状に貼り付けた彩色土器の存在は、前章第6節で触れたとおり「非実用的」な器物か否かさらなる検証が必要であるが、少なくとも安定化する環境に裏付けられた定住意識を基盤としていたとの推測も可能と考えられる。今後、周辺環境復元のための資料を蓄積する必要がある。

早期に関しては、長いスパンの当該期の中でも早期前葉から後葉にかけての土器群がJ地点内のほぼ全域にわたって出土している。ただし、J3地点では出土量が少なく、集石遺構も2基のみである。この点に関しては、J3地点の丘陵状に張り出した箇所に古墳が築造されており、その影響も考慮すべきであろう。J地点全体として南九州円筒形土器に属する加栗山式、別府原式2・3式に該当する個体が多く、集石遺構の形成時期は主に当該型式の示準期にあたと推定される。実際に集石遺構内から出土した土器は上述の型式に属するものである。付着炭化物のAMS法による年代測定によれば、加栗山式の較正年代は8,850～8,250calBP、別府原式は8,450～8,300calBPであり（栞畑2015）、気候の面では温暖期にあたる。遺物の出土量からみても大きな規模の集落が展開したとは認め難いが、いわゆる8.2kaイベント以前の安定的に温暖な気候の中で展開した活動の痕跡と考えられる。なお、少量であるがJ1地点で下剥峯式が、J3地点で東九州押型文土器系列の早水台式に相当する個体が出土しており、それらの並行関係に着目したい。早期前～中葉における九州南部の土器型式の並行関係は山下大輔氏による研究成果がある（山下2015）。系譜を異にする同時期の土器が分布域を違えて存在したのか、細かな時期差を示すのかいずれとも決しがたいが、今後の検討材料の一つとなろう。

なお、往時の生業を復原するための資料となる石器に関しては、細かな所属時期の分析は成し得ておらず、特にJ3地点では細石刃から草創期、早期の土器までが第IV層より出土しており、一部に草創期に含まれると推定される石器もある。ただし、今回は土器と石器の細かな対応関係は明確に捉えられておらず、この点の検討は持ち越しとなっている。（吉本）

### 第3節 弥生時代の様相

塚原遺跡の弥生環濠は、国富町調査の段階から広く知られていたが、今回の調査において詳細を充実させることができたことは大きな成果である。国富町調査の成果を踏まえると、塚原台地東端（J1地点・国富町調査E地点）に、東西約30.0m、南北方向で約38.0mの楕円形の環濠（内環濠）が前期末葉に初期の環濠として構築されている。縄文時代以来、台地上に再び人々の活動が戻ってくるのもこの時期になるのだが、内環濠の維持管理期に伴う竪穴建物等は、環濠内外をとおして明確な遺構の検出はなかった。これは環濠の内側がもともと東西方向の尾根上に位置していたことから、仮に集落が環濠の内側にあったとしても環濠の外側よりも地形的に高い場所であったために、後世の耕作や町道建設によって削平された可能性がある。その後、中期になると塚原台地上の集落規模が大きく展開するためか、内環濠より約20～25m南に検出面より最深部で2.0mに達する中環濠と外環濠の2条、北側については国富町調査E地点において1条の環濠が内環濠の北約40mに設けられたことが判明している。内環濠については、中・外環濠が構築されたことで役割を終えたと考えられ、この時に人為的な廃棄がなされている。環濠の内側では中期をとおして8軒程度の竪穴建物が検出されているが、その他の中期に帰属する集落としては、外環濠よりも40～50m南西に位置する塚原台地南縁に近い国富町調査F地点では竪穴住居と土壙墓群が、最南東縁のJ3地点・県調査C地点では土坑群が検出されている。これを見ると、もともと存在した谷と環濠を挟んで、北と南に集落が展開する様子がみてとれ、台地上の中期集落のあり方は一様ではなかったとも考えられる。さらに、県調査C地点の土坑群からは鳥形などの軽石製品が出土しており、台地の突端部が、同時代の人々の精神文化を担う神聖な場所として認識されていたのだろう。

また、塚原遺跡外に目を向けると、南約4.3kmの地点にある宮崎市石ノ迫第2遺跡（宮崎市教委 1999a）では中期中葉に、南西約6.4kmの地点にある宮崎市下郷遺跡（宮崎市教委 1999b）では前期末～中期初頭と後期初頭の2時期に環濠集落が営まれており、特に石ノ迫第2遺跡は当該調査地点から眺望することもでき、時期的にも両集落の最盛期が重なることから、集落間の関係性は今後検討していく課題のひとつであろう。また、本遺跡や下郷遺跡、さらに距離はあるが高鍋町持田中尾遺跡（高鍋町教委 1982）において、弥生時代前期末葉～中期初頭というある一定の時期に、環濠集落が県内各地で形成されはじめる。こういった事象についても、県内の弥生時代集落の成り立ちを考える上で重要な現象のひとつと考える。

その後、弥生時代後期には、集落は一度衰退して環濠も打ち捨てられるが、再び後期後半頃から終末期にかけて遺構数が増加し始める。ただし、集落の展開としては調査地北側の台地東縁のJ1地点・国富町調査E地点に集中する傾向にあり、5～6軒程度の竪穴建物と土坑群で構成される。（二宮）

#### 第4節 古墳時代の様相

古墳時代になると、J1地点の北側で前期前半期に比定される2段掘削の土壙墓や周溝状遺構が築かれるようになり、周辺には2・3軒の竪穴建物がある程度で集落規模としてはかなり縮小する。これをみると台地の南東縁部は主要な生活の場ではなくなることが判明した。しかし、台地最北東部の直下であるG地点では、前期前半期を中心とする土器類が大量に投げ捨てられていたことから、同時期の集落の中心が北へと移動した可能性もあるが、台地の北東縁～南東縁で現在のところ古墳時代の集落は確認されていない。

最南東縁部では初頭に築かれた円墳（県調査C地点）とやや西側に壺形埴輪をもつ中期中葉の古墳SN1（J3地点）が東から連続して立地する。台地南縁にはさらに西にかけて県指定古墳である円墳12基と前方後円墳1基が存在することから、東から順に台地の縁辺に沿って古墳が築かれる様子が確認できる。また、調査地北側、台地の東縁であるJ1地点では、東向きの尾根の先端に終末期の円墳SN2が単体で築かれていることが確認され、これをもって台地東縁における高塚墳の造営は終了することが判明した。ただし、古墳SN1を含む台地南縁に連続する古墳群とJ1地点の円墳SN2の間には当時谷が存在していたことから、これら古墳は別の支群としてとらえておきたい。さらにこの時期には、SN1とSN2のいずれにおいても、埋葬行為よりも後に執り行われる「後の祭祀行為」というべき須恵器の破碎行為などが確認されており、特筆される。そして、国富町調査F地点では地下式横穴墓が単体で1基確認され、昭和44年には台地の北西地区においても3基の地下式横穴墓が調査されており、古墳時代の台地上では多様な墓制と祭祀形態が混在していた。

なお、台地東縁下の県調査B地点では古墳時代中期～後期の堰跡が、さらに東側に位置するH地点においても、後期にまで遡る可能性のある堰の痕跡が確認され、畦畔の検出はなかったものの、周辺では同一層内で高密度のイネ科の植物珪酸体が検出されていることから、台地下の低地の積極的な開発は古墳時代中期～後期に始まった可能性が高い。（二宮）

#### 第5節 古代の様相

塚原遺跡の古代以降の様相は、台地下の底地での開拓史が中心となる。台地直下より北側に位置する調査地点（県調査A地点、G・H2・H3地点）において、北西から南東に向けて流れる自然流路群が検出できた。一部8世紀代に遡るものもあるが、概ね9世紀頃を中心に形成されており、H2地点では自



然流路の南側で畦畔群も検出できた。また、畔や河川での祭祀痕跡も確認され、これらが執り行われるのは9～10世紀に限定される。また、この時期は洪水と開発が繰り返されており、生産活動の場については9世紀前半期ではより流路に近い場所で、9世紀後半期～10世紀にかけては流路から離れたより台地近くに移動している様子がみてとれ（県調査B地点の畦畔群は高原スコリア降下以前に訂正）、洪水も含めた水との係わりが予想される。古代の畦畔群については、基本的には地形に制約されていると考えるが、H地点における畦畔状遺構B群の直線的な畦畔形状をみると、何らかの計画的な生産活動も想定しておく必要がある。また、近隣における11世紀頃から始まる宇佐八幡宮による荘園開発との係わりなども含めて、当該地における古代の土地開発についての残された課題は多い。（二宮）

## 第6節 中世の様相

台地最北東部直下の低地であるG地点では、古代の開発からやや時期をおいた13～14世紀頃から水田経営が開始されている。そして、この段階においても完全に埋没することなく存在した、古代の自然流路（G地点SE1やH地点SE1・SE2）として検出した蛇行する溝を、用水路とするためか所々直線的に改変して利用している。また、H地点では一直線に構築された基幹水路SE7・SE8が検出され、G地点の畦畔群や溝SE1などと合わせると北から西へ25°傾くの軸が俯瞰でき、復元までには至らなかったが中世における条里地割の痕跡であった可能性も含めて、大掛かりな組織的開発の痕跡としてみてとれる。

これら開発に携わった人々については、塚原台地の南縁寄り地点（町調査F地点）の包含層出土遺物に中世期の遺物が目立つことから、報告書では言及されていないが、F地点北西部で検出されたピット群が中世期の掘立柱建物群を構成していた可能性がある。そして、これら開発の時期が、日向国で中世後期に勢力をもった伊東氏の庶流である木脇氏が、鎌倉から当地に下向する時期（13世紀代）と重なることも、歴史的な事象として重要である。（二宮）

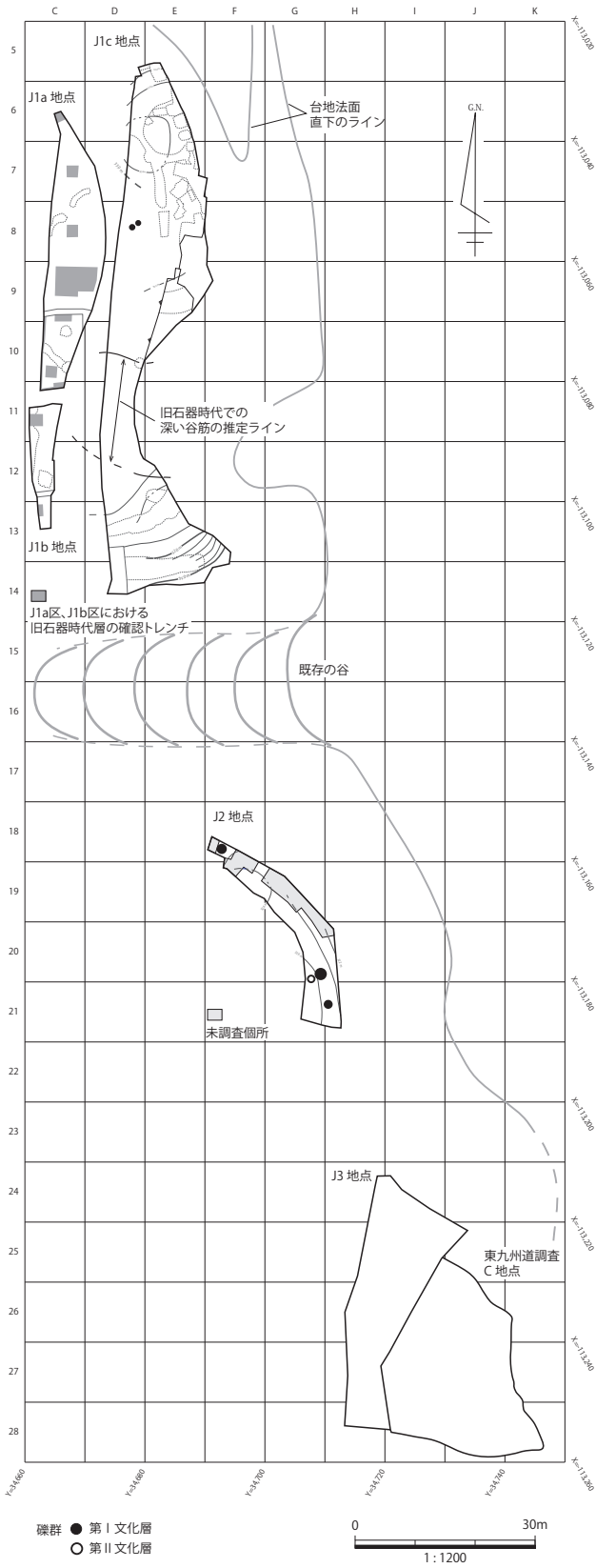
### 【引用・参考文献】

- 雨宮瑞生 1994「南九州縄文時代草創期土器編年」『南九州縄文通信』8 南九州縄文研究会
- 石川悦夫 1984「宮崎平野における弥生土器編年試案－素描（Mk. II）」『宮崎考古』9 宮崎考古学会
- 伊東隆夫・山田昌久 2012『木の考古学 出土木製品用材データベース』海青社
- 指宿市教育委員会 2002『水迫遺跡Ⅱ』（指宿市埋蔵文化財発掘調査報告書35）
- 今塩屋毅行 2016「日向国における奈良時代の土器相」『宮崎県中央地域の考古資料に関する編年的研究Ⅱ』 宮崎考古学会
- 今塩屋毅行・松永幸寿 2002「日向における古墳時代中～後期の土師器－宮崎平野部を中心に－」  
『古墳時代中・後期の土師器－その編年と地域性－』九州前方後円墳研究会
- 今村結記 2018「東南九州の縄文時代草創期土器群」『九州旧石器』21 九州旧石器研究会
- 上杉彰紀 2003「南九州の縄文時代早期前半期に関する覚書－加栗山式土器段階を中心に－」  
『立命館大学考古学論集』Ⅲ－1 立命館大学考古学論集刊行会
- 大阪府立近つ飛鳥博物館編 2006『年代のものさし－陶器の須恵器－』大阪府立近つ飛鳥博物館図録40
- 大阪府文化財センター 2008『池島・福万寺遺跡6』（大阪府文化財センター調査報告書185）
- 小野正敏 1982「15～16世紀の染付碗・皿の分類と年代」『貿易陶磁研究』No.2 貿易陶磁研究会
- 遠部慎・宮田佳樹 2008「宮崎県における土器付着炭化物の炭素14年代測定－縄文時代前半期を中心に－」  
『宮崎考古』21 宮崎考古学会

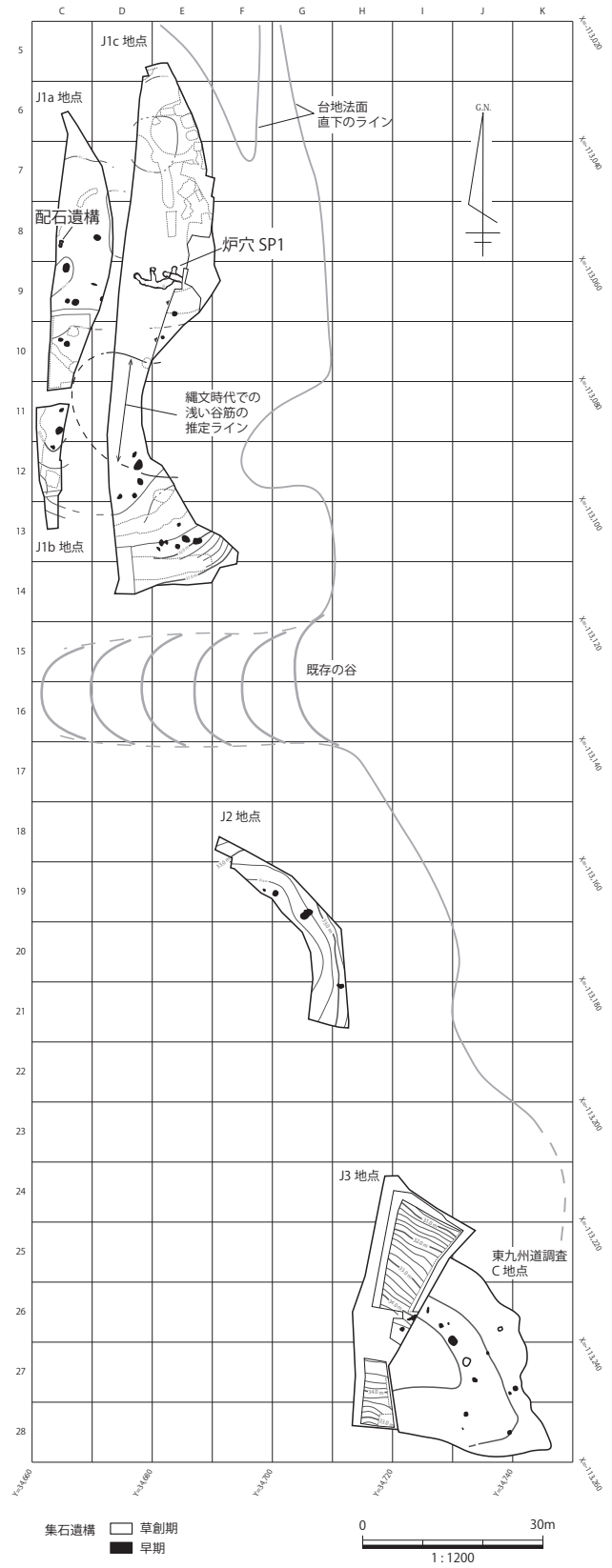
- 金丸武司 2004「宮崎における縄文時代早期前半期の土器群－別府原式土器の設定－」『宮崎考古』19 宮崎考古学会
- 河野裕次 2013「南部九州における弥生時代中期土器様式圏の動態」『古文化談叢』69 九州古文化研究会
- 河野裕次 2017「宮崎県の様相－宮崎平野南部を中心に－」『九州島における古式土師器』九州古文化研究会
- 工藤雄一郎 2015「王子山遺跡の炭化植物遺体と南九州の縄文時代草創期土器群の年代」  
『国立歴史民俗博物館研究報告』196 国立歴史民俗博物館
- 工藤雄一郎 2018「縄文時代草創期の古環境と14C年代」『九州旧石器』21 九州旧石器研究会
- 国富町教育委員会 1996『塚原遺跡 東原A・B・C・D地点』（国富町文化財調査報告書6）
- 国富町教育委員会 1997『塚原遺跡 東原E・F地点』（国富町文化財調査報告書7）
- 黒川忠広編 2002『南九州貝殻文系土器1～鹿児島県～』南九州縄文研究会
- 桑畑光博 2015「貝殻文円筒形土器群の14C年代と較正暦年代」  
『平成26年度宮崎考古学会研究会資料集 貝殻文と押型文』宮崎考古学会県南例会実行委員会
- 高鍋町教育委員会 1982『持田中尾遺跡 発掘調査概要報告書』
- 竹井真知子 2014「胎土に高師小僧を含む土器の原料粘土産地の研究－宮崎平野部の遺跡出土土器の事例をもとに－」  
『日本文化財科学会第31回大会発表要旨』
- 田辺昭三 1981『須恵器大成』角川書店
- 坪根伸也・佐藤良子 2010「第三章第2節（3）弥生時代前期から中期の遺物」  
『下郡遺跡群Ⅶ』大分市埋蔵文化財発掘調査報告書100 大分市教育委員会
- 永井久美男 2002『中世出土銭の分類図版』高志書院
- 奈良国立文化財研究所 1984『木器集成図録 近畿古代編』（奈良国立文化財研究所史料第27冊）
- 堀田孝博 2012「宮崎平野部における平安時代の土器について」『宮崎考古』23 宮崎考古学会
- 堀田孝博 2016「宮崎平野部の中世土師器」『宮崎県中央地域の考古資料に関する編年的研究Ⅱ』同上
- 前迫亮一 2000「付篇 大隅半島中南部域における縄文時代早期前半期土器の変遷」  
『大中原遺跡』根占町埋蔵文化財発掘調査報告書9 根占町教育委員会
- 松永幸寿 2001「宮崎平野部における弥生時代後期中葉～古墳時代中期の土器編年」『宮崎考古』17 宮崎考古学会
- 宮崎市教育委員会 1999a『石ノ迫第2遺跡』（宮崎市埋蔵文化財調査報告書40）
- 宮崎市教育委員会 1999b『下郷遺跡』（宮崎市埋蔵文化財調査報告書41）
- 宮崎市教育委員会 2016『生目古墳群Ⅵ』（宮崎市埋蔵文化財調査報告書113）
- 宮崎市教育委員会 2018『清武上猪ノ原遺跡第5地区』（宮崎市埋蔵文化財調査報告書119）
- 宮崎県教育委員会 2001『西都原13号墳』（特別史跡西都原古墳群発掘調査報告書2）
- 宮崎県埋蔵文化財センター 2001『内宮田遺跡 柳迫遺跡 中別府遺跡』（宮崎県埋文センター発掘調査報告書30）
- 宮崎県埋蔵文化財センター 2001『松元遺跡 井手口遺跡 塚原遺跡』（宮崎県埋文センター発掘調査報告書44）
- 宮崎県埋蔵文化財センター 2003『阿蘇原上遺跡』（宮崎県埋文センター発掘調査報告書71）
- 宮崎県埋蔵文化財センター 2007『国光原遺跡』（宮崎県埋文センター発掘調査報告書149）
- 村上 昇 2000「九州地域に於ける縄文時代草創期土器編年試論」『南九州縄文通信』14 南九州縄文研究会
- 山下大輔 2015「南九州における押型文土器研究の現状と課題」  
『平成26年度宮崎考古学会研究会資料集 貝殻文と押型文』宮崎考古学会県南例会実行委員会
- 八木澤一郎 2008「平袴式・塞ノ神式土器」『総覧 縄文土器』同書刊行委員会
- 横手浩一郎 1998「押型文土器様式最末期の様相」『古文化談叢』41 九州古文化研究会
- 吉井秀夫 2003「朝鮮三国時代における墳墓の構築過程について－墳丘先行型と墳丘後行型－」  
『古代日韓交流の考古学的研究－葬制の比較研究－』（平成11～13年度科学研究費補助金研究成果報告書）



旧石器時代

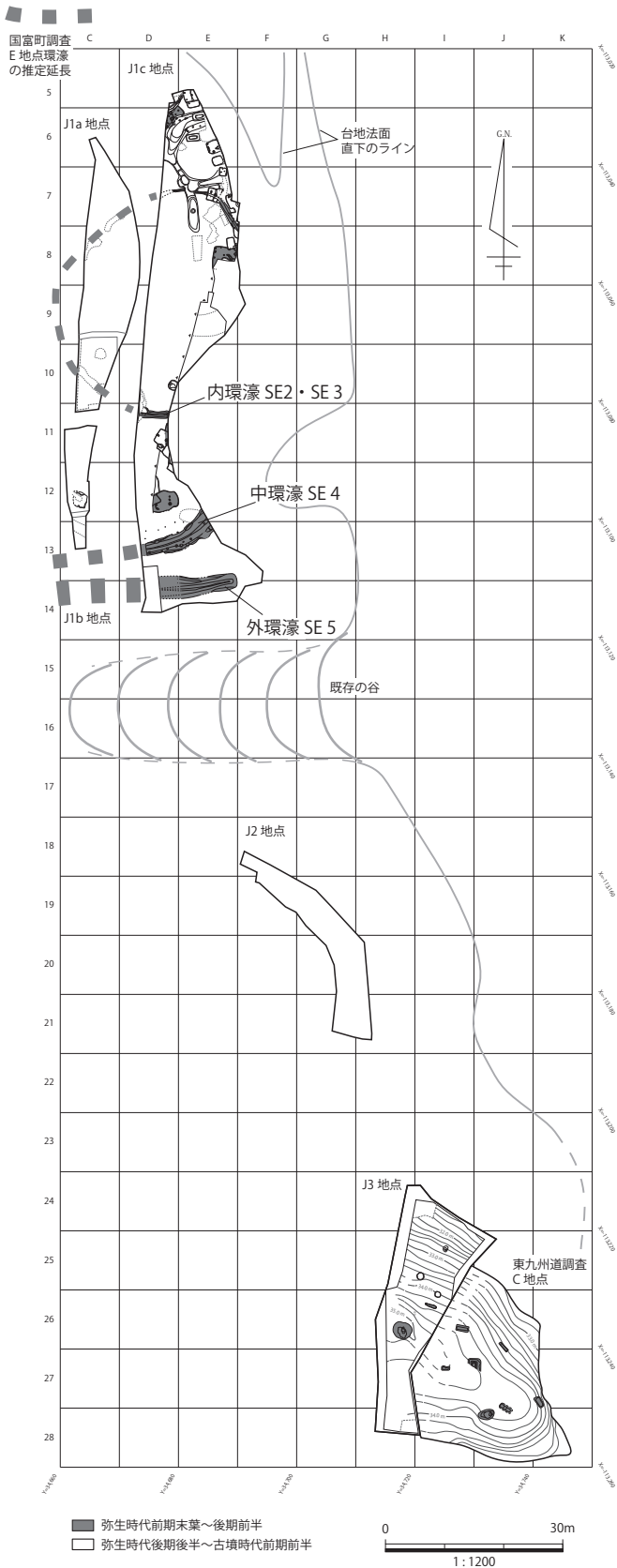


縄文時代草創期～早期

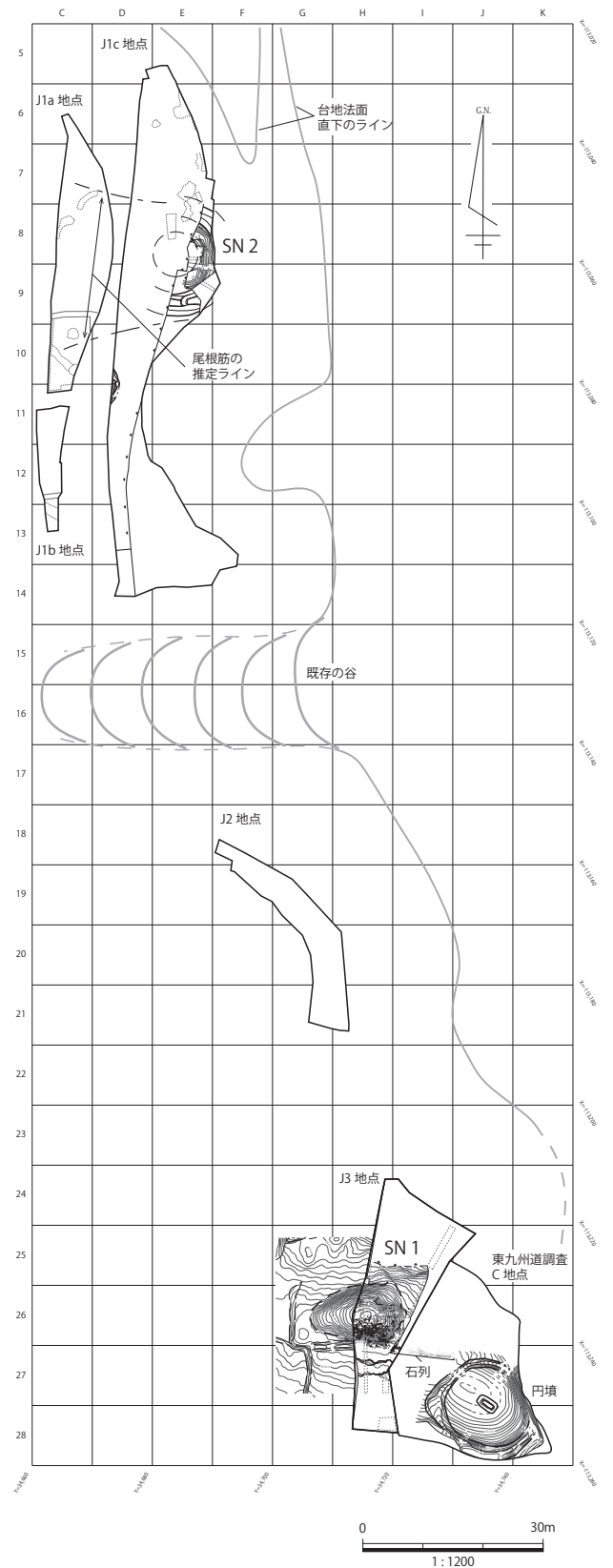


第172図 塚原台地東縁部における旧石器時代～縄文時代の様相

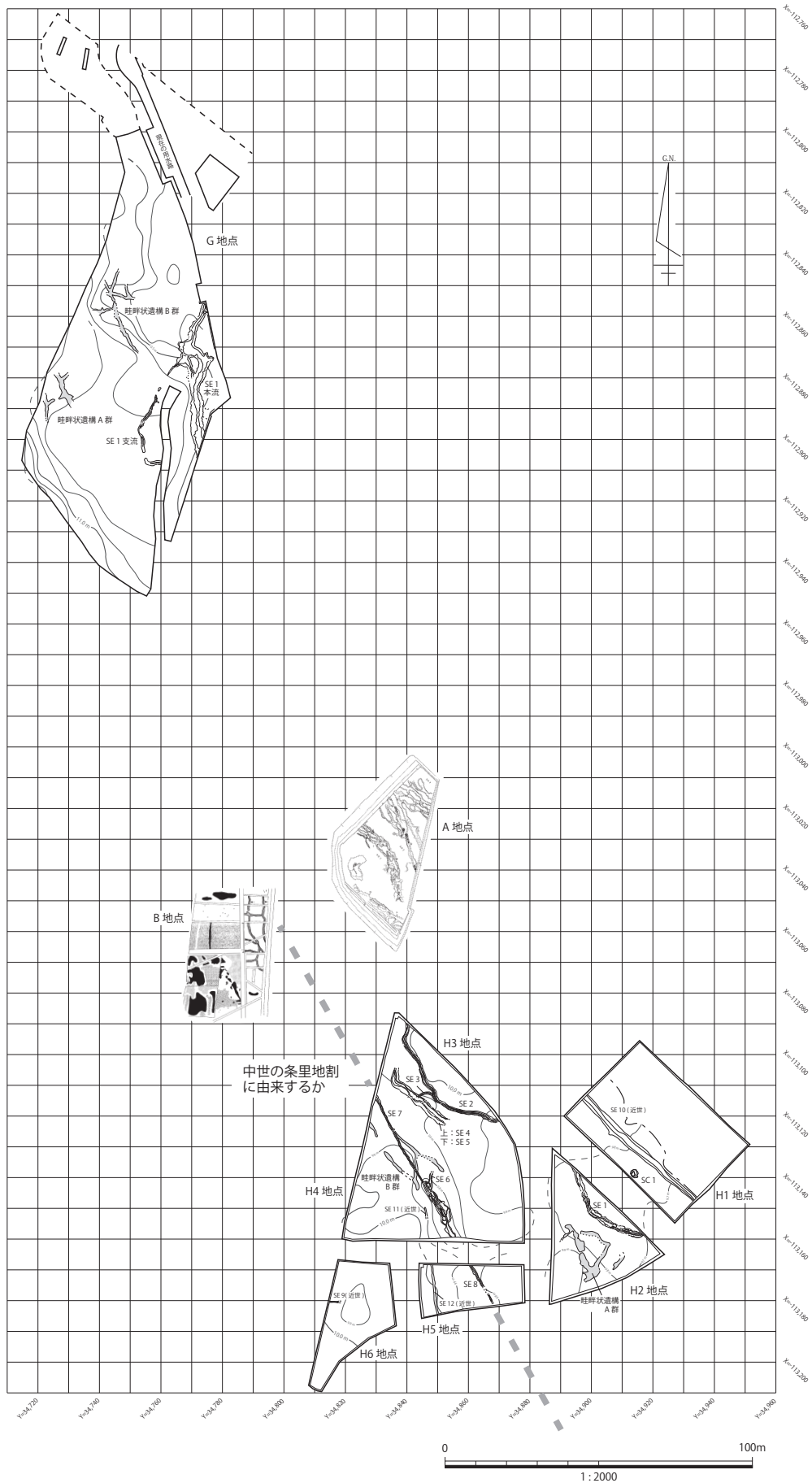
弥生時代前期末葉～古墳時代前期前半



古墳時代前期中葉～終末期



第173図 塚原台地東縁部における弥生時代～古墳時代の様相



第174図 塚原台地下、東側低地における古代～中世の様相